地方大賣捌所

大阪市心齋橋筋南久太郎町		福音社書店
大阪市東區備後町四丁目七八	寶文館	吉岡平助
大阪市心齋橋筋博勞町四丁目		丸善支店
京都市三條通寺町西へ		聖書房
京都市三條通富小路西入北側		便利堂
京都市河原町通二條下二丁目		大黑堂
名古屋市東町三丁目	金華堂	川瀬代助
神戸市北長狹六		福音舍書店
神戸市元町五丁目二三	寶文館	吉岡支店
讃岐國高松市丸龜町四丁目	龜友堂	北郁彌一
廣島市塩屋町		積善館書店
周防國岩國町	日新堂	白銀伊兵衛
福岡市博多中島町		積善館書店
福岡市博多麴屋町		眞海屋書店
久留米市米屋町	金文堂	菊竹書店
熊本市新町二丁目	樂善堂	長崎二郎
鹿兒島市仲町四六	文花堂	吉田幸兵衛
鹿兒島市松山通仲町	金光堂	久永金藏
名古屋市東町通鉄砲町二丁目		三輪文次郎
三河國豐橋呉服町		豐川堂
靜岡市呉服町二丁目一六	金蘭閣	吉見書店
遠江國濱松連尺町		谷島屋
甲府市柳町二丁目		柳正堂
甲府市常磐町一〇		温故堂
横須賀港大瀧町	起明堂	渡邊與三郎
横濱市吉田町一丁目五		第一有隣堂
横濱市松ヶ枝町		弘集堂
横濱市伊勢佐木町二丁目一六		勉強堂
相州鎌倉八幡町		松林堂

加賀國金澤市片町		宇都宮書店
越後國新潟市古町通七番丁		北光社書店
越後國新潟市古町通六番丁	萬松堂	西村支店
越後國長岡町	上田屋	覺張治平
越後國長岡町表四ノ丁	巢枝堂	目黑十郎
越後國水原	萬松堂	西村書店
信濃國長野市大門町	小桝屋	西澤喜太郎
信濃國上田原町二丁目		百合舍
信濃國松本大名町		鶴林堂
信濃國松本本町		松榮堂
上野國前橋市曲輪町		煥乎堂
上野國前橋市横山町		耕雲堂
上野國高崎市	文心堂	柴田量平
上野國伊勢崎町東丁		磯部市次郎
下野國宇都宮市馬塲丁一一	臨雲堂	田邊忠平
下野國足利町一丁目		青木書店
常陸國水戸上市泉町二丁目		川又銀藏
常陸國水戸上市南町		寺田支店
仙臺市新傳馬町一〇		紀港堂書店
陸中國一ノ關町五八五	文港堂	佐藤喜平
岩代國若松市大町堅丁四		二瓶貞藏
羽前國山形市		丸善書店
秋田市茶町菊ノ丁		成見清兵衛
陸奥國弘前市土手町三〇	曙堂	今泉道次郎
陸奥國青森市米町一一六	文港堂	今泉支店
北海道函館區相生町一〇〇	文港堂	福音舍
北海道札幌區南一條西二丁目		富貴堂書店
北海道札幌區南一條西三丁目		進振堂書店
沖繩縣那覇區久茂六一	博愛堂	小澤書店

住谷天來君著

十九世紀の豫言者

◉カーライルの肖像（三葉
◉ラスキンの肖像（寫眞
◉トルストイの肖像（版入
洋裝極美本紙數凡四百頁
定價七十五錢
郵稅八錢

（萬朝報評）十九世紀の預言者として思想界の指南車として物質的文明の暗黑を照す光明として世界に欽仰せらるゝカーライル、ラスキン、トルストイ三賢を評傳せり、蓋し譯者西學に精しく文學に長じ且つ深く三家の人物に私淑する者故に叙事の繁簡頗る要を得、其風丰紙上に躍然として親しく談論を聽くの想あり云々。

（福音新報評）譯者の遒勁にして豪宕なる鐵筆を揮ふて世界三大偉人の性情と徑行と主義と奮闘と名著と閲歷とを記述せらる、熱誠の筆、雄麗の文、沈痛にして奇趣あり、讀去讀來るの間、人をして天來の聖火に燃され偉人の風丰に接し、正義と人道の爲めに起つの思あらしむ云々。

トマス、カーライル原著　住谷天來君譯

英雄崇拜論

定價金五十錢
郵稅金六錢

『警世』（内村鑑三君評）◉哲人カーライルの著にして友人住谷天來氏の飜譯なりカ氏の著にして外國語の飜譯に堪ゆる者は唯此書のみなりと信ず、余は天來氏の原稿を以て數ケ所に於て原書と對照したりしに能く其精神を汲み意を通ずるを見たり余が天來氏の文才に服するに至りしは實に此譯文に由る者なりとす「英雄崇拜論」其名既に我邦青年の心を引くに足る、然れどもカーライルの所謂崇拜なる者は東洋の日本に於けるが如き奴隷的崇拜に非ず、英雄崇拜すべし、然れども神を崇するが如くに拜すべからず、此書蓋し此迷誤を解くに足らん乎、余は謹んで茲に此有益なる譯書を歡迎す。

札幌農學校敎授 理學博士 農學士 松村松年先生著

日本千蟲圖解

（定價一冊凡三圓）

全四冊

▲第一卷▼

▲印刷中▼

昆蟲を研究せんと欲せば、必ずや實物標本に據らざる可らざるは論なし、然れども、各種昆蟲の標本を採集せんとては、實に容易の事にあらざるが故に、一に標本的圖譜に是れ據るの外なし、されど、吾國に於ては、殆んど未だ此種の圖譜を有せざるを憾とするや久し、先生茲に感あり、其該博の識と精密なる注意とを以て、此編を完成せらる、今其特点とも云ふべき内容の一般を擧ぐれば、

一 學名を有せる昆蟲の最も普通なるもの一千種を撰び圖書となしたる事
一 最も適切なる分類に注意したる事
一 圖は堪能なる畫工に描かしめしものにして二年の星霜を經て完成したる事
一 圖毎に説明を付し其昆蟲學上に於ける地位を明にしたる事
一 圖書は正確にして誤なき事
一 學名は著者歐洲在留中各專門の學者に就き質せし正確なるものを撰びたる事
一 一般の害蟲及び益蟲を網羅せる事

等にして、誠や昆蟲研究者の絶好燈臺と云ふべし、

大西博士全集

第一卷 論理學

菊判上等洋紙
總クロース極美製
定價一圓六十錢

附錄 論理學用語英和對譯表

○論理學に關する論文數篇○索引的目次○說明圖表拾數葉

頭腦明瑩、氣品清高、學問該博研究精緻理想の哲學者として學界の囑望最も重かりし故大西祝先生遺稿全集の第一卷として本書出づ●本書は初めに西洋の**形式論理**（演繹法）次に東洋の論理學**因明**終りに**歸納法**を述べ三者の異同長短を究明し從來の論理學の大體に通ぜしめ更に近世の新研究に入るべき道を開く說述、簡明、評論精確、初學者の爲には**無上の良教科書**たるべく先進の學者に取りては有益なる**一大論文**たるべし

第二卷 倫理學

定價一圓六十錢
印刷鮮明洋紙極上
布表紙金字入

附錄 倫理學用語英獨和對譯表

倫理學は大西博士の最も力を注ぎて研究せられし科目にて其の一班をあらはされたるは本書なり。其の自說を開發せんが爲めに先づ學相上の順序に從ひて古今の諸倫理說を批評し來り精緻周到を極む、其の如何に有數の作たるかは早稻田大學の講義にも載せられたるにて識者の既に知了せる所、今回更に從來**未**だ**公**けにせられざりし**公衆的快樂說**（**功利說**）を論ずる一章を**加**へたれば庶幾くは學者久渇の情を慰むるを得ん。

大西博士全集

○第七卷近刊豫告○

故文學博士大西祝先生遺稿

第七卷 論文及歌集

本卷にて完結

本編は大西博士が哲學、心理、美學、文藝等の問題につきてものせられたる諸論文と、其の一代の歌集、即ち和歌、俳諧、新躰詩より端歌、都々逸の諸躰に至るまで、其の折々の心の匂を染めなされたるものとを併せ輯めて一卷としたるもの、前者は博大精緻、後者は温籍優雅、論文家としての先生と、詩人としての先生と、つよき、やさしき兩樣の趣味を合せ攝めて、最もよく先生の面影を現はせり、本書を繙くものは、更に新たに先生の高風に接する想あるべき也。

明治三十七年八月一日印刷
明治三十七年八月三日發行

思潮評論與附

定價壹圓七拾五錢

著者　文學博士　大西祝

發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永文之助

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　横濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社

發行所　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　（電話新橋一五七八）　警醒社書店

校正者

中桐確太郎

中島半次郎

大西博士全集第六卷終

命的精神を以て猛進せざりしことを悲まずんばあらず。今日に至るまで福澤翁が倘當年の啓蒙的思潮の精神を持續し特に最近再び其の聲を大にして此の精神を鼓舞せんとせらるゝを見ては、予輩は翁に對して同情を寄せざるを得ず。何ぞ歷史的差別と歷史的連鎖とに拘泥して革新進取の氣象を失へるとの甚しきや。何ぞ文學、哲學、宗敎、道德、義理、人情に於ける非歷史的なる一大方面を揭ぐることとの衰へたるや。

（明治三十年十月發行『國民之友』第三六二號）

の盛んに唱道せらるゝこととなり、歴史的研究の聲は反響の如く諸種の學科の範圍に呼應せらるゝに至りたり。搗てて加へて獨逸の學者等が第十八世紀の自由平等の主義に代へて國家主義てふものを唱ふるあり。近く我が國に於ける歴史的回顧及び國家主義の唱道は亦是れ歐洲思想の後を追ひたるもの、寧ろそれに因りて影響され挑發されたるものなり。所謂歐化時代の思潮のみが歐洲の思想に動かされたるにあらで非歐化的思潮そのものが亦同じく然るなり。

一時勃然として起こりし啓蒙的思潮が未だ其の成し遂ぐべき事の半ばをも成し遂げざるに、既に早く歴史的回顧を事とし、歴史の連鎖を破ることを以て何物よりも恐るべき事となし、歴史に拘泥するを以て國家に忠なるものと誤想し、而して此の誤想が近時如何に我が敎育界を固陋頑迷偏狹の弊に陷らしめたるぞ。啓蒙的思潮が一時何の方角に於いても頑强なる抵抗を受けず、政府は寧ろ人民に先んじて此の思潮を誘致したる爲めに、佛蘭西に於ける如き衝突の慘狀を呈せざりしは一面國家の爲めに祝すべきに似たるも、其の思潮の温和に過ぎたりしを恨むべきの理由も十分あり。予輩は此の點より見て維新以後の啓蒙的思潮が今一層の革

るものとの比較は吾人を敎ふるに足るもの多し。その狀勢の如何に符節を合するが如き所あるかは見るに難からざるべし。試にかの口々に文明開化と叫びたる時代を回想せよ。其の時代の最好代表者、其の思潮の著大なる先導者福澤諭吉翁を思ふ每に予輩はヲルテールを想起せずんばあらず、我が國の啓蒙思潮の一時如何に非歷史的なりしぞ、如何に非美術的なりしぞ。廣く世界に智識を求め通理公道に從ひ文明開化を進めんためには歷史の連鎖を破ることに躊躇せざりし其の革命的、進取的、世界的精神の如何に一時雄壯偉大なりしぞ。其の非歷史的なりしの反動として國粹保存論等の起こりしこのかた如何に頓に其の思潮の方向の轉じたるぞ。而して此の轉變は先きに啓蒙的思潮の歐洲の思想によりて催起されたる如くに亦實は歐洲思想の推移の後を追ひたるものなり。そは非歷史的なりし第十八世紀を經過して今世紀へ入りて後は歷史の硏究大に起こり從つて歷史的に成り立てるものの價値を了解することに向かひゆき、哲學上にはかのヘーゲル學派の如き深く歷史的精神を以て充てる學說の隆起したるあり、又自然科學も單純なる物理界より進んで生物界に入り從うて歷史的の見樣を具へたる進化說

歐洲第十八世紀に於ける自然と人爲との對峙而して當時その對峙に結ばれたる非歷史的精神が文明論及び敎育論上に現れてはかのルーソーの自然說となり、政治の上に實行されては遂にかの佛蘭西大革命となり、社會組織の論に現れては社會主義の萠芽を發し、宗敎上に現れてはかの自然宗敎を唱へたるディスト等の運動となりたり。而してかの佛蘭西のアンシクロペディストこそ此の歐洲十八世紀の啓蒙的思潮の最好代表者なれ、尙古代希臘に於けるソフィストの如く又近世の初めに於けるヒューマニストの如く。

我が國に於ける維新以後の啓蒙的思潮も、尙かの古代希臘に於いてミレートス學派を初めとしたる物理的思索、又歐洲十八世紀に於いてルネサンス時代このかた勃起したる自然科學が其の啓蒙的思潮の遠因又は近因となりし如く、西洋學術の輸入こそ其の大原因を爲したるものなれ。西洋物理の學が如何に我が國民の頭腦を變せしめたるぞ。又維新以後法律政治等人事上の新學問は先づ主として佛國第十八世紀の啓蒙思潮の產物を輸入したりしものに非ずや。我が國維新以後の啓蒙的思潮とかの希臘の古代に起こりたるもの及び歐洲十八世紀に起こりた

の東西時の古今によりて轉變推移する如きものをば吾人の貴ぶべく頼るべきものとは思はざりき、吾人の依頼するに堪ふべきは物理上の自然法の如く遍通不易なるもの、又眞理は其の如く遍通不易なるべきものと考へ、而して實際上之れに循うて社會を改造するに躊躇せざりき。斯く吾人は歴史的に成り立ちて時處に隨ひて變ずるものに拘泥せず、寧ろ其様なる拘泥を去りて、東西に亘り古今に貫きて悖らざる通理に從ふべき者なりと考へたるは、一方より見ばあはれにも歴史眼を缺きたるものなり。歴史的に成り立ちたるものの價値を認めず、又斯く成り立ちたるものを全く度外視しては人事に於けるの自然を語り難きことを了解せざりしは、固より當時の啓蒙的思潮の大缺點なれども、又一方より見ば歴史的に成り立ちたる様々の差別と其れに伴ふ諸多の弊害とを振り棄てて只管遍通不易の眞理、法則、理想を求め、苟くも通理公道と認め得たるものに向かひては勇往猛進して後ろを顧みざりしこと、是れ即ち當時の啓蒙的思潮をして大光輝を帶ばしめし所以のものなり。歴史的拘泥を打破せん爲めには非歴史的なる啓蒙思潮を喚び起こすの必要しばしばあり。

せむことを要めたるが故に、何事も直截簡明なるを貴び、事々物々之れを判然相區別して其の明かに又容易く了解されんことを必要とし、而して其の如くに了解し得られざるものは皆或は誤謬或は無益なるものとして之を棄てて顧みざりき。斯かる眼孔を以てして專ら自然科學の思想を用ひたるの結果は當時の哲學をしておのづから唯物論に傾かしめたり。又右の理由により此の啓蒙時代の思想には神祕的の所なく幽玄なる趣無く、文學上にも唯條理の一貫せるのみ好んで一切の不可思議なる事を排斥せり。斯かる思潮は神韻縹渺たる文學上の大作を產み出だすに適せず、又總躰美術に適せず、故に此の時代は近世の歐洲にて最も美術の衰へたる時なりき。

昔ながらの權威をそのまゝに尊敬する心の失せゆきたることと自然科學の見樣とが相結びたるの結果と見るべき特色を當時の思潮に認むるを得、其の非歷史的なる點即ち是れなり。自然科學の研究の向かふ所は時處によりて異變すること無き自然法、其の謂ふ物理上の法則などは時の古今によりて變はるものにあらず。當時の學者は概ね此の自然科學の眼孔を以て人間社會の事をも觀たるが故に、處

の點に於いては歐洲十八世紀の啓蒙的思潮も性質上古代希臘に起こりたるものと同一なり。カントが啓蒙的思潮の特質を説きて言ひし如く、これは恰も未丁年者が丁年に成れる時の如し。當時の啓蒙的思潮の特色は何なるぞと云はゞ(一)個人的なる、(二)凡て容易く理解し得られざるものを棄つる、(三)自然科學研究の眼孔を以て萬事を觀る、(四)而して學術の思想を世間に普及せしめんとしたる、此の四個條を掲げて答ふるを得べし。希臘ソフィストの時代と同じく學術思想の普及を計りたる所より其の思潮は自然に通俗的となりて、高遠深邃なる哲學上の大學説等は此の時には見るを得ず、此の點に於いて第十八世紀の啓蒙時代はその以前及び其の以後の時代と明かに異なれり。

是非眞否の判斷を爲すに竟に個々人自己の理解力に訴ふるの外なしと見たるよりして、其の思潮の趣くところ、諸種の權威の所定に服從することをせず、古くより言ひ傳へ久しく行はれたる事物と雖も其の據りて立つ所の確かなるか否かを討究せずして之を其の儘に承認すべきの理由は無しとするに至れるは自然なり。而して各人自己の心を以て事の是非眞否を判斷するにも專ら其の理解力を以て

種々なる形を取りて現れたり、此の觀念の歷史を追ふは一の極めて興味ある研究なり。後の歐洲思想の歷史には右云ふ二觀念の對峙が文明論上に、法理論上に、宗敎論上にそれぞれの形を取りて現るゝを見る。かの佛蘭西の大革命も畢竟ずるに右云ふ二觀念の對峙に基きて、貴族の權利僧侶の權利及び其の他政治上階級制度に基ける一切の不平等は皆人爲的のもの即ち人の捏して作りたるものなれば是れは須からく改むべきもの、自由平等こそ吾人の自然の權なれと唱へたるに起因せり。蓋し人爲的に歷史上定まりたるものは自然の樣より遠ざかりたる點に於いて過誤に陷れるもの、人爲的制定是誤謬、自然是れ眞正なるものなりと見たるよりして社會上の觀念に大變動を來たしたりし也。斯かる見樣是れ十八世紀に於ける歐洲の、殊に佛蘭西の啓蒙的思潮の一大特色なりとす。

歐洲第十八世紀の啓蒙的思潮、是れ亦近世の當初より長足の進歩を爲したる自然科學研究の精神と其の研究より得たる觀念とが廣く人事の上に及びたるの結果なり。此の自然科學的思想の應用と共に當時の啓蒙的思潮の他の要素を爲したるものは人々の理解力に一切の是非眞否の判決を求めたることにあり。此の根本

等以爲へらく個々人は皆自然に其の欲望を滿たさんと力む、人各〻其の力の限り其の欲する所を得んとする是れ其のおのづから然るのさま、即ち是れ人事に於けるの自然法なり。强者の權利是れ人事の自然法にして、法律も道德も畢竟吾人が自己の利益を守らんために作爲したるもの、若し之れを蹂躙して自己の利益を進むることを爲し得るほどの强力を有する者あらば之れを蹂躪するに何の不可かある。ソフィスト等は斯かる議論を吐く迄に當時の啓蒙的思潮を驅り進めたり。ソークラテースは此の時代に出でて同じく當時の思想を呼吸したる者、彼れの見る所に從ひても「人間が萬事の尺度なり」。併し彼れは同じく人間を尺度となすにも、ソフィストの爲したる如く個々人に於いて相異なる欲望を以てせず、萬人に遍通するものを以てせんとしたり、即ちソフィスト等の云ふ自然法の外に尙人事に遍通不易のものあらんと思ひて之れを探求せんとしたるなり。是れソークラテースの起こしたる人事の新硏究にして、此の着眼の點よりして希臘の思想界は更に一大步を轉ずるに至りしなり。

希臘啓蒙思潮の產物たる自然法と人爲法てふ觀念の對峙は後の思想界の歷史に

以爲へらく自然に定まれるものは時處の差別に從うて變はること無し、之れに反して人の定めたるものは決して遍通不易ならず。隨處隨時に變ずること無き自然法てふ觀念は是れ即ち物理の研究より得來たれるものにして、之れと比べて人爲法は全く、相異なりて常に移りゆき變りゆくもの、而して法律習慣風儀等皆此の人爲法に屬するもの也。人爲法は畢竟人間が吾が爲めに自ら造りたるものなれば、人間が自身の都合の爲めに變更して毫も不可なきもの、唯自然法は變更す可からざる也。法律習慣風儀等は人視て昔より犯す可からず更ふべからざる神聖なるものとしたれども、實は然らず、古今を相比べ看よ、實際其等のものの變じ來たりしを知るべし。故に法律にも制度にも風儀にも今人の決して犯す可からざる權威と云ふもの無し。若し人事に變易す可からざるものあらば其は即ち人事に於けるの自然法、吾人のおのづから然るものを除いては吾人の必ず守るべきものある莫し。然らば即ち吾人に於いておのづから然ると謂ふべきは何ぞや。

ソフィスト等は人間を見るに之れを個人として見たり、是れは上に陳ぶる如く彼等が古來社會の掟としたるものに對するの信仰を失ひたる自然の結果なり。彼

ち風儀も竟に此の各人が自己の心を以てする批評を免るゝこと能はざるに至れり。斯くの如くに舊時の所傳信仰習慣が其の勢力を失ふに至りしも其の原因の一大部分は上に謂ふ學術研究の精神の波及に外ならず。ソークラテース出でて倫理の攻究を創めたるも亦新時代の精神に動かされたるなり。彼れは國法及び風紀の尊嚴を維持せんと欲しながら尙吾人が其を守るには各自の眼識を以て其の守るべき所以を了解して之かすべしと唱へたるは、是れ彼れが新時代の精神なる研究心の得て抑壓すべきものならぬを見、却つて此の研究心を滿足せしめたる結果として得らるべき正確なる智識に基いて人倫道德を立つるの外今にして取るべきの道なしと思ひたればなり。ソフィスト中舊來の所傳に對するの尊敬を失ひたるの結果竟に世の風紀を破壞するの傾向に走れるものありしは自然の事なり。

右云へる物理研究の思想と舊時の信仰の衰微との相結べるところに生じたる啓蒙的思潮の產物にして而して後の思想界に重大なる影響を與ふる者となりしは、自然に定まれるもの(フイジス)と人の定めたるもの(ノモス)と云ふことの對峙なり。

して、其の時代の思潮の一方面は學術研究の結果及び精神を人間社會の事態に應用せんとしたるにありき。蓋し是より先き希臘に於いては既に自然界の物理的研究の盛んに起こるありて是れが當時の哲學思想を形づくりたるなるが、ソフィスト等の出でたる時は從來自然界へ向けたる學術の精神を人間界へ向けたるなり。當時の思潮は恰も近時物理界に於ける自然科學的研究の大功を奏したるより亦同じく科學的研究の精神を以て人事の攷究をも爲さんと力め、政治經濟も人倫道德も宗敎も皆科學的に究明するを要すと考ふると相似たり。物理の研究より得たる思想を人事に應用せんとすることと相結んで希臘のソフィスト時代の啓蒙的思潮の一面を成したるは、古來の所傳信仰習慣が舊時のまゝの勢力を有し得ず、人々各〻其等所傳の據りて立つ所を問ひたゞすに至れることと是れなり。人何心なく祖先傳來の信仰を其のまゝに保持したる時代は此の時既に過ぎ去りて復喚び返すべくもあらず、昔しながらの權威(オーソリテー)を以て人心を維ぎ得べかりし時は過去のものとなり了りぬ。新時代の精神は人をして各〻自己の心を以て事の當否を辨別するの必要を感ぜしめ、古來神聖視せられたる法律

國語もて其の時代の特質を平易に言はゞ、先づ維新このかた人口に膾炙したる「開ける」てふ語を以て表はすに如くはなからん。我が國維新以後十數年間は一意啓蒙的思潮の精神もて突進し來たりたるなれど、其の思潮の短處を補はんために起こりたる反動に因りて今は却つて其の時代の大精神を失へるが如し。其の時代の英勃の氣を今は何處に認むべき。

姑くヒューマニストの時代を除きて云はゞ、歐洲思想の歷史に壯大なる啓蒙的思潮の時期二つあり、一は古代の希臘に、一は十八世紀の西歐に起こりたるもの、希臘の古へに起こりたるものは亞典府を中心とせる當時の希臘の社會に限られしものなれど、其の思想上後世に及ぼしたる影響は近世西歐に起こりたるものに比して決して劣る所無し。時處の差別に因りて啓蒙的思潮に幾分か趣の異なる所はあれども、單に其の大躰の狀勢の相同じきのみならず、歷史は自らを繰り返すと思はるゝほどに相似たる點あるを見る。殊に我が國維新以後の啓蒙的思潮は歐洲十八世紀の佛蘭西のに極めて親密なる關係を有せるなり。

古の希臘の啓蒙時代は是れソフィストの徒及びソークラテースの出でたる時に

せんと欲して鳴動しつゝあるは獨り東洋の形勢のみかは、殊に二十世紀に於ては東洋と西洋と愈觸接するに於て學問界にも政治上にも社會上にも非常なる變動の來ること復た疑ひを須ゐず。苟も學界に留意する者爾が眼を拂拭して方さに來らんとする大變動の形勢を熟視せずして可ならんや。

（編者曰、本篇は明治二十九年一月廿九日東京青年會館に開ける學術講演會にてものせられたる講演の要を摘めるもの也）

啓蒙時代の精神を論ず

東西古今の思想界の歴史を觀るに、啓蒙時代と名づくべき時期え(ママ)ばしばありて、此の時期の思潮には著るき長處もあれば亦同じ程に著るき短處もあり。短處は固よりあれど、其の時代の大精神はえばしば世に喚起せらるべき必要のあるもの、予輩は正さしく此の必要を我が國現今の思想界に認むと思ふは非なる邪。こゝに啓蒙時代と稱するは獨逸の學者間に慣用する而して英國語にも其の適當なる譯語を求めんとしつゝあるアウフクレールングの時代を指すなり。今我が

が無くなる惧れがある。其處で「今迄人類を動かした大思想大觀念は單に迷信想像とハネ除けて宜いか」「科學は萬能であるか」「總ての問題は科學で決定するか」。今方に起りたる問題は是れ。成る程實際上、思想上、科學の効果著大なるには相違なきも深き處に入れば尙ほ覺束なくはないか。又智識の方面に於て最も深き滿足を與ふるや如何、思想界の問題今此の點に集まると云ふも可。固より此點は前から人の考ふる處なれども此頃殊に甚し。要するに哲學抔の大組織を望む聲が聞える。又宗敎等の人生に必要なる者を只迷信と言つて破りて宜いか、宗敎は果して必要でないか、又宗敎の理論の方に於ては表面で無く深き處に這入れば哲學組織を闕きはせぬ乎。此等の疑問希望今正に相集合す。其處で現今は此に停止せずして潮流が大轉して行く現象あるはたしか。兎に角以上三の者の關係は未だ定まりたるに非ず今正さに疑題たる耳。而して東西洋の地圖が今方さに變せんとして在るが如く隱々たる智識上の大變動が豫測せられてある。而して變動は學術の方面よりのみならずして、避くべからざる社會問題の醱酵よりして非常なる變動が來るに相違ない。其他宗敎は固より、政治に於て亦然り、ア丶今方さに變

く、是がエキザクト、サイエンス、或は單にサイエンス。是れが物質上の研究に非常なる影響を與へた、故に物理學は十九世紀に於て殊に此の三四十年間は古來稀なる進歩を成した。斯の如く科學研究の應用を爲すが此時代。是に由て道德宗敎もみな科學の裡に入れねばならぬ。(是が又ソークラテースと合つて居る即ちモ一度確實に研究して其研究の結果を應用して始めて社會の事が治まると云ふたと同じ)。此の科學者の中で先頃死だハックスリーの如き尤も有名な一人。而して此科學や近世の福音となりて其勢ひ頗る凄まじ。

是に於て大に疑問あり、即ち現今の學海の潮流は只科學一方か如何、如何、如何、或は他に大潮流を成さんとしては居ないか。玆に注意すべき事は或方面には慥かに反動が起つて居る。何故に科學に滿足せず反動が起つて居るか、夫には色々理由が有る。其科學の根據を餘り狹く見て即ち科學と云ふことで人生と天地間の邃き問題が解るかと云ふ疑問。又人間社會の最も大なる指導力となるに耐ゆる乎と云ふ問題が尙ほ殘つてある。科學を主張する人は一切吾人が直接の經驗の外に出ない、其外は凡て迷信想像であるとする、夫で天道とか靈魂とか云ふ者の根據

因あれば結果ありと云ふは色々の習慣から來る、實際天地萬物にそんな原因あるでなしと云ふ樣なもの)。

此時に當て大革新を圖らんとして出て來たはカント。其言に窮理派でも經驗派でも見逃して居るものが在る、即ち吾人の智識はどうして出來るか此智識の智識を知らねばいかぬ、夫を知らずに色々の事を論じても空論となる、道具の用を知らずに工事を成す樣で夫は危ないと。是が希臘でいふとソークラテースが先づ自分を知らねばならぬ人間を知らねばならぬと云ふたと同一揆。即ち此のカントの說が智識論となつて來て居る。(但し注意すべきはカントが其の論を爲してから後フィヒテ、シェリング、ヘーゲル等が起つて始めて形而上の大法則が建てられた、カントの大本領は實は倫理。此のヘーゲルが形而上の大組織を建てたるは猶ほソ氏の後アリストートルの起れるが如し。而してヘーゲルは遂に學界の王と迄なつた、併し彼に比すれば其支配短かし)。

其後は如何、即ち我々が今住んで居る時代。

何の時代か、即ち科學の時代である。即ち寧ろ確實に局部々々を綿密に調べて行

却說學界の革新を來したるものに二方法あり、一は「確實なることから始める、即ち其銘々の心の裡に確定して疑ひを容れぬと云ふ處から論じて一步一步透間の無い學問の組織を定むるもの」。一は「自分で想像したものでは益なし、外界の澤山の事柄を把りて確實に之を研究し其に據て吾人の智識を定むるもの」。此二ッが近世の學問の開けた基。之れより歐洲學界の二大潮流を成した。

何をか二大潮流と云ふ、一を窮理派と名け他を經驗派と云ふ。而して前者はデカルト之が首唱にして後者はベーコン之が代表たり。而して此二大潮流や近世に至るまで汨々滔々盡きる所なし、然れども後世に至れば二者兩ッながら亦其の弊あり。

窮理派には種々浩瀚なる說立てられた併し惜むらくは確實を缺く、多くの想像を混へる。即ち先づ豫め觀念を定め置て之より分析して總ての形躰を作ると云ふ風。故に其弊や想像なり空論也。經驗派の方はいろんな事實を蒐め樣と掛つて居る、夫で色々な事柄は集るが全躰を通觀する處のものが分らぬ。前の方(窮理)は言へば內を尊ぶ、此は(經驗)外を尙ぶ、是其餘弊。(例へば經驗派のヒュームの說に、原

希臘の末から學問が漸々宗敎に傾いて來た、夫は其時丁度基督敎來りて羅馬の天地を横領せるに依る、之れに由りて政治上の經驗は頗る深く新しくなつた所がある。然れども學理の研究は寧ろ宗敎に由て壓せられた。其處で寧ろ中世紀の學問は訓詁の學問、讀書の學問であつた。故に學問とは書物を能く讀むといふ風になつて來た。（支那に於て儒敎でも矢張り四書五經を讀むのみを能事とする樣になつて來た、佛敎に於ても亦然り）。中世に於て學問は一時其通り即ち人間の世界と自然の世界とは度外に措て只管記誦を事として居る。底で此時學界の革新が來た、曰「自然に歸れ」。即ち自然を主とし事實を主とせねばならぬと云ふ事。是には詩歌繪畫にも適例がある、歌でも詩でも繪でも只外見の陳套の下に束縛せられて本當の美術本當の詩歌が出來ない時代であつた。此時に於て反動は忽ち美術界に起つて詩でも歌でも繪でも皆新らしく目を拭うて天地間人間間を研究せよと絶叫して來た。革新は破壞を意味す破壞は舊慣、故例、因習、凡俗を洗ひ盡さずんば休せず、此時爛熟せる社會を厭うて大革新の氣運を勃興したるは學界も詩歌界も繪畫界も皆一轍に出て居る。

な社會に處して社會を治むるには如何すれば宜いか、是れ其問題にして其を研究するが必要。即ち智識が必要。政治家として政治を爲すに政治は斯の如くすべし社會は斯の如くすべしと其智識を持たずには出來ぬ、其智識を持て始て社會の事が立派に治まる、而して社會の事を處するに困難はないと。故に學術の點から言へばソークラテースは或は粗末な所あらん、然れども斯る意見を持したソークラテースの精神は偉大なる者である、ソ氏謂へらく人往々勇氣(勇氣に限らず)と云ふ、之に問ふに彼れ何と答ふべきか、曰く云々、然れども是れ果して實際に行ふべき勇氣か、彼等は本當にまだ知て居らぬ、是迄色々言つて居るが一も知て居るものがない、併し是に由て無智と云ふことを發見した「余は無智なりと云ふことを知るが眞の智者である」と。底で明瞭なる智識を得ることが第一必要と云ふに歸着する、是れソ氏が學問界に非常の時期を開いた所以。(但注意すべきは斯の如くソ氏が智識を確實にして社會に處して行かねばならぬと云ふたに繼でプラトーン、アリストテレース抔が出でて始めて哲學の大基礎を建てたる也)。其後に來るは即ち近世の大變動。

實にソフィスト、ソークラテースの時代である。今歐洲學問界の變遷を觀るには是非其ソークラテースの位置を知らねばならぬ。ソークラテースの以前には或は哲學、天文、物理、生理等人事に涉らざる自然の學が餘程進んだ有樣にあつた。然るに其を應用して實地に研究するの必要が起つて來た、夫はソフィストで方針が寧ろ人間に向て居る即ち學問を人間社會に應用したものである。而して研究の仕方が事物の根據を探ることで、例へば玆に法律がある道德がある、果して遵ふに足るべき者かと其根原に溯つて行く。宗敎は最も學術に緣遠いが、此方法で遂に宗敎迄も批評し研究するの精神が起つた。其結果竟にむかしの定つた社會を破壞するに至るは當然。其時代に又ソークラテースが起つて學說を其儘受取らず自由に研究せんとするの志を生じた、ソフィストは天の事大地の事其等遠い學說よりも寧ろ人間の事に着眼した、ソークラテースに至ては一切無頓着、只だ言ふ我自身の事を知らねばならぬ、山、海、星そんな身外の如何は問ふの要なし、只人間を研究して其結果として社會の改良を圖らねばならぬと。其處で社會が搖ぎ出した。(丁度日本で適例は維新以後、道德でも習慣でも非常の變動をした時代)。夫で其樣

分かれるものでなく、新しく出來たことを理解するには古きを知るを要す。歷史の必要ば即ち其處で、現在を知るには是非とも過去を知らねばならぬ、殊に學問界の大勢を知るに於て尤も然りとなす。

今の學問界の潮流果して如何、少なくとも三四の大潮流が相集つて更に大なる流れを成さんとして居るの時機也と信ず。而して之を古へに徵するに夫〻大變動の時機があつて其時機には必ず特種の現象がある。故に現今の變動を語らんとするには古來の大變動の時機について語らねばならぬ。

先づ學問の中で最も形躰を成して居るものが物理の學である。人事即ち人間の事に關する學問は古き遣り方が餘程廢れて又新らしきが形作られやうと云ふ有樣で、法律でも經濟でも「新派」と云ふ樣な名が付けてある、即ちどんなことかと云ふと方案が出來て居るのみで未だ十分に形作られぬと云ふことを意味する。即ち心理、道德、哲學、宗敎でも凡そ人事に關するものは尙ほ十分變動を經つゝある時代と言つて可。(無論此大潮流の事たる歐洲の學海を本位として論ずる者也)。

歐洲現時の學問の淵源は遠く希臘にある。而して其希臘の學問の發達の根原は

昔し武士道の盛にあつたのは一つには武士の仲間の制裁が强かつたからです、武士の仲間から擯斥される程不面目のことは無いと思はれたのであります、社會の氣風を保つには此の制裁と云ふものが必要です、宗教の仲間にも何宗徒としては此のやうなる卑劣な事は出來ぬと云ふ心が肝要です、今は武士と云ふ一階級はない、それ故制裁を形づくるべき仲間も廣くならなければならぬ、日本臣民が世界に對する天職からして制裁を形づくらねばならぬ、日本國民として卑劣なることは出來ぬ、その理想に背いたものは武士の仲間で擯斥したやうに擯斥する氣風を盛にしなくばならぬ、此の如き氣風を以て相團結して世界に吾が天職を行ふならば、昔し花は櫻木人は武士と謳はれたるその武士を一階級に止まらしめず、日本全國をして武士國たらしめる事が出來るであらうと思ひます、

（明治廿八年十月十三日惟一舘にて演說、同年十一月發行『宗教』第四十九號）

現今學海の潮流

古人も温故而知新と言うた如く新舊の二事物は決して斧を以て二ツにした如く

その國家と云ふことも其の世界に於ける地位から考へなければならぬ、世界の歴史に於ける我が國家の天職を見ず世界の大勢を見ることなくしては國家主義も忠義心も大和魂も固陋のものとなつて仕舞ふ、

次に又團躰的に物事をする氣風を養はねばならぬ、此點に於いては我國民はまだ十分の熟練を得て居ない、自分が一人で李鴻章を殺せばそれで善いなどと思ふのは封建時代の戰爭の一騎打の考であります、

次に又理想を爲し遂げる手段に精密なる算用をすることを厭はぬやうにせねばならぬ、兎角面倒しがつて唯だ氣を以て勝たうとする僻がある、一言に云へば我が國民はまだ科學的思想又習練に乏しい、科學的の綿密なると精確なると忍耐とに缺けて居る所がある、

次に又武士の階級から農工商を卑しめた氣風は固より去らなければならぬ、今日は實業實業と云つて大分此點に於いては氣風が變りゆき居るとは明かでありますす、然し階級的貴族的の所はまだまだ多きに過ぎはしませぬか、四民平等自由の氣風は尙ほ盛にすべき餘地が澤山あります、

本人民の氣質を見ることが出來ると思ひますが、今終りに國民として自ら其の氣質を省るべき所があると云ふ點を陳べたいと思ひます、我が國人は或る理想を立てると、其理想の爲に何でもする、これが爲に我が生命を輕ずることはその特色であると思ひます、殊に忠義の爲には水火をも辭せぬ、而して忠義心は公共心であつて國家の團結には極めて肝要のものであります、然し又理想の爲に燃えるにも動もすれば忽に熱して忽に冷えると云ふ氣味がある、是れが日本人は氣がはりのしやすいと謂はれる所です、此頃或外國の學者が評して日本人の氣質は心理上から云へば感情的感激的のものだと云つたも同じ點を指したのであります、どうも執着力に乏しい所がある、面倒しがつて短氣を起す、仕方がないと諦めることが早すぎる、早く天命に安じすぎる、

次に我等は理想の爲に心持の善いほどに意氣込んで俠氣を出だすことは寧ろ得意とする所であるけれども、その奉ずる理想を大きくする必要がある、今では忠義と云つても最早封建時代の考ではいかぬ、一藩一藩とか又は東北とか九州とか云ふ地方的團躰が主眼ではない、日本の國家と云ふことで相結ぶのである、そして又

道の由來する所がストアとは違ふからであります、武士道は歐洲のシヴァリーのやうに封建制度の下にあつて主もに戰爭の中に或は戰爭を目的として形づくられたものであります、ストアの精神は安心立命を求める希臘末期の哲學の一產物であります、

斯樣にストアと武士道とはおのづから違ふ所があります、ストアの學には哲學的の所があり宗敎的の所があり天地の大道に對し宇宙に對する宏大なる觀念がある、それ故武士道よりも遙に高遠幽玄なる所がある、然しストアには安心立命を求めて我が心の中に引つ込むと云ふやうなる所が見える、外界の事は我が自由に出來ない、それ故に外物に賴らず但だ他の侵すことの出來ない我が心に立籠つてそこに安心すると云ふ氣味がある、武士はさうでない武士は何處までも我身を捨てて客觀的事物のためにする、主君の爲には我れを思ふの暇がない、尤もストアにも羅馬時代になると社會的の所が增して來ますけれども武士が手近い社會の關係人倫の關係に立場を置くとは大分違ひます、

今迄陳べました武士の氣風が國民の精華であると申しても宜しからう、これに日

た所があるが、然しそこに又差別がある、武士は躰面を重んじて他人が不埒なる事をすると捨てては置かぬ、直ぐに之に訴へても耻辱を雪がうとする、固より無闇に刄を拔くのが武士の道ではない、併しながら何處までも躰面を重んずるが爲には爭ふと云ふことは少しも辭しない、故に復讎をするのが大層名譽である、ストアの精神はそこは違ひます、ストアの考では他人が自分に不埒なことをしても夫を報いる必要はない、なぜなれば他人が自分に如何樣なることを爲やうが我が價値はそれが爲に少しも變らない、他人が我を傷けても實は我れの我れたる所即ち理性は少しも傷けられぬ、その如き仕業は他人の愚なる所から出て來るのであるから寧ろ其の愚を憐めよと云ふがストアの精神であります、ストアには忍辱と云ふやうなる所がある、武士も爭ふのみが其の本分ではない、武士は相見互と云つて頗る情ある所がある、一旦は生命を堵しても相爭ふけれども、その爭ひの決した日には敗者の手を取つて之と親しみ少しも輕蔑する所のないのは實に武士道の思想で其の極めて美しい所であります、併しながら武士は躰面を重んずる所から一毫も假さぬと云ふ精神が必要であつて、こゝはストアと違ふ所であります、こゝは武士

殺の可否は論じませぬが、此の點に於いて武士とストアと善く似て居ることは明であります、

斯くストアの精神と武士の氣風とは善く似て居ますが、又其の異つて居る所にも注目せねばならぬ、ストアの方では宇宙を貫いて居る道理心がある神があると謂つて夫れに根據を据ゑる故に、吾人が天命を知つてそれに安んずると云ふのも其宇宙を通貫する大なる道理心に率ふと云ふことに根ざして居る、ストアには哲學的の所があり又宗敎的の所がある、羅馬時代のストアになるとますます宗敎の風味を帶びて居る、儒敎でも天と云ふことを謂つてそれが幾くらか武士道の精神に關係しないでもありませぬが、併し武士道の基は天と云ふ所にはない、武士道の精神の中點は寧ろ忠義の心にある、宇宙の神と云ふよりも我が手近く事へる國君が主眼となる、ストアには君命と云ふやうなるものが中心とはならない、從つて君に對する忠義と云ふものが最も重きを占めると云ふことはない、ストアの方は哲學的であり又宗敎的であつて武士道は專ら社會的人倫的である、

次には躰面を重んずると云ふことが武士の特色であり又ストアにも多少之と似

と云ふことの外に今世にも又來世にも報いを求めない、武士は君の馬前に義のために武士の職分を盡して討死を遂げる、それが報酬で其外に何も利益を求める心はない、此の武士の精神には儒教の考へ方が見えて居る、儒教に說く所は來世的のものではありませぬ、

それから第四には斯くの如き精神であるからして運命を見て安んずる、天なり命なりと認めてそこに安ずる、これはストアにも善く見えれば又武士にも見える、死ぬべき時には泰然として死ぬる、少しも驚かない、併し又或宗教家の中にあるやうに喜び勇んで雀躍（こおどり）して死ぬるのとも違う、死生の理を觀じて從容として靜におそかに死するストアの死と凱歌を謳ひながら天へ昇り彌陀佛の來迎を目（ま）のあたりに見て極樂淨土に往くと思ひ喜んで死ぬるのとは違ふ、

第五にはストアも武士も自殺を重んずる、一死を以て武士の躰面を維持すると云ふが武士の精神であります、ストアも我が理性に從うて外物の奴隷とならないには死するの一途あるのみと見た時に泰然として自殺する、彼等は自殺を以て人間の特權の如くに考へて居る、ストア學者の中自殺した人は少くありませぬ、爰に自

こがストアの學と似て居る所で吾人の德は吾人の性に從ふにある、仁義禮智忠孝は別ではない吾人の性に於いて人間として爲さねばならぬことである、

第二には吾人の性は仁義禮智を具へて居る貴重なるものであるから卑劣なことは出來ぬ、武士が躰面を尊ぶと云ふことは誰も知つて居ることで、之が武士の武士たる所で、卑劣なことをすればそれは武士ではない、富貴も安樂も生命も武士の躰面には代へられぬ、それ故淨瑠璃の作者も彼の可憐なる若君をして侍の子と云ふものは腹が空つてもひもじうないと謂はしめたのであります、武士は喰はねど高楊子、喰ふ喰はぬなどは何でもないこと、武士道は斯樣なる精神に於いてストア學者が理性に從ふことの外凡べてのものを糞土の如く見たのと善く似て居ります、

第三には今申しました點から自然に出て來ることでありまするが、ストアも武士も利益主義ではない、商賣主義ではない、こゝは或る宗旨抔に說く所と大に違う、西洋の宗教でも日本の宗教でも斯く斯くすれば來世に往いて安樂が得らるゝと說いて善行を勸めることは珍しくないことでありますが、ストアの精神も武士の精神もこゝは大に後生を願ふやうなる心とは違う、ストアの學者は天地の大道に從ふ

の氣質に育ち禪宗などの觀念に多少養はれ又德川時代には主として儒敎の仁義忠孝の思想に養はれて殊に封建制度の下に形を成し上げたるものが我が國の所謂武士道でありませう、その武士道の精神が發揚して日本の社會には種々の現象が現はれて居る、武士道に我が國民の氣質の精華を見ることが出來ます、若し武士の精神と云ふものを取り去つたならば我が國の歷史は其の光彩の大半を失ふであらうと思ひます、武士道の我が國に於ける關係はストアの學風が羅馬の歷史に於けるよりも更に肝要なるものであります、

武士道と云ふものは一の學術ではない、ストア學と云ふやうなる一の學派ではない、武士と云ふ階級に具へて居た精神を謂ふのであります、併し其精神に於て頗るストアと似た所のあるは否まれぬことゝ思ひます、武士道は今申す通り素より學術ではない、然しその精神の基く所を謂へば儒學に關係して居る所があります、如何なる點に於て儒學に關係して居るかと謂ふに、仁義禮智は吾人の性に基いて居るものと云ふことは、武士が常に明らかにさう考へたではなくとも、其道德思想の根據を尋ねて見たらば大抵儒敎の仁義禮智の思想を以て答へたでありませう、こ

馬には種々立派なる人物が出て來て居ります、羅馬時代のストア學の精華と言はるゝマルクス、アウレリウス、哲人王位に居ると云ふは實に彼れのことであると謂はれたる羅馬の明君マルクス、アウレリウスを見ればストアの精神の最も光輝ある代表者を認むることが出來る、

今迄陳べ來たつた所でストアの精神と我が國の武士の氣風と如何に似て居るかと云ふことは見難くないと思ひます、武士道と謂へば直ぐに儒教を聯想します、儒教が武士道を形づくる力あつたは勿論のことで、殊に德川時代には武士道は儒教に養はれたと云ふことが出來る、併し又佛教にも多少養はれて居る所がある、鎌倉時代などには武士が戰場に臨む時に參禪した話は珍しくない、佛教の中にも殊に禪が武士の精神を練ることに關係して居る所がある、然し武士道の由來は儒教の外又佛教の外に尙ほ古い所に溯つて見ねばならぬ、我が國にのみ限つたことではないが、我が國に古くより著く發揚されて居る臣民が主上に對する忠義の心と云ふものを認ねばならぬ、萬葉の歌を見ても王室に對する忠義心は明らかに表れて居る、臣民と君主との親密なる關係、一言に云へば忠義の心が種となつて我が國民

卑劣なことはない、其外に吾人の求むべきことはない、それ故ストア學者の言葉にも正直にして生き得ざる限りは生きまじと決心せよ理性は汝が奴隷たらんよりは汝の無からんことを欲すと申してあります、

第三には矢張今云つた所と連絡して居ることでありますが、ストア學者の精神には外物に待つ所がない、外から來るものは有つても無くてもよい、外物は我が自由に出來ぬ、それに依つて居ては吾人の心の眞に安んずる時がない、吾が安んずべき所は吾れ自らにある、吾れの決心にある、吾れの天命に從ふ心にある、これは他には依らない、他人は我が名譽を奪ふことは出來る、他人は我が官職を奪ふことは出來る、他人は我が實を奪ふことは出來る、他人は我が壽命を奪ふことは出來る、但だ我が意志を奪ふことは出來ぬ、我が意志が宇宙の理性に從ふことは何物も奪ふことが出來ぬ、他人が我を誇り我が身躰を害ふとも、是れは我を傷けたものではない、我は我が名譽にあらず我が肉躰にあらず、我の我たる所は理性である、獨り我を傷けるものは我れ自らの意志が天地の大道に背くことである、

ストア學者は斯樣の精神に據つて立つたのであります、斯樣の精神に養はれて羅

の發したるものに外ならぬ、

そこで此ストアの學を主もに道德の方面から見て、其主要の點を此所に取摘んで、申しませうならば、先づ第一に、儒敎の言葉を借りて謂へば、天命に從つて之に安んずると云ふ所がある、吾が爲すべきことは天命に從ふことの外にはない、そこで或る名高きストア學者の申して居る言葉にも吾は汝のものなり汝の定むる所吾れ何ものをも辭せずと云つてあります、汝と謂ふは宇宙の道即ちストア學者の謂ふ神を指すのであります、宇宙の大道に從つてそこに安ずる是れストア學者の大精神であります、

第二には今申したる第一の點と自然に關係して居ることではありまするが、吾が性を尊ぶこと是れ亦ストア學の特色であります、人間と云ふものは賤いものではない、吾人の理性は宇宙の道理心即ち神が我等に宿つて居るもの、即ち我等の中にある神性である、其尊さは如何なるものも之に較べられぬ、吾が性に對して卑劣なることは出來ぬ、こゝにストア學者の謂ふ義務心が生ずる、人間は其性に從ふ義務を有つて居る、其義務のあるところ何處にも行かなければならぬ、それを爲さぬ程

界の事情に懸ることで、それらに善惡はない、唯だ善惡は他人の奪ふことの出來ぬ我が意志にある、意志のみは如何なる境遇に接しても屈せぬことが出來る、こゝに吾れ人の價値がある、斯樣なる考を以てストアの學者は萬事に接したので、災難のあるなしなどは意に介せない、災難の來ないことは願はない、來ても構はない、なぜなれば災難と云ふやうなものは吾れに取つて善いものでも惡るいものでもない、死といふことも何も恐れるに及ばぬ、死ぬると云ふは善いことでも惡るいことでも何でもないと、斯樣に考へたので、有名なるストア學者の言葉にも世人は我が愛するものの無病息災ならんことを願ふ我れは寧ろ我が子の死ぬることあるもそれに堪へる意志を有せむことを願ふと申してあります、これらは唯だ言葉だけではない、實際ストア學者はそれを行ふたのであります、彼等は死を恐れない所からして種々常人には出來ざることを爲して居ります、彼等が意志の力を信ずることの深い所から、中には唯だ靜座して我れと我が息氣(いき)をとゞめて死んだ者もあると申すことです、時に或は世間の常情を外れたやうなこともあるも、然し右申すやうなる精神で常の人の出來ない大なる行を爲して居る、彼等の氣高い所は此の精神

ある、人間の性は本來宇宙の理性に外ならぬから、我等の爲さねばならぬことは別ではない、吾が性に從つて行けば宜しい、吾が性に從へば取りも直さず天地の道即ち宇宙に貫ける道理心に從ふのである、吾人の性は天地の道から來たれるもの、其性に從ふが吾人の道徳である、かやうに申せば直ぐにストアの學と儒教に謂ふ所とが如何に善く似て居るかゞわかる、中庸に天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教と云つてあることを想ひ出ださずには措けぬ、ストア學者の謂ふ宇宙の理性を此處に云ふ天命に當てはめて見たらば其の相似たる點は明でありませう、

偖斯樣にストアの學者は天地と人性とを見たので、彼等から見ると吾人に於て唯だ一つ大切なるは吾が理性に從ふことである、富貴貧賤權勢名譽などと云ふものは吾人に取つて善いものでも惡るいものでもない、快樂苦痛又生命も矢張り善いのでも惡るいものでもない、富貴だからと言つて吾人の價値が騰るでもない、貧賤だからと言つて吾人の價値が下るでもない、吾人の價値のある所は吾が道理心に從つて道を守る即ち徳を行ふことにある、徳より外に善いものはない、不徳より外に惡いものはない、富貴貧賤幸不幸又生死も我が自由に出來ぬ所がある、此等は外

やうにしてあつたのではなく、當時の道德上に少からぬ影響を與へたものであります、羅馬の歷史を御讀みの御方は當時の有名なる軍人又有名なる政治家の中にストアの學を奉じて居た者の多いことを御存じでありませう、ストア學の精神からして其人々は總てのことを爲したのであります、丁度儒敎の盛んな時分に矢張り儒敎の精神を以て公私の事に從つた者が我が國に多かたのと同じことであります、其ストアの學と申すものの根本思想は何であるかと云ふに、爰には哲學上の委しき御話を致す隙がありませぬから、唯だ專ら道德論の方面を申上げませう、ストアの學者の考へた所では人間に在りて最も大切なるもの即ち人間の人間たる所は何であるかと云へば、吾人が道理心を具へ道理を辨へることにある、其道理を辨へる心で總てのことを支配して行くのが人間の人間たる所、吾等が禽獸と異なる所である、其道理心又言葉を換へて言へば理性は吾等のみならず天地萬物を貫いて居る所のもので、それをストアの學者は或は神とも名づけて居ります、併し通俗に謂ふ神とは大分意味が違つて居りまする故、こゝには先づ宇宙の道又は道理心と申して置きませう、この道理心の一部が宿つて吾等の道理心となつて居るので

てあります、一座の議論が決して一座の議論ですまぬ、空論が空論ですまぬ、我が國維新の大革命も素とは書生の議論であつたと云ふことが出來る、下宿屋の二階の書生論が回天動地の歴史上の大事實と爲つて現れて來ることがある、それ程にまで爲つて現れて來なくとも何處かに現れて來る、吾人の一切の行爲は皆吾が思ひが外に發表したものであると謂ふことが出來る、それ故に各人の又廣くいへば國民の精神又氣風とする所は如何なる思想を中心として成つて居るかと云ふことは大に注目すべき事柄であると思ひます、

そこらの考から私は今日聊かストアの精神と我が國の武士の氣風とを較べて見やうと思ひます、又それにつけて聊か我等日本人の氣質を考へて見たいと思ひます、自らを知るは智惠の始め又智惠の終りと謂つても宜しい、兎角自らを知らぬと、思はぬ過に陷ります、我が國民の心には實際如何やうなる思想が動いて居るか、其思想、其思想が軸心となつて形づくる氣風が我が民心の原動力であります、

先づストアの學と申すものの大躰の説明を致しませう、希臘學術の末の時代に一種の哲學があつて、これをストアの學と名づけます、これは唯だ學者の遊びものの

洋々として海の如く其進歩の堺限を知ることが出來ぬ、我等は實に千歳一遇の時に生れたものと云はなければなりませぬ、

（明治廿八年一月發行、『基督教青年』第二卷第三號）

ストアの精神と武士の氣風とを比較して我が國民の氣質に論じ及ぶ

思ふたばかりは無力のものであるとも申しますが、然し唯だ思ふたばかりでも決して全く力ないものではありませぬ、思ふは爲すの始めで、一念浮ぶ毎にそれが其痕跡を吾が心に遺してゆきます、身躰の方から云へば凡そ思ひは運動に表れる傾をもつてゐて、念々皆吾人の腦髓に捺印され筋肉に刻み込まれると申してもよろしい、殊に若干の思ひが鞏固なる團結を爲し又深く感情の性質を帶びて所謂氣風又は精神といふものを成す時には其力は更に強大なるものと爲ります、それ故に昔から學術の異同に重きを置いて道同じからざれば相共に謀らずなどとも言つて、人が如何なる考を懷いて居るか其の信じて居る所の那邊にあるかを大に重じ

ふ己惚を起したならば、本來差別がなくとも後れて仕舞ふ、我等は今が始めである
といふ事を忘れてはならぬ、總ての社會の事に於て、色々の工業に於て、商賣に於て、
學問に於て、其外總ての事業に於て是からやつてゆくのである、決して滿足しては
ならぬ、故に今我等の最も心を置くべきは無窮の進歩といふ思想であります、限り
ない進歩といふ思想に動かされて我等は進んで行かねばならぬ、何處までも進ん
でゆかねばならぬ、若し滿足だと思つたならば、日本國民は夫れきりであらうと思
ひます、

故に我等は此世界の大勢に始終氣を附けなければならぬ、今から世界の大舞臺に
出るのであります、日本は日本であるといふのは宜しい、併しながら其意味が若し
我は他の事は少しも知らぬ、他に學ぶことはいらぬ、只だ日本は日本で獨りやつて
ゆくと云ふことならば、夫は再び鎖國の間違を來すのである、それではいかぬ、日本
は日本でやるけれども、世界の舞臺に出るのであるから、常に萬國の形勢に注意し
て採るべきものあれば一刻も早く採るべきである、他を排斥する事は自覺心でも
何でも無い、此間違をなさずに、何處までも進んで行いたならば、日本の將來は實に

此說も壞はれて來る、我等は現に之を壞はしつゝある、何も白人種のみが進歩するものでは無い、我等も進歩する、白人種のみ戰爭が上手では無い、我等も戰爭をよくやつて見せる、白人種のみが世界の歷史をなすのでは無い、我等も世界の歷史をなす事が出來る、斯く云ふ考は我等日本人の腦中に今勃々と湧いて來て居る、是れ右申す三大變と矢張り聯絡して居ることであります、强ち白人種たると白人種たらぬとに今云ふ如き本來の差別はない、是れ亦眞實ならぬ差別である、我等も矢張り進む事が出來る、然し我等日本人はまだ望むべき程進んで居るではない、まだ世界史の大部分をなして居るものとは云へませぬ、爲す事が出來るといふ思想は懷いて居る、是からが即ち爲すべき時であると思ふ、今迄は只東洋の片隅に一國を長く建てて居つたといふ事實はあるけれども、世界の文明の潮流に何程の影響を及ぼしましたか、我等はまだ世界史の大勢の一部分を爲したものでは無い、是から爲すべきである、進めば爲せる、奮發すれば爲せる、是即ち國民の自覺心であります、自己を忘れて仕舞つて只他の眞似ばかりして居る樣な事ではならぬ、併し國民の自覺心と己惚とを混同してはならぬ、モウ是で宜い、尤い（えら）ものになつた、モウ滿足だと思

今迄辯じました通り、私の演題に掲げました三大變は、第一が我等の住んで居る地球の位地に關し、其の次ぎは其の地球の主人と思はれた人間の位地に關し、第三は人間の事柄の中で最も深く我が感情に沁み込み最も深く社會に行き渡る宗敎上の思想の變動であります、是が三大變であります、大といふ字を加へて然るべき變動であらうとおもひます、此變動を見渡しまするに、皆な眞實ならぬ差別と懸隔とを毀つものであると云つて宜しい、地球と他の星との眞實ならぬ差別、人間と他の動物との眞實ならぬ懸隔、何々敎と云つて他の宗敎とは黑白の違ひがある樣に思ふ眞實ならぬ差別を毀つて仕舞ふのであります、故に此の三大變は眞實ならぬ差別懸隔を毀つて平等にする所のものと云つて宜しからう、併し全く差別を否むではないが、其の差別は平等の中に起る差別です、始めから定まつて居つて動かすことの出來ない差別では無い、動いて進歩して來た中の差別であります、差別は進歩したのと後れたのとにある、

歐羅巴人は白人種と云つて白人種のみが無比の人種で世界の文明を支配し世界を押領する、他の人種は到底文明の先導者となることは出來ぬと思つて居る、併し

に第三の宗教思想の變動にはまだ反對が强い、是は一つには其變動の起りかゝつた時代の前後にもよりまするが、又一つには其事柄に於て違ふ所があるからです、天文の事は數學上キチンときまるものでありります、生物の進化は數學上キチンときめる事は出來ぬ、幾らか疑を容るゝ餘地がある、然し大に實驗を以て證することが出來る、然るに宗教は之とは違つて更に一層複雜でもあり又試驗を以て證明する事が六ヶ敷い、故に是は地動說よりも進化說よりも反對を容れる餘地がある、併しながら大勢は既に慥に動いて居る、丁度地球が特別に外の天躰と異つて宇宙の中心で無く一の小さい遊星にならぬ樣に、又人間が特別に下等動物と違つて造られたので無く動物進化の一產物に外ならぬ樣に、歐羅巴にある宗教も他の宗教と共に宗教進化の一產物に外ならぬといふ思想が勝を制しつゝある、これが思想の大勢であります、此大勢に逆はうとする人がまだ多くありますけれども、到底之を防ぎとめるとは出來ぬと思ひます、是れが思想の正當の行道であります、無闇に特別と思つた考は破れて仕舞ひますが、是によつて地球の位地にも人間の位地にも又歐羅巴の宗教の位地にも却つて其眞實の價値を與へることが出來ます、

然るに今歐羅巴の思想の傾きを見ると、こゝに大變動が現はれて來て居る、今や右云ふ如き思想は廢りつゝあると斷言して私は差支なからうと思ふ、其宗教も他の宗教と較べて、何も明と暗との如く特別なる隔てのあるものでは無い、固より特殊なる點もある、他の宗教と似て居らぬ點もあるけれども、夫も均しく人類の宗教的現象の一つに外ならぬ、人類の宗教心が段々發達してゆく一段階に外ならぬ、即ち宗教が低い處から進化してゆく一つの段階で、其段階には佛教もあれば基督教もある、其中一つの宗教を取つて是が特別に天から降つて來て、或は地から湧いて出て、他の宗教とは性質來歷に於て全く違ふ宗教であると云ふことは出來ぬと、斯く考へることが益〻盛になつて來て居ります、

當今歐羅巴には斯る宗教思想の變動があると申しましたが、此變動に對しては反對がまだナカナカ强い、諸君が容易く聞く事の出來る程其反對の聲は高い、今申す三大變の中で尙ほ最も反對の多いのは此宗教思想であります、地球の動くといふ說には誰とて今は反對する者は無い、地動說よりも生物進化說の方にはまだ幾らか反對がある、然し甚だ弱い、生物進化說は今の學術界の公論と云つて宜しい、然る

洋又其他に行はれる宗敎とは違つたものであると考へたのです、歐羅巴人は他の宗敎を奉じて居る人々をヒーズンと名けた、ヒーズンと云へば誰も知つて居る通り非常にさげしめた言葉であります、他の宗敎を奉じて居るものは罪人である全く間違つた事を信仰して居るものである全く暗黑の中に居るものである、夫とは全く違つて光明(ひかり)の中に居る者は只だ我等のみだ、惟一の本當の宗敎は我等歐羅巴人の信じて居る宗敎であると考へたのです、固より歐羅巴の宗敎家神學者の中にも異論はあります、その如く考へぬ學者もあります、而して異論者は重もに希臘哲學思想の影響を受けた人々であります、併しながら其如く考へたのが通常の說であります、其說を擴げるに力あつたのはオーガスチン、歐羅巴の宗敎家の中大人物の一つに數へられ、兎に角大人物に數へなければならぬオーガスチンであります、其の說に隨へば、他の宗敎と基督敎とは黑と白と、穢多と侍(さむらひ)といふ樣にスッカリ違つたもので決して關係が無い、較べる事の出來ないものである、故に他の宗敎の中にあるものは皆罪人で滅びなければならぬ、只だ救はれる者は基督敎の中にある者ばかりだと考へた、是れが通常の思想であります、

くない、一寸一葉の新聞紙を讀んでも、直ぐに三つか四つは進歩といふ字が見える、進歩と云ふことは近世の人々の心を刺激した大思想であります、而して此の大思想は進化と云ふことに由つて益〻勵まされたのであります、

歐羅巴では斯やうに此地球の位地と人類の位地とに就いて思想上の大變動があつた、夫が非常な變動であつたといふは、前述べました通り宗教上の思想が伴つて居つたからです、而して今や其宗敎夫れ自身――歐羅巴に行はれて居る宗敎夫れ自身が又一の大なる變動を經過しつゝある、是が此處で御話申す三大變の第三であります、宇宙の中心と思つて居つた地球の地位に非常な變動を起した、地球の位地に變動を起したのみで無い、其地球の主人と思つて居た人間の位地に非常な變動を起した、夫から又人間の事柄の中影響の最も廣く最も深い宗敎上の考に非常なる變動を起しつゝある、之を私は三大變と名づけるのであります、

歐羅巴に行はれて居る宗敎が無上無類の宗敎で、他の宗敎とは全く其生起を異にし其性質を異にして居るといふのが、是れまで其の宗敎家抔の通常の考であります、恰も黑と白とが違ふ樣に畜生と人間とが違ふ樣に歐羅巴人の奉ずる宗敎と東

萬物の靈長と或意味では云ふ事が出來る、併しながら夫も進化して來て其頂上に居る丈けの事である、何も初から下等動物と聯絡の無いものでは無い、人間の位地を奪はれて仕舞つた樣に思はれるけれども、只だ特別といふ意味が變つて來たので、人間は矢張り人間で動物の頂上に居る、夫のみで無い、進化といふことが非常に大なる理想を吾人に與へる、我等は斯う造られたから其儘で居るといふのでは無い、進化してゆける、極く下等なる動物から段々進化して人類といふ樣なものになつて來るといふは實に妙である、極く低い動物が夫程のものになつて來る、進化といふは實に驚くべきものである、我等は又段々進化して行く事が出來ると考へれば、吾人の胸中一大理想が湧いて來る、人間が特別に造られたといふ如き考は壞はれて仕舞つたけれども、尙ほ外の處から吾人には大なる理想が現はれて來るのであります、

近來誰も人間は進步しなければならぬ、人類社會は進步してゆくと云ひます、進步的〳〵といふ事は誰も口にする事であります、併しながら我國で三十年も昔に溯つたならば進步といふ言葉は珍しい言葉だと云つても宜しい、ところが今は珍し

みでない、自然淘汰で種々の動物が出來て來ると云ふは、造物主の働をなみするのである、是れはどうも宗教上の思想から許されぬ、と斯樣に考へて、一時動物進化說には非常な反對があつたのです、併しながら此進化說は反對を受けたものの矢張り今では此說が勝を得て居ると云はなければならぬ、

啻に形躰上動物が進化するといふのみでは無い、進化といふものは心の上にもある、人間の心と云つて下等動物と非常に違つたものの樣に思ふけれども、夫も矢張り進化してさうなつて來たので、下等動物にも矢張り心がある、下等動物の心と人間の心と較べて見ると矢張り聯絡がある、踰える事の出來ない懸隔は無い、但だ人間は大に進化したものに外ならぬと云ふ考が今は盛に行はれることとなりました、夫で兎に角進化といふこと丈けは今は否まれぬ、尤も進化のみで凡べての事が說けるかどうか夫は別論でありますが、進化といふ事を否む事は出來ぬ、

斯樣に特別の位地が地球から奪ひ去られた樣に、人類の特別の位地が又奪ひ去られた、特別と云ふも素からの特別ではない、進化の中の特別である、言換へて見れば、差別はあるけれども皆平等の中に起る差別である、人間は矢張り生物の長である、

たのであります、勿論生物の進化といふものは自然淘汰のみで出來るか又自然淘汰と云ふは審に云へば如何なることであるか、又自然淘汰の行はれてゆく其奥底に目的を具へて働いて居る者がありはせぬかといふ如き問題に就ては固より種々の論があります、併しながら兎に角生物學上では少なくとも自然淘汰といふことが進化の一大方法であるといふ事丈けは疑はれぬ、一トロに約めて申せば、動物は一種一種別々に造られたのではなく、極く下等の物から段々進化して來たのである、進化の道は或は色々ありませうが、兎に角進化して來たと云ふことは(即ち動物進化說は)生物學者の公論である、

斯く考へて見ると、人間の位地に非常な變動が起らなくばならぬ、前には人間は特別に造化主に造られたもので、他の動物とは比べも出來ぬ、人間には特別の位地があると思つたのが、さうでは無い、矢張り下等動物から出て來たものであると思うて見ると、下等動物の親類になつて仕舞ふ、昔し我國で穢多の親類になると云つたら大變なことの樣に思はれた、丁度其樣に畜生と云つて卑げしめる下等動物の親類となるのですから大變な事です、人間がスッバリ其直打を損して仕舞ふ、それの

ひがある、五匹生れゝば五匹とも皆同じでは無い、親に似て居るけれども又相互に幾らか違ふ、而して其違ふものの中で其場合に適して能く生存するものと生存に適せぬものとがある、不具のものは能く生存しないから夫は亡び易い、不具と迄云はぬでも、特殊なる事情によつて適したものと適せぬものとがあるから、適した物は生存し適せぬものは滅びてゆかねばならぬ、夫で動物が段々選び分けられて、自然に選び分けられて、殘つたものが子を生んで、其中から又選び分られる、此自然淘汰の長く續くうちには、最初見なかつた動物が出來て來る、自然淘汰の爲に後には非常に違つた動物が出來る、其動物が世の中に發育し又變遷してゆく、即ち今別の種類と見えるものも素と別々に造られたのではない、同じ祖先から進化して出で來たのであると、斯くダアヴィンは説いたのであります、夫故何も人間といふ一種類に限り特別に造りなされたのでは無い、矢張り下等なる動物から前云ふ自然淘汰で段々高等なるものとなつて、遂に人間が現はれて來たのである、人間は猿の子孫である、今生きて居る樣な猿から人間が出て來たかどうか分らぬが、兎に角猿の如き動物から出て來た、人間は猿の子孫である、猿の苗裔である、と斯樣に説いて來

と大に其工合が違ふ、印度では昔から輪廻轉生の説が行はれて、人間が墮落すれば畜生となつて畜生界に生れると考へた、夫故畜生と人間との間に越えられぬ隔ては無い、惡くすれば人間も畜生になり、良くすれば畜生も人間に生れることが出來る、輪廻轉生の説は印度のみでは無い、他の國にもあつた、然るにこれは中世期以來の歐羅巴には行はれなかつた、人間と畜類との間にその如き關係は無い、人間は人間で特別に造物主に造られたもので、外の動物とは飛離れたものである、此事が人間の位に非常な關係があつて、人間は夫故特別の位を有つて居るものであると斯う考へたのであります、

然るにこゝに又非常の變動を起したのは動物進化論であります、動物進化論では如何に説くか、何も特別に此の種類彼の種類と一々造化主が造り設けたのでは無い、極く下等なる動物から進化して高等なる動物となつて來たのであると説く、此説を最も明に唱へたものは誰ぞ、何人も知つて居る通りダアヴィンである、ダアヴィンの説に從へば進化は要するに自然淘汰を以て行はれる、自然に動物が淘汰せられるといふ意味は、澤山の動物が世に生れて來るが、同じ親に生れても幾らか違

と見て居る太陽よりも尙ほ大きな太陽が澤山ある、天に光つて居る恒星が皆太陽である、今の天文學で斯く說くことは誰も知つて居る通りのことであります、是が歐羅巴の思想の一大變と私が名づけて置いたものであります、次は此地球に住んで居る人類の位地に大變動が起つて來た、素と地球が宇宙の中心で特別の位地を占めて居ると考へた樣に、人類は又外の動物とは異つた特別のものであると考へて居たのです、地球が中心であつて其外のものは皆其の爲に之れを廻つて居ると考へた樣に、此地球に於ては人間が特別に違つたもので、外の動物とは較べる事も出來ない程に懸け隔つたもので、下等動物と人間との間には迚も踰える事の出來ない隔てがあると、斯く考へたのであります、人間は萬物の靈長と云つて人間が殊に貴いものとなつて居るのは何處でもさうでありますが、殊に歐羅巴では是が又宗教上の思想に結び着いて居つたのであります、夫は世にある種々の動物は皆特別に神に造られ、就中人間は神の象に似せて特別に造られたと考たのであります、夫故下等動物即ち畜生と名けて居るものとは人間は少しも關係の無い別のもので、特別に造られたものである、是は外の國の思想と較べて見る

宇宙の中心では無いといふ事になつて仕舞つて、今では誰一人として之に反對するものは居らぬ、宗教上からも反對するものは居らぬ、當時では宗教上の思想と是が反對しましたが、今では決して此樣な說と宗教上の思想とが相反するものでは無いと云ふことゝなつて來ました、

尙ほ其後段々天文學上の硏究又た其他の硏究によつて觀れば見る程、宇宙といふものは大なるもので、夫に比較して地球の小さいことが益〻わかる、夫を極く分り易く喩へて見ませうならば、光線は一秒時間に七萬六千里も走りますが、其一秒時間に七萬六千里も走る光線が三百年も掛つて始めて地球に達する樣な遠い距離にある星を我等は望遠鏡で見る事が出來る、殆ど想像にも載らぬ程宇宙は宏いものとなつて來ました、其星から光線の走つて來るに三百年もかゝる、先づ云はゝ德川幕府が建てられた家康公の時代に一つの星から光線が出立して夫が一秒時間に七萬六千里も走つて、そして始めて此頃漸く地球に到着したといふ程に遠い星が見える、實際その如き星が見えるのであります、斯う思つて見れば、地球は片隅の極く小さなもの、其外にどの位大きな星があるかわからぬ、地球又其他の遊星の中心

云つて出したのであります、若しもコペルニコスが此說を出す時に、自分は眞に斯う思ふ、是でなければならぬと云つて出したらば、或は其生命は危かつたかも知れませぬ、彼の剛膽なるジョルダノ、ブルーノー、彼の焚殺さるゝ時自分を處刑した人々に向つて我よりも汝等が恐れ戰いて居るでは無いかと叫んだジョルダノ、ブルーノーの說も矢張り此コペルニコスの說を取つて之を編み込んで一つの大なる考と爲して居たのであります、ガリレオも矢張り此說を取つて之を唱へたが爲に當時には非常に反對を受けて、遂にガレリオは屈して表面上其說を枉げました、近世哲學の始祖とまで云はれるデカルトが始め「ル、モンド」といふ書物を書きました時に矢張りコペルニコスの說を其中に取つて居りましたが、ガレリオの迫害されたことを聞いて恐れて其書物は出さなかつたと云ふことであります、是等を以て見ても其時の歐羅巴の思想の變動の劇しかつた事がわかる、今で見ると、夫等の說を出して何の憚る所も無からう、夫を心配するのは實にデカルトも意氣地が無いと思はるゝでありませうが、併し當時にあつては夫が非常に六ケ敷かつたのであります、此の如き反對はありましたが、遂に地球は只だ一つの小さい星に外ならぬ、

ありますが、前申す通り宗教上の思想が夫に結んで居つたから、ナカナカ八釜しかつたのであります、歐羅巴では夫が一大變動と名づけて宜しい程の變動であつたのであります、我國抔では此天文上の新説が左程の劇しき變動とも思はれなかつた、思想上劇しき影響もなかつた、素より我國でも誰も皆此大地は靜かに宇宙の中心に居る樣に考へたのであります、然し大分昔から段々地球の動くといふ説が這入つて來ました、名高い畫工（ゑかき）の司馬江漢が書いたものを見ますと、自分が始めて日本に地動説を唱へたと云つて大に之を誇つて居ります、其江漢の時代即ち今を去る百年程前から段々其説が這入つて來て、今では小學校の子供でも此のコペルニコスの説を知らぬ者はない、コペルニコスと云ふ人物は知らないでも、其説を知らぬものは無い、地の動くことは最早當り前のことの樣に思つて居る、此説が歐羅巴に起した思想上の變動は只だ我國人の考からのみ見てはわからぬ、歐羅巴では前申した通り宗教上の思想が結び着いて居つたから、此コペルニコスの説に當時非常の反對があつて、コペルニコス自身も此説を唱へる時には表面上之を只一つの臆説として斯うも考へる事が出來る、然し何も實際之を信じて居るのでは無いと

も星も之を廻つて居るのでは無い、只地球は宇宙の片隅の一つの星に外ならぬ、他の星と何も異別つた事は無い、異別つた事が無いのみで無く、他の多くの星に較ぶれば、實に數ふるにも足らぬ程小さいものである、宇宙の宏きに較ぶれば、一粒にも價せぬ樣なものである、而してそこに實に小さい人間が住んで居るのであると思つた日には、今までの考は一時非常に動いて來ねばならぬ、宇宙の中心なる大地に主人として居るといふ考と宏い宇宙の限りない處の其片隅の只一粒にも價せぬ樣な小さい地上に住んで居るといふ考とは非常に違ひがある、所がこの如き非常の變動を其時の思想に始めたのが即ちコペルニコスの地動說であります、

誰も知つて居る通り、コペルニコスの說に從へば、太陽が中心で而して其周圍を地球又其他の遊星が廻つて居る、夫が一つの太陽を中心として居る星の組である、尙は段々と研究して見ると、それ等の組がその外に幾許となくある、我が太陽が宇宙の中心ではない、無數の恒星は皆各〻太陽であると思はれる、我が太陽よりも餘程大なるものが多い、斯樣に考へて見れば、地球の位地が非常に變つて來る、併し夫が變つたからと云つて、何もさう非常に八釜しく云ふ筈も無つたらしく思はるゝので

ります、どういふ様に結び附いて來たか、當時の宗教上の思想では、此大地は人間の住んで居る舞臺で、人間が其主人である、日も月も皆之を照すが爲めに之を廻つて居る、又人間の住む爲に地上に種々の物が存在して居る、即ち山川艸木を始として禽獸其外の物皆人間の爲に存在して居る、人間が其主人である、總べての事の目的は人間にある、人間が中心で、而して其人間の住む此大地が宇宙の中心であると、斯う考へたのであります、然るに此人間が善い事ばかりしては居らぬ、却つて上帝に背き罪惡を犯して居る、夫故に上帝は此人間を救はうと思つて自から此世に降り人間の形を取つて救の道を立てられたと、斯く思つたのが、當時の宗教上の信仰であります、此の如く大地が宇宙の中心で、あつて而して其主人である人間が罪を犯し、特に造物主が意を注がれてある人間が墮落して、惡事が世の中に行はれる、それを見逃がして居らるゝ造化主ではない、造化主自らが此人間の身躰(からだ)を取つて、世の中に降られたのも、尤ものことである、夫程迄に此大地は宇宙の中心にあつて特別の位地を占めて居る、

然るに若し此地球は其の如く宇宙の中心では無い、何も地球を照すが爲に月も日。

が廻ぐる、而して無數の恒星皆各〻一の太陽である、ピタゴラス派の學者の考へた所は夫とは違ひますが、兎に角太陽も動けば地球も動くといふ事を唱へたのは、極く古い時代では是等の人々であります、然るに此派の說は希臘の學者間にも一般に用ひられなかつた、寧ろ地球が靜に宇宙の中心に居つて天が動くといふ說が一般に行はれた、彼のプラトーンの如き又たアリストテレースの如き大學者も矢張地球が中心に居つて天が其周圍を廻ぐると考へたのであります、其後西曆紀元後第二世紀に及んで彼のトレミーが出て、地球が靜かに宇宙の中心に位して天が之を廻ぐるといふことを基礎として、一つの巧みなる又細しき天文說を立てまして、夫が後にトレミーの天文學と名附けられて、一般の西洋の學者間に行はれる事となりました、

此地靜說が若しも夫丈けの事であつたならば、さまで其說の變はる時に劇しき影響はなかつたでありませうが、夫がそれに止らなかつたといふは、歐羅巴の中世紀に今云ふ天文上の考と宗敎上の思想とが結び附いて來たからであります、是に由つて今申した天文上の考が一層大なる深い意味のあるものとなつて來たのであ

と、天と地とでありませう、誰も先づ始めには此大地といふものは非常に廣いもので、どこに際限があるか分らぬ程大なるものであると思ふ、又天は固より誰にも宏大無際限のものと見える、而して先づ我等が考へた所では、此の廣い大地が眞ん中に在つて其周圍に天が廻つて居ると思はれる、誰もさう思ふ、日も月も其外の星も皆此大地の周圍を廻つて居ると見える、只だ通俗にさう思ふのみでは無い、歐羅巴の學問の本と謂はれる希臘でも、昔の學者は大率ね其如く考へたのであります、矢張り地球が扁平くして宇宙の中心に位して其周圍を天即ち諸々の星と月と日とが廻つて居ると考へたのであります、一ト口に希臘の學者も斯く考へたと申しますが、只其中に取除けをせねばならぬのはピタゴラス派の學者であります、此派の學者は大地を球の形をなして居るものと考へた、即ち此派の説では地球と云ふ名稱を正當に用ふることが出來る、而して又此地球は動く者であると說きました、然し其地動說は今云ふ地動說とは違ふ所がある、ピタゴラス派の學說では宇宙の中央に火がある、此中央火の周圍を太陽も月も地球も其外の遊星も又恒星も廻つて居ると考へたのであります、今日の考では太陽が中心で其周圍を地球其他の遊星

る、然るに其考も今述べた通り是迄の經歷から見て始めて能く解かる、全躰思想の歷史に由つて我等の學ぶべき事は餘程澤山あると思ひます、只だ全躰思想の歷史が斯やうに有益であるのみでは無い、殊に我國今日の如き時代に住んで居る者に取つては思想の歷史は非常に大切であると思ひます、我國の思想は輓近甚しき變動をなして來たのである又爲しつゝある、この如き思想の大變動の時期は世界にも稀でありります、又我等も復たと會ふ事は無いであらうと思ひます、この如き時代にあつては殊更思想の變遷の歷史に注目すべき必要があると思ひます、

こゝに掲げました演題は『近世歐洲思想の三大變』是は餘處の國の事でありまするが、近世の文明は先づ歐羅巴を中心とすると云はなければならぬ、而して其歐羅巴の近世に於て見ることの出來る三つの大なる思想の變動を知る事は甚だ有益の事と思はれる、是に由つて我等の學ぶべき事柄は決して少なく無いと考へられます、

我等が此世に生れ出でて、上を仰ぎ下を俯して最も宏大に思ふものは何かと云ふ

時代を開くといふ事が既に舊い時代に關係して居る、舊い時代と離れて新しき時代を開くのでは無い、總べて歷史上の事柄は皆この如き關係を以て出で來たるとすれば、特に深く歷史を知る必要がある、今我々が生れて居る此時代を眞に知らうと思ふならば、此時代のみを見てはならぬ、今までの經歷を知らねばならぬ、古を稽へて將來を察すると云ひますが、成程從來の經歷に由つて幾分か將に起らんとする事變を察する事が出來ませう、夫のみで無い、將來の事のみで無く、此の我々が今看て居る目の前の時代も、それを本當に知らうと思ふならば、今までの經歷を見ねばならぬ、今までの歷史を知らずに、我々が生れて居る此時代を眞實知る事は出來ないと思ひます。

歷史の上にも種々の事變があつて、外形に現はれて目に着くものもあれば、又目に附かぬものもある、思想の歷史抔と申すものは、直接には目に着くもので無い、然し此が寧ろ外形に現はれるものよりも重大であると云ふことが出來る、此が外形に現はれるものの奥底にあつて、而してそれが發現して目に見える歷史上の變動となつて來ると云つても宜しからうと思ひます、我等は今種々雜多の事を考へて居

下篇

近世歐洲思想の三大變

人類の歷史は我等人間が自から作り出だすものでありますが、又歷史が我等を作るといふ事も出來ます、我等は皆歷史中のもので、如何なる英雄でも豪傑でも歷史上の關係を脫して世に現はるゝものはありませぬ、皆其の時代〳〵の人物で、其時勢の關係といふものの中に生長するのであります、夫故に屢〻歷史家が人を評する辭に、この如き俊傑でも矢張り時代の子であると申します、社會と個人との關係は兩面から見ねばならぬ、人々相寄つて吾人の歷史を作るのでありまするが、併し其人々が又今までの歷史によつて作り出される、何故に一面時代を作り又一面時代に作られるか、新しき思想を開く人或は新しき事業を起す人は歷史上新しき時代を作り出しますが、然し其時代が夫より以前の經歷と全く無關係のものでは無い、其時代も矢張り前の時代の續きである、夫故に新しき時代を開きながら、其新しき

る信仰と見做し候、其如き信仰の必要と思はれ候は但だ吾人の宗教上の安心立命を保つに右の如き神學的の信仰を以てさゝふることが必要と思はれ候間即ち宗教の觀念の(小生の所見にては)まだそれだけ進歩せぬ有様にある間のみのことゝ存候、全躰或一の書に錄しある事をば徹頭徹尾絕對的の眞理と見做し候ことは(小生には)到底證據し得べからざる假定と存ぜられ候、右は只だ所見の程を申のべ候のみにて辯論も證明も致さず候又簡略に申のべ候ことゆゑ或は明ならざる點も有之ことゝ存候且右申のべ候ことは通常の神學の所說とは大に異なり居り候ことも篤と承知致居候、但だ考ふる所のことは其考ふる通りに披露致したる方或はよからんと存候まゝ斯くは陳述致候次第に御座候敬具

編者曰。右の一篇は明治廿三年三月五日附にて六合雜誌に寄せられ、同月發行同雜誌第百十一號に掲載せられたるもの也。本書上篇中に收むべかりしを、もれたるまゝ此に掲ぐることゝはなしぬ、讀者諒せられよ。

しめ得るものをも養育して動かざる國家にこそ堂々たる國家の眞光榮は屬するなれ

眼識遠大に達する經世家の眼中には戰備の世中に非戰論者あるも可なり生存競爭の世中に寂滅爲樂と唱ふる一釋迦あるも可なり

（明治三十年十月發行、六合雜誌第二〇二號）

インスピレーションに就いて

六合雜誌記者足下小生は六七年まへに神學の端を窺ひしこと有之候得共其後は特に神學的の問題を格別攷究致せしことゝては無御座候、過る日御書狀を戴きインスピレーションの問題に就て考ふる所を書き送れよとの御依賴を受けし時には恰も久しく相見ぬ朋友に邂逅致したる如き心地致候、久振に此問題に面接致して小生の思想の昔日とは大に變更致したることに自身ながらも驚きし次第にて御座候、然し其如く變更致したることなれば敢てながく者には無御座候、インスピレーションに就いて思考致候ことを委しく中のべ候ことは差當り致兼候故茲には只だ裏面的にのみ陳述致候、即ち小生は此迄通常聖書のインスピレーションと申來り候ことなれば到底維持し得可らざ

あることもにまた國家的差別を離れたる處に其の心を遣らんことを欲す斯くの如くにして始めて世間的生活國家的生活も亦能く全うせらるべし若しひたぶるに出世間的、出國家的趣味を排斥せんとせば是れ却つて世間的、國家的生活を貧くするもの、寧ろ人をして其の生活に厭かしめずんば已まざるべし國家何者ぞ其を組織する人間の一切の需用を滿足せしむることを離れて其の目的を語るべからず美術家が美を追慕し學術家が眞理を探求する是れ人性の自然の要求なり而して美術家及び學術家が國家的差別を離れたる處に其の心を遣ることを禁ずるは是れ其の美術的及び究理的活動を防遏するに等し人國家の光榮を揚げんと云ふの目的を以てして能く美術に學術に如何程の大業を樹て得べきぞ吾人が吾が屬する一國家の光榮のためにのみ生存すと云ふ心を以て能くニュートン及びシェークスピアの心となすを得べきか國民をして國家の差別的光榮のためにのみ生活せしめんとする國家は却つて萬世に輝くべきの光榮を被る能はざるべし遍通の眞理及び人情を輝かせしむることに於いて偉大ならざる國家は却りて其の差別的存在をも狹小にすべし國家的差別を脫したる宇宙大の境界に其の心を遊ば

家に擬せんとす笑ふべきの至りなり

世に厭世教と名づくるものあり今之れを經世家の眼を以て觀ば其れが社會の唯一的若しくは中心的風教たらんこと固より其の願望すべき所にあらず而も全く之れを撲滅せんことの爲し得られざるのみか斯くせんは是れ却りて經世の目的を達する所以の道にあらず人の時に厭世的趣味を感ずることあるは其の性の自然なり猥りに之れを除かんとするは寧ろ其の性を殺すものたるべし予輩は厭世教を以て人生の一大需用なりと謂ふに躊躇せず世に愛すべきは陽春三月の風光のみにあらず枯木寒鳥の景是れ亦言ひ難きの趣味を以て人目を惹くにあらずや人のこれを愛する者を名づけて病癖的と云はんは是れ唯自己の偏僻を以て他の偏僻を笑ふの類のみ偏見を持する論者が如何に贅辯を弄するも詩人にバイロン莫からんことを望むべからず哲學者にショーペンハウエル出でざらんことを望むべからず厭世教も亦人心を取扱ふ一要具なることを知らざる者が奇矯の言を爲す一論客たらんは可なり經世の策を講ずる者たらんは非なり

人、世間に住みて屢〻出世間の境に其の心魂を遊ばせんことを求む國家の一員にて

若し吾人の看取する天地人生の諸趣諸面諸岐を悉く捕捉し調和したる絶對圓滿なる見解の立てらるゝあらば經世家の之れに依らんは固より言ふを俟たざる所なれど實際の事に於いて斯かる圓滿を期すべからざるに於いては(一時弊の一方に極まれるものを矯正するの方便を除いては)經世家の眼よりせば成るべく寛容の精神を以て反對の見解を等しく思想の大海に游泳せしむるを可とす若し然らずして猥りに其の一方を抑壓せんとせば是れは却つて其の保持せんとする所のものをも害ふべし蓋し一方を防遏する如くにしてまた還りて能く之れを活如たらしむ所以の者は其の反對なればなり其の反對の存するは實に他方の苦痛とする所なれども其の苦痛は是れ寧ろ之れをして老朽枯死せしめざる所以のもの也生のみありて死なからんには生者竟に何によりてか其の生を保たん人生は到底禍福のあざなへる繩ならずや此の故に經世家は一方の見地を取りて其の價値と歸趣とを明かにせんことを職務とする研究家とはおのづから其の態度を異にする所なかるべからず又此の故に人の研究家に適する者と經世家に適する者とは多く一ならず然るを人或は人生の一面以外に透徹せざるの眼を以て己れを經世

人生の二面

（經世家の着眼）

人生の多趣多面多岐なる能くこれを一學説若しくは一主義に捕へんこと難し故に古來樂天主義厭世主義唯物論唯心論一元説多元説等と稱ふる種々なる見解あり以て天地及び人生の説明に擬せんとすれど天地及び人生は其等一方面の見所を以て捕捉すべくもあらず而も吾人は能く一時に其の全面を看取し得ざる者なれば個々人の觀る所おのづから反對の二方に分かるゝを常とす天地人生そのものが陰陽物心一多等と稱せらるゝ何等かの反對の二者によりて織り成さるゝか否かを知らずと雖も斯かる反對に分かちて觀ることが吾人の見樣に於いて已むを得ざるの事なるに似たり其の已むを得ざるの故を以てまた其の反對なる二方面を維ぐに何等かの統一的基本若しくは極致を以てせんとする、是れ亦吾人が思想の排擠すべからざる要求なり凡そ哲學的思索は畢竟此の問題の解釋に向つて進まんとするものならずや

意は吾人は信向によりて動作する者なれば須からく我が祖先の信じたる如く信じ以て祖先崇拜の大義の淵源を維持すべしと云ふにあるか否か予輩之れを知らず穗積氏自らの信仰は果して如何

若し右云ふ如き祖先の信仰は是れ唯歴史上の淵源にして祖先敎そのものを持續すべきの理由は其の信仰の存亡に拘らずとせんか然らば祖先敎そのものを社會に持續すべきの理由は何ぞや穗積氏曰はく「社團の分子が其の主力に忠順なるは分子の福利を全うする所由なり忠孝の大道は豈君父の專恣の爲に斯の身を犧牲にするの義ならんや」と又曰はく「祖先を崇拜するは斯の身を愛惜する所以なり」と是に於いてか穗積氏も亦國民の利福といふことに重きを置かざるを得ず然らば祖先敎の行はるべきも畢竟ずるに其の根據は衆民の利福が之れを必要とすることにあらざるべきか如何若し斯かる理由を以て人倫の大本百德の基礎は忠孝に在りと云ふならば予輩其の立脚地を看破するに苦まざるなり

（明治三十年九月發行、六合雜誌第二〇一號）

りしを云ふ然るに其の社會組織の變遷は遂に家族制の衰頽個人制の增長を誘致したり而して其の原因を(穗積氏の爲すが如く)唯々耶蘇敎の傳播に歸するは善く社會變遷の由來を解したるものなるか予輩は之れを疑ふ家族制如何に美なりと云ふも之れを昔時の儘に保つ可からざる時代あり經世家は之れを思はざる可からず人青年に達して其の小兒の時の無邪氣なるの美處を失ふを見而して之れに代へて其の行爲を統御する所以のものを得るに或ひ強ひて昔時の無邪氣を之れに求むるは果して青年を敎育するの道なるか穗積氏等の爲す所は之れに類せずや唯昔時の無邪氣に代へて青年を統御する所以のものを得んとして思ひ惑へるの衷情に至りては予輩十分に之れを酌み知ると言はん

穗積氏曰はく「人は信向によりて動作す限定せられたる人智は宇宙の現象を總合して之を其根底の眞理に證明し絕對の理法を自覺して行動すること能はざればなり祖先は肉躰の外に不死の靈魂あることを確信し又子孫を慈愛する父母の威靈は顯界に於て其肉躰を亡ふも尙幽界に在りて其子孫を保護することを確信したり是れ祖先崇拜の大義の淵源にして敬神の我が國敎たる所由なり」と穗積氏の

識に發生すと考ふるものの如し氏は「家族が家長に從順なるは祖先の威靈に服從するなり」とて世敎を立つるために祖先を思ひ家系を貴ぶの心を以て其の基礎と爲さんとす氏が欲する所の如きは家系が如何なる祖に發したりと云ふことを重んずる封建制度の時代に在りては殊によく實現せらるゝならん然れども其のよく實現せらるゝは斯かる時代には特に家系血統を貴ぶ社會上の必要あればなり其の必要の減少したる處に之れを實にせんとするも到底行るべきことに非ず人誰れか其の父母を思ひ從うて其の祖先を思ふの心あらざらん而して其の心が家庭の、延いて一般社會の道德的生活に關係する所あるは勿論なり然れども如何程の重きを其の血統的意識に置くべきかは社會生活上の必要によりて異ならざる可からず穗積氏等の盡力によりて我が民法は歐洲のに比して尙家族制の要素を保存するものあるを得とするも昔時我が國に行はれたる所に比すれば此の點に於けるの差別は蔽はんとして蔽ふ可らざるべし而して今後の變遷は如何なる傾向を取りて進むべきぞ穗積氏自ら歐洲に於いても其の古制は希臘に羅馬に日耳曼に何れも皆祖先敎を以て國を建て祭政一致なること我が國と異なること莫か

歷史的批評の結果として我が國民の血液に如何なる人種の血脈を傳ふるか如何なる意味にて我が國民は人種を同うすと謂はるべきか果して皆同一祖の子孫なりと謂はべるきか又如何程嚴密なる意味にて其の祖を同うすと謂ひ得べきかを明示せざる限りは予輩は穗積博士の言ふ所を其の儘に承認するほどの信仰を有せざるなり博士は曰く「國として統治の權有らざるはなし然れども統治權の存在する所由民人の之れに歸服する所由は國各〻其歷史に由りて同じからず或は腕力の爭奪に由り或は民人の選擇に由る腕力は時に消長あるを免れず……選擇は民心一時の傾向に依る……我が帝國は人種を同じうし變遷を一にする大民族が純白なる血統團結を成す者なり其の團結は天賦にして人力に非ず」とて我が建國の由來我が統治權の所由には「腕力爭奪」の與かる所なく他とは全く其の趣を異にせりと云ふものの如し予輩は事實を曲解することが民心を振はしむる永遠の良策にはあらずと考ふ予輩は穗積氏の言に對しては果して然るかと問はざるを得ず

穗積氏は其の以て人倫の大本百德の基礎とする忠孝は祖先を同うすと云ふの意

中に包含し易からざらしむることも亦明かなりそは血統團結に重きを置くことの強きほど血統を異にする者を同團結中に包含することの難かるべければなり而して血統團結は穗積氏の言へるが如く天賦の團結にして人爲を以て如何ともすべからざるもの、若し血脈相異なる家族相婚せば其の子孫は既に其の祖を同うせず而して尙血統相依る自然の團結に於いてのみ求め得べきの美處を此に求めんとする豈難からずや例令何等かの意味にて他を我に同化せしむるを得と云ふも異血脈の混じたる事實は遂に滅すべからず祖を異にする者の相婚したるの子孫は遂に同祖の子孫にあらざるなり予輩は穗積氏の言ふが如くに君民同祖に重きを置くことが能く我が國の膨脹的國是と相容るべきかを疑ふ試に問ふ如何なる眼を以て新領土の民を見んとするぞ又新領土の民は血統團結をいふこと穗積氏等の如くなる者に如何なる心を以て接すべきぞと

穗積氏は我が國家を以て恰も一大家族の如くに見做し民人は皆な一宗家より出でたる子孫なるが如くにいふ予輩は穗積氏のいふが如き意味にて我が國民の其の祖を同うすることが果して能く歷史上嚴密に證せらるべきかを疑ふ嚴密なる

るを得ば政治家も宗教家も共に其の大任とする所の造作なく成就せらるゝを見て安堵するなるべく予輩も亦吾が祖國に於いて殆ど理想的なる結構なる世の中の存するを觀て欣然措く能はざるべし然れども穗積博士の美しく描かるゝ所の儘に實際行はるゝか否か是れ予輩の思ひ惑ふ所なり穗積博士の言はるゝ如き一種特別なる美質を具へたる我が家國の歷史は其の一切の社會的道德に於て他に比して果して能く多く超越したりと謂はるべきか家國の組織は穗積氏の描かるゝが如くにてありながら尙氏をして憂慮措く能はず其の愛國論を物せしめしは何故ぞ是れ唯外國文明の我れに侵入し來りて社會に激變を與ふるが故のみなるか若し外敎及び其れに伴ふ社會組織の輸入さるゝことさへなくば我が國民は其の社會的生活に於いて十善の美を放つべきか予輩は穗積氏の所謂祖先崇拜をのみ以て我が風敎の基礎となすに就いて如何にしても滿足し得ざるものあり今簡單に其の理由の二三を言はん

今穗積氏の論に從へば君民同祖たるを以て我が國躰及び我が國民道德の基礎となすべきは明かなり而して之れを基礎となすことが同祖ならぬ民人を我が國民の

に於いては法律と道德とは勢ひ兩岐に分かれ各〻其の本源を異にせざるを得ず故に彼れに在りては

道德は專ら宗敎に倚賴し共和の要件たる博愛を敎ふ約束に由る主力は服從せらるれども崇拜せられず法律の主因たることを得れども敎義の源泉たることを得ず故に敎義の源泉を社會の外に求め無形の怪力を以て上帝とし民衆をして之れを崇拜せしめ僅に敬愛の敎を保維す國法と國敎とは旣に各〻其の本源を異にす何ぞ必しも其の合一を保せん或は宗敎の名に於て國法を蔑如し或は國法の名に於て宗敎を侵犯す歐洲の史上邦國の大亂此の源由に出でたるより大なるはなし…………近世諸國に於て敎義は政治の外に在りと爲し之を度外に放視する者は之を欲するに非ず積弊の餘勢已むことを得ざるなり國政豈民人肉躰上の福利のみを全うするを其の本とせんや

穗積氏の論旨は更に予輩の言辭を加ふること無く以上揭げたる所を以て明瞭に看取し得らるべし若し實際穗積氏の描くが如くに單に君民同祖なるの故を以て人々をして其の胸中敬愛の至情を湛へしめ以て國家の雄大なる發達を遂げしむ

を成す是れ家族制なり父母を同うする子孫は其家父の下に一家を成し同祖より出でたる數家は其の氏族の長の下に氏族をなす而して始祖を同うする數氏族は其始祖の直系の宗統たる皇室の下に民族を成すなり單に人種を同うする者が相依りて社會を成すと云ふにあらず社會全躰の構成が家族制に依りて作爲せられたるなり

此の故に家に在りては家長に對するの孝國に在りては皇室に對するの忠是れ我が社會に於ける人倫の大本にして百德の基礎なり而して忠と孝と我れに於いては其本二ならず如何となれば我が皇室は是れ一切家族の宗家なればなり「約束に依る服從は腕力を以て强制せらるゝの外敬慕の誠情なし祖先敎に淵源する服從の看念は子孫が祖父を敬愛するの成果にして其の服從は敬愛の發表なり忠孝は君父に從順にして之を敬愛するの謂なり約束に由る權力團結に於ては服從あれども敬愛なし人類平等の關係に於ては博愛あれども服從なし服從は秩序の源由にして敬愛は親和の基礎たり此の二者を兼具するは血統團結の特性なり」

然るに血統團結の純潔を保つ能はず祖先敎早く既に頽廢したる歐洲社會の如き

拜の大義に溯源し血統團躰を保維するの軌轍たり我が堅固なる家國の躰制は祖先教の基礎に存し之を千古に建て之を萬世に傳ふるは我が民族の特質にして我が國躰の精華たる所なり」と

穗積氏が論の要旨は此等數行の言句に包含して餘さずと謂ふべし氏が以上の論旨に從へば血統團結に重きを置き君民同祖を以て我が國躰並びに國敎の淵源及び特質となさんとするは當に然るべき事なり氏は血統團結に特有なる美處を揚げて曰はく「利害を以て集散し約束を以て協和を維持する者は其の團結固からず又久しからず利害の異同は生活の狀況に隨ひて時に變轉し人爲の約束は又人爲を以て解除することを免れざればなり血統相依るは自然の團結なり……血脉相通ずるは天然の連鎖なり人爲を以て之を絶つことを得ず利害の看念の外に超越し敬愛の至情に由り離るべからざるの共同生存を成す者は血統團結なり」と血統團結に基き祖先崇拜の主義に依りて鑄造せられたる所是れ我が家國の大特色にして此の特色は言を換ふれば家族制に在りと謂ふべし

始祖を同うする民族が更に其の最近の同祖に依り小團躰を成し層を重ねて國

ずしも非なるにあらず唯予輩は祖先崇拜といふ如き單純なる思想若しくは手段を以て果してよく今日及び將來の民心を滿足せしむるに足るべき世敎を振起し得るかを疑ふ而も穗積氏の論は一種の落つきを有し須からく吾人の一顧を價ひすべきものなるを以てこゝに專ら氏の言辭を假りて其の論旨を紹介し又少しく予輩の之れに關して思考する所をも附記せむと欲す

穗積氏は其の著「愛國心」中祖先敎が我が固有の國躰及び國民道德の基礎たることを論ずる條に曰はく

我が日本固有の國躰と國民道德との基礎は祖先敎に淵源す祖先敎とは祖先崇拜の大義を謂ふ我が日本民族の固有の躰制は血統團躰なり血統團躰とは民族が其同始祖を敬愛するに由りて共存團躰を成し祖先の威力に服從するに由りて平和の秩序を維持するを謂ふ小にしては家を成し大にしては國を成す者なり祖先崇拜の大義は血統團結を搆成し維持すると同時に血統團結の存續は亦祖先崇拜の大義を鞏固にし深遠にするの成果あり二者相待て消長し須臾も離るべからず而して我が固有の國民道德たる忠孝友和信愛の道は一に皆祖先崇

祖先教は能く世教の基礎たるべきか

（穗積八束氏の論を讀む）

此頃祖先教を以て我が國躰の基礎及び其の特色となすと共に之れを以て世道人心を繫ぐべき風教の骨髓たらしめんと欲する論者あり此の種の議論にして最も明瞭に又最も沈着に發表されたるは法學博士穗積八束氏の近著「愛國心」に說ける所のものなるべし穗積氏が我が國家の前途の爲に慮り我が國民道德の爲に憂ふる所ありて出來得べくんば其の謂ふ祖先教に基ける思想を以て世教を振起せむとするの志に對しては予輩は深き同情を表するに躊躇せず若し穗積氏の言ふが如き思想を以て能く長へに國家の隆盛を來たし能く民心を統御するを得ば予輩も亦日ごろ竊に考慮する所のこゝに成就せられたるものとして欣喜措く能はざるべし予輩は何人に拘らず此の點に於いて予輩を滿足せしむる者あらんを願ふや切なり然るに不幸にして予輩は未だ穗積氏の唱ふる如き祖先教を以て能く長へに民心を滿足せしめ得べき所以を發見せず思想若しくは手段の單純なるは必

の起る毎に云ば云ば行はるゝものにして恰も美術的天才の所作の自然なるが如くに自然なり美術的天才の所作に驚くべきものあるが如く宗教的天才の行ふ所にも亦驚くに堪へたるものありと雖も是れ畢竟自然の所爲(Nature's work)の一部分なりと見て何の不可かある予輩は斯かる事件のあるを否みて自然界を云ふことの狹きに過ぐるを思ふと共に又特に斯かる事件を超自然と云ふの必要を見ず予輩は斯かる事件の現實生起することを否まざると共に之れを以て到底自然科學の説明し得べからざる所となすの理由を認めず生理上及び心理上セルギエフの事蹟の如きを説明し得べからずと云ふ必要なし自然科學的説明を與へ得るか否かゝ宗教的天才の所業の價値を増減せざるは恰も其れが美術的天才の所作の價値に係はる所なきが如し予輩はロイド氏の云ふ如き現在の證據を以て豫め何々教に限れりと云ふべき理由を見ず何教にても可なり若し之れを現はさば予輩はそれに從はん我が國民はそれに從はん所詮宗教的人物の出づるか否かゝ其の教の生死を決すべし法は人によりて重しとは蓋し是れをいふ也

（明治三十年七月發行、六合雜誌第一九九號）

くは我が國に於ける黑住宗忠の性行及び事蹟の如き畢竟は同種類に屬すべき者ならずや若し一を以て眞とし他を以て僞とせば是れ遂に我が田へ水を引くの誹りを免れじ現在に於ける超自然を以て基督敎の證據となすを許したる上にて再び還り來たる問題は他の一切の宗敎に全く無き如何なるものを基督敎は能く與ふるぞと云ふことなり基督敎に在る道德的敎訓は頗る美なれども是れ亦佛敎及び儒敎の有する所なりと答ふる者ある如くに現在の超自然は基督敎の證據となるべしと雖も佛敎も亦同じ證據を有すと云ふ者あらば如何に辯ずべき詰まる所團栗の丈くらべとなるに非ずや予輩は遂に基督敎も亦人類に於ける宗敎的進化の一段階一現象たるに外ならずと云ふ結論を免るゝ能はず若しロイド氏の此の論旨が獨り基督敎を他の宗敎的現象の列より拔いて之れを絕對的に完全なるものと爲さん目的を有するならば余輩は其の論を失敗せりと云ふに躊躇せず

ロイド氏が現在に於ける超自然の一例として揭げたるセルギエフの性行の如きは予輩の見を以てすれば決して珍しきことにあらず又必ずしも自然以外の事と云ふを要せず寧ろ斯かる事は如何なる時にも如何なる處にも宗敎界に一大人物

甚だ多しと云ふ

予輩はロイド氏の論を以て條理頗る明瞭なりと云ふに躊躇せず若し基督敎にして眞實廣く我が國民を敎化し得ば其の依て以て力あるの證據は畢竟するにロイド氏の謂ふ所の外に出でざるべし宗敎の感化の廣く民衆の間に行はれたりしは凡そ斯くして行はれたりしなり他の證據は寧ろ附屬物たるの位置にあり啻に基督敎のみならずロイド氏の云へる如く凡べての宗敎の究極的證據は之れに外ならじ然れども予輩のこゝに問はんと欲することは斯かる現在の證據は唯基督敎にのみ限れるものなるかと云ふことなり若し現在に於けるの超自然は唯基督敎會にのみありて他になしと云ふ意味にて其の證據を說き而して之れを以て基督敎を證せんとせばこはロイド氏が單に道德又は哲學又は歷史を以て基督敎を證することを難事とせると少くも同じ程の難事なるべしロイド氏は曰く神の働きは國民的區劃を以て區劃せられずと予輩はロイド氏の此の言の意を以て予輩の謂ふ所と同じき意味に解すべきか否かを知らず唯予輩の見る所にてはロイド氏の揭げたるセルギエフの例の如きを以て基督敎會にのみ限れるものと思ふ能はず近

信仰個條として奉ずる所のものを謂ふ然れども此の種の超自然は實際若し現在に於ける超自然即ち現に我等の中に神の手の働けるものあるを證明せざる限りは多く其の効力を有するものに非ず唯其等をのみ提出するは畢竟死せる正説を説くに外ならずブシュネルの論じたる如く現在に於いて超自然なる事柄の起こるを信ぜざるの結果は遂に過去に於いて其の如き事柄の起こりしを否むに至らざる可からず凡そ人不思議なる事柄を事實として信ずるの度は其の事柄が時を隔つるに從うて減却すべし所詮過去に於ける超自然を承認することは現在に於けるものを承認するに依りて憑る若し基督教會に於いて現在超自然の事の行はれずば其の過去に於けるものを説くも畢竟無益なるべし現在に於ける超自然とは現實教會にある者が其の中に靈なる見るべからざる力の働けることを其の品性と所業とによりて證するを謂ふと斯く論じてロイド氏は其の一例として露西亞の一僧セルギエフ(Sergieff)を擧げたりセルギエフの行く所民衆之れを圍繞して其の祝禱を得んことを求め其の面を仰ぎ其の聲を聞くや彼等は一種異常の力を授かりたるが如く艱める者の其の艱みを忘れ病める者の其の病を癒さるゝこと

し佛學者は其の哲學を主張せん爲に多くの議論を提出するを得基督敎家が日本を敎化せんには哲學的理論に優るものを以てせざる可からず或は基督敎の歷史的方面を根據とし敎會の歷史を以て其が證憑となさんとす然れども是れ佛敎家又は回々敎家の等しく爲すところ殊に日本人に取りては其の自ら經過したる自國の歷史より得たるものの方歐洲國民の又は基督敎會の如何なる時代の歷史よりも趣味あるべく効力あるべし若し歷史と哲學と道德とを併用せば玆に基督敎の信仰の爲に頗る堅固なる基礎を形づくり得んも尙以て日本を敎化するには足らざるべし此等假令證據となるも畢竟唯學問ある人々に對してのみ効力あるべし

基督敎を提出するに他の道あり其の超自然的方面を以てする是れなり其の道德其の哲學其の歷史と共に其の超自然的方面を提出せずば未だ十分に耶蘇基督の價値を世に發揚したりと云ふ可らず然れども超自然と云ふに二種あり一は過去に於けるもの一は現在に於けるもの是れ也過去に於ける超自然とは基督の化現其の奇蹟其の復活等凡て「正說」(オルソドキシー)を守ると謂はるゝ基督敎徒が其の

人に提出さるゝや獨り所謂宣敎師等の說敎に於いてするのみならず歐米より渡來する文學は皆其の道となならざるは無く又日本人が歐米に渡行して或は其の大學に遊び或は其の家庭に勞働する是れ皆基督敎を日本人に提出する所以の道にあらざるは無し此等の種々なる經驗が寧ろ斯國民に基督敎を提出することに於ける最大要素を爲すと云ふも必ずしも過言にあらざるべしと

さらば基督敎は如何なるものとして斯國民に提出さるゝぞロイド氏曰はく之れを提出するものの思ひ思ひに因りて其の道一ならず或は專ら基督敎を以て道德上の事として基督の德性を稱揚し使徒等の道德的敎訓を稱讃することに力を用う惟ふに其の道德的敎訓には佛者も儒者も必ずしも反抗を呈することと無かるべければ彼等は必ずや問うて道德的敎訓として佛敎及び儒敎に全く存在せざるものの如何程基督敎に在りやと云はん道德上の敎訓を陳列し而して之れを以て基督敎を傳播せん十分の理由となさんは難し或は基督敎を其の哲學的方面より視而して神學上の議論を根據として其の敎を證せんとす然れども實際不信者に向つて神の存在を論證せんことの如何に難かるべきかは自ら試みて之れを知るべ

るにあり(The Presentation of Christianity to Japan)基督教がまさに如何程の理由を以て我國に宣傳せらるべきかを論ずるもの此のロイド氏の文の如く偏僻の少なきは稀なりロイド氏は素より教役者たる資格を有し一般宣教師等と共に基督教の我が日本に傳布せられんことを熱望する一人なるが而も其の所論尋常一樣の宣教師の口より予輩の云ば云ば聞く所とは其の趣を異にせるものあり己れが奉ずる宗門を如何に他人に提出すべき奈何なる證據を以て之れを宣傳すべきと云ふことの如きは之れを言ふ者大抵我が田へ水を引くの誹りを免れず從つて他を首肯せしむるに足るものの稀なるが常なれどロイド氏の論の如きは先づ最も此の弊の少なきものの憒かに一讀を價ひすと思惟するを以て茲に其の趣意を紹介し而して之れに關する予輩の意見をも附せんとす

ロイド氏は先づ日本人が決して宗教心に乏しきものに非ざるを論じ此の故に元來宗教に冷淡なる人民なりと云ふことを以て日本人間基督教傳道の遲々として進まざるの理由と爲す可からざるを言ひ而して其の理由は其の教が斯國民に提出さるゝの仕方に在るべきかと問ひ起こせりロイド氏以爲へらく基督教の日本

とせば予輩は其の甚しく狹隘淺薄なるを思ふ也予輩は帝國文學記者と共に所謂日本主義を解して唯我が國民としての實踐道德の一部を指示するものとなさんと欲す斯く解するが故に予輩は彼の一派の人士が古典に得手勝手なる解釋を下して輕佻なる國自慢の心に媚び稱驕の心を煽り立つるを以て時務を識らざるものとなす斯かる大言壯語は是れ現時の我が國民に與ふべき誠實なる忠告と云ふべからず是れ却て國事を誤まるものなればなり良藥は口に苦し誰れか此の良藥を投ずるの勇氣あるものぞ國民の虛驕心に媚ぶるは爲すに易し日本主義を唱ふるものは之れを記憶せざるべからず請ふ看よ門前の瘦犬を己れが見知らぬものとし云へば後込しながら滅多也多羅に吠えたてて而して犬魂を發揮し得たりとなす寧ろ憫むべきにあらずや

(明治三十年六月發行、六合雜誌第一九八號)

宗教の究極的證據

去(明治三十年)六月二十日發兌の英文國民之友『極東』にアーサー、ロイド氏の筆になれる一文を載す其の趣意とする所日本國民に基督教を提出するの道奈何を論ず

義を去ること甚しく遠きものにあらざるべし殊に若し我が國家の目的は國利民福を主義とすと云ふ論者の意を以て國家至上主義を解することを得ば是れ畢竟功利主義の上より國家の價値及び基礎を說き來たらざる可からざるべし以上陳べたる如く「日本主義」を唱ふる人々の中個々人の差別を外にして其の綱目に現れたる協會全躰の主唱を見れば其の頗る如才なきものたるを知る予輩は寧ろ其の一二ヶ條を削り去りたらん方假令一方に偏するの嫌はありとも却て主義の發表として凛乎たる所あらんと考ふ其の綱目に雜然列べられたる所を見れば萬能藥の廣告に類し而して其の賣る所の藥も亦千金丹ほどの効能はあらんかと疑はるる嫌なきにあらず

然れども若し眞實に萬能藥たらんと欲せば予輩は尙其の綱目に掲ぐべきものの尠からざるを思ふ例へば個人を沒し去るものにあらず却て多くの個々人の利福を計るものなりと云ふ如き斷り書きは其の一個條なるべし予輩の解釋を正しとせば日本主義の綱目に掲げられたる程の事は之れを尤も至極と云ふに躊躇せず然れども是れ以外に國民として又は個人として何も云ふべく求むべきものなし

教的趣味が人生の如實の一面を看取したる必須のものにあらざるか否か是れ佛教家の須からく論ずべき所なるべし國祖を崇拜すと云ふことが宗教的崇拜を他の何者べも捧ぐることを容さずとならば是れ耶蘇教家の極力爭はざる可からざる點なるべし若し國家の臣民として其の敬意を皇室に致せと云ふことならば何人が聞いても尤も至極の事なるべし若し凡べて宗教と名づくるものは迷信の外に何物をも有せずと云ふことならば是れ耶蘇教家及び佛教家の須からく爭ふべき點なるべし所謂日本主義は宗教にあらずと說明せらる而して此の主義を唱ふる人々の中には全く宗教を以て迷信視する者もあるが如く見え又一種の實躰論を根據として宗教及び美術の哲學的價値を說かんとする論者もあるが如く見え極端なる寧ろ粗笨なる經驗哲學を唱ふる人もあれば又頗る形而上的趣味を帶べる思想を懷ける人もあるが如しされば此等の點に於いては日本主義は定論とする所あらざるならん盛なる國家主義を稱ふとは云ふものから「我國家の目的は國利民福を主義として其の國家主義は個人を沒し去るものにあらず」と云ふ言譯を明々白々に附したる人もあれば是れまた都合よき國家主義にして都合よき個人主

尤も過ぎて見ゆること是れなり十個條の綱目の何れも皆美々しき言葉を列ねて雜然たるは一言に評すれば如才なしと云ふを以て最も當たれりとす光明を旨とすと云ひ清淨潔白を期すと云ひ其の美々しさ詩人を待たずして知らるべし日本主義者の嫌惡する佛敎も耶蘇敎も光明を求め清淨を欲すと云ふに於て差別はあらず唯何を以て眞實の光明とし淸淨とするかの論につゞまるべし武を尙ぶと云ふことあるかと思へば直ぐに列んで世界の平和を期すと云ふことあり國民的團結を重んずと云ふことあれば人類的情誼の發達を期すと云ふこともあり若し人類的情誼の發達を期して國民の團結を重んずとならば耶蘇敎家も强ひて反對するを須ゐざるべし殊に御尤も千萬なるは(尤も過ぎてをかしと云ふ者あらんか)精神の圓滿なる發達を期すと云ふことなりいみじくも言はれたるものかな唯少しく特に意味ありげに見ゆるは生々を尙ぶと云ふこと及び社會的生活を重んずと云ふことが佛敎家にあたり國祖を崇拜すと云ふことが耶蘇敎家にあたれりと見ゆるの點にあるべし大乘佛敎の本旨が果して社會的生活を輕んずるものなるか又生々を非とするものなるか其の本旨は只管に厭世的なるか又厭世的と解せらるゝ佛

一社會的生活を重んず
一國民的團結を重んず
一武を尙ぶ
一世界の平和を期す
一人類的情誼の發達を期す

「大日本協會」の唱ふる日本主義は略〻右掲ぐる綱目によりて窺ふを得べし協會員個々の意見は多くあらんも協會全躰の唱ふる日本主義といふものは上出の綱目に網羅せられたりと見て可ならん機關雜誌發刊の主意にも唯國民を結合して其の進取の氣象を助長するの主義と云ふべきなりと云ふほどの説明に止まりたれば先づ以て協會として之を見る時は其の目的により、寧ろ其の目的を達するに必須なりとする綱目によりて其の特色は發表せられたりと云ふべきならん

予輩が右の綱目を讀んで先づ奇異に思ひたるは其れが其の機關雜誌の「時評」欄に現れたる馬車馬的なるワカラズ屋の一人意張りなる如き讀んで怒らんよりも又畏れんよりも一種のをかしみを覺えしむる如き句調と相對して頗る如才なく又

に新領地の如く隙もあらば亡國の恨を報せんとする心のある處には斯かる强力に基ゐせる倫理說は孟子の政治論にまさりて危險なり」てふ結論の再び吾人に還り來たるなり、

（明治三十年十一月發行「六合雜誌第二〇三號）

日本主義の綱目

三四の人々相寄り日本主義と名づくる主義に從うて一の協會を起こすの計畫ありてふ噂を耳にしたりしが其の噂いよいよ事實となりて其の機關雜誌「日本主義」も發刊せられたり其の目的とするところ日本建國の精神を發揮するに在りと云ふ而して其の綱目を掲げて曰はく

一國祖を崇拜す
一光明を旨とす
一生々を尙ぶ
一精神の圓滿なる發達を期す
一淸淨潔白を期す

者たりと云ふを得ば、是に於いてか(予輩が曩に彼の短篇の冒頭に指摘し置きたる如く)先づ問ふべき問題は謂ふところ强とは何ぞや弱とは何ぞやと云ふことゝなるなり、

若し又個々人の所欲が直に其の行爲の標準たるべきものなりとせば、强者が社會一般の幸福に不利にして唯己れに利なる事を制定し之れを是非の標準となし居る時にも(此の如き事態が如何程長く繼續すべきかは問題なれども權力說上斯かる如き事の全く無しと云ふべからず)或者は社會一般の幸福を欲して之れを其の行爲の標準となすことあらん、其の代はりに或者は又他の事を欲して之れを其の行爲の標準となすべし、而して其の間に道德上是非の區別は立つ可からざるべし、故に若し當時の主權者に對する謀叛を我が所欲とする者あらば之れを道德上非とすべき理由はあらざるなり、予輩が曩に論じたる如く「時の强者の壓服力の下に在るものに取りて始めて謂ふところ道德上の是非あり、其の壓服力を爭ひ得と思ふ者は其の所定の是非を顚倒するも何の憚る所あるべき、こゝに於いてか所詮はMight is Rightと云ふことに歸するなり」、此の故に予輩が彼の短篇の結末に云へる「殊

準を與ふるものにあらずとせば、そは論者の勝手なるべし、然れども予輩の知れる權力說は唯々歷史的說明を事とするもののみには非ず、(全躰倫理說てふものは畢竟唯歷史的硏究に止まるべき者なるか否かは別に一問題として論ずべきもの、玆に詳論するの餘地なし)されど今假りに强者の權力を基本とする倫理說は元來唯歷史上の成り行きを云ふに止まるものなりとするも、歷史的事實と吾人の道德的行爲の標準とを全く相分離して說くを得べしと思ふは誤謬なり、事實上は凡て强者の制定によらずして道德の標準の定まること無しと主張しながら、尙其の强者の制定の如何に拘らず實際上吾人が道德的行爲の標準を設け得るやうに云ひ得べしや、强者の權力の制定に拘らずして何物のあり得べしとするも、道德上の是非はある可からず、蓋し權力說に從へば道德上是非の標準は權力の所定に先だちてあらざればなり、强者の權力の定むるところに合はざる事件を個々人の欲することはあらんも、其の欲する所を以て直に道德上の標準とはなし得ず、それが道德上の標準となるは只其等個々人自らが强者たることの世に認められたる時にあるべし、若し人實際は甲なる者が强力を振ひ居る時にも乙なる個々人の方眞實に强

知らざるは笑ふべきの至りならずや」と云へるを以ても明かなるべし、斯く予輩が彼の短篇をものしたる趣意を明かにしたる上に、更に論ずべきは、强力を根據とする倫理說の歸結の果たして孟子の一書に劣らざるほどに、否それに優りて、危險なるか否かなり、予輩の論旨は上にも云へる如く倫理說としての權力說を其の根柢より批評し了せんとせるにあらず、唯右辯明したる趣意に用ある點をのみ取りて之れを掲げたるなり、而して其の趣意に用あるほどの點に於いては予輩の曩に論じたる所に加へて尙ほ多くの言を費すの必要なしと信ず、

辯ずる者あり、曰はく、强者の權力を基礎として說く所の倫理說は、其の目的、唯事實上の說明を與ふるにありて敢て吾人の行爲を律すべき標準を與ふるにあらず、凡そ社會の道德は强者の權力の制定によりて始めて成れるものに非ざるは無しとするも、是れ唯實際上の成り行きを云ふのみにして、是れより直に結論して吾人當行の事も亦强者の權力の定むる所の外に非ずとは斷ずべからず、蓋し各個人の行爲の標準は其の所欲の何たるかに因りて定まれば也と、論者の謂ふ權力說を以て斯くの如く唯歷史上の成り行きを說明するに止まりて吾人に當行の理想又は標

ことに熱心にして之れを恰も道德の唯一基本なるが如くに思惟する人々の中にあるを見、又國家の權力を道德の唯一基本とする說と强者の權力を其の基本とする說とが共に倫理上の權力說として思想上親密の關係あるを見て奇異の感を起こし、若し孟子の仁義說が國家に危險ならば彼の强力說は少なくも同じ程に危險ならずやと云ふ疑問を想起し、而してますます彼の一派の論者の老婆心の濃かなることを可笑しく思ひたり、是れ予輩が曩に彼の一短篇をものしたる所以なり、彼の一短篇の趣意は、倫理上謂ふ權力說の完き批評を揭ぐるにもあらねば、又必ずしも其の當世に及ぼすべき結果の危險なるか否かを以て一倫理說の眞否の究極的標準となせるにもあらず、一概に其の當世に及ぼす結果を危險なりとして一學說を排せんとする如き狹隘なる心は、彼の苟にも國家に危險なりと云ふ一事を以て如何なる哲學をも宗敎をも排せんと唱へて孟子の一書をだも容るゝ能はざる論者の方にこそあれ、予輩の趣意は他に向けたる論鋒の同じく己れにも向けらるべきことを知らざる論者を戒むるにあり、是れ彼の短篇の結末の一段に二度も繰り返して「之れを是れ思はず唯孟子を排するを知りて彼の一派の倫理說を排するを

＊本誌とは六合雜誌のこと即ち前掲の論文を指す

再び强力を根據とする倫理說の歸結に就いて

予輩は本＊誌第百九十八號に「强力を根據とする倫理說の歸結」と題する一短篇を揭げたりしが、其の後一論者の之れに對して辯駁の勞を執れりしを見る、予輩は論者が彼の短篇に向つて注意を與へたるを喜ぶと共に、又さきに彼の論をものしたる趣意を再びこゝに明かにするは無益ならじと信ず、

予輩曾て知名の一敎育家が公衆に向つて演說せるを聽きたるに、其の中新領土に施すべき敎育の方計に關する說を陳べて曰へらく、孟子の如きは新領土の讀書家の常に執りて子弟に敎へ來たりたるものなれど、此の書の道德論及び政治論の我が國家に對して危險なることを忠告する人あり、成程と思ひて自今此の書の句讀を新領土の子弟に授くることを禁ずるの方針を取れりと云々、予輩は之れを聞いて其の老婆心の濃かなるに驚きたり、而して孟子が仁義を基とし又民を本として說ける道德及び政治の論を斯くの如く嫌ふ者の往々彼の國家の主權を崇拜する

如き所に於いて唱へしむべからずと而して孟子を排するを知りて强力說を排するを知らず笑ふべきの至りなり若し危險なることを云はゞ此れは彼れに優るとも劣らじ若し王者の權は畢竟ずるに强力に基ゐするものならば民心離反し去り國內の不平湧くが如き時は是れぞが强力を失ひつゝあり而してそれと共に其の王者たるの權を失ひつゝあることを證するものなりと看て而して己れ取りて代はらんとする者あらんことを道德上妨ぐる理由あるべからず却て是非は强力に據りて決すべきなれば上述の倫理說は斯かる謀叛を誘起するの傾向ありと云ふも過言にあらざるべし殊に新領地の如く隙もあらば亡國の恨を報せんとする心のある處には斯かる强力に基ゐせる倫理說は孟子の政治論にまさりて危險なりと云ふべし之れを是れ思はず唯孟子を排するを知りて彼の一派の倫理說を排するを知らざるは笑ふべきの至りならずや予輩は彼等一派の論者に就かんよりも寧ろ孟子に從はん

（明治卅年六月發行、六合雜誌第一九八號）

義務もなければ是非正邪の差別もなし故に一國家の主權者によりて定められ又は代表されたる所のものに違背すべき道德上の權理の其の臣民に於いて在るべき筈なし然れども是れ唯道德と云ふものを其の如く制定されたるものの範圍に限れるに由るなれば主權者が制定したる所を守るべき道德上の理由と云ふべきものも(實際服從を强ひらるゝ强力の外に)あるべからず若し國內に時の主權者を壓倒し得べき强力を有すと思惟する者起こるあるも其の者をして時の主權者に屈從せしむべき道德上の理由てふものはあらず謀叛を是とする道德上の理由は無きと共に又之を非とする理由もあらず現國家に於いて道德上の是非を定めたるものは時の强者の强力に外ならねば其の强者の壓服力の下に在るものに取りて始めて謂ふところ道德上の是非あり其の壓服力を爭ひ得と思ふ者は其の所定の是非を顚倒するも何の憚る所あるべきこゝに於いてか所詮は Might is Right と謂ふ事に歸するなり

或は曰ふ孟子の如く民を本として說ける政治論は危險なり王者若し民心を失はば王者たるの權を失へるものとするは危險なり殊に此の如きの思想は新領土の

るものの外に道德上爲すべき又は爲すべからずと云ふの區別はあらず斯く其の社會に制定されたるものの外に道德上合理又は不合理を語るべからずと云々他の說を陳腐と云ふべくば此の如き倫理說も亦其の根本思想に於いて頗る陳腐なるものなりそは兎も角も斯かる立脚地よりすれば國家の意志と稱せらるゝものも畢竟ずるに強者の意志の相合したるものに外ならず其が個人の服從を要求する理由又實際の效力はそれが強者の意志の發表されたるものなりと云ふことの外にある可からず(上述の倫理說よりすれば一法律が吾人の服從を要求する實際の效力即ち制裁力以外に吾人が其の法律に服從すべきの理由といふべきものを語るべからず斯かる倫理說と通常所謂功利說との間に根本的差別のあることは予輩が前に「哲學道德宗敎に關する現今の問題」の中に云へるが如し)然れば國家の意志と名づくるもの及び其が發表と見らるべき法律等は唯それが眞に強者の意志の發現にして他を屈從せしむるの效力ある時にのみ其れに從ふべき義務あるなり其の效力の無きところには道德上の義務と云ふことも全く無意味のものとなるなり其の如き強者の強力を以て制定したる事柄の範圍外に於いては權理も

斯かる歸結を發表して而して始めて理論上一種の倫理說たる面目を備へ得たりと謂ふべきなり斯かる倫理說を以て能く吾人の道德的意識の全躰を說明し得たりと考へ而して一切他の倫理說を視て陳腐なりとする論者は須からく上述の歸結に至ることを自識して其の說を唱へざる可からず彼等論者の中には斯かる倫理說の立脚地に在りて而して國家に對する絕對的服從の義務を唱道せんとする者あり啻に之かせんとするのみならず忠君愛國等の公德は最もよく斯かる倫理的觀念に根據して維持せられ他の主義を取るは却て之れを危うするものなるが如く考ふる論者あり果して然るか予輩は此點に於いて彼等論者の唱ふる倫理說の歸結を暴露せしめんと欲す

彼等は曰はく道德上是非善惡の區別には究竟すれば其の根柢に於いて吾人が道理上の承認と名づくべきものあらず何事が一社會に於いて道德上是とせらるゝぞと云はゞ是れ其の社會に强者が其の好みに從うて定めたる所のものに外ならず一言に云はゞ强者が其の行はれんことを欲し而して弱者をして之れを承認せしめたる所のものに外ならず斯くして强者の强力によりて其の社會に定められた

强力を根據とする倫理說の歸結

此頃我が國の學者中或は倫理の根據を論じて單に之を强弱の關係に發見し强者が其の强力を以て弱者を强ひて我が權力を承認せしむること是れ道德の由て起こる所なりと云ふ謂ふところ强とは何ぞや弱とは何ぞや是れ先づ問ふべき問題なるが予輩は今は此の點を論究せざるべし唯右論者の所說を正當に立せんには謂ふところ强力を解して他の好む好まざるに拘らず其を圧ふるの力(即ち圧ひて我が意志の下に他を屈せしむるの力)とせざる可からず而して斯く他を强ふるを得る所以は畢竟するに他の存在を危からしむるの力を我れに有することに在らざるべからず若し斯く解せずば論者の所說が一種の倫理說としての特色は沒せらるべし論者が謂ふところを正當に論究せば其が道德の根據を說くの趣意は遂に Might is Right 即ち强力のある處權理ありと云ふことに歸せざるべからず此の歸結に至らんことを憚るは是れ唯己が論旨の正當なる論理的結論を引かんことを恐るゝに外ならず焉ぞ斯かる結論を引くことに躊躇すべき理由あらんや大膽に

ふと何の揀ぶ所ぞ理性の指示を謂ふ點に於いては(固より單に形式的ならざる點に於いては相異なれども)カントの所説に比して何の異なる所ぞ若しかゝる功利説を唱ふる者にして只管にカントを嗤はゞ是れ自らを嗤へるなり

若し又吾人が社會一般の幸福を來たすを要すと云ふも其の理由として別に理性の指示と云ふが如きものの存するにあらず唯其の社會に於ける強迫力の然らしむる所に外ならず唯若し一般の幸福を來たすことをせずと云ふ者あらば社會の強迫力の爲に其の者は我が身を亡ぼさゞるを得ざるが故のみと云はんかゑか云はば是れ固より一種の倫理説として主張することを得んもこれは所謂功利説とは全く其の立脚地を異にせるものなり少くも理論上は件の強迫力の強迫せしめざる所に於いては個人に取りて社會の公益を計ると云ふの德行は存せずと謂はざる可からず是れ倫理學上詳論すべきの根本問題なり然れども功利説と其の如き立場とは決して混同すべきものにあらざることを忘るべからず予輩は此の如き思想の混同を以て倫理的研究を阻害するものなりと考ふ

(明治三十年五月發行、六合雜誌第一九七號)

にして其の學理的根據を考ふることの精しからざればなり功利說は何と云ふぞ社會一般の幸福(快樂と云ふ意味に解したる幸福)を增進する是れ吾人の爲すべきこと即ち德行なりと云ふ然れども各個人自己の最大幸福と社會一般の最大幸福とは必ず相一致すべきものなりや其の全然相一致すべきことの如何にして經驗上證明せらるべきか吾人は各〻社會一般の幸福を增進することに力むべき者なりと云はゞ之か言ふ理由は何處にありや社會一般の幸福を增進するは是れ亦取りも直さず自己の幸福を增進するの道なりと云ふことを根據として能く功利說を唱へ得べきか若し其の如く云はゞ社會一般の幸福を增進すること(例へば仁義を行ふこと)に己が最大快樂を覺えざる者は何故に尙社會一般の幸福を增進することを以て其の義務となすべきか若し一般の幸福を行ふべき理由と動機とを區別して其の動機を有せざる者に對しても尙其の理由はありと謂はんか其の謂はゆる理由と云ふものは何處より得來りたるものなるか是れ即ち理性の指示と云ふべきものならずや若し吾人が社會一般の幸福を來たすべきことを以て其の他に理由を要せずして吾人の承認すべき明瞭なるものと云はゞ是れ理性の直覺を云

(其の果して然るかは是れ精考を要すべき問題なり)道德の標準を語る時に其の何れに着眼するかは是れ實際上の心得に於いて輕少ならざる關係を有するものなり右等の立脚地は學說上大に其の趣を異にするものなるも唯社會の利益とのみ云ひては其の何れに從へるものなるかを明示するに足らず幸福と云ふも亦然り之れを英語のハッピネス(Happiness)の義とも解すべく又ユーデモニア(Eudaemonia)の義とも解すべし而も其の何れに解すべきかを明かにせず又其の兩語意の實に區別せらるべきものなるか否かをも明かにせずして漫然之れを用ゐ幸福こそ人生の目的なれ又幸福主義こそ眞正の倫理說なれと言ひのゝしる者尠からず通俗の談話に於いては固より殊更に咎むべきことにはあらざるも苟くも倫理學上の論を爲すと云ふ者に取りては其の思想の未だ精しからざることを示すもの也

口を極めて功利說を稱讚する人にして又口を極めて倫理說上理性又は直覺と云ふことを嫌ふものあり此の如きの人は其の自ら言ふことの何なるを明かにせざるの過ちに坐す其の如き論者がシヂウイックの功利說の何故にベンザム及びミルの所論の後に唱へ出ださるゝに至りしかを解せざるは是れ唯漫然功利說を口

の上よりして推察し得らるゝが如し而も尚多くの倫理學者は社會の利益又は公益と云ふことを以て少くも道德の一部面を說くに必要なるものとすることに於いて異議を挿まざるべし若し社會の利益と云ふことを以て一切の道德上の是非の據りて分かるゝ唯一の基礎又は標準とせば其の立脚の地は以て通常謂ふ所の直覺說と相簡別すべきものなることは明かなり然れども更に其上に尚吾人の解答を要するの問題は橫はれり此の問題に答へざる限りは未だ其の倫理說としての立脚地を明かにしたりと云ふべからず其の問題とは社會の利益と云ふことの意味是れなり社會の利益と云ふことは幸福と云ふと等しく動もすれば諸種の倫理學者に用ゐらるゝの語なれば其の意義頗る漠然たり或は社會を組織する個々人をして其が諸性能を發達せしむるをば指して其の人を(從うて社會を)益するものと云ふを得べく又スペンサー氏の倫理說に云ふが如く生を厚うするを名づけて個々人を又は社會を利するものと云ふを得べく又ベンザムが唱へし如き功利說に從うて最多數の人に最多量の快樂を與ふるをば社會を利益するものとも云ふを得べし縱令ひ厚生の道と快樂を增進するの道とは相離れざるものとするも

他にはヘルバルト風或はグリーン風の倫理說あり若し宗教的道德說及び未だ一の整頓せる學說を爲さゞる儒教めきたる道德思想を除かば現今我が學界に於いて唱道さるゝ倫理學上の立脚地は略ゞ今揭げたる種類のものを以て代表さるゝならん

我が國に於ける現今の倫理說上の論議にはおのづから右揭ぐる如き三四の立脚地の發見せらるゝものはあれど予輩の特にこゝに注意せんと欲することは斯かる立脚地を代表するが如く思はるゝ人々も未だ其れが理論上の眞相を十分に言表するに至らずして已むものの多きこと是れなり斯かる論說は倫理說としては學理上未だ全からざる者と云ふべし試に斯かる例の著るきものの一を揭ぐれば社會の利益と云ふことを以て道德の基礎又は標準なりと唱へ而してこゝに其が倫理學說としての立脚地を明かにし得たりと考ふるものの如き即ち是れなり社會の利益と云ふはまことに便利なる言葉なれども其の便利なると共に之れを以ては論者の倫理說上の特殊の立脚地を明かにするに足らず固より社會の利益を以て道德の標準とすと云はゞ其の立脚地が一種の功利說ならんと云ふとは言語

たりしが今又少しく現今の倫理説上の論議に對して注意する所あらんと欲す我が國に於いては未だ哲學上の大組織を打ち建てて之れを世間に問ふ者のあらざるは言ふに及ばず偶〻自己の世界觀を世に漏らさんとしたる者あるも概ね己が所感を吐露するに止まりて未だ堂々たる根據を据ゑて論議したる者なきことは嚮にも一言したる所の如くなるが其の他論理學及び智識論上の問題又は美學上の問題に關しても論述さるゝもの未だ甚だ多からず廣義にて云ふ哲學的攷究に屬する者の中他に比して最も多く學者の注意を引き又最も多く論文及び著譯書の世に公にせらるゝは心理學及び敎育學の範圍に屬するものならん此れに次ぎては倫理道德に關する論説ならん歟固より未だ倫理學上見るに足るべきの著述と云ふべきものは甚だ稀なれども倘或は善惡應報の問題或は敎育主義の論に關聯して倫理説上の意見の發表せられたるもの必ずしも尠しとせず而して其の發表されたる意見の中には學説上種々の立脚地の代表されたるを見る而して其の立脚地の中屢〻吾人の觀察に觸るゝものには或は功利説あり或はスペンサー風の進化説あり或は强者の强力または國家の命令を基礎とする權力説ありまた其の

漠然たり種々雜多なる宗教家のある如くに種々雜多なるポジチヸストあり(宗教家にしてポジチヸストを以て任ずる者もあり)されば自稱ポジチヸストの或者に取りてはコントが一種の宗教的熱情を以て對したる人類と云ふ觀念さへ亦一の大々的空想に外ならず彼等は人類教に代ふるに國家教を以てせんとす若し神在さずば人は神を造るべしとヺルテールの言へるは宜なるかな彼等は人類てふ神の代りに國家てふ神を拜せんとす若し國家てふ神に代へて寧ろ自身てふ神を拜せんと唱ふるものあらば彼等は何と辯ずべき是れ決して戲言にあらず彼等が誠實に答ふべき好個の問題ならずや何は兎もあれポジチヸストの宗教こそ予輩の最も開かんと欲するところなれ

(明治三十年二月發行、六合雜誌第一九四號)

(其三)

予輩は本誌*第百九十三號及び其の次號(即ち前掲二篇)に此の一二年來我國に於いて論議されたる哲學全躰に關する問題即ち所謂形而上學對經驗哲學の論爭に就いて先づ簡單なる觀察を下し次に宗教對學術の問題に就いて聊か所見を陳述し

*六合雜誌をいふ

と爲す如くに他人は亦他が事物の眞相を探ぐるの唯一方法なるかの如くに貴重する數學的計算を以て殆ど無意味のものとなす人にかゝる差別はあれど何れも皆人生の富贍なる心的生活の方面を發表せるものにして天地と人生との祕奥を語らんと欲せば須からく其の全面に眼を注ぐべし彼れと此れとを合せて以て始めて能く人生を了解すと云ふべきなり

加藤博士等の如き口吻を以て宗教を語るは敢て爲し難き業にはあらず而も能く是れを以て人生の一大事實なる宗教的現象を闡明したりと云ふべきか所謂經驗主義を取ると云ふ人々（ポジチヸスト）も亦必ずしも斯かる口吻を以て語るに滿足せず尙深く宗教的意識の何たるを看取せんと力むるあり而も神祕的方面を言ふは固より彼等の肯せざる所なるべければ其の何れにも屬せざるポジチヸストの宗教談こそ予輩の最も好んで聞かんと欲する所なれ予輩は眞實に此の種類の論者の志のある所を憶うて之れに同情を表するに躊躇せず名に於いては甚しく相異なりとも實に於いては恐くは意外にも相合せるものもあるならん兎にも角にも今日に於いては唯ポジチヸストと名乗りたるのみにては其表示する所餘りに

の到達せる限りに於いては宗教も到底之れに違背して立つを得ず學術思想を解せざる下愚のものは云はず苟くもそれを解するものに對して宗教の立つべきあらば其の宗教に説く所は少くもそれに戻らずと云ふほどの消極的條件を充たさざる可からず宗教に説く所が當時の學術思想に從うて變じゆくべきは恰も美術に標現さるゝ感想が文化の程度によりて一ならざるが如し而も當時の學術思想より得來たる所のものが其の思想のまゝに於いて宗教又は美術の神髓を爲すにはあらず寧ろそれは唯標現の方法となるのみ宗教の本領はおのづから別に存するものある也是れ予輩が常に吾人が心的生活の神祕的方面と名づくるものにして若し之れを埋沒して人生の何たるを會得すと云はゞ尙は是れ馥郁たる香氣を去つて花の何たるを解すと云ふが如し宗教心と名づくるものは吾人が當代の學術思想を以て天地と人生とを了解せんとする時にそれに伴うて吾人の聞き得る一種の餘韻に譬へつべし唯人によりて其の餘韻を聞くことに敏鈍の差別あるは恰も人によりて美術の趣味に差等あり又事物の統計的數學的觀察に對する興味に强弱あるが如し一人は他が斯かる餘韻を語るを以て全く一種の空想又は幻覺

動に奔るべきか斯かる思想の轉變は吾人に取りて趣味深き教訓を與ふるものならずや

我が國に於いて或部分の人々の間に論ぜられたる所も畢竟ずるに一方には學術の要求を以て吾人が生活の全範圍に亘るべきものとなし宗教の事も亦全く學術の所定を以て律せざるべからずと云へば又一方には宗教と學術とはおのづから其の範圍を異にするものなれば一を以て他を律すべからずと云へるなり予輩は屢〻繰り返されたる論議を今復たこゝに繰り返さゞるべし唯予輩の所信を略言せば予輩は學術と美術とを以て其の範圍及び趣意を異にするものと見る如くに亦學術と宗教とを以ておのづから其の立ち場を異にするものとなす又美術が或社會に又或時代に於いては一見嘔吐を催すべきほどに不正當のものとなることはありながら尚人生の滅すべからざる一方面をなす如く宗教も亦然るものなりと考ふ併しながら美術も宗教も共に當代の學術の證明に逆うて立つべきものとは考へず固より學術と云ふも尚甚だ不完全なるものなれば其の現在の進歩の程度に於いては未だ以て吾人が生活の全範圍を蔽ふに足らず而かも當時の學術思想

とすヒュームが宗教の眞妄を云ふときには所詮是れを理性の法庭に引き來たらざる可からざれど宗教の起因を以て吾人の理性に歸するは非なり却つて其の由りて起こる所は吾人の心性の他方面即ち理非理を問はざる種々の感情及び欲望にあり宗教の起こるや其の劣等なるものと雖も敢て全く僧侶等の虛構に成れるにあらず人性の自然に出でたる也而かも謂ふところ自然は理性を指すにあらで究理を目的とせざる他の性情を云ふ理性は唯宗教的信仰をして成るべく非理の分子少なきものたらしむるの用はありと論じたるは能くディスト等が所說の缺點を指さしたるの批評と云ふべしヒュームの論旨を平易に言ひ表はせば宗教は人心の自然の作用に由來せるものなれど素と道理を考へたるの結果に非ざれば學術的硏究の進むにつれ吾人の理性に照らして其の非理なる事柄は漸次脫落しゆかざるべからずと云ふにあり而して脫落しゆいて遂に何物の殘るべきぞ此の立ち場に在りて之れを問うて之れに答へんは敢て難きにあらざるべし一方にゆいて斯かる立脚地に到るか將た他方に轉じてディスト等の宗教的意識を解することの淺きを補はんが爲に遂に(現に英國に於いて起こりたる)メソヂスト風の運

要すべきなり或は今にして學術と宗教との衝突を語るは時節後れの譏りを免れず蓋し眞正の學術と眞正の宗教とは相衝突すべきものならじと獨りぎめにすまし居る輩もあれど是れ畢竟たゞ眞正といふことを空想して眞理の相戻るが如きことあるべからずと云ふに止まり若し實際在る宗教と實際在る學術とに就いて云ふときは斯く事もなげに斷じ去るべきにはあらざる也

前世紀に於いて歐洲殊に英國にはディスト等相起こりて「自然宗教」を唱へ吾人の自然に具ふる光(lumen naturale)なる理性の指示に合へるとの外眞正の宗教として懷抱すべきものは非ず其の他は皆僧侶等が愚民を惑はさんが爲に虚構したるものに過ぎずと論じて當代一般人民の蒙を啓くに力め又實に宗教思想進化の上に其の功績は少々ならざりしかど其の歷史眼を缺ける又深邃なる宗教的意識を了解することの淺かりしが故に遂に當時に於ける宗教對學術の問題を解釋し了するを得ず却つて人をして或はヒューームの立脚地に至るか或は多くの宗教家のしばしば爲せる如く唯宗教的信仰と吾人の究理心とを相別かちて學術上は如何にあらんとも宗教には亦おのづから別なる節ありと云ふに其の安居を求めしめん

ずして何等かの新運動の勃起し來たらんことを望み聊か舊時の惰眠を覺まし來たれるが如き有樣のあるは事實なり而して斯くなりし原因の少くも一大部分はこれを自由討究の精神の隆興せるに歸せざるべからず元來自由討究と宗敎とは其の精神相合ふべきものなりや一者の增長は自然他者の衰微を伴ふべきものなりや否を問はず今日思想界の大勢が自由討究の精神を宗敎の範圍に押し擴め來たりたるは避くべからざることにして彼のユニテリャン風の運動が現今少なからぬ勢力を有し樣々なる名稱の下にありながら尙其の氣風に感染せられたるものの多きは其の運動又其の氣風が今所謂思想界の大勢の產兒なればなり老朽者は兎も角も新學界の空氣を呼吸せる輩は遂に自由討究の精神を拒むを得ず而して其の結果として必ず提出せらるべき問題は學術と宗敎との關係是れなり此の問題是れ實に此の一二年來或部類の人々によりて盛んに論議せられたる所なるが固より學術と宗敎との衝突は今に始まりたる論議の題目にあらず且此の頃我が國に討議されたることも多くは是れまでの討議を繰り返したるに過ぎざるが如きの觀あれど尙は是れ決して死せる問題にあらず更に深く攷究されんことを

見れば笑ふに堪へたる如き下等なる宗教的現象にもまた深くその由りて起これる人心の機微を察すれば決して唯一言に幼稚なり迷妄なりとのみ彈訶すべからざる所ありと考ふる人々は現時の有力なる學者間にも少なからざるが如し中には進歩せる宗教的運動の勃起せんことを切望してこれが爲には私に一臂の勞をも假さんとまで思ひ立てる人もあるが如し

宗教を以て識者の考慮を煩はすに價するものとなすことに就いて今日異論を挾むものは甚だ尠なからんと雖もさて如何なる宗教が識者の心を繫ぐに足るべきか又若し識者の信心を得んことは難くとも我が國一般人民を教化せんには如何なる宗教的信仰を擇ぶべきぞと問はゞ答辯まことに紛々たり其のまことに紛々たるの故を以て多くの識者は特に我が現今の宗教上の狀態に關して私に憂ふる所あるものゝ如し今日の狀態は唯熱誠なる宗教的信仰の必要をのみ說いて而して實は其の信仰の勢力を失へるなり

熱誠なる宗教的確信を以て身みづから動けるものは甚だ尠なからめど兎に角誠實に宗教の事を論談する者の增加し來たり且活力を失へる舊信仰舊制度に慊ら

*此に本誌とあるは六合雜誌をいへる也

法の論が洪水の如くに漲り來たりし頃には苟くも學識ある人士が眞面目に宗教の事を談ずるを以て耻辱となしたりしこともありしが爾來社會の諸要素もおのづから其の相互の平衡を保たんとするに從ひ識者が宗教に對する感想も漸く其の趣を改め來たり殊に此の一二年來は今時の第一流の學者を以て居る人々が誠實に宗教談を爲すを以て己れ等に似合しからぬことゝ爲さゞるに至れるが如し是れ實に我が近年に於ける思想界の一大事實と見るべきものにあらずや

斯くの如く宗教に對する識者の意向の大に變じ來たりたる所ありとは云ふものから彼等が今迄信ぜざりし宗教を信ずるやうになりしと云ふにはあらず同じく眞面目(まじめ)に宗教を論ずる人々の中にも其の懷抱のまちまちなるは予輩が本*誌百八十九號(即ち本書第四八三頁以下)に宗教に對する三種の意見と題して論じたるところを以ても明かなるべし實に其の意見は種々樣々なれども兎に角宗教と名づくるものを以て全然齒牙に懸くるに足らざるものとするの心は漸く變じ來たりて同じく宗教と稱するものの中にも多くの差別ありて其の解釋次第にては識者と雖も亦只管にこれを排斥すべきにあらず啻に然るのみならず己れ等が眼より

カルト、スピノーザ等の哲學の如きをのみ形而上學と思ふべからず現今英國第一流の思想家ブラッドレー氏の如きも其の著書「アッピアランス、アンド、リアリテー」に於いて「絶對者」に論じ及ばんとす此の書の如き破壞的批評を以て滿ちたる所說も亦能くメタフィジック(形而上學)上の論として提出せらる一派の見識にのみ局して考ふる人々の目には佛國の有名なる或學者等が「經驗に基づける形而上學」(la métaphysique fondée sur l'experience)と云ふはいともをかしく聞こゆるならん斯樣なる形而上學のあるべき筈なしと思はるゝならん是れ要するに今日に於ては經驗哲學といふも形而上學といふも決して定まりたる形を有せず特に此の一二年來我が國に於いて論せられたる所の如きは畢竟唯問題を掲ぐるに止まりて未だ其の解釋を明かにしたるものとは謂ふべからざる也

(明治卅年一月發行、六合雜誌第一九三號)

(其二)

我が國に於ける維新以後の思想界の變遷を回顧すれば一時泰西物理の學及び政

雖も其の問題が取りも直さず歐米の學者間に現に論議されつゝある者なる事は是れ既に我が國の學者が世界の學界の潮流に掉さんとするものなることを示すに足らん歟たゞ歐米の學界に於いて大きく議論されしものが我れに在りては頗る小形に討議されしことは是れ即ち我が學問界の甚だ幼稚なることを示すものなり

一般哲學上の問題として注意すべきは形而上學對實驗哲學の論なるべし是れ畢竟哲學攷究法の論にして委しくは必ず智識論の上より討究し入るべきもの而してこは尙世界の哲學界の大問題として遺れるものなり其の一方にのみ既に問題の決着したる如くに云ふは是れ唯自家の說に立ちて云ふものにして學界の大勢よりして云ふものにあらず學界の大勢よりして云はゞ往時經驗哲學と見做されたるものにして今の經驗論者と自稱する輩の棄てたるあり往時の形而上學にして今の形而上學論者の拋棄せるあり要するに經驗といふことが須からく更に明かにせらるべき事柄なり又形而上學といふものも既に定形を爲したるものにあらずロック及びヒューム の說をのみ取つて直に經驗哲學と云ふべからざる如くデ

究せんとする者も追々其の數を增し東西古今の思想に廣く通曉せんと力むる所あるは現在の事實にして而してこは將來の盛況に向つて準備を爲すものと見ば我が思想界が多少の進步を遂げたるものとして之れを賀するを得ん殊に此の一二年來哲學道德宗敎上世界の大問題とも見るべきもの多く提出せられて學者が之れに多少の注意を傾けたるは兎にも角にも我が學界に於ける著明なる一事實なるべし尤も唯問題の提出せられ之れを其の一二の方面より窺ひたるに止まりて其の解釋に至りては特に目新しきもの若しは根底を穿ち得たりと謂ふべきほどのものを見ず而も尙ほ明かに其の問題を眼前に揭げ出でたること是れやがて思想上の進步を促せるものと謂はざるべからずそは明かに問題を自識することはそが解釋に近よるの第一步なればなり而して現に論ぜられたる所は是れ唯我が學界に於けるの問題ならずして世界の學問界の大問題と見做さるゝ所のものにして其が新解釋。の俄に呈出せられざりしは異しむべきことにあらず其が新解釋の揭げられざりしを責むるよりも寧ろ提出されし問題の何れも皆世界の學問界に於いて旣に在りふれたるものなりしを憾みとせん歟之れを憾みとすべしと

哲學道德宗教に關する現今の問題

（其一）

此の一二年來我が國にて哲學道德宗教に關して論議されし主要の問題の更に究明を要するものあるを列擧し吾人が何那邊に向て論步を進むべきかを自識するの便りとせん我が國に於いては哲學上の攷究は何頗る幼稚なる情態に在りて未だ人目を新にする大議論といふべきものは出でず自己の世界觀を世に漏さんと試みたるものあれども是れとても概ね片々たる議論に過ぎざるか若しは唯自家の所感を吐露するに止まりて堂々たる根據を据えて組織的に其の學說を開發したるものあらず今日先輩と稱せらるゝ人々が壯んに論陣を張りて相討議することあるは至つて稀なり却つて後進の少壯者が其の讀書の間に得たる一時の思ひつきを怯めず臆せず公にするを見るは豈奇ならずや惟ふに先輩と稱せらるゝ人々は流石に輕々しき議論をも吐きかねて其の思想の更に熟するものあるを待てるなるかそは兎まれ角まれ未だ哲學上予輩は大聲を聞くを得ず然れども哲學を研

予輩は宗教制度に於いて他の事に於けると同じく疉ばしば破壞を行ふの必要を認む而して予輩の之れを言ふは獨り本願寺の現制度に就いて云ふにあらず獨り佛教に就いて云ふにあらず予輩は基督教會に於いて革新的精神の揚らざるを痛歎す今の牧師と稱する者概ね老婆心を抱いて宗教の大勢を轉ずるの道を知らず新神學の呼び聲を聞きしと思ふ間に早く既に實際的傳道てふ名目の下に舊夢を繰返さんとす而して其の謂ふ實際的傳道事業の擧れるもの何處にある破壞することを知らずして何ぞ偉大なる建設をいふを得ん既成の組織内に安居せんとする弱志の輩は寧ろ宗教の刷新をいふ勿れ眞に刷新を言はんとする者は寧ろ革命と云へ予輩は今の世に革命的精神を鼓舞する者の多く出でんことを希はずんばあらず是れ即ち無理想の生活に夢死せんとする天下の民心を攪醒する所以の道ならずや

（明治廿九年十二月發行、六合雜誌第一九二號）

んや佛教全躰の革新より云へば一本願寺の破滅何かあらん予輩は本願寺の現制度が佛教の本旨にかなへるかを疑ふ封建の君主制度と凡べてそれに伴へる階級と虚榮とを模寫したる本願寺の組織は其の今日に至る迄の隆盛を來たしゝ一大基因なりと云はゞいへ是れ唯其の外形の膨脹を云へるのみ斯くの如くにして其の隆盛なりしは早く既に其腐敗を釀成して佛教の本旨に遠かりつゝありし所以なり若し我が國に於ける佛教の現情は上に引ける言の如しとせば是れ改良と云はず改革と云はず革新と云はず寧ろ佛教界に於ける革命を唱ふべき時なり少くともルーテルが羅馬教會に對して爲したる程の改革を唱へざるべからず若し此に出でずして唯多少の宗務を改め役僧を更ふるに止まりて我が事成れりと云はば予輩は其の所謂改革の唯如才無き者たるに感ぜんのみ若し事の難易をいひて今は役僧の更迭さへも爲し難しと云はゞ其の如き眼識を以て爲すの改革は寧ろ一宗派內の些事のみ予輩の深く關心する所に非ず此頃佛教家中の學者として世に其の名を知られたる人新聞紙に投書して內地雜居に至るまでにそれが準備として今の宗教界に改革を成就するの志を陳ぶ何ぞ其の云ふ改革の造作なき

て健全なる宗教的生命に害毒あるものと考ふ斯様のことを容す本願寺の制度の如きは先づ其の根底に於いて革新する所なかるべからず人多くは予輩の言を以て唯抽象的空論を喜ぶ者となさん然れども宗教的信仰の如何が國民の元氣に關する所あるを考ふれば予輩は其の信仰と道念との撞着を許容する如き宗教的制度は之れを破壞するの必要を唱へざる可からず

此頃本願寺改革を唱ふる一佛教徒は論じて曰く「吾輩は此に斷言す今日の佛教は社會の毒物也若し夫れ佛教が我が國史上に關係する上よりいふときは功過未だ必ずしも言ひ易からず然りと雖も現時世に流布する佛教なるものは決して功の以て罪を償ふに足るべきものにあらず彼等の形骸は習慣なり彼等の骨髓は迷信なり而して彼等の精神は唯黄金なり今日の佛教腐敗すといふは未だ盡さゝる也今日は既に全く佛教なきなり」と此の如きは時事に激したるの言ならんとはいへ眞に此れほどの氣慨を以て佛教改革に從事する者今の佛徒の中にありとせば佛教は未だ全く廢れざるなり佛教の運命は誠にかゝる精神を實行するか否かに懸れり一時の破壞を恐るゝ者にして豈に能く斯かる精神の實行に其の身を委ね得

*六合雑誌第一九一號をいふ、即ち本書五〇七頁を見よ。

にする一愚物を戴いて之れに滿腔の歸依心を注ぎ蒼生の粒々辛苦になれるの財寶を集めて斯かる一愚物の逸樂の用に供せんとするに至つては(予輩が前*號の時論欄内に論じたる如く)宗教も亦一の惡戯となり了せりと謂はざるべからず深く民心の根底に入りて之れを治むべき宗教の事は國政の事とおのづから同一視すべからざるものあり宗教を信ずる人にして若し其の信仰の至つて厚きと道徳の下劣なることが能く相容るゝものとならば其の如き宗教的信仰は是れまさしく社會を蠱毒するものにあらずして何ぞや一宗旨に若し其の如きことを許さば是れ其の根本に於いて彼の所謂淫祠と何の擇ぶ所ぞ吾人若し信仰の可見的目標を要せば道徳の下劣なる者を以て之れにあてんよりは寧ろ無情なる木石を以てすべし此の方吾人の道徳心に戻れる所少なし若し品徳の修まれるか否かに關らずして宗教上無上の品位を有し得るものとせば而して其の者が自ら宗教心を有する者なりとせば其の者には尠くも宗教上の信仰に於いては能く衆民の目標となるの資格あらざる可からず然らば斯の如き者を戴いて一宗の目標とするは宗教的信仰に厚きと道徳修まれるとを相離すの宗旨たらざるべからず予輩は是れを以

未だ以て深く累を法主の德に及ぼすべきに非ずと斯く論ずるもの是れ世間の論者多數の所思なるべし今の本願寺の組織を其の儘にして之れが爲に謀る者の言は概ね斯くの如くなるべし其の以上を言ふは是れ唯座上の空論にして實務に益なき者とせらるゝなるべし然れども若しこゝに道念の進歩に伴うて宗教心の發達を計らんと欲せば其の見所亦おのづから異ならざるを得ず宗教的信仰の目標たる者と道德心の目標たる者との分離は一見恰も宗教の事に害なきが如く思はれんも是れ決して宗教が一社會に健全なる生命を保ち得る所以にあらず斯くの如き分離は其の生命に取りて最も危險なるもの、斯くの如き分離の始まる所これ其の腐敗の始まる所也予輩は固より道德と宗教とを同一視する者にあらず本願寺の法主も羅馬敎會の法王も假ひ其の身に幾多の惡德あるも之れを信ずる者は其の惡德と其の宗敎的品位とを區別して其の宗敎上の品位を以て無上のものとなし之れに向つて渴仰の念を注ぎ之れによりて安心の利益を得るなるべし然れどども斯かる方便を用ゐて民心を繫がんとするの大弊害は之れを羅馬敎會の全權を振へる國民の生活に於いて見るを得べし道德心の上より見れば肉慾榮華を恣

謂ふに不可なし今の宗教上の革新をいふ者それ如何なる意味にての革新を唱へんとする

當今世間に囂々たらんとする大谷派本願寺の事の如き其の改革を言ふ者若し果して成就する所あるも是れ畢竟唯其の役僧を更へ其の宗務に多少の改良を加へたりと云ふに止まらんか其の此に止まるも是れ亦事に益なきにあらず宗門保護の上に尠からざる功績を遺したる者と云ふを得べきも此の如きは是れ果して能く其の宗教的制度としての病根を醫したるものと謂ふべきか論ずる者は曰はく本願寺腐敗の淵源は執事以下宗務に當たれる役僧の輩にあり此輩をさへ更迭せしめば爲すべきの事了れりと謂ひつべし法主の如きは素と是れ親鸞以來其の血脉を傳へたる者を推して萬人信仰の府と爲せるに過ぎず之れを立てて現世の活佛と仰ぐは尙一木像を立てて之れを一宗旨の本尊とするが如し但し法主の品行や動もすれば醜聲を外に漏らして世の毀貶する所となるも斯の如きは寧ろ法主といふ木像の一缺損のみ彼が彼れたる職分は萬民信仰の目標たるに存し人道を明にして衆庶の模範たるべきは別に其の人なかる可らず則ち其の品行の如きは

く民心を疑惧に陷らしむるを恐るとて宗教的制度上根本的破壞の必要あるを認めず今の改革を云ふ者それ如何の處まで進まんとする若し一宗一派に於ける現組織に伴ふ若干の弊害を除去して其の醜態の餘りに世間の耳目に觸るゝことなきに至らんを希ふに止まらば其の業や必ずしも爲し難きにあらず又其の如き改良事業が其の宗其の派の一時の安寧を來たし兼ねて民心を繋ぐ上に多少の補益する所あらんを疑はず而して兎にも角にも當世に成功を求むる實務家は會ゝ改革を言ふも概ね其の如き局部的表面的修繕を爲すを以て其の目的を達したるものと爲すならん而も若し宗教上の革新を唱ふる者皆唯其の如きを以て其の業を成就したるものと思惟せば是れ未だ以て宗教界に於ける現時の大問題を解釋したるものと謂ふ可からず未だ以て現今社會の新宗教的需用に應じたる者と謂ふ可からず此の如きは畢竟彼の所謂新しき酒を古き革嚢に盛るの譏を免れざるべし革新といふにも種々の程度ありルーテル等によりて歐洲に起こされたる彼の宗教改革は固より一の偉大なる革新なるがそれに對して羅馬教會に起これりし(其の組織をますます堅固にし其の制度を保守せむとせし)運動も亦一の革新なりと

したる「神の國」に社會主義の歴然たることは決して蔽ふべからざる也初め基督の敎の弘まりし一原因はそれが社會主義を帶びたりしにあるや疑なからん予輩は現社會に社會主義を唱ふるの必要あることに眼を覆ふ能はず而して宗敎は由來社會主義と親しかるべき筈のものなりと考ふ予輩は宗敎を說く者が今一層大膽に平等主義を主張せむことを希はずばあらず

(明治廿九年十一月發行、六合雜誌第一九一號)

宗教制度に於ける破壞の必要

(附　本願寺問題)

此頃我が國に於ける宗敎上の革新を唱ふる者尠なからず特に其の或者の如きは人意を壯にする節なしとせず然れども其の革新を言ふや多くは唯一時の醜態を除き弊竇を塞ぐを以て其の事了れりとなすものの如し而も此の如きは唯一時其の表面を修飾するに止まり久しからずして其の裏面に或は尙舊に倍する害毒の釀生し來たるべきを知らず宗敎上改革を言ふ者動もすれば保守頑陋の輩と等し

の精神に動きたるものにあらずや

猶太の預言者の如きは亦社會主義を唱道せるものにあらずして何ぞイザヤの如き其の最も偉大なるものなり心を潜め先入を去りて福音書中の基督の教を讀む者誰れか其の社會主義の歴然たるに氣附かざらん貧き者に福音を傳ふとは是れ片時も基督の口を離れざるの言にあらずや彼れが富者を叱責したること幾何ぞや彼れは富の力に媚びんとしたる者にあらず社會の階級に諂はんとしたる者にあらず彼れは寧ろ之を無視せり學者とパリサイの人とは彼れの口より甘き言葉を聞くこと能はざりき彼れは貧き者不具なる者病める者みつぎとり罪人無學者勞働人の友を以て任じき富める者は其の所有を賣つて彼れに從はざる可からず貧者に貸すに利を取るの心を以てす可らず天國に於いて大なる者は己れを棄てて最も多く他に事ふる者なり歐米の社會組織に適はせんが爲に基督の社會主義的說敎に微温なる解釋を下すは非なり基督の所謂「富める者」「貧しき者」には註解者の精神上の意味と名づくる微弱なる意味を與ふべきにあらず基督の說敎が實際如何ほど正當に行はるべきかに拘らず其の描ける而して此の世に來たさんと欲

平等を言ふや多くは沈思冥想の上に於けるの哲理に止めて之を世間に實行するの勇氣を缺く差別即平等といふ言は頗る美なれども動もすれば俗世間の差別に假すの微温的調和に出でんとす眞俗兩諦の區別妙は則ち妙なれども是れ亦俗に媚ぶるの好遁辭とならんとす世に門地的差別はあり餘れり自ら設けし爵位を自ら帶び自ら定めし年金を自ら分配して傲然世に臨み無智の民をして其の虚榮を崇拜せしめんとするものは有り餘れり而して其虚榮を張るの費用はこれを民の膏血に得るに外ならず此の如き虚榮を以て糞土と見做し衆庶をして其の如き世間の不平等を冷眼視せしむるの平等地を開くことをせず却つて自らが其の如き虚榮中の一人たらんとするが如きは何たる怪事ぞ佛弟子たる高德の具はれるか否かに拘らず世襲的門地を踏んで愚なる門徒に生佛と崇められ其の門徒の粒粒辛苦に成れるの財を集めて大廈高樓に榮華を極むる如きは宗教家としては沙汰の限りと謂はざる可からず此の如きを以て衆生に安心を與ふるの方便と爲すに至つては宗教も亦一の惡戲に過ぎざるなり釋迦が階級的制度を打破せんとしたる如きは平等を空理に止めずして世間に實にせんとしたるもの、是れ明に社會主義

富貴賤の差別に媚びんとす今日に於いて予輩は尙一層聲を高めて平等の福音を唱ふるの必要を認む弱肉强食富勝貧敗が世上の一大事實なればこそ宗敎が弱者貧者の友たるを要するにあらずや何故に今の宗敎家は富者を咀ふの勇氣なきか自我主義爭鬪主義が人類社會進步の一大動力にして又これが實際大に行はれつゝあるものなればこそ宗敎家は其の反面に立ちてそれが弊害を矯正するの責務を有するにあらずや自我主義の一面のみを以て人類の進步の全うせらるべくもあらず而も人は動もすればこの方面に走らんとす宗敎が博愛を說き大慈悲心を說き一視同仁の平等觀を主唱せずんば何者か能く之を爲さん國家が神聖なる名目の下に多くの不義を働きつゝある時に若し宗敎家が之を叱責するの勇なくば何人か之を能くせん社會の不平等のために苦しめらるゝ幾多不幸の人々に平等の樂地を與ふる是れ宗敎の本務にあらずや然るに宗敎家は己が宗旨の一時の虛勢を張るに便なるの故を以て動もすれば種々の階級的、血統的、財產的、權勢的、國家的、世間的差別に媚びんとするは何事ぞ

佛敎の如きは世間の不平等に對して平等觀を嚴取するが其特色なるべきに其の

はんと雖も勤むれば必ずしも得らるゝにあらず社會に設けある種々の規定のために差別のために其勤勞に價ひする物を得ざる人々の多きは是れ吾人の實見する世相にあらずや假りに黄金の多少は殊更に歎くべきほどの大事にあらずとするも社會の不公平なる制度のために精神上の修養を缺くもの何ぞそれ多きぞや富者貴人は罪惡を犯しながら尙其の跡を塗抹し易く貧者は麵麭を得るの難きに苦んで法網に罹り易し假りに公正は全くの平等にあらずして各自の得る所が其の功に比例するにありとするも現社會がかゝる公正といふ理想に遠ざかれるや甚し而して斯かる意味にての公正を實にすることが現在にまされるの平等を來たすべきは疑ひを容れざる事ならん誰れか現社會に壞つべきの不平等は存在せずと云ふか其の不平等を去らんとする社會主義の精神は何の世に於いてか不必要なる

かゝる社會にありて宗敎といふものが世間的差別に媚ぶることをせば是れ宗敎の精神を失ひたるものなり斯かる不平等に向つて醫藥を投ずるが是れ宗敎の一大目的にあらずや然るに動もすれば宗敎家は世間に從うて世間を利すと稱へて貧

は却て貧富の間に生ずべき社會問題を更に困難ならしむるものと謂ふべし其壞つべき惡差別除くべき不公平が社會に存するの多少は處々同一ならざれど其の全く存せざる社會あるを見ず殊に我等の生活する現社會の如きには排除すべきの不平等何ぞそれ少々ならんや成るべく斯かる不平等を排除すと謂ふ意味にての社會主義は何れの社會に在りても之を唱ふべき必要の存せざるなし予輩は今こゝに人類社會の理想はサン、シモンの徒の云ふ如く各人が自己の眞實の功に從うて其の報を得るの狀態にあるか將た或社會主義論者等の云ふ如く全く平等の分配を爲すの狀態にあるかを論せずまた國家といふものが社會主義を實行するに於いて如何ほど効力を有すべきものなるかを論せず兎に角現在の社會に於いて除去すべき不公平の少なからざるは蔽ひ難き事實なりと考ふ不能にして空位を守り虛威を張るもの幾何ぞ轗軻不遇其の處を得ざる者幾何ぞ輕車を驅りて日夜逸樂を事とする者あれば眠食を缺いて其の力を勞するも尙其の口を糊し得ざる不幸の子あり而して何の故に然るぞと尋ぬればたゞ一は富貴の家に生れ落ち他は貧賤に長じたりと云ふの別あるのみ懶惰なる者は其の所有せる物をも失

眞實社會問題は未だ發生し居らず貧富の大懸隔のあるに加へて貧者が智識を增して自己の狀態の憫むべきことを意識し從つて不平を懷くに至らずんば社會問題は未だ存在せりと云ふ可からざる也と若し其の如き辯解を以て社會主義を唱ふるの必要を覆はんとせば是れ一の淺薄なる詭辯に外ならず成程貧者が未だ多く不平を懷いて相呼應して起つことなくば現今歐米に視るが如き貧富の軋轢は存せざらん然れども若し貧者が自己の狀態を顧みて之を不滿足に思はずば彼等を救ふの道を講ずるに及ばずと云はんは是れ恰も愚者が自ら其の愚を感ぜずば彼は不幸なるものに非ずと云はんに同じ貧者が自ら社會の不公平を感ぜずとも其の不公平だに實在せば之を醫するの必要は存せる也貧者若し貧なるがために其の身躰上及び精神上の修養に失ふ所あらば彼等をして須からく先づ早く自己の狀態に對するの不平を起こさしめ其の狀態を脫するの志望を懷かしむべし彼等をして其の如き不平を懷かしめず知らず識らざるうちに能く其の憫むべき狀態を脫せしめんは是れ言ふべくして行はれざること也若し醫すべき社會の不公平あらば須からく人をして早く其の不公平を感ぜしむべし貧者不平を起こすことの遲き

斯く考ふるは是れたゞ其の主義が其の極端の弊害に陷れるを見て而してこれを以て其の眞意となせるの過なり世に謂ふ社會主義論者の唱ふる所に迷信あらんと雖も亦社會主義に對して迷信を懷ける者甚だ多し殊に門地若しくは財産等を以て我が安居となせる者は社會主義の何たるを深く考へずして只管之を蛇蝎視し此の主義を唱ふる者とし云へば唯羨望の念に動かされて富貴に居る人々を惡むの外に思ふ所なき者の如くに思惟す假令其の如き偏見を以て社會主義を見ざる者と雖も唯だ虛無黨又は無政府黨の名に恐れて社會主義の根底を看取せざる者甚だ多し其の如く世間の現制度現組織の外其の胸中に何物をも藏し得ず其の腦裡に何等の光明をも容れ得ざる者甚だ多きが故に社會主義を唱ふるの必要は何の世に於いても滅せざるなり若し能く大同情を以て社會の不公平のために苦めらるゝ無數の人々を視る者今少し多からんには社會主義を唱ふるの必要も少なからんものを現世の狀態は然らざるなり

或は曰ふ我が國の如きは貧富の懸隔尙未だ歐米に於けるが如く甚しからず今にして社會問題を喋々するは狼狽するに過ぎたるもの、我が現時の狀態に於いては

に至りたるぞ此の問題を明にするを得ば恐くは一道の光明を加藤博士の揭げられたる問題の解釋に加ふることを得んか予輩は此の人類學上の問題に就いて加藤博士の高說を聞かんことを希ふ

予輩は加藤博士の平生主張さるゝ强者の權利といふことを以て博士の自ら揭げらるゝ如き道德問題を審斷さるゝの手際を見んことを欲す斯かる問題は是れ實に博士の平生主張さるゝ道德主義の試金石ならずや博士が平生の持論に對しても焉ぞ明快に斯かる問題を解釋して世人に示さであるべしや博士は或は社會の利益といひ或は强者の權利といふこれは換用し得べきものなりや予輩は博士の意を明にせざる所あるを以て試に上述の論を爲して博士の意のある所を問ふと云爾

（明治廿九年十月發行、六合雜誌第一九〇號）

社會主義の必要

頃日一新聞の論ずる所を見るに言へるあり曰はく嫌惡すべき社會主義を其の未發に防がざるべからずと社會主義といふもの果して左かく惡むべきものなるか

みならず予輩の持論を以てするも男女の交際と云ふ如き事に關して吾人の直覺すべき不變易の關係ありとは考へられず倫理學上に所謂一種の直覺說の到底維持さるべからざることを知る善惡の究極的標準に關しては其の以上の理由の問ふべきものなしと考ふれども社會上の個々の關係に於いて道德上直覺すべき不動の定理ありと云ふことは予輩の取らざる所なり予輩は社會の利益てふことを云ふの非なるを見ず但し加藤博士等がこれを解するとは其の解釋に於いて相違する所あるべし

予輩は賣淫の惡事なるか否かの問題よりも更に一歩を進めて何故に人類は淫事を以て耻しき事となすに至りたるかと問はゞ加藤博士の問題は更に人類學上の研究に入りて大に面白き所あらんと考ふ博士は曰く若し淫を公然稠人廣座の中にて賣りたらばそは甚だ惡しかるべけれども賣淫は必ず隱密を旨として決して稠人廣座中にてなすものにあらず羞耻的の事を羞耻的に取扱ふものなれば第四條の理由も立ち難しと然れども何故に密かにすればよろしくして人に見せては惡しと云ふ如きの區別は生じたるぞ何故に吾人は淫事を以て羞耻的の事となす

意識を養ふことが必要なるにあらずや加藤博士みづから理由は知らざれど我れは賣淫を惡しと信ずと云はるゝ其の信念は取りも直さず今いふ如き社會の必要に生じたるものにあらずや博士若し已むを得ざる事は社會的道德上些も惡しと謂はるべきの理由なしと斷言さるればこは博士の立場よりするの論としては誠に拙劣なる愚論なり已むを得ざることをも尙惡しと言ひならはすことが社會の利益上また已むを得ざることならずや此の理を博士は何故に揭出されざりしぞ若し賣淫が風俗を壞亂するは紛れもなき事實ならば公賣淫もなく密賣淫もあらざる社會が其の共にあるの社會よりも優れるならん而して現今の社會を更に之れに優れるの社會に少々にても近よらせんには法律上公賣淫を許しながら尙道德上之れを惡しき事と見るが必要なるにあらずや

社會の必要てふ加藤博士の平生の持論を以てして何故に博士は賣淫を惡しとする意識の社會に存することを說明するに苦まるゝぞや予輩は實に之れを奇異に思ひたり予輩は假りに加藤博士の立場に在りてだに尙賣淫を道德上卑しむべきことゝするの理由は見難からずと考ふ假りに加藤博士の立場に在りてしか云ふの

に在りて功利說上の說明を用ゐんは尠しも不適當の事にあらず却て博士の當に爲すべかりし所ならん請ふ予輩をして假りに博士の立場にありて論ぜしめよ賣淫の風俗を壞亂するは紛れもなき事實なりしかも法律上公賣淫を禁止せば密賣淫を盛にして却て風俗に害あるが故に公賣淫は法律の許容すべき「已むを得ざるの惡事」なり若し已むを得ざるの惡事ならば或意味にては社會に必要なるものなれば之れを惡事ならずと見ては如何何故に公賣淫を不道德ならずと云ふことが非なるか是れ博士がみづから揭げて自ら解釋に苦まるゝの問題なるべし惜いかな博士は已むを得ざるの事にてはありながら尙其の事を惡事と視るの已むを得ざることを看過せるが如し請ふ試みに公賣淫を道德上卑しむべきこととするの意識を現社會より全く取り去れりと考へよ其の結果は如何問はずして明かならん社會が賣淫を惡しき事と見て擯斥すればこそ公賣淫の弊害が制限せられて此れ程のことは他の更に大なる弊害に比して法律上は許し置かざる可からずと云ふことを得るなれ法律上禁止することを爲さゞるの傍には法律以外の社會的制裁の其の事を妨止するもののあるを要す社會の利益よりして賣淫を道德上非とするの

れを離して爲さんとするの意識を含まざるなり私生兒の多く出づるは決して社會を利する所以にあらず賣淫は生兒なからんを欲す通常所謂正當なる男女の關係に於いて娛樂が一大動力とはなりながら尙おのづから生殖といふ自然の目的を離れざるものと賣淫とは今云ふ點に於いて大に異なる所あるなり

上述の如き點の尙論ずべき者はあらんが予輩の特にこゝに云はんと欲する所は加藤博士が第五の理由として揭げられたる個條に於いて其の應に用ゐらるべかりし說明の利器を十分用ゐられざりしこと是れなり博士も此の第五條を以て他に比して最も理由とするの價値あるものとせらるゝが如し博士の所謂社會の風俗とは如何なる範圍のものを指させるかは問ひ質すべき點なれど(若し賣淫を非とすることが已に所謂社會風俗の範圍內にあるものなりと視ば風俗を壞亂すといふの理由を以て賣淫を非とすべきは論なきことなり)こゝには之れを言はざるべし博士曰はく「賣淫の風俗を壞亂するは紛れもなき事實なり」と此の點に論據を置いて功利說よりするの說明を用ゐたらばこゝに博士は一大利器を得べかりしにあらずや博士は平生社會の利益を以て道德の基本となす人なり博士の立脚地

視さるゝ比較の當を得ざる所なきかカントの所謂ペルソンを自己に於いても他人に於いても唯方便として取扱ふ勿れと云ふ如きことは加藤博士に取りては意味なきことならんが兎に角右等の個條に就いて論ずべきの點は尚あるべし又博士の揭げられたる個條の外賣淫が男女の關係の自然の目的を離れんとするものなることも亦其の惡とせらるゝ理由の一ならんと思はる所謂目的論の眞否に拘らず生物學上より見て雌雄牝牡の關係が生殖を以て其の自然の目的(又は用)となせることは何人も許容するならん種類の維持と其の蕃殖との用を爲すことより離れては男女の關係は其の根底に於いて解すべからざるものとならん而して下等動物は人間の如くに思料することを爲さゞるが故に知らずして目的を達しつゝあれど人間はみづから顧みて男女關係の自然の用を多少意識することを爲す予輩は賣淫と云ふ事を以て生殖といふ(男女間の)自然の用を爲すことより離れんとするものなりと考ふ若し賣淫が子孫を得るの必要よりして爲さるゝならば社會が之れを視るは其現に之れを視る所よりも頗る其の趣を異にするならん娛樂の爲にするの飮食は固より無きにあらざるもこは必ずしも其の自然の用より全く之

れる如き科學的說明の狹隘なるにあらざるか將た我が信念の迷妄なるかと問ふところ是れ實に各自の精思熟考を要すべき所なり或者は信念を棄つるに早く或者は說明の狹かるべきを思ふに傾くべし其の傾く所の我れと多少異なれる者を呼んで打ちつけに彼れは科學的精神を有せずと云はんは非なり予輩は加藤博士が賣淫問題に關して奈何なる決斷に至らるゝかを見んと欲す

予輩は加藤博士が平日の持論なる社會の利益是れ道德の基本なりと云ふ說を持しながら倘博士が賣淫を惡しと信せらるゝの信念をも棄てずして可なるの道あらんを思ふ予輩は博士の文を讀むに當たり博士の必ず用ゐらるべしと豫想したる說明の利器を博士の用ゐられざりしを怪しむ博士が平生の論據よりすれば用ゐ易きの利器を用ゐんとして而も明に用ゐられざりしこと是れ予輩の少しく隔靴搔痒の感ありと思ひし所なり

博士がみづから揭げられたる五個條を以ては未だ賣淫の惡しきことを證するに足らずと論せらるゝ所は更に再考を要すべきものあり例へば淫を賣る者が其の身躰を他人の娛樂に供すると藝人が其の技藝を以て他人を悅ばしむるとを同一

處より來たれるかそれが奈何なる社會的勢力の結果なるかを尋ぬるは應に研究を價ひすべき好個の問題なり其の如く理由を知ることなくして有する信念は如何樣に取り扱はるべきものなるか若し如何に考ふるも其の理由を發見し得ずばこゝに吾人の取るべき道は恐くは二途あるのみならん或は其の信念を理由なきものとして拋擲するか或は理由の說明を放棄するかの一なるべし(若し其の說明が強者の權利とか優勝劣敗とか云ふ如き一種の主義を以て出立せるものならば其の主義を棄てて他主義を以て更に說明を試みることが其の如き場合に取るべきの一途ならん)但し學理的根據を有せざる事柄を迷妄として之れを打破せんと力むる者に於いては理由の說明を放棄せんは其の決して取るべきの道にあらず其の取るべきの道は寧ろ理由なき信念を拋擲することにあらん然れども如何程考へたる後に此の決斷を爲すべきかと云ふ事の決定は個人に於いて同一ならざるべし兎に角研究の中途にある間は何人もしばらく理由を知らざる信念を懷きて之れに從うて行ふ事あるを免れざるべし其の如くするを非科學的なりとは云ふべからず寧ろ狹隘ならぬ實驗を基礎とする者は斯くせざるべからず我が今取

の掲げられたる個條に曰く

第一男女の情交は一夫一妻に限るべきものなるが故に賣淫は惡なり

第二萬物の靈長たる人間が其の身躰を他人に賣る(假令一時のことなるも)が故に賣淫は惡なり

第三萬物の靈長たる人間が其の身躰を他人の娛樂に供するが故に賣淫は惡也

第四人生に於いて最も羞耻的なる淫を賣るが故に賣淫は惡なり

第五社會の風俗を壞亂するが故に賣淫は惡なり

而して博士は右掲たる所の外賣淫を惡しと視るの理由或はあらんも余は未だ考へ當たらず尙熟考すべしと云はる然れば博士は賣淫を惡しき事とは思ひながら未だ再思三考するも其の惡しき所以を發見せずと云はるゝ也博士が賣淫を不道德と思はるゝことは博士自ら叮嚀にも「余も亦賣淫を惡しと信ずることは毫も世人と異なる所なし」とことわられたるを以ても明なり

然らば加藤博士の如く多くの年月を社會の研究に費されし碩學が理由を發見せざれども尙惡しと信ずと云はるゝことの(卽ち其の如き信念を懷かるゝこと)の何

のなり予輩は博士が十年一日の如くに主張さるゝ優勝劣敗論を更に綿密に更に大膽に凡べての人事に應用して其の結果を示されんことを望むや切なり是れ啻に人類社會の學理的研究を奬勵するの益あるのみならず予輩の見る所を以てするも加藤博士の謂はるゝ如き優勝劣敗は假令眞理の全面を提げ得たるものにはあらずとするも少くも社會の一大事實を言表せるものなれば也予輩は國家の起原に關し又日常人倫の事態に關して博士が論旨の論理的結論を開かんことを切望す

博士が掲げられたる第一問は德義問題とはいふものから日本人は宗教に冷淡なる國民なりや否や若し冷淡ならば其の理由如何といふ重に宗教的方面に結べるの問題にしてこれよりも寧ろ第二問が通常謂ふ道德問題に屬せるものと考へらる第二問に曰はく賣淫は何故に惡しき事なりやと予輩は此の第二の問題に就いて加藤博士の論としては隔靴搔痒の感ありと思はるゝ所あるを言はん加藤博士は先づ從來賣淫の惡しとせらるゝ理由なりと博士の思考さるゝ五個條を掲げ而して未だ一も以て賣淫の惡しきことを證するには足らずと斷定せらる其

なる國躰論者の傍に個人主義世界主義平等主義の者を容るゝの餘裕ある社會にして始めて一種のおちつきを有し得べし釣合なき社會は傾き易し何ぞ種々の大膽なる思想を容るゝに臆する能く之を社會の懷に容れて自在に游泳せしめよ噫何んぞ我が社會の精神上こせつくことの甚しき

（明治廿九年九月發行、六合雜誌第一八九號）

賣淫問題と功利說

「日本宗教」第十二號に文學博士加藤弘之氏が「德義的問題に就て世間大方の解釋を求む」と題して二個の問題を掲げられてより世間多少これに關する論說を公にせるものあり察するに加藤博士の希望されし程には世の論者は未だ此の問題に注意を傾けざるが如きも尙これに多少の注意を引き得たる所以のものは是れが加藤博士によりて提出されたるが故ならん博士が我が思想界に重きを爲せる所あるは恐くは何人もこれを承認するに躊躇せざるべし予輩は我が國現代の學者中盛名を擔へる加藤博士によりて種々眞率なる議論を聞かせらるゝことを悅ぶも

墮落せむとするや詩歌俳諧小說に於いてのみまじめ臭きを嫌ふに止まらず批評といふものまでいと輕々しき道樂とならむとす借問す今日の文學者は少しく倦みたるにはあらざるか

人生娛樂を缺くべからず而もこちたき事重も重もしき事に一種の愉快を覺し得ざるは其の心力の弱きを證するなり眞面目にして快活なるを得べく快活ならんがために輕佻なるを要せず

吾等は如何程長くまじめにてあるを得べきか

早く倦怠の心を生ずるの一大原因は之を一個人に就いて云へば其の神經質にして胸宇狹く日夜同一事をのみ焦慮して他の念想を容れ得ざるにあり神經質の個人ある如くに神經質の國民あり神經質の人が爪先まで同一の感覺に打たるゝが如く些細なる事にも國民擧つて同一の調子に激昂す危機に臨んで冷靜なるを得ず神經質の人が四六時中同一の念慮に繫がれて他を容るゝの餘地を有せざるが爲め早く疲勞を來たす如く同一の文學同一の敎育同一の忠孝の外思ふ所なきを以て動もすれば倦怠を生じ其の一時熱心なりしに似ずして輕佻に走るなり偏狹

神經質の國民

變り易きが流行の常とは云へ衣裳や頭の飾ならば兎も角も詩歌小說など苟くも精神的生活に大關係を有するものまでも其の流行の波の極めて小さく極めて淺くして忽にして起こり忽にして消えゆくは興さむる事どもならずや流行といふものの由來かくの如きものなるか將た特に國民の氣質のこれをして然らしむるあるか其の氣がはりのし易きが流行をも變り易からしめ其の調子の輕きが流行をも輕からしめずや奈何

若し美學上美術をもて實を脫するものとし而してその脫實の境を假りに遊戲と名づけば戲作者といふ名稱は意味なきものにあらず美術と遊戲との間親しき關係あることと學者のしばしば論じたる所の如し空想もて造り出づるを指して云ふの名稱ならば詩人は皆戲作者なり若し然らずして作者の道樂に過ぎずと云ふ意味にて戲作と云はゞ此の語の悅ばるゝは其の文學界の健全ならぬを證するなり文學が俗に謂ふ個人の道樂と爲り了するの日は其の文學が墮落せる時なり其の

が根據を一種の神祕哲學に置かざるを得ざるべし

予輩は今こゝに上述せる三種の意見を詳細に比較するの餘地なし唯今日我國に於いて宗教を論ずる者の旗幟やゝ鮮明ならんとするを見てその意見のおのづから三種に區別さるべきことに注意し更に宗教をいふ者がますます其の立場を明にせんことを促すなり右三種の意見の中第三のものは上にも云へる如く方今或部類の思想家中一種の勢力を有し而して彼等に取りて一時居るに易き立場なるが如くに見ゆるを以て今後更に其の思想界に於けるの勢力を增し來たることもあらん然れどもその現今說かるゝ所のまゝにては予輩は其の果して宗教論者の永住の安居たるに適すべきかを疑ふ其の意見よりすれば宗教は畢竟個人の主観的選擇に一任してそが優劣を爭ふべからざるものとならずや其の現在の說き方を以ては吾人は未だ之に向つて滿足を表すべからざれど或は更に深く人性の實相と社會の實情とを探究し來たらば此の方面に於いて新光明の求むべきものあらんか或は宗教を見るに新眼孔を以てするを得るに至らんか

（明治廿九年九月發行、六合雜誌第一八九號）

亦吾人の性質上一種の要求によりて起こりたるもの也とは考ふれど飜つてその要求、その傾向の價値を問はるゝに至つては其の答ふる所殆ど第二種の意見を取れるものと相揀ばざる如きものなきにあらず

其の外第三種の意見に屬すと見るべきものの中にも尙種々あり宗敎は理性を以て根據となせるものにあらず威權によりて立てるものなりと考ふる論者あり然れど謂ふところ威權の根據及び其の是非を尋究すれば遂に全く哲學的基礎を離るべからずリチル派の論者の如きは哲學上合理不合理の論を爲さず敎會の意識と歷史的傳統とを以て宗敎を維持せむとす而も若しその敎會の意識の果して正確なるか否かを尋ね歷史的傳統の價値如何を考へ來たらば宗敎の事を全く個人の主觀上の取捨に任せざる限りは必ずや理性といはずとも或名稱の下に遍通的標準を呈出せざるべからざらん

宗敎を以て一種の神祕的感情又は悟了に存するものと考ふる人ありこれも亦宗敎の信仰を搔い撫でに迷信と見ず又そを科學的に論證すべきものにあらずと見る第三種の意見の一例なるべし此の神祕說も一たびこれを考ふるに至りてはそ

求むべきには非ず哲學的有神論といふ如きものの立つべき十分の根據を發見せず宗教は道理を以て取捨すべき境堺のものにあらず唯人情の一種の需用に應ずるものと見るべしと此の第三種の意見は由來前述の二種の意見の中間にある如きものにして從つて立場の明瞭ならぬもの頗る多し

大躰の點に於いては右いへる第三種の意見は一方には宗教を只管迷妄と見ることを肯せず又一方には道理上これを證明し得ずと云ふことを以て其の特色となせどこの大躰の區畫の中に入るべき意見の種類は數多ありカントの如く宗教を以て理論上證明さるべきものにあらずとし純粹の智識の範圍内にあるものにあらずとし唯道德心の要求に出づるもの(即ちそれなくんば道德は建てられず)として承認するを要すと考ふるありこれは一面に哲學的根據を排しながら道德といふことに於いて一種別樣の根據を宗教に與へこれを或意味にて合理的のもの即ち眞理と見るなれば第三種の意見の中にては最も第一種に近づけるものなり同じく第三種の意見と視るべきものの中にも人性に一種の宗教的空想を念ひ浮ぶるの傾向ありて音樂の趣味を具ふるものに音樂が一種の需用となる如く宗教も

神發達上經過すべき一狀態なれば必ずしも之を攻擊するには及ばずと思ふ人との區別ありこの二者は同じく宗教を以て迷信とすれどその宗教の價値を視ることに於いての意向を異にせり後者は宗教の信仰を以て尤も至極のものとすると共にまた之を以て全くの迷信とするものなり故に此の第二の意見を取る人と第一種の意見を懷く人とは宗教的信仰の道理上の根據に就いて全く其の意見を異にせり第二種の意見を取る人は人性そのものに宗教の起こるべき自然の原因を具へりとは考ふべきも其の自然の原因より起これる宗教に毫末だも眞理を含めりとは考へず第一種の意見を取る人々は世に所謂宗教的信仰に幾多の迷信の存することは拒否せざれどもその信仰を擧げて全く不合理のものとは思はず多少の哲學的根據を有せるものと見るなり

右二者の何れにも就かず云はゞ其の中間に位置を占むる者ありこれを第三種の意見とす此の第三種の立場は當今或部分の思想家には一種の引力を有して暫くこゝに其の隱家(かくれが)を得んとする者少なからず彼等はおもへらく宗教を全く不合理なるもの、全く迷妄なりと斷ずるは非なりさりとて哲學上又科學上これが證明を

此の三種の意見は特に當今我國の宗教論に於いてのみ見得べきものにはあらず宗教の論ぜらるゝところ斯くの如き意見の差別を生ぜんは自然の勢なれども今や我が思想界に於いてはこの三種の差別のやゝ明ならんとするを看るなりこゝに謂ふ三種の區別とは一は宗教といふものが道理上正當の根據を有せりと見るもの、此の説を取る學者の中にも數多の種別ありて舊神學家の所謂組織的神學を主張し得と考ふる人々のみならず多少の哲學的根據の宗教に具はれるありと思ふものは皆この種類に屬すべし

これに反して宗教は全く迷信によりて成れるもの、但し愚昧なる人民に迷信の存するは自然なれば社會を治むる上にこれを利用するをよしとすと考ふる論者あり今こゝにこれを第二種の意見とす此の種の意見を取る人々の中にもたゞ宗教を以て只管迷妄となし愚なる者の此の迷妄に陷るは免れ難きことなれども一刻も早く其の智識を開いて其の迷妄を去らしむべしと考へ專ら宗教に對して攻撃の位置に立つ人と宗教に説く所は道理上より考ふれば迷妄には相違なけれども人間の心理より見れば其の或時代に於いて宗教的信仰を懷くは必然の事にして精

宗教に對する三種の意見

現時の實業熱の流行は唯しばし人心の表面に起これる漣波の如きものにあらず社會の大潮流の然らしむる所なれば其の旺盛を致すや決して唯今日の如きに止まらざるべし尚一層我國の民心が貨殖の道に傾き拜金宗に感染しゆかんは火を観るよりも明なり此時に於いて如何に教育家は忠君愛國を以て一種の宗教となさんとするも又如何に宗教家は其の宗旨の合理的なることを辯明せんとするも一般の民心はますます拜金宗に歸依し唯物的なる今世紀よりも來世紀は更に一層我國に於いて唯物的なるべし此の時に方りて忘られんとする人心の聖所を照らすべき法燈を傳ふる者は誰ぞや

今日我國に於いて宗教の論未だ全く忘却し去られず其の是非の或部分の思想家間に爭はるゝは寧ろ賀すべき事なり其の論爭を觀れば宗教を論ずる者の旗幟漸く鮮明ならんとするが如く既に略ぼ三種の意見の大別すべきものあるを見るなり

て舊時の信仰を都べて其の儘に保存し難く思ふに至らしめたるには一派の論者が代表する近世思想の一面亦與つて力ありしと謂ふべし然るに唯彼等に向つて堅信力行凡俗を德化せよとのみ云ふは彼等を敎ふるの道にあらず啻に宗敎を迷信視する一派の論者のみが彼等新佛敎徒に對して同情を缺けるにあらず耶蘇敎家亦動もすれば唯佛者を見て墮落腐敗を極めたる者にあらずば空理を喋々して喜ぶの徒となし聊の同情を表することを知らず只管に彼等を無志無能なる者の如くに見做す(然らば耶蘇敎の青年牧師みづからは如何程世の德化に重きを爲せるかは姑く問はざるべし)余輩の見る所を以てすれば唯舶來の說敎集を燒直しきまり文句の信仰のすゝめを爲して得々たる者を除き近世の思潮を了解し深く自己の立場を考ふる事をする青年耶蘇敎家の位置は青年佛敎徒の位置と甚しく異ならざるを看る僧侶の腐敗は彼等の自白する所、然れども佛敎家と稱する者の中豈其の志の嘉す可き者なからんや其の道の共に語るに足る者なからんや其の志を知らずして相罵る予輩は其の可なる所以を知らざる也

(明治廿九年三月發行、六合雜誌第一八三號)

論者或は佛教家が高遠の哲理を談じて得々たるを見て之を以て打ちつけに宗教に相應しからぬことゝ爲す宗教家豈必ずしも哲理を談ずべからざる者ならんや一派の論者は恰も宗教家とし云へば其の談は卑近の理にのみ限るべきものと爲すが如し是れ決して宗教の玄旨を得たるの言にあらず一面卑近なると共に能く幽玄高遠の域に進まんとする是れ佛教の特色なり佛教家は此の特色を失はざらんを要す論者は殊に青年佛徒が哲理めきたる談理を喜びて獻身躬行實際の教化に力めざるを咎む予輩を以て是れを觀れば彼等實際の教化に力めんと志さゞるにあらず唯彼等の慧眼なる者に取りては決すべき大問題の其の心を勞するある也彼等は舊來の信仰その儘を以て立つことの難きを見たり而も宗教の(佛教の)弊履を棄つるが如くに棄つ可からざるを思ふ上下數多の人心を繫ぎ得たる大宗教に玄旨妙味の無かる可からざるを思ふ是に於いて彼等立脚の地を固うすべき大問題の彼等に迫れるあり舊は居るに難く新は未だ其の形を成すに至らず予輩は彼等新佛徒と稱する者の位地と其の志望と其の困難とに多くの同情の表すべきものあるを見る彼等をして舊來の僧侶の如くに全く世界の思潮に盲ならず從つ

のみ看る可からざる人心の一大方面人生の一大事實を形成するものならば社會民衆の進歩に應じ之を敎ふるの道として之に適せる宗敎を推薦することも深き理由あることとならん全然宗敎を排斥して迷妄と見做しながら德育上これが價値を必要と認めんとするは無力の論なり何となれば斯かる心を以て宗敎を取扱ひたる者が眞に能く宗敎の効能を社會に現はしたることなければ也其の如くに取扱ふことは宗敎を殺すものなればなり彼等は宗敎家に勸めて實踐躬行凡俗の師表となれと言ふ然れども彼等みづからは宗敎家に倣ふを以て迷へることとなし卑しむべきこととなす木工は身みづから商賈の事を行ふ能はざるべし然れども彼れは此れを以て此れは彼れを以て迷へる者とは見ざるべし彼等論者は宗敎家の信ずる所を以て根本的に迷へるものとなし身みづから之に倣ふを屑しとせずして而して之に堅信力行を勸む躬ら行ふことを耻として他に之を行はしめんとす豈之に優りたる背理の言あらんや彼等その如き非宗敎的の心を以て宗敎を用ゐんとするも宗敎は其の用を爲さゞるべし誠は能く人を動かす彼等の殺風景なる方便論が能く世敎に益する所ありと思へるは眞に笑ふべきの至りならずや

等が宗教の實驗なくして宗教を談じ宗教を知らずして宗教家に教へんとするの蒙を示すものにあらずや予輩は社會の德化を思ふが故に予輩と共に之を思ふと云ふ彼等論者が斯くの如き無意味なる無効なる忠告を爲して平然たるを歎ぜずんばあらず予輩は世間の風教を思ふが故に彼等論者の爲すよりも宗教の事を論ずるに一層鄭重ならんことを欲す

彼等論者或は曰はん愚民を德化するに迷信を用うる亦一の好方便なり愚なる宗教家を以て愚俗の道德を扶植する是れ人間社會の好配劑ならずやと人を教ふるにおのづから其の道あり固より萬人一樣なるを得ず發達の一時代にある者に其の他時代にある者の識見と感想とを求むべからず病に應じて藥を與へ機根に應じて法を說くの必要こゝにあり然れども宗教といふものを其の根本より一種の迷妄に過ぎざるものと看了すれば何處に其の價値を發見せんや若し宗教といふものを其の本旨に於いて決して全く妄想迷誤とのみ看るべきものにあらず唯花卉の生長し小兒の發育するが如く漸次に發達進化しゆき其の或は種々の變態異狀を呈することあるに拘らず其の根本性質に於いて深き意味ある(決して迷妄と

らずとなし之を排斥し之を罵倒せんとすると共に又他方には社會民衆の風儀道德を憂ふと稱して宗教家に向つて堅信力行これが敎化に盡瘁せよと云ふ彼等は勸告すらく汝宗敎家よ徒らに高遠幽玄微妙と誤想する哲學めきたる空理空想を談ずることを止め專ら卑近の信仰を說いて凡俗を化せよ堅信力行身を犧牲に供して社會の道德を扶植することに努めよ汝等の敎祖は實に其の如くなしたりと然れども何處より堅信力行身を犧牲に供するの覺悟と勇氣とを得べき若し宗敎家としての覺悟と勇氣とは其の宗敎的信仰に基くものならば彼等論者の勸告は畢竟魔力の信仰即ち一大迷信に依りて民衆の德化に盡力せよと云ふに同じ一宗旨を開始したる人々は皆一種の宗敎的信仰を懷き其の信仰に確立せるに因りて百難を排して身を衆生の敎化に委ねたる也彼の論者は宗敎家に向うて一方には堅信力行社會の道德を扶植せよと云ひ他方には汝等の堅く信ずる所は迷妄なり取るに足らずと告ぐ誰れか此の如き勸告に感動して奮起する者あらんや彼等論者の勸告は恰も樹根を鋸りながら他に勸めて枝頭に攀ぢよと云ふが如し彼等みづからは此の如き勸告を以て有効なるものと思へりや此の如きの勸告は曾ま以て彼

は己れの心の不具なるを知らずして傲然他を呼んで愚俗に傚ふ者といふ知らずして知れりと思ふ程醫し難き病はあらずソークラテースの喝破して倦まざりしは此の種の知らずして知れりと思へる僞學者なり宗教の皮相に見易く其の數多の迷信は說破し易きが如し故に彼等は宗教を見て知り易しとなす然れども彼等は遂に宗教的意識の堂に上り奥に入ることをせず奥に入りしことなく初より宗教は唯愚俗の信ずべきものとのみ思ひ做し自ら宗教的意識の一端をだに實驗することなくして喋々として宗教を談じ宗教家に教ふる所あらんと云ふ而して彼等は自ら稱して經驗主義を主張し實驗を重ずる論者と云ふ豈これよりも尙可笑しき自家撞着あらんや

心靈といへば直に妄想となし永生といへば直に空語となし宗教の本旨は要するに魔力を信じ而して其の信仰によりて安心するにありとなす彼等論者の見る所にては機械的必然の作用を爲す物質界の自然力の外に魔力の存在を信ずるばかり太しき迷信はあらず即ち彼等の論に從へば宗教の本旨又其の安心は一に迷信によりて繫がれたるもの也彼等は斯く一方には宗教心の骨髓を以て迷妄に外な

に迷妄也と斷ずる豈是れをしも能く經驗的事實を重んじ之を考ふるものと謂ふべけんやカントが他の事を論ずるはこれを聽くべく宗教の事を談ずるは一顧の價なしと打ちつけに言ふ如き是れ一種の先入と偏執とを以てこれに臨めるものに非ずして何ぞ眞に事實を重んずる者、眞に科學者の精神を抱持する者は今少しく其の先入の見と偏執の情とを去りて宗教的意識の何者なるかを如實に看取せんを要す若し世に宗教家と稱ふる者動もすれば偏見と先入とを以て明白なる學術の啓示に逆はんとすることあらば科學的研究を唱ふといふ者亦ばしば其の一眼を閉ぢて人生の眞相を觀んとす彼等は倘ベーコンの謂へるイドーラを懷いて之を棄てざる也トルストイ伯曾て曰へらく宗教の事を說くに言辭を以てするは不當なり宜しく淚を以てすべし若しこの淚なくば宗教の事を談ずる勿れと彼等若し此の淚なくばトルストイ伯の言に從うて宗教の事を談せざるを可とす此の淚なきの心には宗教の眞味眞相は解せられざればなり否な彼等は此のトルストイ伯の言をさへも解し能はざるべし彼等に宗教の事の只管迷信妄想と思はるゝは恰も詩心なき者に詩人の想像の只管可笑しき空想と思はるゝが如し而して彼等

を思ふの心を知らんには假ひ其の孝を實行するを要すと迄は云ふべからざるも己れ自ら同情を以て孝子の心と化し了すること莫かる可からず然るに世に宗教を語る者の宗教的經驗に對するや動もすれば猶聾者の音曲を聞くに侔しからんとす彼等は身みづから宗教家たるの實驗を有せしことなきのみならず詩人的同情を以てさへも宗教的心情に親みしことなきものの如し彼等が宗教を解するの如何は其の宗教心に疎きを示して餘りあり人の美術的趣味に乏しくして美術を品評し美術家を月旦するばかり相應しからぬはあらず而も世の一派の學者は宗教の趣味なくして宗教を談じ宗教家を教へんとす

殊に奇なるは世に實驗を主義とし經驗に據らざるの談理を悉皆空想妄語と呼ぶものにして身みづから宗教的實驗なく而も傲然宗教を談じ之れを以て愚俗の迷信に外ならぬが如くに獨斷せんとす予輩は世の所謂經驗論者に優りて經驗を重んぜんとする者なり宗教には或は甚しく卑近なる分際のものあらん厭ふべき迷信忌むべき亂俗の習はしもあらん然れどもまた世に智慮あり義氣ある人々にして宗教心に厚き者あるは如何ぞや彼等の實驗實證する所を取つて以て打ちつけ

に於いても亦其の哲學思想は實際の行爲に對して無關係なりとせられざりき哲學豈に哲學者の生活に全く影響を及ぼし得ざるものならんや哲學を以て實際の行爲と修行とに益する所なきものの如くに視るは特に歐洲近世の思想に於いて發見する所、而してこれは予輩の上に云へる學問の分離的傾向に偏したるの一結果にあらずや

(明治廿九年二月發行、六合雜誌第一八二號)

宗教家に對する無効の忠告

現今世に學者と稱する輩の中宗教家に對して種々なる忠告を爲す者あり而も彼等みづからは宗教的實驗のために苦心焦慮せしことあらず正當に他を了解批判せんには之が局外に立ちて之を傍觀するのみならず一種の濃厚なる同情を以て之に接せざる可からず小兒に同情せずして如何で小兒の心を解せんや惡人を知ると云ふ亦一種の同情を以て其の心底に探り入るにあらずんば其の知ると云ふや唯その皮相を看るに止まる眞實に事物を知ると云ふの極致に至らんにはたゞ抽象的概念を用うるその外に詩人的同情を必須とする所以こゝにあり孝子が親

れども哲學と云ふものは必ずその如きものならざる可からず吾人の安心に關る所ある可からずと言はゞ是れは其狹義を以て其廣義を律せんとするの僻事なり哲學の講ずる所は理論なりと云はんは可、其の理論は吾人の安心に關する所なく又些も吾人に安心を與ふるの効力なしと云はんは不可なり哲學は必ずしも安心を與ふるものにあらずと云ふ予輩これに同意せん然れども必ずしも與へずと言ふは決して與へずと云ふことの根據とはならざる也宗教も亦必ずしも安心を與ふるものにあらず宗教も之を疑惑の中に置くものには安心を與ふる所あらず哲學も之に確立するものに取りては安心の力となる可からざる理由なし假ひ哲學に論ずる所吾人に安心を與ふるの十分なる根據とならずとするも其の論が深く人生の歸趣に及ぶとある以上は之を以て吾人の安心に無關係なるものとは云ふ可からず假ひ哲學は吾人に安心を與へ得ずとするも其の論ずる所の吾人の安心立命の事に及び得るは勿論なり啻に論題に於いて然るのみにはあらず希臘の哲學者等は哲學を以て實際上また吾人に安心を與ふるに無力なるものとは視ざりき印度哲學が實際上安心の道と親密の關係を有したることは更にも言はず支那

にはこれを必須とすとも謂ひつべし然れども唯だ浩澣の書をのみ著述して其の畢生の考慮の要を疊み之を一書に纏むることをせざるは未だ後生を敎ふるに親切なるものと謂ふ可からず其の智識論を窺はんには一大冊の之を詳論せるあり其の美學思想を觀んには別に一大冊の繙くべきあり又其の道德論又は宗敎論を知らんにも同じく一大冊の繙讀すべきあるは固より敢て厭ふべき事にはあらざれども其の世界觀人生觀の全躰を開展せるものを缺くは未だ哲學者の職務を全うしたるものにあらず哲學を知るの道を簡便ならしめんと云ふは餘りに通俗を喜ぶものの如しと雖も實に之を簡便ならしむるは亦哲學者の一技倆ならずや深大なる事柄を說くに必ずしも多言を要せずスピノーザのエティカは大部の書にあらず而も之を熟讀玩味すれば彼れが畢生の思索の結果と其の安心立命せしところとは看取するに難からざる也

或は哲學を以て唯だ或種類の理論を講ずるに止まりて吾人の安心立命に關係する所なきものとなす是れ亦研究の分離的傾向の一結果なるべし若し我が講ずる哲學は斯くの如きものなりと言はゞ何ぞ必ずしも之を非とするの要あらんや然

人の智識は繁なるに從ひて又簡ならんを要する也徒らに專門的分離と煩瑣とを極むるは是れ決して吾人の智識の圓滿なる進步にあらざる也

哲學の如き元來諸般の智識を統一し千差萬別の事相に貫一の原理あることを闡明せんとするものなるに是れまた近時の科學的研究に倣うて動もすれば殊別の攷究に分かれんとす故に人或は哲學を以て專門とすと云ふに滿足せずして其の中の何れの科に專らならんとするかを開かんと欲す心理學はあり論理學はあり美學はあり倫理學はあれど哲學は無きものゝ如くに思惟す哲學に於ける局部的研究の進むは決して拒むべきことにあらず憂ふべきことにあらざれど天地と人生とを大觀することを放棄するは是れ亦一の流弊たるを免れず高遠を厭ふと稱して心弱き者のしばしば止まりて安せんとする局部の穿鑿は未だ以て吾人の智識的要求を滿足せしむるに足らず哲學を講ずるものは啻に吾人に世界を大觀するの道を敎ふるのみならず其の觀ずる所を簡明に解說するの道を發見せざる可からず然るに徒らに大部の書を著すことに其の一生を消費するは或種類の哲學者間に行はるゝ流弊なり大部の書を作る必ずしも不可ならず否な攷究の精密ならん

じ偏狹なる發達を爲す是れ事物の一部に局するの弊害ならずや吾人は各自其の特色を開發せざる可からざれど又之と共に廣き同情と興味とを養ふを要す各人に殊なるものの進むと通なるものの進むと相離れずして始めて眞正の發達をなすと謂ひつべしますます殊に進まんには其の根據としていよいよ通に廣からざる可からず然らば如何せば以て吾人の智識と興味とを廣うし得べき如何にせば一事に專らになりながら尙ほ不具となるの弊を免れ得べき但だ專門の煩しきを益すと共に其の要領を會得するの道を簡にするの一方便あるのみ事物は其の多樣の方面を探ぐれば極めて多樣なるべきも其の全躰を貫通するの原理又極意にはおのづから簡なる所あり事理の粹は必ずしも繁なるものにあらずそれが繁ならずして却つて大觀し易きものなることを明にする是れ亦智識進步の一方面ならずや專門的硏究の結果の粹を會得するの途を簡易にする是れ敎育上吾人の必要とする所なり一專門家が始めて事物の理を發見する時には其の發見の方法の繁なる、到底專門を異にせる者の遂行し得ざる所あらんも究極せる最要の事理に至りては(これを解說するの道を工夫すれば)必ずしも知了し難きものにあらず吾

予輩は專門的研究のいよいよ專門的になりゆくを以て決して憂ふべき事とせず反つて望ましき事態と考ふれども唯だ偏に專門に分離するを以て學問の完全なる進步とは思ふ能はず分化が進化の一方面ならば統一に進むことが亦その缺く可からざる他方面なり事物の局部々々の精細なる穿鑿は固より飽くまでも奬勵すべきことなれど唯だ局部的研究のみを以ては其の事物の實相を看取し得べからず局部的觀察は如何に詳細なるも尙ほ偏見たるを免れず否な眞實にその詳細ならんことを計れば他局部との關係を明にし全躰の綜合的觀察を爲さゞる可からず局部の詮索を極めんとすれば勢ひ全部の總見に移らざる可からず別見と總見とは一を全うし而して後に他に及び得べきものにあらず互に手を取りて始めて進み得べきもの也故に學問の進步には其の一方に於いてますます專門的となると共に又他方に於いては不專門的となるを要し局部を細見すると共に全躰を大觀するを要する也

啻に學理上局部の穿鑿と全躰の統一とを相伴はしむべき必要あるのみならず、各個人の發達上若し後者をして前者に伴隨せしめずば遂に偏僻狹隘に陷るを免れ

らざるを得ざるの有樣なり數學と云ひ星學と云ひ生物學と云ひ皆一專門科とするには餘りに尨大にして或は太陽斑點の專門學者あれば或は寄生蟲の專門科あるに至れり近來新面目を開き初めたる心理學も既に其の全部を以て一專門科となすこと難く現に生理的心理學の如き特にこれに專なる學者にあらざるよりは其の現在の硏究の結果をだも知悉し得べからざらんとす經濟の學の如き亦數種の部門に分かれんとするは其の學方今の形勢を見れば明なり此の如く專門の科が更に專門に分かれんとするは學問進步の自然の結果なるに相違なくますます專門的になりゆくは硏究の綿密精細になりゆけるの證と視るべきならん進化論者の語を假り用うれば學問も亦分、化、しゆくものなりと謂ひつべし

我國に於いても近來ますます專門的硏究を貴重するの氣風を生じ工藝技術より幽玄高遠なる學理の攷究に至るまで專門家の言にあらずば世の信用を得難からんとす今日發兌さるゝ雜誌の數年以前に比して專門的方向に進み來たれる又專門の著書の漸く歡ばれんとする如き皆以て今日の學問の傾向を窺ふに足る是れ我が學界の進步を示すものとして賀すべき事ならん

の要求を棄つるものにあらずして却つて之を繼紹するものなり若し形而上學の興味を有せざる者には形而上學は無用なりと云はゞそは高等なる數學又美術の興味を有せざるものには數學も美術も無用なりと云ふに等し而して高等なる美術の興味を會し得る者の少なき如く形而上學の興味を解し得る者の少なきことは毫も其の學の尊貴を害ふに足らざる也社會の利益てふものを甚しく狹く思はざる限りは曷ぞ高尙なる哲學の研究を社會に無益なるものと云ふべき理由あらんや

（明治廿九年一月發行、六合雜誌第一八一號）

學問の分離と其の統一

（附　哲學の研究と安心の道）

科學的硏究の盛んなるに連れて專門は更に專門を生み昔は一學科と見られしもの今は數部門に分離せるが故に其の一に專らならんとすれば勢ひ他に疎からざるを得ず、今は物理學は既に一專門科にあらずと謂ふも不可なし專門の研究は寧ろ其の範圍を或は光學或は熱學或は電氣學、又電氣學の中にても其の一部門に限

利なれば也哲學者が直接經驗の範圍にあらざるものを想起して之を說くも吾人の經驗上の事柄を說明するに必要なりと思へば也經驗を超越せる觀念の哲學にのみ形而上學にのみ存在すと思へるは太しき謬見なり科學にも亦幾多のかゝる觀念あり科學者が根本觀念として用うるものに少なからざる困難の附着せることはブラッドレー氏の近著アッピアランス、エンド、リアリティーを一讀しても看るに餘りあるべし尙ほ深く此等の觀念を明にして智識の統一を更に大に更に全うせんとするは是れ哲學者の以て其の問題とする所にあらずや又之を以て形而上學の問題なりと云ふも何の非なることかあらん予輩は其の如き攷究を無益なりと云ひ又打ちつけに空想なりと云ふべき理由を發見せざる也幾多の困難はありながら尙ほ個々の連續を缺ける科學の觀念に止まりて敢て其の以上の智識的統一を計らんとは我は力めずと云ふ者あらば予輩は强ひて其の如き者に其の如き統一を計れよとは言はざる也然れども他が其の如き統一を計らんと欲するを打ちつけに空想なりと云ふべき理由は存せざるなり科學的研究は何を求むるぞ或根本的觀念によりて或智識の範圍を統一せんとするにあらずや哲學は此の科學

も實驗せざることに及び得と見ずんば學術の成立せざることは明なり若し一歩も實驗以外に出づること能はずんばロック又ヒュームの云ふ觀念と觀念との關係に就いての遍通的立言さへも爲し得ざるべしロックは一觀念と一觀念との間に不變不易の關係あることを知ると云へり三角形の角度の加と云ふ觀念は二直角と云ふ觀念と相等しと云ふの關係を有し而して其の關係は決して易ることなしと思へり然れども若し嚴密に實驗の範圍に止まらば一觀念と一觀念とを相比べて其の間に一の關係ありと思ひたる時にのみ其の關係ありと云ふべく其の關係ありと我れが思はざる時にも其の兩觀念の間に常に其の關係の具はれりとは云ふべからざる也吾人が其の兩觀念を等しと見るの經驗は嚴密には之を等しと見たる時にのみ限れり故に嚴密に謂ふ實驗の範圍に於いては三角形の角度の加を二直角に等しと見たる時にのみ其の加は二直角に等しと云ふべき也ロックは決して實驗の範圍に留まりたる者にあらざる也

物理學者のアトムと云ふ如きものは是れ決して吾人の實驗するものにあらず而も科學者が其の觀念を用うるは何故ぞ他なし是れ經驗上の事柄を說明するに便

如く我が經驗を我が觀念の範圍に限らば右陳ぶる如き結論に到ることを覺悟すべきは明なり人或は曰はん吾人は吾が觀念と共に其の觀念を起さしむる外物を直接に經驗すと若し玄か云ふべくば曷ぞ我が觀念と共に其の觀念の起因なる(即ち外物の刺激を受けて觀念を起こす)心躰を直接に經驗すと云ふべからざらん空間上のものは觀念にあらずと思へるは未だ幼稚の見なるを免れず若し嚴密に實驗の範圍に止まると云はゞ吾人の實際遭遇したることの外に吾人の智識は出づべからず吾人の實際見聞せざる範圍に就いて或法則の行はるゝことを豫期するが如きは實驗を超越せるもの也嚴密に實驗の範圍に止まると云はゞ吾人の智識は個々の事實の外に出づべからず然るに若し法則てふものを語らんと欲せば個々の事實の外に出でざる可からず而して若し法則てふものを語らずんば如何にして學術を立つるを得ん實際科學に說く所は嚴密にいふ實驗の範圍を超越せること多し故に科學を成り立たしめんと欲せば吾人の智識を實驗の範圍に限るべからず但だ實驗に根據するを要すとは云ふべし實驗を根據として吾人の智識は何の處にまで到達すべきか是れこゝに決すべき問題にあらずと雖

人各自の觀念の外は吾人の直接の(即ち嚴密に云ふ)經驗の外にあるものなりとせば如何なる結論に陷るべきかを考へざる可からず吾人の觀念ならぬ心躰の存在を許すことが嚴密なる經驗を超越すると等しく吾人の觀念ならぬ物躰の存在を許すことも亦嚴密なる經驗の範圍を超越せるにあらずや

吾人は此の卓子に觸れ彼の畵幅を見ると云ふ而して之を經驗すと云ふしかも嚴密に經驗の內にあるものを何ぞと尋ねよ色と云ひ形と云ひ觸覺と云ひ重さと云ひ皆詮ずれば我が觀念にあらずや我が觀念ならぬ物躰の我が觀念以外に存在することは何によりて知るか我が感ずる感覺あるが故に其の原因と見るべき物躰なかる可からずと云はんか是れ既に因果律を基としたる一種の論理に從うて我が直接の經驗の外に突出せるものにあらずや是れデカルトが其の實驗上の出立點より論理に從うて其の歩を進めんとしたると其の論法に於いて何の異なる所ぞ觀念ならぬ心躰を語ることが實驗外に出でたるものならば我が觀念ならぬ物躰(外物)を語ることも少くもそれと等しき程に實驗外に出でたるものなり予輩はこゝに經驗てふものゝ如何にして成り立つかを論せず然れども若し論者の言ふ

とを見而して其の意識に(論理的に)含まれてあるものを闡明せむと試みたり若し吾人の直接に實驗して疑を容る可からざることあらばそは我れの思ふと云ふことなるべし經驗論者も亦之を外にしては出立の點を失はんデカルトの論を運ばす途すがら幾多の缺陷はありと雖も其の實驗上確實と見たる者より出立して論理に從うて歩を進むる所に於いて焉ぞ經驗論者のする所と甚しき差異あらんや徒だデカルト等の爲す所を以て唯理論的方法とし之を實驗哲學の方法と區別することをのみ知りて未だ實驗論者の實際爲す所が其の根本的方法に於いてデカルト等の爲す所と酷だしく相異ならざるを見ざるは皮相の見たるを免れず

或は曰はんデカルトは我れ思ふと云ふ事を以て實驗上疑ふ可からざる事となしたるのみならず我れの思ふに即して我れありと云ふことをも實驗すと考へたり而も是れ既に實驗の範圍外に出でたる也直接に實驗する所は思ひのありと云ふことのみ思ふ者のありと云ふ事は直接の經驗を超越せることなりと爰にはデカルトの「我れあり」と云へることの既に實驗以外に突出せるものなるか否か又思ふ者といふその者は如何に解すべきかを論せざるべし但だ若し論者の云ふ如く吾

く智識の成立を看取したるものに非ずと考へたり此の如きことは歐洲近世の哲學に一わたり通せるものの熟知せる所なれば予輩の殊更にこゝに繰り返して言ふを要せざる所なれども尙ほ精しく此等の事實を考へずしてヒユーム以外に出づるをば只管に空想なるかの如くに言ひ做して大言壯語を是れ悦ぶ徒のあるを奈何にせんや假ひカントの智識論はヒユームに對する十分なる答辯とは云ふべからずとするも是れは決してヒユームを以て滿足すべきの證據とはならざる也心を智識論に傾けたる者はヒユームの說に幾多の缺陷あることを見るは敢て難しとせざるべし然るに之を思はずして一もヒユーム二もヒユーム、ヒユームにあらずば夜の明けぬ如くに言ふは之を感情の激昂に任せたる誇張の言とは見るべく實驗を基として精細に智識の成立を考ふる者の言とは見る可らざる也
人は或はデカルトを以て形而上學者の一人とし而して其の形而上學者なるの故を以て空想論者の一人となさん然れどもデカルト決して實驗を度外視したるに非ず彼れは先づ自ら疑ひ得るほどを疑ひ而して實驗上竟に疑ひ得ずと見たる所を以て出立の點となしたるなり彼れは吾人の意識そのものの疑ふ可からざるこ

が果してヒュームに答へ得たるか否かを決定せざるべし唯だヒュームの所説に満足せずして智識論上自家の見地を開きたるカントを目して空論者の如くに云ふは毫も理由なきこと也ヒュームは絶對的懷疑論者に非ず彼れは幾何學上の論證を以て遍通的價値あるものと見たり而して彼れは之を以て觀念と觀念との關係を分析し出だすものと考へたり果してヒュームの言の如くなるかカントは幾何學上の論證を以て分析にあらず綜合なりと見たり而してヒュームと共に其の論證の遍通的價値を疑はざりき是に於いてか遍通的價値を有する綜合的立言の如何にして成立し得るかを問はざる可からず是れカントが智識論の大問題なりヒュームに從へば因果の法則も客觀界に於いて遍通的價値を有するものと云ふべからず究竟すれば吾人の主觀的習慣に外ならず啻に客觀界に於いて遍通的價値を有せざるのみならず主觀界に於いても之を有せず唯だ今迄かゝる習慣を有したりと云ひ得るのみ吾人の確實に知り得ることは或觀念と或觀念とが時を同じうして又は前後して吾人の思ひ浮ぶる所となれりと云ふことの外に出でず吾人の智識は果してその如きものなるかカントは斯かるヒュームの説を見て未だ能

何たる、智識の何たるを論せずしては能く決定し得べき問題にあらず智識は全躰出來得べきものなるかと問ふは意味なき不都合の疑問也とするも眞實の智識の何なるか其の如何にして出來べきかを問ふは決して不都合の事にあらず却つて哲學上必須の事なりと云ふべし所謂經驗論者にして智識論を避けて進まんと試みる者あれども是れ決して爲し得べき事にあらず又是れ未だ智識論の何なるかを明にせざるより起これる誤謬なり經驗論者たると智識論者たるとは素より相容れざることにあらず而も智識論の要を主張しながらカントを罵詈して取るに足らざる者の如くに云ふ論者あり何たる思想の混雜を表出するものなるぞカントの説ける所は未だ以て智識論の問題を決定するに足らずとするも些も其の功績を認めず其の説を顧ることなくして智識の論を爲さんとするは近世の哲學思想に暗きを表白するものにあらずやロックの智識論に留まることを得ずしてヒュームの出でたるは英國の哲學史を知れる者の皆認むる所、而して之を認むる者は更にヒュームの智識論に留まり得べきかと云ふ問題に接せざるべからずカントは智識の成立を攷究してヒュームに留まるを得ずと考へたり予輩は茲にカント

るに足ると思へるが如きは是れ未だ當今の哲學的問題を看取せざるの過ちなり眞實問題は唯だ經驗的と叫ぶの前にあらずして寧ろ叫びたるの後にあり言語を以て他をおどかすの弊は獨り經驗論者の所謂形而上學者にのみありと思へるは是れ所謂經驗論者の己惚に外ならず絕對又は本躰と云ふ語が愚者をおどかすの語として用ゐらるゝことあらば實驗と云ふ語も亦しばしば同じ樣に用ゐらるる經驗と云ふ語を早く口にしたる者が哲學の道場に勝利を得る如くに思へるは餘りに小供らしき思想なれども自ら經驗論者と名乘れる輩の口調が往々その如き小供らしき思想を發表するは誠に嘆ずべきことならずや予輩は決して經驗哲學を輕ずる者にあらず否寧ろ一種の經驗論を主張する者にして喜んで經驗論者と握手すべしと雖も唯だ事の一面を見て之をのみ實驗の範圍と思へる自稱實驗論者の妄に倣ふことをせざる也徒らに經驗的實驗的とのみ叫ばずして經驗の如何にして出來得るか其の堺限の何の處にあるかを攷究すべき也

經驗の成立と其の堺限とを攷究するは是れ即ち智識論上の問題なり吾人の智識は經驗の範圍を出でずと云ふ是れ既に智識論上一種の見を構へたるにて經驗の

範圍を出でずと獨斷せるの誤謬にあらずや限るゝは是れ却つて實驗を蔑視するものに非ざるなきか是れ却つて一種の空想に非ざるなきか予輩はヘルヱシウス等の唱へたる如き感覺論を以て一種の空想と云ふも決して全く無理なることにはあらずと考ふ空想哲學てふ評語を作るは易し淺薄哲學てふ評語を作るの易きと何の簡ぶ所かあらん

論者或は曰はんヘルヱシウス等の感覺論は我が所謂實驗哲學にあらずと予輩は必ずしも其の如き感覺論を以て唯一の實驗哲學なりとは言はず但だ實驗的又は經驗的と云ふのみにては哲學的問題を掲ぐるに止まりて未だ其の眞實の解釋を示したるものに非ざることを言はんと欲せる也形而上學者何ぞ必ずしも濫りに經驗を無用視せんや眞實の哲學は實驗を以て出立せざる可からずと云ふ予輩はこれに同意することに躊躇せず又哲學は啻に經驗を以て其の出立點又は基礎となさゞる可からざるのみならず經驗の範圍に止まるを要すと云ふも予輩は必ずしも之を否まざるべし但だ所謂經驗の何なるかを明にするを要する也經驗又は實驗てふ語は恰も一種の呪文の如く之を唱へさへすれば以て反對論者を調伏す

經驗と哲學的攷究

（實驗を超越するは非なるか）

哲學は須らく實驗的なるべし空想的なる可らずといふ誰れか之を非なりとせん何人か哲學は徒らに空想的なるを要すと言はんや我れと見を異にする者を評して空論家といふは一種便利なる嘲罵とは見るべきも未だ以て論評の要を得たるものとはなす可からず世に自ら實驗論者と稱する者動もすれば他の論を排して空想と云ふ彼等は談少しく高遠の域に進めば是れ空想なり我れの拘る所にあらずと云ふ論少しく幽玄の境に入れば忽ち叫んで空想と云ひて耳を傾くることを肯ぜず唯だ評し去つて空想と云ふは唯だ所謂實驗論者の所説を評し去つて淺薄と云ふと何の擇ぶ所ぞ何故に感覺以上のものを語るは空想に屬すれど感覺のみを以て智識の要素とするは空想に非ざるプラトーンに近よるほど空想を增しプロタゴラスに近よるほど空想を減ずと思へるが如き是れ偏に狹隘なるを以て正確なりと誤認せる迷妄にあらずや是れ智識を五官の感覺に限りさへすれば實驗の

謂ひなり社會的現象の中にても流行は最も反響呼應を以て其の生命動力となすものなり一人之に應ずれば頓に其の勢力を増し一人之に應ずることを止むれば頓に其の勢力を減ず流行の忽ちにして來たり忽にして去るはこの故なり

流行といふ者若し今論ずるが如き者ならば予輩は世に所謂文學界又は宗敎界の潮流若しくは傾向なる者の多くは一種の流行に過ぎざるなきかを疑ふ一時自由討究批評的研究の唱へらるゝかと思へば深くも討究せず深くも批評せず深くも破壞せざるに早や破壞は畢れり今よりは實驗的方面に進まざる可からずと云ひて表面的批評に滿足せんとす此の如きは是れ眞に流行といふものの特徴にあらずや鋭進するも一種の流行老成なるも一種の流行、流行の力何ぞ夫れしかく大なるぞ文學界の潮流といふもの亦是れ多くは一歲を出でずして變化す衣服はき物の流行よりも短し焉ぞ厭世に赴かば大厭世を以て貫かざる破壞を事とせば大破壞に進まざる輕進は流行の中に求むべく猛進は求むべからざる也宗敎並に文學の變遷は一種の流行的變遷に過ぎざるか（明治廿九年一月發行、六合雜誌第一八一號）

ずるもの是れ一代の流行を創始し得るもの也
幸に時好の變動する趣に投ずれば一時の流行を起こし得るは勿論なれども又(上に云へる如く)流行は盲信によりて搬めらるゝこと多し流行に現るゝ嗜好の多くは社會の或部分(即ち模範と見做さるゝ階級)の爲すことを善しと盲信するによりて造り出ださるゝ吾人は何人の爲す事をも等しく眞似するにあらず一種の信仰を以て迎ふる所吾が最も力めて眞似するところ也而して其の模倣は多くは特別の理由あるにあらず唯だ社會に模範と見做さるゝ階級の人々の爲すことなるが故にこれを模する也この故に流行には模倣心に一種の盲信の加はり來たるを要す而してその盲信と模倣との目的とする所は專ら見えにあり他人に見らるれば足れりこの故に流行は變り易き表面的の事柄にあるを常とす此等の點に於いて流行と一代の人心を其の根底より傾倒する大風潮とを區別せざるべからず流行はその如き社會人心の自然の大潮流の表面に出沒する漣波に外ならず
斯くの如く流行は雷同を以て其の大部分となすが故に唯だ流行すと呼稱することが眞實に流行を呼び起こすこと少なからず虛却つて實となるとは眞に流行の

然かも唯だ他の爲すことを眞似(まね)るの性は未だ流行の全き起因となるに足らず舊きに飽きて新しきを好むの心が之に加はり來たるを要す人の漸く舊きに飽かんとする時に新奇なるものの案出せらるゝあるが故に一時靡然として諸人のこれに倣はんとす斯く流行は舊きに飽くの心を以つて其の一動力となすなれば變じ易きが常なりこの點に於いて流行は世の風習又は習俗と名づくるものと異なる風習は保守性のもの流行は變動性のものなり

啻に新奇を悅ぶの心のみを以ては流行の起こる所以を說明すべからず新しく案じ出だされたるものは悉く流行するにあらず新案の多數は寧ろ流行の幸運を見ずして忘れ去らるる新案のうち何れが流行の幸運を見るに至るかは一には時好變動の趣に投合するか否かに懸れど又一には(寧ろ其の多部分は)盲信さるゝか否かに懸れり人心の舊きに飽かんとする時にも其の嗜好は如何樣にも等しく動き易きにあらず其の最も走り易きの方角と然らざるとあり是れ同じく舊きに飽けるも其の飽きやうの同じからねば也この故に同じく新奇なるものも倖しく時好に投ずるを得ざる也舊きに飽けるの飽き工合を洞察して其の變動の趣と勢とに乘

流行論

社會に一種の現象あり風の如く何處ともなく吹き來たりて何處ともなく吹き去る其の來たるや草の靡くが如くなべての人は之に動かされ其の去るや復これに倣はんとする者なし而もその何のために來たりて何のために去れるかを尋ね難し修飾服裝の些々たることより文學技藝の重きに至るまで社會萬般の事概ね此の現象に襲はれざるはなし之を流行と名づく吾人は禽獸の社會に特殊の習慣のあるを見れど流行と云ふものあるを見ず人類の社會にして始めてこのもののあるを見る

流行の一起因は吾人の模倣の性にあるや明なり下等動物の中模倣の能を有するもあれど最も好んで又最も巧みに他を眞似ることをするは人類なり吾人の模倣の性が如何に親密に吾が智識と技藝との發達に關する所あるよ古の學者は人を眞似する動物とも名づけたり猿眞似といへど人は猿よりも眞似することを好まず流行も亦この模倣の性に起こる也

を卑うするの理由とはならざる也斯かる狀態にあるもの豈獨り心理學のみならんや不整頓なる事より云へば社會學の如きは其の最も甚しきもの也論理學は如何美學は如何世人の通常一科の學問として疑はざる倫理學の如きも心理學と殆ど同一の狀態に在るにあらずやベルリンのジンメル氏の如きは今日物理學と云ふ漠然たる名稱の下に硏究の結果を述ぶる者なき如くに將來倫理學と云ふ名稱を以て一書を著はすものなきに至らん倫理學は一部は歷史的一部は心理的硏究等の數方面に分かれ了らざる可からずとさへ論じたり此等の學問の不整頓なるは吾人が智識の今日の狀態に免れざることなり是れを以て分毫も此等學問の硏究を輕んずるの理由とは爲すべからざるなり其の事柄が人生に、吾人の心的生活に密なる關係を有するものなる以上はそれら學問の不整頓なることは却て吾人をして其硏究に勵ましむるの動機となるべき也

（明治廿八年十二月發行、六合雜誌第一八〇號）

間にも大差あり又意識の統一作用を説くと共に靈魂の存在を説く心理學者あり又說かざる心理學者あり意識の統一作用を說くには靈魂てふ一實躰を許容せざる可からざるか否か是れカント以來の一問題なり

新心理學者の中には或は靈魂を說き或は之を說かず或は意識の統一作用に重きを置き或は重きを置かず此の如く新心理學は未だ整然たる一定の組織を爲さゞるものなれど若しこれが故に些にても其の研究を輕んずるものあらばその道理なきことゝ也新心理學者自らしばしば心理學の未だ甚だ不整頓なる狀態にあることを云ふ是れを云ふには敢て(預言的の眼光を以て天下を達觀する)にも及ばざる也上に云へるジェームス教授の如きも心理學は今尙ほ唯だ斷片的智識を寄せ集めたるの狀態にありと云へり予輩はジェームス教授の言ひ放てる言を以て當今の心理學に適切なるものと考ふ心理學は未だ眞に整頓せる一組織を爲さず寧ろ局部詮索の時代に在りと云ふも可ならん其の全躰の統合は今試みられてあれども未だ決して成就されたるにあらざる也

心理學は今かゝる狀態にあり然れどもかゝる狀態にあることが決してその價値

觀念を旣に生起したるものと見たる上は彼れが心理的說明にはその謂ふ靈魂は殆どその用を爲さゞる也然れども是れ決して靈魂の存在を否めるにあらず但だ靈魂てふ舞臺に現るゝ觀念の作動を觀念そのものの離合として說けるのみ觀念の結合を說くには靈魂の存在を用ゐざりきと(消極的には)云ふべきも積極的に之を否めりとは云ふべからず觀念の結合を說く時には彼れは靈魂の存在を否めるにもあらず又之を主張せるにもあらず觀念の起原を說くところには彼れは之を主張せり假令ひ彼れの純理哲學に入らずして經驗的範圍に止まるも彼れは畢竟靈魂の存在を否めりと云ふは其の心理說の正當の解釋にあらざる也此の頃我が國の某々の學校に用ゐらるゝリンドチルの如きは要するにヘルバルトの立脚地に立てり靈魂論に就いてヘルバルトを奉ずればリンドチルに從ふ能はずとは最も可笑しき意見なり現今の心理學者中靈魂の存在を說く者にありてもその之を說く意味は決して同一ならずハーヴードのジェームス敎授が說明上臆說として靈魂と云ふものを說いて可なりと云ふとヘフディングがスピノーザ風の一元論を唱ふるとは其間に大差あり又これとリンドチルの如きヘルバルト風の說との

於いて學者の注意を惹き來たりたる心理研究の新方面即ち所謂生理的心理學病狀的心理學嬰兒心理學民族心理學比較心理學等を指させる者とも解せらるべし然らば新心理學は通常所謂一般心理學（ゼネラル、サイコロジー）にあらずして寧ろ特に此のころ開けたる又は開かれんとする心理研究の或部門を指せるものに外ならざるべし又は最近の心理學者の主張する心理說を新心理學と稱すと云はんかさすれば新心理學は唯だ近きころの心理學者の種々の心理說の總名にして決して一定せる組織のあるにあらず何となれば其の學說の趣には甚しく相異なる所あれば也畢竟するに新心理學は唯だ近來の生理的研究試驗的考察を利用し偏に自省にのみよらずして廣く客觀的事實に攷究の材料を求むる心理的研究に名づけたる廣義の名稱と見るべきならん

そも新心理學は斯くの如きものなれば靈魂てふ一實躰の存在に關しても其の所說一ならず吾人の實驗する心的事實の說明に靈魂の存在を說くを要せずと思ふものは之を說かず之を要すと思ふ者は之を說くヘルバルトはその謂ふ觀念の起こる所以を說明する時には靈魂てふ一實躰(即ちその謂ふレアール)を說けり但し

は其の日なるべし其の日までは科學的方法の傍に天才の方法を置かざるべからず而して其の方法は天才自らの發見する所なり而して其の方法の哲學に用ゐらるゝものを名づけて思辨的(Speculative)と云ふ故に思辨的方法は個々の事實をのみ根據とする歸納的方法とは異なる也

（明治廿八年十二月發行六合雜誌第一八〇號）

新心理學とは何ぞや

新心理學と云ふ語やうやく我が國の學術界にも行はれんとするが如し名のみを聞けば或は心理說上一定の組織を有する學說の謂ひなるかの如くに思はれんも其の實何等の新に組織せられたる一定の心理說あるにあらず唯だ近き頃の心理的研究の種々の傾向に漠然名づけたる名稱に過ぎず或はこれを解して純理哲學的根據に据ゑたる若しは其の根據を論究する彼の英語に所謂ラショナル、サイコロヂーに對して云へるものとすべし玄か解すれば經驗的心理學と名づくるものと略ぼ同一となるべしさすればヒューム等の心理說をも新心理學と名づくるを得べし蓋しそを經驗的と云ひ得れば也又は新心理學は主として今世紀の後半に

的傑作と併しく天才を待つて始めて爲し得らるゝ事にはあらざるか今日の吾人の智識にては更に恰好なる言辭の無きが故に之を天才の作爲と名づけざるを得ざるにあらざるか此の點に於いて道德と美術とは同列に置かるべきものにはあらざるか

斯くの如く若し科學と天才とを相對せしむれば啻に道德又美術のみならず宗敎的創造も亦天才の事に非ずや百世の信仰を維ぐ宗敎家が大美術家大詩人と共に一種の天才なることは殊更に說明するを要せざるべし宗敎上の事跡を探ぐるは科學の能くすべき所なれども宗敎を作爲するは科學の事にあらず斯かる意味にては哲學も(少くも其の最高の部分は)科學の事にあらずして天才の事なり何ぞプラトーン又ヘーゲル等の哲學の能く美術の傑作に似たるぞ

上陳の如くに解釋すれば凡そ創造は科學の事にあらざるべし科學的發明を爲す是れ既に天才に待つ所あるにあらずや予輩は猥りに不可思議を語ることを好む者にあらず然れども天才てふ一不可思議の沒すべからざるものあるを見る也何の日か天才てふものを科學的法則に移して語るを得ん理想と現實との融會する

得べし理想の建設には(ブラウニングの語を用うれば)外に在りとする光を内に入らしむるよりも寧しろ内に幽閉したるの榮光を漏らし出だすの趣はなきか内に幽閉したるの榮光を漏らし出だすと云ふは果して適當の語なるか又斯かる語は果して何を意味するかはこゝに論ぜざるべし予輩は唯だ實際既に現れたる事實を穿鑿する科學が克く理想を建設すべきかと問ふ也

科學的研究は法則を闡明するもの又科學的に行ふと云ふことは知了せる法則に從うて過まることなく行ふの謂ひならば吾人の作動を導くに足る法則の未だ法則として(即ち概念的智識として)揭げられざるものは科學の範圍外にありと云はざるべからず而して天才てふものは吾人の今日の智識に於いては科學と相對せしむべきものにあらずや天才は自ら知らずして(即ち概念的智識を有せずして)その作る所を作る者ならば其の作爲や科學的と云ふべからず而してかゝる天才てふものの存在することは人世の事實に面して否むべからざる事なり若しその如く科學と天才とを相對せしむれば偉大なる道德的理想を建設して百世の師表となるは科學の事にあらずして寧ろ天才の事にあらざるか此等理想の建設は美術

"Truth is within ourselves; it takes no rise
From outward things, whate'er you may believe.
There is an inmost centre in us all,
Where truth abides in fulness; and around,
Wall upon wall, the gross flesh hems it in,
This perfect, clear perfection—which is truth.
A baffling and perverted carnal mesh
Binds it, and makes all error, and *to know*
Rather consists in opening out a way
Whence the imprisoned splendor may escape,
Than in effecting entry for a light
Supposed to be without."

斯くの如くブラウニングと共に歌ふは全く根據なき事なるか今は姑くかゝる智識の論は措いて問はざるも理想の建設には我れの自ら加ふる所なきかと問ふを

力を有するは否むべからざる事實なり此の理想の建設も亦能く科學の範圍内にあるべきものなるか

往時の理想はこれ既に歴史上の事實となりしものなれば唯だ事實上の穿鑿を以てして其の如何にして現れしかを知るを得ん然れども未だ事實とならざる理想は如何にして之を發見すべき假令へ事實と理想と全く相融合したるものありとするも予輩の今所謂理想はそれが謂ひにあらず吾人の實際の生活に於いては理想と現實との乖離を意識すること甚だ多し斯かる理想は現實を超越したるもの、事實に附加せる所あるもの也斯かる理想を建設するは事實の穿鑿を主眼とする科學の能くする所なるか是れ深く考ふべき問題なり

事實を考査すると云ふ事に既に我れの附加する所なきか此の事果して唯だ或物を我れの外より我れに受け容るゝに過ぎざるか若しは此の事既に其の一面は我れ自らの創造に懸らざるかましてや個々の事實に通貫する法則を發見すると云ふ事には我れの附加する所はなきかそも智識てふものは一面我れの附加し創造するものにはあらざるか

る法則を知るの謂ひなるべし故に一切の先入と好惡と豫想とを去りて虚心平氣にして實際行はるゝ所の法則を看取せざるべからず事實と其の法則是れ科學的研究の瞬時も忘る可らざる所なり人間社會の出來事の複雜なる固より單純なる物理的現象の儔にあらずと雖も科學的研究の方法に從うて其の事の實際の又自然の法則を發見するに非ざるよりは道德も宗敎も遂に確然不動の根據に坐する能はざるべし自然は唯だこれに從ふによりて之を用ゐ得べしと云ふべーコンの格言は獨り物理界の事にのみならず亦た須らく人事に應用すべきものなりとは是れ今日科學の使徒たる多くの人々の主張する所にあらずや

科學的智識の必要と其の功德とは是れ今世紀が人類に傳へたる一大福音なりと雖ども若し謂ふところ科學は實際現れたる事柄のみを觀て其の自然の法則を知らんとする者ならば能く一切の人事を說明するに堪ふべきか人心には理想(Ideal)と名づくるものあり而して人事は少くも或程度まではこれに從うて形づくらるる理想は未だ事實にあらざるも當に事實に現るべきものとして念ひ浮べらるる而して斯くして念ひ浮べらるゝ理想が吾人の實際の生活を形づくることに强大なる

よ高遠にして所信いよいよ相分かる欲すると信ずると想像と事實とのわいだめ無く相錯雜せる是れ常人の意識なり是に於いてか嚴密なる科學的方法によりて事實と想像とを分別すべしと云ふ要求を聞くこと頻りなり而して科學的精神並に方法が吾人の思想界に樹てたる又尙ほ樹てんとする功績の偉大なる事は何人も否む能はざる所なるべし啻に物界の研究に於いて然るのみならず人事を處するも亦科學の範圍內の事たらんとするが如し政治と云ひ理財と云ひ法律と云ひ道德と云ひ皆人類社會の科學的研究の結果を應用して始めて之を處理し之を維持し之を改造するの法則を發見し得べきが如し從來學術と最も緣遠きが如く思はれし宗敎さへも亦科學的研究の範圍內に入るべきものとせらる昔しソークラテースが吾人の行爲を整へ社會を治めんには明確なる智識によらざるべからず之れなくんば小は手工の業(わざ)より大は政治の道に至るまで皆まぐれあたりの外に出づべからずと云ひし如く今日は社會萬般の事を擧げて皆科學的智識の支配下に置かんとす

科學的智識とは何を謂ふ精確なる方法に從うて事實を考査し其の事實に行はる

象的のものならば(眞實の通理は the concrete universal ならば)理論は即ち完全なる智識にして整頓せる又不斷絕なる實行に缺くべからざるもの也天才はその如き智識の幾分を所謂天來の瞬間に捕捉するものなるべし而も尙ほ未だ完全なる智識を得たるにはあらざれば其の創作は不斷絕なるを得ざるなり

(明治廿八年十一月發行、六合雜誌第一七九號)

道德界に於ける天才

世に高遠空漠の談は有り餘れり之を一個人の想像として見るは敢て妨ぐる所あらずと雖も之を以て眞に吾人の信憑すべきものとは爲す可からず或は一種の感情を描いて直に之を客觀的事實と見なし或は個人の習慣希望を以て遍通不易の定理となす如きは世間毫も珍しき事にあらざるのみか世に哲學と云ひ宗敎と云ひて衆人の承認を得んとする者に此等架空の想像の有り餘れるを見る也我れは來世の斯くあるを信ずといふもの是れ多くは寧ろ我れは斯くあらんことを欲すと云ふべきものにあらずや故に一人の信ずる所他人の信ずる所と異なり談いよい

かの論起こる倫理學は吾人の倫理的事實(吾人の如何なる事を善とし惡とし來たりたるか)を明にするに止まりて吾人の當に如何なる事を善とし惡とすべきか(假令ひそれは今迄善とし惡としたる所とは異るも)を定むるは其學の能くせざる所なるか否かの論起こり來たる之と連續して美學又論理學は正當には如何程學にして如何程術なるかの論起こり來たる要するに事實(自然的法則)と所謂規範との關係は更に明にさるゝを要する問題也こゝに云へる意味にては術は嚮に云ひたる技と密接の關係あるもの若しくは大部分に於いて相同じきものとなる也

終りに理論と實行との關係を一言すべし或は云ふ理論は學を以て知り得べきも實行は術を得て始めて爲し得べしと理論を知悉するも未だ以て實行を爲すに足らざるのみならず實行を爲すには理論は知るも益なしとは實際家の理論家に對じてしばしば言ふ所なり或は智識と理論とを一にして智識は實際上の結果を來たすに足らずとも云ふ若し理論てふものを解して唯だ抽象的規律の智識を意味すとすれば無益とは云ふべからざるも其の以て實行を來たすに足らざるや明なり然れども若し理論の明にすべき通理なるものが抽象的のものにあらずして具

立てられざるにあらず或は實際の應用を目的とするものは應用學なりと云はんか然れども若しその如くに解すれば最も抽象的なる理論を攷究するにも之を實際に應用せんの目的を以てすればこれも應用學となるべし而して打ちつけに純理學に其の如き目的なしとは云ふべからざるべし

學と術とを區別するに又これを事實（ファクツ）及び其の法則（ロー）の研究と理想（アイデアル）の建立との區別として見るを得べし即ち學は曾てありし又現にある事實を明にするもの術は吾人の爲すを要する理想を立つるものなりと云ふを得べしかゝる意味にては物理の研究又歷史の研究は學なり物質的現象及び其の法則の現實にあるの樣（さま）を研究し人間社會の經きたりし樣を研究するものなれば也之と異なりて倫理研究の如きは若し之を吾人の道德的理想を立つるものと見れば學にあらずして術に屬すべし世に高尙なりとせらるゝ道德的理想を建立するは是れ聖賢の事にして一種の術なり學の能くすべき所にあらずとも云ひ得べし道德的理想を發揮して之を世人に示すには美術上の傑作を創造して美的理想を發揮すると等しく天才を要すと云ふは一理なきにあらず此に於いてか倫理學は果して學なるか將た術なる

に非ざるべし

然れば美辭學又は論理學を術と云はゞ謂ふところ術は實際の技にあらずして一般の規律の智識を意味せざる可らず若し一般の規律の智識を意味すれば是れを廣義にての學と云ふものの内に置くも不可なからん若し又術と狹義にての學とを區別すれば其の區別は那邊に存するか是に於いてか術を唯だ實際上の事と云はずして實際の應用を示すの智識と云ひ學を純粹の理論上の智識と云ひ判かつを要す而も斯く判かてば術の學に對するは應用學の純理學に對すると略ぼ同じかるべし即ち術を應用の學と云ふも不可なきことなる而して應用學と純理學とは其間截然たる區堺を立つべきものなるか純理學は通なる理論を定むるもの應用學は其の理論を殊なる塲合に適用したるものなりと云ふも其の應用學に示す所亦到底一般の規律を掲ぐるに止めざるべからず但だ其の一般の規律が純理論に云ふ所に比して多少實際の個々の塲合に近しと云ふのみ所詮通なり殊なるの差等に於いてのけぢめあるのみなれば其の間に判然不動の區劃線は引くべからず然れども假りに純粹化學と之を染物に應用したるものとの如き大躰の區別は

の各〻に如何なる意義を附すべきかを明にせんと試みん

論理學は正當に學と云ふべきものなるか將た術なるか或は學と術とを兼ねたるものなるかとは屢〻論理學者の間に爭はれたる問題なるが其の如く學と術とを相對せしむる時には其の區別は何の點に存すべきか通常これを區別して學は理論上のこと術は實際上のことなりと云ふ而も實際上の事と云ふのみにては術の意義未だ分明ならず實際上のことなる術は或は實際の作動とも解せらるべし例へば詩はその規律を知れるのみにては作り得べきものにあらず即ち學びて達せらるべきものにあらず一種の術なりと云ふが如きは術を實際の作動と解し而して其の作動を爲すには熟練と技倆とを要すと云ふ意味を含めたるなり此の意味にては術は技なるべし技術と云ふもの即ち是れなり術てふものを斯かる意義に解すれば論理學は術にあらざるべしそは縱令ひ實際上の規律(論を爲す時の心得等)を示すものとするも論理學は矢張り一般の規律を掲ぐる智識上のものにして實際の技にあらざれば也詩人の妙技と云ふが如きものを術と名づくれば多くの學者が純粹の學にあらず少くも一部分は術に屬すと云へる美辭學又は修辭學も術

學と術、理論と應用、法則と理想、これらの語の意義及び其の相互の關係

學術といふ語は古くより用ゐ來たれるものなるが近頃はまた其の語の意義も頗る多樣となれるが如し其廣き意義にては古代希臘にてソークラテースの頃にいへるフィロソフィアと略ぼ同じく又おほらかに云ふ獨逸語のヴィッセンシャフトにも相當するが如し然れども又純粹の智識(即ち理論的のもの)のみならず多少處世の(道德的)覺悟をも含めるやうにも用ゐらる古人の學術といへば人間の道とすべき事に關する見識を常に聯想し來たるは支那の學問が主として人倫道德に關するものなりしが故ならん此の故に學術といふ語は近頃いふ人生觀又世界觀を意味する如くに用ゐらるゝとあり然るに此頃はまた所謂科學的智識即ち嚴密なる意義にいふ英吉利語のサイエンス獨逸語のヴィッセンシャフトを指して學術といふこともなきにあらず或は此の語を分析して學と術との二者を包含するものとも爲されざるにあらず予輩は今こゝに若し學と術とを相分かたば當に其

に或倫理學者の見なるのみならず吾人の常識は之を否むに躊躇するにあらずや加藤博士若し善業又德行(こゝには之を分かたざるも可なり)に對する善なる應報を幸福と見而して善業德行には善なる應報の伴隨せざることありと主張せんと欲せば德行は遂に吾人の眞正の幸福を奪ひ去ることありと主張せざるべからず加藤博士は實にかゝる德行を求めらるゝか德行若し吾人に幸福を覺得せしめずして止むものならばその幸福と思へるものの誤れるにはあらざるか又はその德行と思へるものの眞實德行と名づく可からざるものにはあらざるか問うてこゝに至れば遂に倫理學の根本問題に觸れざるべからず何をか德行と云ふか何をか幸福と云ふか其の相互の關係如何と問ひ來たらざるべからず此頃の加藤博士の論は一は天則の何物なるか又一は德行と幸福との何物なるかの論に歸着せざる可からず若し明に吾人の眞正の德行と吾人の眞正の幸福とを背馳することある者と定め得ざる限りは予輩は寧ろ德行は吾人の眞正の滿足を來たすものにして而して其の滿足に代ふべきものは他にあらずと考へんとするは非耶

(明治廿八年十一月發行、六合雜誌第一七九號)

惡業に對して來世に於いて賞罰を明にする神てふものありとせば善惡業は皆何時かはその應報を受くと云ふに不可なし然れども此の如き宗教的信仰を假り來たらずして唯だ目前の社會にのみ就いて云はゞ如何嚮には若し目前の社會にのみ止まり又唯物說に立ちて云はゞ善惡の應報は加藤博士の論ぜらるゝ如く或は全からずと考ふることをも得んと云ひしが果してその如くに考ふることが正當なるか予輩は曰はん先づ須らく善惡業と云ふものゝ何なるか又善惡果と云ふものゝ何なるかを明にすべしと之を明にせずして善惡に應報の有るか無きかを爭ふは恰も闇中に相擊つが如し善果とは何ぞやといふ問に答へて幸福を享くるの謂ひなりと云はんか然らば問はん德行は、善業は吾人をして遂に幸福を失はしむることあるべきか我れに眞正の幸福を與へざるものを我が德行と云ふを得べきか我れは我が眞正の幸福を犧牲に供すべきの義務あるか其の如き事柄を正當に我が道德上の義務と名づけ得べきか是れ深く考ふべき問題なり或倫理學者は明に我れの眞正の、終極の幸福を棄てゝ或事柄を爲せよと云ふ道德上の規律なしと考ふ或倫理學者は德行と眞正の幸福とは相離るべきものにあらずと考ふ是れ啻

るものはこゝを擊つべし空間に運動する物躰を以て出立點となし而して心と云ふものも畢竟物躰の空間に運動する作用に外ならずと見ると物界の現象も所詮心より發したるものなりと考ふるとは其の出立點を異にせり或哲學者の考ふる如く自然界てふものも其の根本の意味に於いて道德的なりと見ると道德界なる者は自然界の表面に浮びたる一泡沫に外ならずと見るとは大躰の見處を異にせり頃日哲學雜誌上の一論者が加藤博士の說を評してこれは唯だ加藤博士一家の見に基けるものなれば「我が所立の道德說よりすれば」と云ふ前置を附せざる可からずと云へるは若し之を解して佛教を批評するには內部批評に止まるべしと云ふの意味とすれば固より可笑しき事なれど若し其の意味は佛教の因果應報說の根據を破せずして唯だ假りに批評者自己の立脚地を正しとして論ずるのみにては未だ有効の批評ならずと云へるにあらば可笑しき事にはあらず若し佛教の因果應報說は唯物論ならぬ別の根據に立つものならば其の根據を衝かざる限りは有効の批評と云ふべからざる也

若し基督教に說く如く吾人は此の世にて萬事を終るものにあらず吾人各自の善

に限れることなればなり
然れども若しその如く唯物論上の根據より見ずして吾人に過去又は未來の存在ありとし又物躰の機械的作用以外の作用と法則とを認許せば唯だ目前の社會に於いて善惡の因果應報の完からずと云ふの故を以て應報説を打ちつけに排撃すべきにあらず善惡の因果應報說を非難するにあらずして須らく決すべきことは善惡の純然たる天則上のものなるか否かにあらずして寧ろ謂ふところ天則の何なるか(それを唯物論上より見るべきか否か)にあり若し唯物說にして立つべきものならば善惡及び其の應報の純然たる自然界のものなるか否か又人間界と自然界との間に多少の別あろか否かは必ずしも論ぜずして善惡の因果應報說を擊破することをも爲し得るならん加藤博士の正當に理由とすべきは善惡てふものが人間の定むる所にして自然に存在するものにあらずと云ふ事にあらずして寧ろ博士の天則論の根據に橫はれる唯物說にあり善惡の因果應報論は正當には加藤博士の主張さるゝ一種の哲學若しくは哲學めきたるものなる唯物論と佛敎の哲學との爭とならざるべからず守らんと欲するものはこゝを守るべし擊たんと欲す

天則上のものにあらざらん

こゝに於いてか加藤博士の所謂天則の何なるを審にするの必要あり天則的と云ふことを唯だ法則的と解するの廣きに過ぐるは既に之を云へり天則を唯だ自然法と言ひ換ふるのみの吾人を敎ふるに足らざることも既に之を云へり自然界を人間界と相對せしむるも亦以て吾人を敎ふるに足らざることは之を云へり然らば天則は何の謂ひなるか加藤博士の論旨をして有効ならしめんにはその謂ふ天則は詮ずる所唯物論(委しくは唯物的機械說 Materialistic Mechanism)の立脚地より解せざるべからざるべし機械的必然の法則に從へる物質界以外に何物もなしと見て始めて加藤博士の議論は確立すべし人間社會てふものも物質の機械的必然作用の造る所、人間が其の社會の成立に利あることを善と見害あることを惡と見るも亦自然界の必然作用の結果、又善惡を褒貶賞罰することも天則上の必然作用、其の賞罰の洽ねからぬことも亦天則上の必然の結果なりと見ざる可からず此の故に人間の事一として純然たる天則上のものならぬはなしと見て而して能く善惡の因果應報說を排し得るなりそは吾人の善惡業とその應報とは吾人の現在の社會

み除きたる天地の萬象を自然界と名づくと云ふのみならばこは唯だ假りに其の名稱をその如くに限りて用ゐたるにて斯く用うる者の隨意なるべしと雖もこれは毫も天則の何なるを示すに益なきなり人間のみは純然たる自然界のものにあらずと見て所謂自然界に一別寰を區劃せむとするは是れ豈に加藤博士等の常に排斥する人間中心說の面影を殘せるものにあらざるなからんや

人間の所謂善惡及び人間が善惡を褒貶するを以て純然たる天則上のものにあらずとするは加藤博士の立脚地にありては決して必要のことにあらざるのみか博士が善惡の因果應報說を難ぜらるゝ論法に取りては却つて不利なることなり善惡とその應報とは自然のものならずと云ふを要せず純然たる天則上のものならずと云ふを要せず純然たる天則上のものと天則に基いて出でたる人間の事とを區別するを要せず加藤博士はかゝる區別を爲さずして善惡の因果應報說を破すべきなり善惡とその應報とを純然たる天則上のものにあらで人爲なりと見而して是れを以て因果應報說を難ぜんとするは加藤博士に取りては相應(ふさは)しからぬ論法なり博士の立脚地よりすれば人間の事何れか自然界の事にあらざらん何れか

ものにあらずや加藤博士等の進化論の立脚地より見ては人間界の事を純乎たる自然界以外のものと云ふべき理由はあらざる也

人類は各〻自己の意志を具ふるが故に人間の事は純然たる自然界の作用にあらずと云はんか然れども自由意志を否定する加藤博士等に取りては此事誠に言ひ難かるべし博士等おもへらく吾人の意志は毫末も吾人の自由に發動せしめ得べきものにあらず全く必然の原因ありて發動するものなり而してその發動の原因は一は遺傳に存し一は外界の影響に存すと遺傳と外界の影響とによりて(即ち動機に從ひて)必然に行動するとに於いて人間と他動物との間に何等の差別かある但だ動機に應ずるとが人間に於いては下等動物に於けるよりも複雜なりとは云ふべきも未だ之を以て前者を純然たる自然界以外のものとは見る可らざる也

予輩は加藤博士等の立脚地に立つ間は人間又た禽獸を純然たる自然界以外に置くの理由なしと考ふ或は廣義にては人間も素より自然界の一物なれども狹義にて云ふ自然界には含まれずと云はんか然れども上來辯じたる所によりて見れば廣義と狹義とを別かつべき十分の理由なきに非ずや唯假りに人間又は禽獸をの

たるものなりと云ひながら尙ほ純乎たる天則上のものにあらずと云ふは解し得べきことなるか假りにこれは解し得べしとするも純乎たる天則上のものならずと云ふ以上は何物か加はり來たりて之を不純乎たらしむるものあるべきは明なり而してその加はり來たるものに加藤博士の所謂人間界と自然界との多少の區別は存するならん若し然らばその物は何なるぞ

その物は何なるかといふ問に答へて人間には特別に智識の加はれるあれば是れその純然たる天則の支配下にある自然界と異れる所なりと云はんか然れども智力は人類に於いて始めて發生したるものにあらず下等動物に於いて既に之を見る特に加藤博士等の主張する進化論より見れば心理上人間と下等動物との間に越ゆべからざる懸隔を置くこと能はず智力の差等こそあれ其の有無を以て人類と他動物とを別かつべからず若し差等を云はゞ下等動物間にも之れ有り(その差等決して些少にあらず)人類と下等動物とは智力の多少に於いて大に相異ると云ふとも未だこれを以ては前者を純然たる自然界以外のものとなすに足らず自然界に於ける進化の結果として他動物の生出したると同樣に人類も亦た生出したる

るもの也と考へ得ざるにもあらず要は唯だ所謂靈界又其法則の事實上存在するか否かを尋ぬるにあり超自然なるの故を以て之を存在せざるものとは決定すべからずそは今云へる意義にては何等かの法則を具ふる靈界は超自然にあらざれば也法則と云ふ觀念は必ずしも神界と云ふ觀念と相容れざるものにあらず

或は自然界なるものを人間界と相對せしめて人爲ならざるものの是を自然なりと云ふ若し此の如き意義に解すれば人間の事は超自然(或は超自然と云ふと非ならば自然以外)の事となる而もこれは宇宙の森羅萬象は悉皆天則即ち自然法に支配さるゝと見ると相適(かな)はずそは人間も宇內の森羅萬象の一なるにそれのみは自然法の支配下に在らざる者となれば也此頃加藤博士が人間の所謂道德は天則に基いて生じたるものなれども純然たる天則にあらず自然界と人間界とには多少の區別ありと云はれたるが如きも尙ほ其の言意を審にするの必要あり若し人間が自己の社會に利あることを善と見害あることを惡と見て之を褒貶するは所詮天則に基いて出でたることなれども純然たる天則にあらずと云はゞ何物か特に人間の事に於いては純然たる天則に加はり來たらざる可らずそも天則に基いて出で

よりも寧ろその流行すと謂はるゝ天則の何物なるかなり或は云はん天則は是れ天然の法則にして自然界の萬象皆これに從ふ故に之を自然法と名づけて可なりと然れども是れ未だ天則の何なるを說明したるものにあらず但だ天といふ語に代ふるに天然又は自然と云ふ二字を以てしたるのみ要は謂ふところ天然の法則又自然法の何物なるかを示すにあり但だ天然に行はれ自然に通ずる法則を指すと云ふのみにては單に天則と云ふに比して其の意義に於いて別に精しき所なし須らく問ふべし何を指して天然と云ひ自然と云ふか如何なる法則の行はるゝところを天然界又は自然界と名づくるかと

論者あり曰ふ世に超自然の事なし自然法に違背して存在し得べきものなしと而して動もすれば自然を超ゆると云ふと法則を超ゆると云ふとを同意義也とし自然以外と云ふは法則以外と云ふと同じく悖自然と云ふは無法則と云ふと同じと思惟す若しその如くに自然てふものを解すれば神界と云ひ靈界と名づくるもの、も必ずしも超自然のものにあらじ神界又靈界には神界又靈界の法則ありと考へ得ればなり啻にしか考へ得るのみならず靈界以外の法則は靈界の法則に根據す

を要する程の事にもあらざらん但し予輩は漫に我が國語學の研究を見て勞力を要せざるものと云ふにあらず辭書の編纂の如き固より多くの歳月と勞力とを要すべし然れども他の學科と比較して新事實の發見の爲し易きはまさに斯學の研究なりと考ふ日本語學こそ我が邦人の研究すべき事柄の中最も多望なるものなれ予輩は今日現れんとする萠芽の蝕せらるゝことなからんを希望す眞實斯研究を運ばすに堪ふる準備を爲せるもの(言語學上十分の智識を備へたる者)のますます多くこれに其の力を致さんことを望みて止まざるなりそは研究者として其の光榮を收得せんのみならず文學に敎育に我が國民を益することまことに大なるべければ也

(明治廿八年十月發行、六合雜誌第一七八號)

天則とは何ぞや

(加藤博士の論を讀む)

人或はおもへらく天則と云へば其の意義既に明瞭、天地間の事物一として此の則に從はざるはなしと然れども吾人の究明すべきは唯だ天則の流行すと云ふこと

予輩は今の國語研究の形勢を見て多望なりと云はんとす又之をして必ず多望ならしめんことを欲するなり本＊誌前號又本號にも假名遣の論を見得る如き亦以て一部類の學者が其の心を國語の研究に傾けんとするの氣運を察するに足るべし文典と云ひ辭書と云ひ國語變遷の歷史と云ひ新研究者の着手を要すべきもの眼前に堆し多望なる日本語學の原野は開拓者の早く來つて鋤を入れんことを待てるなり

若し現今割合に勞少くして功の大ならんものを何ぞと云はゞ予輩は先づ指を日本言語學の研究に屈せん何となれば是れ實に新しき研究なればなり未開の地に入らんには一種の困難はありと雖も未だ世人の知らざる發見を爲し易きの便益あり早く此の地に入りたる者は早く發見者たるの榮譽を擔ふを得ん數理學に理財學に哲學に新見地を開かんは容易の業にあらず顯微鏡を取つて生物學上又黴菌學上多少の發見を爲さんは甚しき難事にあらず而も此等の研究には既に數多の學者の着手せるあり眞に新學問と云ふべきは日本語學ならん近世の博言學上の智識を假り來たらば本居諸氏の規定せる範圍外の發見を爲さんは甚しき勞力

日本語學の研究

國粹保存論に多少の關係を有したる國文學の隆興と我が國民が世界の舞臺に打つて出でんとするの大希望とは一部類の學者をして國民の徽章ともいふべき國語の研究にますます意を注がしめんとするものの如し少くも我が國語のみは我が國民の特殊固有の產物なるに從來深く之が學理的研究に分け入らんとする者なく概ね先代の和學者輩の遺したる痕跡を辿るに過ぎざりしが今や漸く徒らに先人の迹を追はずして新研究を開始せむとする精神の勃起し來たるを見る予輩は此の精神の早く萎微することなくますます增長しゆかんことを望みて止まざるなり

此頃國語に關する議論の新聞雜誌に見ゆるもの少からず此等は多くは未だ小區域の開拓に過ぎざる者なれども其の研究の傾向は旣に唯古人の舊套を襲へる者にあらざることを示す一方には國語國文の將來に關する大問題(文字改良論)等の揭げらるゝあり一方には新眼孔を以て我が言語の性質を究明せんとする者あり

難は提出するに由なからん

上來述ぶる所によりて觀れば我が心以外に世界の實在すと視るも詮ずるに我が心性の要求に外ならず智識の示す所といひ道理の許す所といふ皆畢竟吾人の心性の一種の要求に外ならず此の如く觀れば何ぞ獨り所謂道德的要求をのみ斥くるの理あらんや或人々の謂ふ道德的要求の賴むべからざるは吾人の心性の他の凡べての要求と相契はざればなり相契はざることなくば吾人は之を吾が指導者となして不可なることなし吾人はなるべく多くの要求の調和されんことを求む吾人の心性の凡べての要求がその最も完全なる程度に於いて調和して全躰の滿足を覺得したる情態是れ即ち生活の理想なり狹義に謂ふ道德的要求は斯る理想的生活中重大の位地を占むべきものなり廣義にいふ道德の要求はかゝる理想的生活の全躰を意味せるものなり而して又廣義に謂ふ理性は吾人の心性の一切の要求の相契へるを標準としてこれに到らんことを求むるものなり

（明治廿八年十月發行六合雜誌第一七八號）

ればその統一されたるものが智識なりその善く統一されたるものを見て眞なるものとす則ち眞理と云ふものも吾人の經驗を統一せむとするの要求を滿足せしめたるものの謂ひにあらずや約言すれば事實に從ふと云ふも眞理に就くと云ふも吾人の心性(取りわけては智性)の要求に外ならぬにあらずや

何故に萬物みな我が心の造りなせる所、我が一心の幻夢に外ならずと見るは非なるか何故に極端なる主觀說(個人的唯心論)を取るは非なるかハルトマンは其の智識論に於いて斯かる主觀說を駁するに遂に吾人の道德的意識に訴へて斯く凡べての物を我が一心の夢想の如くに視るは是れ取りも直さず我れ以外に心意を有せる人物なしとするなり我れと相語り相親しむ父母兄弟もみな我が心に浮べる念ひに外ならずその念ひの去ると共に去りゆくこと恰も夢の消ゆるが如しと思惟せざる可らずこれは明らさまに吾人の道德的意識に反する事なりとて斯かる極端なる唯心論を斥けたりこはまさに智識學上の問題を決するに道德的要求を持ち來たれるものにあらずやハルトマンが個人的唯心論を駁するに遂に吾人の道德的意識に訴へたるは決して僻事にあらず却つてこれよりも更に有力なる論

の如き要求を覺識するにあらず人生の歸趣に關して深く思慮を費したる者の中にも來世に於いて生存せむ希望を有せざるものあり彼等はむしろ心身都滅せんことを望む然れば高等なる道德的要求と云ふものも畢竟ずるに各個人の主觀上の價値あるに過ぎざるものにあらずや甲は自己の道德的意識を省みて某の事柄を要求すと思はんも乙が自らの意識を顧みてその事柄を要求せずと思はゞ甲は乙に對して何とか言ふべき

然れば則ち事の眞否を定むるものは前述したる如き吾人の要求又は希望にあらずして偏へに理性の指示にありとせんか然るに理性の指示なるものも畢竟吾人の心の要求に外ならぬにあらずや吾人が或事柄を認めて事實となすは吾人の心に經驗する所が其の事に於いて相契合するが故にあらずや何故に今爰にこの机に觸れて之を實物を認むるか吾人の要求し欲望することの如何に拘らず之を實物と認めざるを得ざるか吾人の感官の示す所の相契合するが故ならずや若し吾人の一方より經驗する所と他方より經驗する所とが相契はずば吾人はその物の實在することを疑ふべし吾人の智識は吾人の經驗する材料の統一を求むる換言す

所なりと云ふは敢て不可なきも之を客觀的實在者に移して其のもの當さに此の如しと云ふに至りては容易く首肯すべきことにあらず但し吾人が事物を思考し會得するは所詮主觀を以て客觀を推すに外ならざるかも知るべからず吾人の智識は其の根本的作用に於いては此の如きものなるかも知るべからず併しながら主觀を移して客觀を推度するにおのづから其の正當の道なくばあらず如何なるものを如何樣に移しても皆正當なりとは云はるまじ若し然か云はゞ吾人の條理とする處は各人勝手次第のものとなり了すべし

死後に獵場に遊び美女に逢はんと欲するが如き希望又要求の以て事の眞否を決するに足らざるは蓋し此等は肉躰に屬する下等の欲望にして人々個々その趣を異にすればなりかの高等なる道德心に基ゐせる要求は此等と同一に論ずべきものにあらずと云はんか而も尙ほこれら高等なる道德心の要求も人によりて大にその趣を異にする所あるは否むべからざる事實なり或は道德的品性の永久に發達しゆかんことを我が心底に要求し居れりと考へ而して之を以て(カントの論旨に倣ひて)來世の存在又は神の存在を證據せんと試みるものあり然れども人皆そ

道德的要求とする所とスペンサー氏が玄かする所と相同じからざるは双方の著書を一讀しても明なり又同じく宗敎の必要を唱道する人の中にも現にマルティノー氏の如きはバルフォール氏の要求する所に同意せずと云ひてポロック氏は「信仰之基礎」の論法に一撃を加へたり

吾人の希望し要求する所の相同じからぬはスペンサー氏の言の如し北米の土人は死後に愉快なる獵場のあらんことを希望しモハメット敎徒は其謂ふパラダイスに往いて多くの美女を得むことを希望し印度人は心身都滅の涅槃に入らんことを希望す此の故に死後に獵場ありパラダイスに美女あり涅槃が唯一正當の人生の終局なりとは論ずべからず吾人の主観的想念を移して直に以て客観的事實を推量することは玄ばしば吾人の試みたるところ又た試み易き所なれどもその結論の極めて薄弱なることは殊更こゝに辯明するの用なかるべし古の希臘の學者も牛馬若し神を描くことを得ば馬は馬の形に牛は牛の形に之を描くべしエテオピヤ人は其の神を色黑く鼻平しと思ひツラキヤ人は其の神を赤髮碧眼なりと思へりと云へり自己の好む所に從うて神佛又は來世を描き而して是れ我が好む

し又は要求する所に訴へて最後の判決を得たりと考へ或はこの如き論法は事の眞否を定むるに毫も益する所なしと考ふ斯かる二樣の考へ方は種々の時に種々の方面に於いて種々の形を取りて現る

此頃英國の思想界に評判高かりしバルフォール氏の新著「信仰之基礎」に關しても亦右云へる二樣の考へ方の相當り相摩するを見るバルフォール氏はその所謂自然說を論評して之は以て人間の要求を充たすに足らずとなし此の要求に應ずる宗教は自然說に優れりと云ふバルフォール氏の所說に對する評論多きが中に特に此の點に對しては壯に論難の鋒先を向けたるものありスペンサー氏はその屢〻斯かる論旨と爭ひたる時に用ゐたる論鋒を用ゐてバルフォール氏の論陣を衝き吾人の希望又は要求と云ふ如きものを以ては哲學上の論點を決定するに足らずと云へりポロック氏も亦マンド誌上にバルフォール氏の所謂「道德的要求」の果してその論せむとする如き論旨を決定するに足るべきものなるかを疑ひ道德的要求てふ名の下に包含せらるゝものは人によりて同じからざる所なり姑く現今最も明識ありと稱せらるゝ社會上流の人に就いて云ふもバルフォール氏みづから

るのみにて特殊なる一科の學を成せりとは云ふ可らず此故に予輩は學問上の性質より見て從來所謂組織神學なるものは遂に解躰し去るべきもの也と考ふ歐米の大學に今尙ほ神學が一科の學として存在するは其の原因そが學問上の性質にあるよりも寧ろ實際上の關係にあり即ち敎會に敎役者を要し而して神學科を卒業するものは牧師又は傳道師として一種の職業を得るが故なり恰も佛敎の寺院に附屬して僧侶を養成する學林あるが如し今の所謂神學校は正當には一宗敎又は宗派に要する傳道師養成所と云ふべきものなり若し學問の性質上一專門の學科を成さんとせば所謂組織神學は變じて予輩の上に所謂宗敎學とならざるべからざる也

（明治廿八年十月發行、六合雜誌第一七八號）

道德的要求に訴ふる論法の効力

吾人の希望する所ばかり千差萬別なるはなく又そればかり吾人に取りて重大の勢力あるものはなかるべし吾人は希望によりて活く而もその希望は嗜好の人によりて異なるが如くに異なり故に或は所信の眞否を論斷するに之を吾人の希望

せんと欲すれば宜しく之を宗教歴史若しは比較宗教學若しは廣く宗教學てふ名稱の下に爲すべし何ぞ特に神學てふ一科を設くるの用あらんや若し又教會の制度來歴等を詮索せんには須らく之を教會史としてなすべし若し又救拯來世等の宗教的信仰を道理上論究せむとせば是れ決して宗教哲學の外に獨立すべきものに非ず若し又宗教上の信仰には學問以外のことの存在するありとせばこれは哲學又は史學に屬せざる如くにまた神學にも屬せざるものなりそはこゝには神學を一種の學問と見ればなり縱令宗教上の經驗には一種特別の趣ありて之を物理的科學に取扱ふ事柄と同一視す可らずとするも其の特殊の經驗を神學上研究せんと欲せば是れまさしく學問の範圍内の事となる此の如き宗教的と名づくる特殊の經驗こそ先づ第一に宗教學の材料となるべきものなれ若し又神學は本來學問にあらずと云ふものあらば爰には强ひて之を爭ふの用なし但だ之を學問と見る以上は一部は哲學の中に入り一部は古典の歴史的研究となり一部は比較宗教學に併さるべきものなるべし學問上の性質より云へば此等二三種の學科以外に別に神學と名づくべきものなし又此等異種の學科の切れ〲の部分を引き集めた

きなり而して今日の學問界の正當の傾向は斯くの如く宗教の現象を探究するにも廣く之れを人類進化の上に看むとするにあり若し果して今述ぶる所の如くならば從來歐米に所謂神學は能く永く其の學問としての獨立の位地を保ち得べきか

予輩の見る所を以てすれば神學は學問としては遂に二三種の研究に分解されざるべからず今日の所謂組織神學の中道理上神の存在及び性質を論ずるは是れまさしく哲學の一部分なりこは哲學上の研究より離れて決定せらるべき問題にあらざるなり此の點に於いて神學は哲學の中に沒し入るべきもの、之と相併びて立つべきものにあらざるなり若し又基督教の舊新約聖書又は回々教のコランの如き經典の起原成立(なりたち)等を詮索し其の中に記載しある事柄の歷史上の根據を討究するの邊より見ればこは古典の歷史的研究の一部分にして上に所謂神の存在性質等の哲學的研究とは大に其の趣を異にせり彼れと此れとを打つて一團として强ひて一科の學を形づくらんとするは學科の範圍を亂るものにして學問上正當のことにあらず若しイスラエル人又は印度人の宗教的意識の性質と發達とを究明

を持續することを得ん然れども神學は其の性質上果して特殊なる一科の學として永存すべきものなるか果して哲學等と併立すべきものなるか
若し唯一の天啓ありて神に關する眞理を其の中に求め得べく又神語を誤謬なく記錄したる經典ありて之を以て吾人の信仰並に行爲の唯一の標準となすべくば其の一種無類の完全無缺なる天啓又は經典を詮索することを以て或は特殊なる一科の學と見るも妨なからん物理學生理學等を學術と云ふと同じ意味にて之を學術と名づくべからざらんも尙ほ廣義にては之を一科の學問と云ふも敢て不可なからん而もこは唯だその如き天啓又その如き經典を以て唯一の眞正完全なるものと認むる者に取りてのみ能く特殊なる一科の學問(嚴密の意味にては學問にあらず)として存在せん基督敎徒に基督敎の神學ある如くに回々敎徒に回々敎の神學あるべし然れども若し廣く宗敎上の現象を通觀して之を人類の宗敎的意識の發表したるもの、其の發達の段階を爲せるものと見ば何ぞ特別に基督敎若しくは回々敎の神學をのみ選び出でて之を特殊なる一科の學と見るべき理由あらんや寧ろ人類の宗敎心全躰の性質と發達とを究明する宗敎學の中に之を沒入すべ

の思想界の末期に至りては既に神學と哲學との分離を來たし哲學は自然界の事柄を吾人の理性即ち所謂自然の光りによりて究明するもの、神學は之と異なりて天啓によりて立てる者なりと思惟せり其の後諸科學の興起進歩するに及びては神學以外ますます數多の學問を分別することとなり神學は唯だ學問界の一小區域を占むるの運命に遭遇せり近世自然神學なるものありて吾人の自然に具ふる理性によりて神事を研究せむと力めたることあれど是れ所詮哲學の一部分たるに外ならず曾て學問界の王、否唯一の學問なりし神學は今やその學問としての性質さへも疑はしきものとならんとす神學は應にこの如き運命に安ずべきものなるか如何

神學は既に早くその學問界の王たる位地にあらずなりしと雖も尚ほ久しく今日に至るまで一科の重要なる學問として攷究されきたり歐米の大學に於いては尙ほ神學科なるものありて之を他の醫學科法學科等と併立せしむ神學は今や假ひ學問界の一小區域を占むるに過ぎざるものとなれるも若しその學問たるの性質に於いて特殊なる一科の學を成すべきものならば所謂組織神學は永くその命脈

は彼は生れて死する一個の人間なり理想界の預言者としては彼は永遠の職務を有す實業てふ名の下に天下の人を驅りて彼の狹隘なる淺薄なる實益なるものを拜せしめんとし學者も亦みづからその特有すべき信仰を失うて流俗の神に事へんとす予輩はその可なる所以を知らざるなり學界の振はざるは學者が自己の光榮を信ずるの心に乏しきが故なり

儒學的叉武士的敎育の一結果として實業を賤みたるの反動は人をして理想的學問の價値に、學者の天職に、其光榮に目を閉ぢしめんとす予輩は彼の漫に實業を言ふ者に與することを能はざるなり

（明治廿八年十月發行、六合雜誌第一七八號）

神學の解躰

歐洲の中世紀には神學以外學問なるものあらざりきと云ふも不可なし當時の哲學は即ち神學なりき彼の所謂スコラ哲學に於いてはアリストテレースを典據として多少自然界に對する考說を構へざりしにあらざるも是れ唯だ神學の一部分たるに過ぎず當時は學者即ち神學者、神學者即ち學者なりきと云ふべし然るに其

に無用なるものの如くに思惟し學者も亦みづからその修むる所の實益なきを白狀して流俗の見なる彼の所謂實業家に降らんとす此に至つては學者の氣慨は遂に見るべからざるなり學者が其の氣慨を失うて職業換へを爲さんとするばかり見苦しきものはあらざるなり

吾人に麵包の必要なる如くに理想上の糧も亦た缺くべからず學者はその眞善美に對する熱情と發見とを以て人生を飾るべき天職を有するものなるに何を苦んでか彼の所謂實益を來たすものに倣ふことをせん他人の得與へざる大益を人世に與へんとする是れ眞儒の本願ならずや學者のこの自信を失へるは尙ほ鹽のその鹹味を失へるが如しこゝに至つてか學者は眞に無用の長物となり了するなり世間何の職業か下賤なるものあらん正直なる額に汗して爲す所の勤勞は悉く皆な神聖なるものなり予輩は漫に商賈工人の業を蔑視するものにあらず共に其の腦力を用ひて衣食住を求むることに於いては學者豈獨り職人の列を脫せるものならんや然れども眞善美の神殿に事ふる祭司として、其の理想の福音を宣布する天使としては學者は自ら高く持する所なかるべからず衣食を求むる職人として

所以のものはまた其のおのづから商賈工人と同一視すべからざる特職を有すればなり商賈は偏に其の貨物の賣れんことを求むべし是れその商賈たるに於いて至當の事なり然れども學者が偏にその學問の世に賣れんことを求むるに至つては是れ既にその學者たるの特職を空うせるもの、學者は世間に賣るゝことを思ふに先ちて須らく其の學問上の理想を全うすることに焦慮すべし是れ𛀁ばしばその赤貧洗ふが如くなるも尙ほ辭せざるの氣慨あるを要する所以なり世人若し我が學問を求めば之を賣るに何の妨ぐることかあらん是れ學者がその學問によりて一の職業を得る所以なり然れども(普通の工人と同一視すべき部類の學者は云はず)眞理を求むることを目的とする學者は賣らんがために其の學を研くにあらざるなり是れ眞理と云ふ如き理想を追求する者に具はれる一特色にして此の點に於いては美術家又詩人は學者と同類に屬す而も生活の困難は𛀁ばしば學者をして此の特色を失墜せしめんとす

啻に生活上の困難のみならず實益てふ一種の迷信が學者をして其の自重心を失はしめんとす所謂實業を稱揚する輩は動もすれば理想的學問を輕じて殆んど世

敎に數百金を得るも何ぞ必ずしも忌むべき事とせん或は云はん學問又は宗敎の上に他人を利することのために金錢を得るは是れ決して報酬と見るべきものにあらず學問や說敎や是れ決して金錢に代ふべきものにあらずと然れども是れ唯だ報酬なるものを見るに實物交換の思想を以てしたるのみ若し種類の同じきものにあらずば彼れと此れと代ふべからずと云はゞ大工はその仕事を其の賃錢と代ふべからざるべし報酬はたゞ利益を與へたる者に其の者が生活に要する所の物件を供するの道に外ならず今日の思想を以てすれば學者が其の敎ふる所に對して報酬を求むるは少しも怪むべきことにあらざる也今殊更にかゝる見易き事態を述ぶる所以のものは學問を職業とする事に關する思想の變遷を顧るも亦一種の興味あることなればなり

學者とて或意味にては一種の職人に外ならず然れども學者としての特殊の自重心を失墜せざることより見ればソクラテースが己れを束縛せざらんために報酬を求めざりしも亦深き意味あることならずや學者のみならず商賈工人と雖も亦その職業に關する自重心なくんばある可からず而もこゝに特に學者の自重心と云ふ

たり彼等は其の學問を以て口を糊するの手段となしたり當時學者が普通の職人の如く又商賈の如く其の授くる智識に對して金錢を得んと求むるは目新しき事柄なりしかばソフィスト等は學を賣る者として擯斥さるゝことを免れざりきソクラテースは此の點に於いてソフィストに倣ふことを屑しとせず二十有餘年アテンの市街を徘徊して日夜其の敎を垂れたりしも之れがために一錢の報酬をも求めざりきクセノフォンの書きのこせる所によればソクラテースは己が自由を保たんために其の敎を授くるに報酬を求めず金錢を得る者は之を與へたる者と必ず相語らざる可からざるが故に之を求むる輩を目して自らを奴隸にするものなりと云へりきとぞ

學藝を授くるに報酬を求むることを非とするは今日の思想に適合せず手工の術をもて口を糊することの卑劣ならざる如く學問をもて生活することも亦些も耻づべきことにあらず學識のみ豈獨り金錢に代ふべからざるものならんや人間の事の中最も神聖なるものとせらるゝ宗敎的職務の如きすら亦一種の職業と見做さるゝにあらずや天の糧を與ふることの報いとして地上の糧を求め一時間の說

學問の價値

(學者の自信)

香川景樹曾て歌のしらべを論じて「身は賤しけれども天地のしらべなれば萬乘の君にきこえあげても耻づる事なきをもて歌よむ人と云へば歌をしるもしらぬも崇め尊ぶなり」といへり彼れ景樹が歌人の天職を見ること極めて高しと謂ひつべし而してこはこれ詩人と共に理想の光輝を人生に放たんとする學者の以てみづから任ずべき所にあらずや此の自信あり此の氣慨ありて始めて眞儒たるを得べきなり故に古來學者と云へば特別の人間として崇め尊ばるべき筈の者なりしなり而も今日の學者は普通の職人とその列を同うせんとするにあらずや報酬のために其の學問を賣らんとするにあらずや又今の世にありては之を賣るも敢て不可なきにあらずや如何

希臘學問の興起せし初代にありては未だ其の學識を以て職業となしたるものあらず但だソフィストの輩に至りて始めて其の知識する所を授くるに報酬を求め

の教育說を破するには足らざるべし之を破せむにはその教育法そのものを詳細に論ぜざる可らず予輩は今日の教育學者に向つてヘルバルトを論ずるに唯だ倫理上又心理上の一般の論を爲すに止まらずして教育法そのものを詳論せむことを望まざるべからず予輩はヘルバルトの教育學を以て完全なるものとは思惟せず之を稱揚するの餘り新行路を開くことの障碍を爲すは予輩の決して取らざる所なり然れども予輩はヘルバルト學說の我國に流行せむとするを見て甚しく憂ふべきこととなさず却て之を當然のことと考ふ今日のヘルバルトを稱揚する輩は或は雷同附和に出づる者多しとするも其の勢力の由て出づる處を究むれば偶然の事情によるにあらずして其の組織の整頓せるによれり之に優れる組織の出でぬ限りは其の偉大なる勢力を揮はんは亦避くべからざることなるべし

（明治廿八年九月發行、六合雜誌第一七七號）

ヘルバルトの倫理說の形式的なる處又其の謂ふ道念を五個に定めたる處などは其の敎育說に不利なる關係を有せずと云ふべからず或は形式的なるが故に其謂ふ道念の應用自在なりと云ふ者あれど其の應用を示すには他の倫理上の敎示に待つ所あらざるべからざるは是れ其の完き所に非ずして寧ろその缺けたる所也例へば內心の自由は吾人の爲すべしと見ることと實際爲す所の意志との相契ふにありと云へど爲すべき事の何處にあるかは之によりて知るべからず五箇の道念の如き形式的觀念を以ては敎育の目的を十分に明にし得ざるの失あり若し又此等の形式的觀念に附するに內容を以てするは專ら常識によるの外なしと云はんか常識に存在する一切の道念を五個に分つが至當の分類なるか疑なき能はず且又ヘルバルトの倫理說が其根本に於いて社會の進化又國家の組織に疎き所あるは其缺點の一に數へられざる可らずヘルバルトの學說は社會的道德の進動的（ダイナミカル）方面を說明するに適せず此等の點は其敎育學に無關係なる能はざるべし

其の他心理學の方面より見るも其缺點と認むべきものを指摘するに難からざるべし然れども右の如き倫理上又心理上の一般の論は未だ以て甚しくヘルバルト

トの眞意にあらじヘルバルトの趣意は通常所謂美醜は事物の形式(Form)に對する褒貶の即ち(よしとしよからずとするの)判別にして(これに感情の要素あることを否むの要なし)善惡の判別も亦同じく形式(但し意志の關係)に對する褒貶の判別なりと云ふにあり彼れ以爲へらく此等の判別は形式に對するものにして客觀的又遍通的價値を有することに於いて快不快とは同じからずと之を約言すれば形式に對する褒貶の判別なることに於いて善惡と美醜とは同一根據を有すと云ふ是れヘルバルトの趣意なり其の意は決して善惡を取つて狹き意味にての美醜に投じ去るにあらず善惡を狹義の美醜に歸せしむるにあらず假ひ廣く善惡を込めて之を美醜と名づくるも此の廣義の美醜は狹義の(即ち通常所謂)美醜と同一ならず狹義の美醜は物躰の形式に關し善惡の判別は意志に關する點に於いて相異らずばあらず予輩はヘルバルトの說を以て倫理上正當のものなりと云ふにあらず但だ其の美醜と善惡との關係を論ずる所よりして特に如何なる缺點が其の教育學に生ずるかを見難しと云ふなりヘルバルトは實際美學を建設するに努めずその力を用ひたるは倫理の研究なり

敎育の方法を示すと云はるゝ心理學は其の靈魂論に於いて純理哲學と相係る所あるが如きも實際ヘルバルトが心理的現象を説明する點に於いては殆どそのレアルの論と相連關せずその心理の説明をなすに當りては恰もその謂ふ觀念(Vorstellung)を實躰の如くに見做し却て一種のレアルなる靈魂は殆ど用なきものとなれるが如し又その觀念の如何にして生起するかは一種のレアルなる靈魂の性質より見ては(予輩の考ふる所にては)遂に説明し得べからず此等は其の心理説の缺點には相違なきも其の説が哲學の他部分と親密の關係を有せざることを證するには足れり

予輩はこゝにヘルバルトの敎育學を論せむとするにあらず唯だ此頃の論爭に就いて聊か言ふ所あらんと欲したりヘルバルトの敎育學の根據を衝かんには其の倫理學並に心理學の方面よりせざる可からざるは論なきことならん但だ其の倫理又心理の學説の缺點を指摘することが直に其の敎育説を破するの道にあらず或はヘルバルトは善惡の別と美醜の別とを混同し審美的判別を以て道德的判別の淵源となし重きを美醜に置ける如くに論ずるものあれども是れ必ずしもヘルバル

論鋒を之れに向けずして斯かる薄弱なる又拙劣なる駁撃を試みんとするかを怪しむ

斯かる皮相の論を以ては能くヘルバルトの敎育說を批判すべからずさ雖も又必ずしも其の純理哲學の立脚地にまで論じ到るを要するにもあらず却てヘルバルトの純理哲學は其の哲學組織の自餘の部分に親密なる關係を有せず哲學の種々の範圍を相分別し强ひて其の間の聯絡を求めざるが是れヘルバルト哲學の一特色なり其哲學は一中心を有する組織と云はんよりは寧ろ哲學の諸科を引き集めたる者と謂ひつべし故に其の宗敎思想の如きは殆ど其の純理哲學と何等の關係をも有せず又其の倫理學の如きも之と決して親密なる關係を有せずヘルバルト學派の一人なるナアロウスキイの如きは倫理學を純理哲學の動搖と相係らしめずして之を獨立の基礎に建てんとしたるはヘルバルトのいみじき思附きなりと云へり(Nahlowsky, Die ethische Ideen als die waltende Mächte im Einzel- wie im Staatsleben)之をヘルバルトのいみじき思ひ附きなりと云ふべきか否かは問はず兎に角其の倫理學を論ぜんには之を獨立のものと見敢て他を顧みるの必要なきは明なり

ものなるか予輩は之を疑ふ予輩の見る所にては教育勅語は倫理の攷究に豫め越ゆべからざる藩籬を設けんための者にあらず些も其攷究の障礙となるべきものにあらず又學理の爭を決するの便益あるものにもあらず若し學理研究の範圍にありて一學説を非難せんとせば吾人一般の道德的心識又は人類社會の倫理上の事實又は吾人の道理心の名を以て之と爭ふべし勅語の名を以てすべからず若し或論者の爲すが如き論法を奬勵せば後日必ずや學問社會の一大弊害を見るに至らん政治家の慣用するが如きの武器を學問社會に利用せんとするは陋なりと謂ひつべし予輩は飽くまでも教育勅語の名を以て學理を是非するの不當なることを主張す

ヘルバルトの教育學を難ずるものの中或はその宗教的(細しくはその歐洲に起こりたるの故を以て耶蘇教的)なるを云ひ又獨逸に起こりたるの故を以て我が國躰に合せざるを云ふ此の如きは正當にヘルバルトの教育學を貶するの理由となるべきものにあらず其の學説の原理と其の獨逸に於けるの應用とを區別せば斯かる非難は忽に其の根據を失ふべし予輩はヘルバルトを難ずる者の何故に正當の

ヘルバルト爭論

近頃我が敎育家社會にはヘルバルトの敎育學に關する論爭頗る囂しヘルバルトの學説は其の本國なる獨逸の敎育界に在りては今尙ほ覇權を握れるの有樣なれども之に對して反抗を試みる學者も亦決して無きにはあらず寧ろ當今はヘルバルト爭論の盛になりゆかんとするものゝ如し此の時に方りて我が敎育社會にヘルバルト學派の敎育説(現時敎育説としては最も宏大なる又精細なる組織をなせるものと見做さゞる可からざる學説)に關して敵味方の論爭を聞くは大に賀すべきことなり但だ恐る其の論爭する所皮相にとゞまり要處を穿たずして已まんことを

ヘルバルトの學説を難ずるものゝ或は其の倫理學の敎育勅語に合はざるを云ふ玄かも此の如きは眞に學理を談せんとするものゝ取るべき論法にあらず倫理學の研究をなさんとする者は敎育勅語なる一假定を置いて而して常に之を以て其の考究を左右せざる可からざるか敎育勅語は此の如き目的のために設けられたる

ず唯だ之に淸高幽玄なる氣韻を添へざるの致す所のみ而も此の氣韻を添ふるあるも中には唯だ習慣上神聖として聞きなれたるものを聞かざるが故に其の宗敎的妙味を解し得ずして之を打つけに無味なりとし宗敎的ならずとする者あり今日の困難は此の宗敎的妙味を新用語を以て道破し得る者の少きにもあれど亦此に宗敎的妙味を求むることを知らざる者の多きにもありそは高等なる宗敎的生命は往々未だ宗敎的てふ名の附せられざる處に存すればなり吾人の宗敎的生活の進化こゝに存す會堂に往いてアブラハム、モーゼ、エルサレム、ガレリヤ等の名稱を聞かず其他の聞きなれたる祈禱又は說敎の定文句を聞かずば毫も難有からずと思ふは未だ高妙なる宗敎の神韻を解せざるの致す所なり唯だ天竺を猶太に代へ御經の定文句をバイブルの定文句に代ふるも何の益かあらん此の如きは是れ唯だ習慣上の難有味に過ぎざるなり習慣上の難有味を以て宗敎の深奥なる趣味と誤認せざらんを要す

（明治廿八年九月發行、六合雜誌第一七七號）

來の面目に契ふものなるか否かに拘らず又其の傾向によりて生ずる矛盾は大乘の談理を以て能く解釋し去らるゝか否かに拘らず予輩は斯かる佛教の新傾向を喜ぶものなり

然りと雖も宗教の社會的に傾くと共に其清高の趣味永遠の價値幽玄の神韻を失はざらんを要す社會的に傾く必ずしも宗教の俗化するの謂ひにあらず唯だ貧民救助の方策を講じ教育の方案を論じ國家の組織に密接するのみが宗教家の職務にあらざるは勿論なり宗教家は此等の社會の制度に一種の清高幽玄なる氣韻を添へざる可からず強ひて出世間の別區域を設くるを須ひず却て世事の紛々擾々たるものに靈妙なる趣味を附すべきなり高遠偉大なる詩趣のなき宗教は未だ宗教の高等なる特色を具へざるものと云うて可なり若し人をして永遠の生氣に觸れしむることを忘れずば宗教の社會的に傾き現世的に赴くは毫も憂ふべきことにあらず却つて其の進歩を表はすものなり

或は云ふ今の宗教家は餘りに政治家めきたり所謂社會問題を論ずれども信徒の信仰を養ふに益あらずと然れども是れ決して宗教の社會的に傾くの罪にはあら

無我の論にもさまざまの言譯を附せざるべからず大乘の高遠なる議論は多少此等の矛盾を蔽ひ得べしと雖も今日の或佛敎家の云ふ如く佛敎を以て國家主義を唱ふるものとなし近世歐洲の社會的活動に契ふものとなすは是れ決して佛敎本來の面目にあらじ釋迦をして今世に生れしめば或は方今の宗敎の趨勢を以て當然のものなりとし之を以て今日に處するの道なりとなさんも知る可からずと雖も其の實際在世の時に自ら說きし敎法の主義は決して此の如きものにはあらざりしと言ふならん佛敎本來の面目を維持せんには富國强兵を相競ふ今日の歐洲の文化に調子を合せんよりは寧ろ冷眼を以て之を視るの勇氣なかるべからず此等を以て都べて迷妄の所爲なりとし西人が兵力を用ひて他を制服し商權を握るを觀るも超然として之を羨望せざるのみか寧ろ之れを兒戲と見做し其の妄執の醫し難きを憐むの心ありて始めて佛徒本來の意氣に契ふものと云ひつべし而して元來斯樣に出世間的なる佛敎も今日我が國に於いては力めて世間的社會的ならんとす其の變化は實に巨大なりと雖も是れ亦今日の世界に於いて佛敎の運命を維持せんには止むを得ざることなるべし其の社會的ならんとする傾向が其の本

社會の事殆ど皆宗敎的なりしに今は宗敎の事殆ど皆社會的ならんとす是れ宗敎の進步なるか將た其の衰微なるか其の孰れなるに拘はらず此の如きは是れ今日の自然の叉當然の趨勢なるを疑ふべからざるなり此の趨勢を惹き起こしたる原因を約言すれば凡そ三事を數ふべし一には徒らに出世間の空想に走り宗敎的信仰の厚きと社會的道德の修まれるとは全く別の事件となれること二には近世學術攷究の一結果として來世の存在叉自然以外の勢力を信ずることの堅固ならざること三には社會叉國家なるものの硏究叉其の價値の近來極めて大になれること是等は宗敎の現世的社會的になりゆく原因の主なるものなるべし

今陳べたる宗敎の社會的傾向は啻に之れを歐米諸國に見るのみならず我が國に於いても亦ますます著明になりゆくものの如し基督敎は云ふも更なり元來最も出世間的最も非社會的最も非國家的なる佛敎すら富國强兵を以て其の敎法の目的なるが如くに振舞ふに至る我が國に於ける佛敎の新傾向を何ぞと云へばますます俗世界に近づきますます世界的社會的ならんとするにあり此故に佛敎は一種の奇觀を呈し種々の矛盾を暴露せむとす其の厭世觀にも其の寂滅說にも其の

したる一結果と見て可なるべし

斯くの如く宗教が社會の事業國家の經營と相離れて而も却て一時は一種の信仰と希望とを鼓舞して能く偉大の又特殊の勢力を揮ひ得たりきと雖も其のゑかく出世間的となりしことがまた其の大弊害を釀すの因緣とはなりたり蓋し徒らに未來を談じ信心を貴び念佛を勸めて吾人の實際の生活、社會の實際の道德には毫も益する所なく但だ愚民の迷信を利用して僧侶と名づけ牧師と稱ふる一種の階級に糊口の道を與ふるが如くなるは是れ宗教が國家的經營社會的事業と相離れたるに生じたる弊害なり是れ惡しき意味にて坊主が坊主臭く宗教が宗教臭くなれる所以なり

斯かる狀態に陷れる宗教は假令ひ下等人民間には尙ほ其の舊來の勢力を維持し得べしとするも智識ある中等社會又其の以上の階級に於いては遂に萎微し來たらざるを得ず是に於いて乎宗教を社會の進步國家の目的に聯結せしむるを要すとするの思想はますます其の頭を擡ぐることとなれり斯くの如く宗教を現世的事業に聯結せしむるの結果は竟に宗教の運命に如何なる變動を生ずべきか最初は

宗教の社會的傾向

出世間的なるをば宗教の特色としたりし時代もありしが近代の新傾向を觀るに宗教はますます世間的となり又世間的とならしめざる可からずとするものの如し白雲深き處に行ひ澄まして紛々たる世事を放擲する是れ決して宗教家の本務にあらずと思惟するのみならず社會的事業を扶植し國家的經營に協力するを以て宗教の本領となすに至らんとす昔は社會の事殆ど宗教的ならざるものなく法律も制度も技藝も美術も皆宗教と密接の關係を有し後世の多くの慣習風儀は禮拜祭祀に由來したりし程の有樣なりしが後に至りて分化のますます行はるゝに從ひ種々の事業は各〻其の特殊の區域を拓きて元と宗教の中に包含されし許多の事件は漸次其の範圍を逸出し從つて宗教は他の事柄と嚴密に區別されて特に宗教的と名くる領分に閉ぢ籠もるに至れり是れ社會進化の自然の趨勢にして一時宗教の本領を偏へに出世間的なるにありとし世事の紛々擾々を忘れて極樂淨土を希ふを以て信仰の惟一の目的となすに至りたるも亦此の趨勢の(但し一方に偏

べき者と承認するが故に之に反するものは最後の勝利者たるを得ざるなり若し強者なるものを斯く解し去らば尙ほ殊更に何の爭ふべきことあらん而も加藤博士等の謂ふ强者なる者を以て能く道德の進步を解釋すべきか其の立脚地より云へば湊川に斃れし時の楠正成は弱者にして忠臣の模範として尊崇さるゝ楠公は强者なるか勝つ者を强しと云ふは可、而も如何なる條件を具ふるものが遂に勝つべきか當時に勢力ある思想が當時の道德的理想となると云ふは可、而も如何なる理想が勢力を得べきか自然說は假りに社會的現象の自然の前後を說明し得とするも其の當にとかく前後すべき所以を說明する能はず唯だ兎に角その時代にはその種類の人が勢力を得たりし故にその欲する所が道德の理想となりしと云ふのみ何故に曾て勢力ありしものに代ふるに他のものを以てすべきかを說明し得ず唯だ斯くなりしと云ふのみ自然說に從へば遂に如何なるものをして勢力あらしむべきかと云ふ問題に一言の解答をも爲し能はざるなり

（明治卄八年九月發行、六合雜誌第一七七號）

がために其の行爲を整ふべきものならば萬人に通ずる道あり理想ありと云ふと何の擇ぶ所かあらん此の如き標準は是れ決して强者の氣儘に左右すべきものにあらず又必ずしも各個人の快樂とする所に合すべきものにもあらず自然說は云ふ人皆自然に自己の快樂を求むと然れども社會の幸福を來たすに不利なる事柄に自己の快樂を求むる者なきを保し得べきかその如き者は道德上社會の幸福を來たすことに力めざるも可なりと云はんかその如き者にも尙ほ社會の幸福を來たすべき義務ありと云はゞ是れ既に自然說の立脚地を脫したるものの言なり强者にして若し社會の幸福又は進歩なるものを來たすことを好まずば之に向うて何とか云はん若し又社會の幸福又は進歩なる者を來たさずば强者にあらず又は强者たるを得ずと云はゞ理想派の立脚地よりしても亦同じく道德的理想を行はざる者は强者にあらず又强者たるを得ずと云ひ得べきにあらずや社會の幸福を來たさゞる者は何故に强者たり得ざるか是れ吾人の道心が社會の幸福を來たす者を嘉みして之を來たさゞる者を擯斥すればなり强者が社會の幸福を好むが故に吾人の道心が之を來たすべき者と承認するにあらず吾人の道心が之を來たす

る者にあらざるなり

予輩の見る所にては今日の倫理學上の最要問題は理想派に取りてはその謂ふ理想を明にし自然派に取りては道德上爲すべきことのある所以(Moral ought)を說明するにあり理想派に於いて患ふる所はその謂ふ理想の未だ十分明瞭にせられざるにあり自然派に於いて病む所は吾人の道德的心識の要點を說明せずして之を度外視するにあり將來の倫理學の進步は此等の缺點を脫するにあるなり

自然派の立脚地に處る加藤博士等の議論の出でたるの故を以つてこゝに特に此の說を主張する學者の所論に一言の注意を加へ置かんに大躰より云へば自然派の立脚地に在るべき筈の議論にして其の根本論旨と相容れざる思想を竊取せるもの甚だ多し現今我が國に於いても自然派風の議論を唱ふる者に乏しからざるが如きも首尾貫徹せる自然說を主張する者は至つて稀なり加藤博士すら社會の幸福又は進步なるものを以て善惡の標準となせり然るに道德的理想を離れて社會の幸福又進步なるものを解釋し得るの道如何予輩は之れを聞かんことを欲す若し社會の幸福てふ一定の客觀的標準又は目的ありて諸人は皆之れを來たさん

*本書三六一頁所掲の論をいふ

従ふも是れわが快樂を享くるに利あればなり強者が或は弱者を好遇することあるも是れ亦己れが快樂を増さんためのみ人各〻その快樂とする所に就くは是れ自然の狀態にして此の外に吾人の實行すべき理想と名づくる如きものあるなしと云ふ是れ自然派倫理說の大趣意なり

予輩は右略述したる二派の倫理思想の對峙を以て倫理上の大問題なりと思惟す頃日加藤弘之氏が佛敎の因果應報說を駁したるが如きもその立脚地は上に所謂自然派の思想にあり故に加藤博士の論を反駁せむには勢ひ自然派の思想をその根據より覆さゞるべからず是れ大論題ならずや是れを以つて余輩は本*誌前々號に加藤博士の議論は倫理學の根本問題に密接する所あれば大に學者の注意すべきものなりと云ひしに端なくも一雜誌記者の如きは予輩の言を評して事を重大視過ぎたるものと云ふ予輩は彼れ雜誌記者が果して能く加藤博士の立脚地を認め得たるかを疑ふ其の立脚地を許容することが啻に佛敎の應報說を立ち難からしむるのみならず如何なる甚大の影響を倫理上の問題に及ぼすかと考一考するを要す此の點に着目せずして加藤博士の論を讀みたる者は未だ眞に之を讀みた

ありと云ひ「カテゴリシェル、イムペラティーフ」ありと云ひ衆人の協力して達すべき社會的目的ありと云ふ如き皆此の派の倫理思想に屬す倫理學者の所謂直覺的倫理說理性的倫理說は言ふも更なり功利說の如きも若し諸人の皆等しく共同の目的として追求すべき社會の幸福なるものありと云はゞ是れ畢竟ずるに理想派の倫理思想に屬するものなり

理想派に對して自然派は正善と云ふも義務と云ふも皆吾人の欲望の名に外ならずとなし吾人各自の好むこと欲すること以外に吾人の爲すべきこと無しと說く故に此の說に從へば各個人の快樂とする所の外に理想なし目的なし善惡正邪の一定の標準なし但だ一時代一社會に於いて强者の好む所(その己れが快樂とする所)是れ其の時代其の社會の道德の標準なり而も此の標準は諸〻の人の遵守すべき道と云ふ如きものにもあらず弱者が强者の好む所に從ふべきは唯だ其の强迫力を以て之を强ひらるゝが故のみ之に從はざれば己れ亡びざるを得ざるが故のみ若し强者の快樂とする所が變ずれば其の社會の道德は變ずべし之を要するに各人その快樂とする所の外に守るべき道なく盡すべき義務なし枉げて强者の意に

なり之を約言すれば漢字の便利は未だ分化(Differentiation)の行はれざるものの便利なり是れ即ちその未だ進歩せざるの狀態にあることを證するものなり一人一家にして植ゑて食し紡いで衣る、一種の便利なきにあらず漢字の便利は此の如きのみ予輩は文字としては漢字を劣等なるものと見ざるを得ず文字は畢竟するに音字たるを以て最上とす但だ音字の堺限内に於いて成るべく目に訴ふるの便利を計らざるべからざるのみ

(明治廿八年八月發行、六合雜誌第一七六號)

倫理思想の二大潮流

當今倫理思想の種別多しと雖も其の根本的差異の最も大なるものを掲げんには凡そ之を二大派に分ち得べし一を假りに理想派と名づけ一を自然派と名づくべし此の差別は今に始まりたることにあらず倫理研究の興起したりし原初より既に存在したるものなりと云ふを得べし理想派は吾人の生活上實行すべき目的又は遵守すべき標準(一言に云へば理想)ありとし而して善と云ひ正と云ひ義務と云ひ皆此理想に根據して生じたるものなりと思惟す吾人の須臾も離るべからざる道

の便利に歸するを得べし文字としての漢字の利は目に訴ふるの點を利用して多くの意義と種々の趣味とを思ひ浮べしむるにあり故にその便益は繪畫の便益に外ならず若し之を以て文字としての漢字の利を盡したるものと云ふべからずば少くとも其利の最も大なるところは此にある也書きたる一顆の林檎を見よ一見して如何に多くの事柄の心中に浮び來たるよその色その形其の美しさ其のうまからん樣若し之を文字に寫さば如何に多くの字數と紙面とを要すべき目に訴ふるの便利は繪畫に及くはなし漢字の利も亦此の種の利に外ならず而も繪畫は言語を寫すを目的とする者にあらず之を目的とするものは文字なり(少くとも今日に於いては文字の主要の目的はこれに外ならず)此の目的を有する文字に繪畫の便利を併有せしむるを得ば幸なりと雖も之を併有せしめんとするは却つて其の本來の目的を害ふの不利はなきか現に漢字の如きに於いて其の不利を見るなり言語を寫すものとしての便利を云はゞ漢字は遠く音字に及ばず目に訴ふるが上の(即ち繪畫的)便利を云はゞこれ亦遠く繪畫に及ばず而もその兩者の利を併有せんとするものなるが故に一見恰も音字に優りて便なるが如くに思はるゝ所ある

或は云ふ漢字を以て不便利となさば請ふ今試に全くこれが使用を廢止すと思へ又實際自ら之を使用せざれと斯かる議論は是れ決して漢字を永久使用すべしと云ふの理由とはならず今現に一人若しくは數人のみが其の使用を廢することは不便利なればとて末遂に全く之を廢することをば便利ならずとは云ふ可らざるなり

方今國字論の問題とする所の最も肝要なるは漢字の利害なり予輩の見る所にては漢字は決して不便利なるのみにはあらずそれに特有の便利も亦全く無きにはあらず然れども其の便利は文字としてその好良なるが故の便利なるか是れ考ふべき所なり久しく之を我國に用ひ慣れて多くの文書も此の字を以て書かれたればば今急に之を廢せむよりは之を使用するの便利なることを外にし又支那に關係する智識を得且其の國と交際するに就いての便益を外にせば(此等は皆漢字そのものの即ちその字形より生ずる便益にあらず)漢字の利は簡短にして多くの意味を表はし得ること、字形に趣味あること、其の偏などによりて詩趣を添へ意義の了解を易うすること等幾多の個條を擧げ得べしと雖も之を概括すれば目に訴ふる

りて實際の利益を來たし得ること些少にあらず我が國字の改良を言ふに當りては實行の難易遲速を見てその事件の忽にすべからざることをば忘れざらんを要す敎育上の利害を考へても文字改良論の鄭重に熱心に攷究すべきものなることは少しく事理を解する者の否み得ざる所なるべし予輩は必ずしも今新國字を製造して之を授けんとするにあらず但だ文字改良論の輕ずべからざる、冷笑すべからざる、我國人の忘るべからざるものなることを切言せむと欲す予輩は先づ此の論の重要なることを深く我が國人の心に印せむと欲す若し深く之れを印し得ば改良案は續々出づるに至らん少しく事理を解するものは此の論の重大なることを否まざらんと雖も尙ほその如何、何、程重要なるかを眞實解したる者は多からざるなり

事件の餘りに大なるが故に之を行はんと云ふものを輕薄なるが如くに思ひ昔より定まれるものをば破棄することを何となう心よからず思ひ巨大の困難と戰うて多くの時日と勞力とを費さんよりは寧ろ目前の便利に就くを智なりと思ふ輩は文字改良論に反對す

若し道理を見ることの狹きに失し又宗敎的信仰を吾人の開發する精神の生活に見ずして曾て編纂されたる一書典に不動的に存在するものとせば理信兩者の衝突は遂に絶ゆべからざる也

(明治廿八年八月發行、六合雜誌第一七六號)

漢字の利害一斑

文字改良論も其の實行はかばかしからぬにあらずやとて此の論を輕せむとする者あり若し速急に其の功を奏し得べしと思ひて文字の改良を唱へば是れ甚しき誤謬なり改良論は實行し易きが故に唱ふるにあらず但だその事の重要なるが故に今より徐々に其考案を回らすを要すと言ふなり重大なる改良又は改革には頑強なる反對と困難との存するが常なり而も其の困難の大なることは遂に改良を無用視するの理由とはならざるなり假令ひ五十年又は百年又は二百年の後に至りて尙ほ全く改良の實行されずとするも之を唱ふることを思ひとゞまるべきにあらず改良を唱ふるは必ずしも其の事の早く行はるべきを期するが故にあらず假令ひ改良案その儘は未來永劫行はるゝことなしとするも尙ほ之を稱ふるによ

的信仰を合理のものと說かんとし或は道理なるものの外に宗敎の別天地を開かんと主張す或は又宗敎的信仰の吾人の理性の光に照らして遂に消滅すべきものなることを說く論者あり但だこゝに今日迄の思想の經過を見て動かすべからずと思惟さるゝことは若し一敎會の曾て定めたる所又は一經典に記載しある所を以て宗敎上の信仰と同一視せばその信仰なるものと道理との和合は遂に保つべからざることと是れなり又一つ動かすべからざることは道理と信仰との衝突を避けんために道理以上と道理に悖るとの區別を立つるも此の區別は永く有効のものにあらざることと是れなり道理以上のものを承認するにも道理なくんばあるべからず道理なくして之を信ずるは悖理なり吾人の道理と見るところ決して全く不動なるにあらず然れども宗敎上の信仰とする所も亦決して不動なるにあらず吾人は其の時々々に道理とする所に從うて信仰を形づくらざるべからず些も道理以外のものを許すべきにあらず但だ謂ふところ道理を以て吾人の經驗の全躰を蔽ふものと解するを要す成るべく廣き經驗に基いて吾人の道理となすべきものを求むるを要すとは云ふべきも道理以外のものを信せよとは云ふべからず

究理上の眞理非眞理と宗教上の眞理非眞理とは相關せざるものなりと思惟したるなり此の如きは是れ中世紀思想の止むを得ざるの結果といふべし

斯くの如くスコラ哲學の本流に於いて理信の調和の破れんとする傍には神祕的副流大に膨脹して所謂獨乙神祕學派を成し教會の信仰とは頗るその趣を異にしたるものとなりたり

又神祕派の流れの外に甚だ微弱なれども科學的研究の流ありロージャー、ベーコンの如きを以てそが代表者となすべし中世紀思想家の殿り若しくは近世思想への橋梁とも見るべきニコラウス、クザーヌスに於いては他の要素と共に科學研究の精神の鬱勃たらんとするの樣なきにはあらざれども此の精神の著く興起したるは近世の事にして而して近世に在りては此の科學思想の宗教的信仰に對する關係よりして理信の問題は一層複雜なるものとなりたり

科學哲學神祕説、是等の宗教的信仰に對する關係は今尙ほさまざまに論せられつつあり或は科學的又哲學的研究として働く吾人の理解力と宗教的信仰とは全然一致すべきものなりと考へ或は道理なる者を専ら神祕的悟入の邊より見て宗教

豈永く破綻を顯さずして止まんやア氏の哲學の深く研究さるゝに從ひ之を悉く教會の信仰に適ふやうに說くことの牽强附會なるはますます明になれり或重要なる論點に於いてトマスの學派と對立したるドンス、スコートスに至つては既に頗る其の思索の趣を異にしトマスは獨斷的なるもスコートスは批評的なり又後者に在りては道理を以て證し得ざる信仰の事柄は前者に於けるよりも一層多く又大なるものとなれりスコートスは其著述の中事のついでに宗教上眞なることも哲學上妄なることあるべしとさへ云へり其の弟子ウイリヤムに至りては理信の分離ますます著く神の存在又靈魂の不滅等も道理上論證さる可らずと思惟し道理と信仰とを全く相分離することを以て却つて宗教に利ありと考へたり以爲らく宗教上の信仰は教會の權威、先聖の所傳に據りて立つ超然として道理の攻擊の及ばざる處に立つ若し常に道理との調和を求めば絕えずその煩はす所とならん道理上の研究はこれを全く別の事とし信仰上の所定に合ふか否かを顧るを須ひず純ら究理の趣く所に趣いて可なりと斯く理と信とは全く相分かるゝことゝなり當時眞面目に「二重の眞理」ありと云ふ說を唱へたる者少からず即ち彼等は

向と(各人の心に取りては外より定めたる)教會の信仰との相離れゆくことは後に至りて更に明になりたり

今陳べたる辯證的並神祕的思想の流れはトマス、アクィナス等の時代即ちスコラ哲學全盛の時期に在りてはさまで相分れずして彼のアリストテレースに據りて造りなしたる大組織の中に包含されたりそれトマスの哲學は中世紀思想の偉大なる代表者にして全盛時代の頂上に位すと云ふを得べきも彼に於ては理信の關係を考ふると既にアンセルムの如くならず彼れはおもへらく信仰上の事柄は悉く皆道理を以て論證し得べき者にあらず道理に違背するとは素よりなしと雖も道理の到達し得ざる境界あり即ち宗教上の信仰の中或部分は道理に照らして論じ得べく或部分は道理以上にありと此に至つては理と信とは既に一歩を其分離の方向に進めたりと云はざるべからず當時哲學上の師と仰がれたるはアリストテレース也當時謂ふ所の道理なる者はアリストテレースの學説なりと云ふも不可なし然るに教會の信條等に合せしむるの目的を有せず其の如き束縛を受けずして自由に建設したるア氏の哲學を以て羅馬教會の信仰に契はしめんとするも

上の事柄にして道理を以て論證し得べからざるもの一もなきなりアンセルムの所說は二個の事柄を要求せり一は理解する、せざるに拘はらず宗敎上の信仰の儼然として存在する事一はその信仰を理解せむとすれば悉く皆理解さるべきこと是れなり

アンセルムは論理上辯證して能く當時の宗敎上の信仰を合理のものと說き得と考へその有名なる神學を組織したれども全躰辯證なるものの性質を考ふればその多少信仰の藩籬外に逸出するの傾を藏することを知るべし何となれば辯證は論理を旨とするが故にその傾向その結果必ずしも宗敎上の信仰に利ありと云ふべからず若し大膽に嚴密に辯證上の結論を追ひゆかばおのづから羅馬敎會の信仰の外に逸出するの傾あることは辯證家の精華と謂はるゝアベラルドに至りてますます明なり聖ヴィクトル寺院のヒューゴー等は辯證法の乾燥無味なるに厭き其傾向の可ならざるを見て神祕的思想に其の隱れ家を求めたり然れども神祕派は各自の心底に實驗悟得する所を以て旨とするが故に其の思想の趣くところ亦羅馬敎會の豫め定めたる信仰と必ずしも契合すべきにあらず實にや神祕的傾

信仰と道德との調和を圖るにも二途なり或は吾人の通常所謂理解力の示す所と宗敎上の信仰との相合ふことを明らめ或は一旦豁然として直覺悟入する底の知見に訴へて理信の二途ならぬことを明らむ後者の傾向は神祕的(ミスチック)なり前者の利器とする所はアリストテレースの論理學に據りたる辯證法(ダイアレクチック)なり前者は是れ中世紀思想界の本流にして後者は其の傍に流れたる副流なりエリゲーナに於いては此の二つの流れ未だ渾然相分かれず後に至つて其のます〳〵相分流するを見る

通常所謂吾人の理解力により辯證法によりて羅馬敎會の信條を合理の者と說かむとしたる最好の一例はスコラ哲學第二の祖と呼ばるゝアンセルムなりアンセルムに至つてスコラ哲學の眞面目ますます顯然たり彼れおもへらく吾人に無くて叶はざるものは宗敎上の信仰なり然れどもその信仰を理解して之を懷く者あり又之れを理解せずして懷くものあり理解せざるも敢て不可なるにはあらざれど相應の能力ある者は信ずる上に之れを理解せば更によし又た若し未だ信せざる者あらば道理上その事の信ずべき所以を明示するを得るなりと斯くアンセルムは考へ全然道理と信仰との相合すべきことを說きたり即ち彼れに從へば信仰

敎は一大宗敎なれば其の信仰する所おのづから哲學上又科學上合理とする所の外に又其の上にあらざるべからずと或は宗敎上の敎説はまさに神祕的直覺の境界に於いて道理と契合すべきものなりと而して近頃斯く樣々に道理と信仰との關係を考ふるも多くは中世紀思想の繰り返へしに過ぎざるを思へば吾人は此の思想の變遷の跡を尋ぬるによりて益せらるべきこと尠々にあらざるべし

眞正の哲學と眞正の宗敎とは一なりとエリゲーナの言ひ出でしは是れスコラ學の發端なるが彼の實際道理と信仰とを和せしめむとしたるの跡を見るに寧ろ其道理とするところに重きを置いて之れと相容れずと思ふときには信仰上の敎義をば曲げて解するの傾あり又その道理とする所は新プラトーン學派の影響を受けて神祕的思想に根據するところあり故に後に至つて羅馬敎會はエリゲーナの説くところを正説ならずとして斥けたり然れども彼の所説に於いてまさに中世紀思想界の大問題は掲げられたり彼は一方に敎會の信仰を置き他方に吾人の道理心を置き而して兩者をば共に等しく眞理の標準と見做したり此の如き兩標準を立つ相合はゞ幸なり然れども其相合はざるとのなきを保し得べきか

歐洲中世紀の思想界に於ける信仰と道理との關係

歐洲中世紀思想の骨髓たるスコラ學は道理と信仰とを調和すること、言ひ換ふれば宗敎上(敎會)の信仰を道理あるものとして解說することを以て其の大目的となせり然れどもその道理と信仰とを相和せしむるの道は決して一樣ならず兩者の關係を考ふるの趣に著き變遷あり此の變遷こそ中世紀の思想を研究する者の最も注意すべき所なれ

信仰と道理との關係如何は是れ決して歐洲中世紀のみの問題なりしにあらず宗敎の勢力の强大なる傍らに學術研究の勃興したる處には多少此の問題の論せられざるはなし近世歐洲に於いては哲學又科學と基督敎會の信仰との合不合は今尙ほ盛に論せらる此の頃我國に於いても亦此の問題に關する議論を聞くことしばしばなり啻に基督敎會のみならず佛敎も亦同樣の問題に接してこれに種々の解釋を與へんと力むるが如し或は云ふ佛敎は哲學と些も相背かずと或は云ふ佛

の忍耐力と執着力と綿密なることを厭はざる心とは是れその美德の大なるものの一なり

科學の研究は漠然たる想像に依賴せずして精密なる計算を以て其の基礎となさざるべからず唯だ無闇に氣を以て勝つをば主義とせず每事時と力とを計算して其の如何にして如何程如何なる事を爲すに堪ふるかを明にせざるべからず唯だ漠然たる考へを懷きよい加減にして如何にか濟むならんと思ふ如きは科學研究の精神と全く相容れず自然界の理法はその如き漠然たる橫着なる豫想に假借する所あらざるなり粗漏なる放肆なる緊密ならざる嚴正ならざるは科學の甚しく嫌ふ所也之を約言せば精密なることは是れ亦科學研究に特有せる一美德也

右掲ぐる所是れ科學研究の精神に出づる美德中特にこゝに予輩の注意せむと欲する所のものなり、惟ふに我國人は武士の氣象と名づくる如きの感激的精神には或は富むに過ぐるも乏しきに失することなかるべし但だ自今大に養ふべきは以上陳ぶるが如き科學的研究の精神に出づるの德義ならずや

（明治卅八年八月發行、六合雜誌第一七六號）

擲するばかり苦しきことはあらず其の餘りに苦しきが故に樣々の理窟を造りて之が辯護の用に供せんとす快き虛妄を懷いて自己の心眼を闇うせざる者幾人かある科學研究の精神には此等の虛妄此等の偶像を毀つの勇氣あり而も事實の前には跪く事に躊躇せず此の如く勇敢なると此の如く我執なきとは眞正なる科學者の特有する美德なり妄想を追ひ感情に驅られて常に架空の事のために悲喜する者は須らく科學的研究の精神に出づるの德を養ふべきなり

次に科學の研究は吾人に忍。耐。を敎ふ科學者が其の研究する事物の法則を發見せむとするや一朝一夕にして其の目的を達し得べきにあらず詮索に詮索を累ね緻密なるが上にも尙ほ緻密ならんことを力めざるべからず失敗に繼ぐに失敗を以てするも尙ほ毫も撓まざる忍耐力なかるべからず短氣なるは科學的研究に於けるの一大罪なり一旦立てたる目的のためには毅然として生涯刻苦勉勵するの執着力あるを要す感情的なる、短氣なる、一時火の如くに熱して忽に水の如くに冷却する性質のものは或は小詩人とは爲り得べきも科學者とは爲るを得ず而してその如き短氣と移り氣とは大業を成就するに甚しき障碍となるものなり科學研究

究の精神に充たされて天地人生に對する者は一種の嚴肅なる心を懷く一點の輕薄の氣なし眞正の科學者は貝殼を以て大海の水を汲むが如しと感じたるニュートンと共にその心の極めて謙遜なる所あり彼等の眞面目なる、ごまかしの心なき、俗氣なき、饑え渇く如く眞理を求むるは口に德義を唱へ僞善を責め庶民の師表を以て自任する僧侶牧師等に遙に勝れるものあり道德を言ふ宗敎家に道德なく之を言はざる科學者に却つておのづからなる德義の存するは決して珍らしきことにあらず科學者が天地の法則に對するや世の多くの宗敎家の感得し得ざる高大なる思ひを懷く敬虔の念は神を說く後者に存せずして神の名を口にせざる前者に宿ることしばしばあり眞實なる科學的研究の精神ばかり美はしく氣高きは少し眞率にして勇敢なるは少し眞に科學的研究の精神を以て充たされたる者はわざとならざる一種の高尙なる品德を具ふる也

特別に科學的研究の精神に出づる一種の德義は事實を重んじ之に對しては謙遜に又勇敢なることと是れなり吾人は動もすれば種々の妄想と偏僻と先入と好惡とを以て眞理を枉げ事實を蔽うて樣々の不德を働く吾人の胸裡に懷ける偶像を放

とし職とする所に於いては毅然冒すべからざるの品格を具ふ即ち彼等は其の道に於いては一種の德義を有するなり若し一技一藝一業に伴ふ道德なく又その技藝を研き其職業に專らなることによりて知らず識らず品德の修養さるゝことなく唯だ偏へに學校の講話寺院の說敎の如き特に設けたる德育の方法に依るの外德性を養成するの道なかりせば世上の人はおしなべてその現實あるよりも一層德義に缺けたる者にてあるならん各自其の職とし業とする所に熱心なるは幸に是れおのづからなる一種の德育なり如何なる技藝と雖も人生を益するものは之を研き之に專なるの心得によりておのづから身を修め德を養ふの道となるなり若し別に特に德育なるものあらば其の最も要とする所は此の心得を敎ふるにあり予輩は世の敎育家が道德と學藝とを全く別にせず修身科と他の學科とを全く別にせず凡べての技藝凡べての學科を授くることに於いておのづから德育を爲しつゝあることを忘れざらんことを欲す

予輩はこゝに特に科學的研究の精神に出づる道德に注意し其の研究の精神が如何に吾人の品性を養成するに與つて力あるかを言ふの要ありと考ふ眞實科學研

技の藝を學ぶことによりて吾人は强固なる一種の道德を躰し得るなり斯く學藝を學ぶことによりて知らず識らず得たる道德はその强固なることに於いてその吾人の品性を形づくることに於いて唯だ彼の所謂修身科の講話若しくは敎會の説敎を聞いて得たるものに優ること大なり

學術の攷究は決して道德の涵養に係はる所なきものにあらず故意に之を德育の方便となさずとも其の事それ自身に於いて一種の德育たるなり予輩はカアライルと共に勞働の神聖なること、勞働することの一種の道德たることを主張するのみならず細技と雖も之に專心し之に練達するによりて一種の品德の修養さるゝことを主唱す技術家は其の技術を以て、學者は其の學問を以て己が修德の道に無關係なるものと思ふ勿れ一技一藝と雖も其の妙に達する者に於いては一種特別なる品格の具はれる所あり美術家は美術に於いて劍術家は劍術に於いて農夫は農業に於いて各〻一種の道德を養成す古の刀劍を作る者の如きは其の業によりて其の心膽を練磨したりその業が一種の神聖なる道德たりし也一道の妙處を得たる者は或は他の事柄に於いて放恣淫蕩の過ありとするも少くとも其の己れが道

のとなす予輩は自然界をもその根本目的に於て道德的のものとなすなり此の如きの見地よりせば道德なるものを解することゝ加藤博士の如き機械說と異るは勿論なり「人間社會の維持又進步に利ある者是れ善なり」と云ふ予輩は些もこれを否まず唯だ如何なる意味が所謂人間社會の維持又進步に含まれるかゞ議論の存する所なり來世又は其他の處に於いて禍福を享くると云ふ意味にての善惡の應報を說くべきか否かは予輩のこゝの論旨にあらず問題は尙ほ深き處に橫れるなり

（明治卅八年七月發行、六合雜誌第一七五號）

科學研究の精神に出づる道德

世に德育を言ふ者或は之を一切の學術技藝と分離し德育を授くるには須らく古人の嘉言善行等を以てし學藝を授くるとは全く其の道を異にせざる可らずと考へ學術を攷究し技藝を練磨することがやがて德育の一勢力たることを知らざるなり故に其の謂ふ德育は動もすれば機械的たらんとするの弊ありそれ修身の講話を開き經典を繙讀する時にのみ吾人の德性の涵養さるゝにあらず一科の學一

「社會の維持又進步」と云ふことには何程の意義を含めるか此等は是れ最も論ずべき所とす

予輩は今此等の問題を詳論するを得ずと雖も若し物質的機械說を取らば加藤博士の道德論は當然の結果なりと考ふカントは自然界と道德界とを分別して二元論を立て而してその相合し難きを見て道德的理性の要求として神の存在を承認したり若し自然界なる機械的必然作用に繫がれる禍福を以て道德界の善惡の業に契合せしめんとせば神と云ふ如きものなくしては行はるべき事にあらず神なき佛教が如何にして善惡の應報を確立し得るかは是れ實に一問題なりカントは自然界と道德界とを相分ちて全然別種のものとなす加藤博士の論は道德界を取つて自然界の中に沒入せしむるにあり予輩の見る所をこゝに一言し得べくば予輩は自然界と道德界とを全然別種のものと見ず或意味にては道德界は自然界の結果也然れども其眞意其目的の發展したるものとしての結果也自然界と道德界とは共に唯一根本作用の發現したるもの、而も其作用の眞相は自然界を蹈臺とし(Condition とし)て更に能く道德界に開展せるなり機械說は道德界をも機械的のも

出でたるものとのみ見れば善もなく惡もなく只だ必然の結果のみ唯だ之を善とし惡とするは人間が我が社會の存在に便不便を感ずる上よりなすのみ故に人間社會を離れて善惡の差別なく隨つて又之を善とし惡とするより來たる應報のあるべき理由なし「但し人間が善惡の區別を立つることも亦天則の然らしむる所と見れば善惡と云ふ區別も亦天則に從へるものなり人爲も天則の外にあらざるなり故に加藤博士も道德は天則的に(多少人力を假て)發生し來たれりと云へり」之を要するに善惡の區別は人間社會の或狀態に於いて起こり來たるものなれば人間相互の褒貶を外にして(即ち人間の褒貶として働く天則の作用を外にして)善惡に天則上自然の應報あるべき理由なし又其人間相互の褒貶によれるの應報は決して完全なるものにあらず善は必ずしも賞せられず惡は必ずしも罰せられざるなり加藤博士の論旨は正に以上の如くならんと考ふ

是に於てか予輩は明に吾人に迫り來たる倫理上の根本問題を見るなり即ち道德は機械的必然作用とのみ見たる天則の結果に外ならざるか善惡なる者は唯だその如き作用の行はるゝ人類社會の存在に利あると否との外に意味なき者なるか

理は善にもあらず惡にもあらずされど眞如に合するの行爲は善にして之に背くものは惡なりとなすと論じたる如きを以て加藤博士は決して滿足の答辯とは思惟せられざるべし若し眞如を天則とし而して天則に從ふを善背くを惡とし且之に從ふことは必然に成就し之に背くことは必然に失敗し其成就が即ち善因に對するの善果、その失敗が惡因に對するの惡果なりとせば因果應報と云ふことに就いては最早論なかるべきなり然れども予輩は加藤博士の云ふ天則をその如くに解するの當れるを疑ふ

予輩の見る所にては加藤博士の所謂天則は機械的必然作用(Mechanical view)の意義に解せざる可らず究極の意味にては天則に逆らふことは天則の中にある者の爲し得ざる所なり例へば一物躰としては物躰の法則に從はざるべからざるが如し落つるも上るも共に均しく物躰の法則に從へるなり此の如き機械的必然作用が世界萬物を貫通せりとなし而して道德なる者も此作用の(唯だ人間社會の或狀態に於けるの)一結果に外ならずと見るが加藤博士の論旨ならん故に或意味にては善も惡も共に天則に從つて出でたるものなり然れども均しく機械的必然作用に

又正當の結果なりとは云はず然れども其論が今日の科學的研究の少くとも一方面を代表し其方面より出でたる結果なることは明なり現に博士の論の如きは科學的精神又方法を唱ふる西洋の學者間には頗る流行し居るものに外ならず予輩は惟ふ佛教家が加藤博士に對して辯ずる所あらんとせば勢ひ廣き哲學上の議論に立ち入らざるを得ざるべし恐くは多くの佛教家には加藤博士の論は一向に馬鹿らしく奇怪なるが如くに思はれんそは彼等と博士とは餘りに其思想の根底と趣きとを異にすれはなり

加藤博士の論は啻に佛教に云ふ因果應報説に對する點に於いてのみ注意すべきの價値あるにあらず之を推し究むれば實に倫理學の根本的大問題を提げ來らざるべからず予輩は倫理學上の一要問題として世間の學者が之に注意せむことを欲するなり之を論究するは取りも直さず天則の何者なる又道德の何者なるかを尋ぬるなり天則てふもの又道德てふものを解するの如何は是れ此問題の骨髓となるべき點なり佛教家の發兌する一雜誌が加藤博士の論に對して博士の所謂天則は佛教に謂ふ眞如の諦理ならんか請ふ先づ佛教に於いて說く所を見よ眞如の

然れども吾人が社會を組成するに方りては社會の生存即ち社會の維持と進步とに利あるものを正善となし不利なるものを邪惡となし以て善惡邪正の別を立て之を賞罰褒貶するにあらざれば決して社會の生存を營むこと能はざるにより遂に道德の生ずることとなりて之によりて吾人の行爲の善惡邪正を分別し以て賞罰褒貶を施すことゝなりしなり

加藤博士の論は佛徒の注意を惹くべき價値ありと思はる佛徒が之に對して抗辯せむと欲する時には必ずその懷持する道德論の根底を明示せざるべからず予輩は佛者が加藤博士の議論に注意を傾け且之に對して十分辯解する所あらんを欲す如何となれば之によりて佛敎的道德論の基礎を世人に明示するの便利を得ればなり基督敎が近代の科學的思想の結果に對して切りに辯じ來り又今尙ほ辯じつゝある如くに佛敎も亦之に對して辯ずべきものを多く有するなり佛敎の哲學的又宗敎的根據は近世の科學的精神方法及結果に對して如何なる位置を有するものなるかを明にせざるべからず加藤博士の論の如きは是れまさしく佛敎的道德論が近代の科學的と稱する倫理思想に對する位置を明示せむことを迫れるものなり予輩は必ずしも加藤博士の道德論を以て今日の所謂科學的精神の全躰の

合する行爲をなせば其報酬として早晩必ず災害を蒙るべしとするものなれば全く天則に合せざる誤謬させざるを得ざるなり何となれば余が從來論じたるが如く道德は本來天地自然に存するものにあらず之を換言すれば道德夫れ自身は決して天則にあらずして唯吾人々類が社會を組成するに至り社會の維持進步の要具として天則的に(多少人力を假て)發生進步したるものなれば此道德の標準たる善惡邪正を以て天地自然に存する所のものと認むることは決して出來得べからず隨て天地自然に存せざる善惡邪正の爲めに天地自然に其應報が必然生じ來るべしと信ずることも亦出來得べからざるをなればなり………

………前述の如く善惡邪正の別は唯吾人の社會上に起れることにして本來天則に存するものにあらざれば吾人の善惡の行爲は社會に於てこそ褒貶賞罰を受くることなれども天然に於て褒貶賞罰のあるべき理絕てあらず是故に姑く吾人を社會の一個人と看做さず單に天地間の一動物として考ふるときは吾人の行爲は他の動物に於けると同く善惡邪正を以て論ずべきものにはあらずして唯必然の理由即ち已むを得ざるの原因より生ずるものとすべし之を細說すれば吾人が正善の行爲をなさんと欲するの自由心より之を爲すにあらず邪惡の行爲をなさんと欲する自由心より之をなすにあらず全く正善の行爲をなさゞるべからざる必然の原因ありて之をなし邪惡の行爲をなさゞるべからざる必然の原因ありて之をなすものと知るべきなり果して然らば正善の行爲も之を賞すべきの理あらず邪惡の行爲も之を貶すべきの理あらざるなり

點と見るべからずば何を以て佛教の須要義となすべきぞ須要の點に於いて釋迦所說の外に出で又其の上に出でたるものをば倘ほ能く釋迦を祖述したるものと云ふべきか而して大乘敎はまさしく須要の點に於いて釋迦所說の上に出でたる者ならずや予輩の見を以てすれば大乘非佛說論の必然の結果は通常所謂佛敎の信仰を打破するに至らざるを得ずと考ふる也

（明治廿八年七月發行、六合雜誌第一七五號）

自然界と道德界

（善惡の因果應報）

頃日文學博士加藤弘之氏は哲學雜誌第百號に『佛敎に所謂善惡の因果應報は眞理にあらず』と題して論じて曰はく

佛敎にては因果の理を說くこと詳なれども就中吾人行爲の善惡邪正の上に就て言ふもの多くして善因に善果あり惡因に惡果ありと說き之を因果應報の理と云ふなり蓋し此因果應報主義は天地間自然に善惡の別ありと認めて吾人が此自然的の善に叶ふたる行爲をなせば其報酬として早晚必ず福利を得べく若し又吾人が此自然的の惡に

せば或は此の如き論を爲すを得べきがこは畢竟ずるに佛の本躰と云ふ一假想を以て强ひて變遷の中に一貫を求めんとする者に過ぎず基督敎會初代の或學者が耶蘇基督はローゴスの化現なりローゴスは凡べての眞理の源なり故に猶太に現れたる所の耶蘇基督以前に於いても又猶太國以外に於いても眞理の述べ傳へられたる者は皆基督の敎なり皆基督敎的眞理なりと云へると何の揀ぶ所ぞ

若し或一の敎門を以て佛敎と云ふべくば唯だそれが釋迦に歷史的關係を有すと云ふのみならず少くとも須要(Essential)の點に於いて釋迦の眞實說きし所と同一なるを要す少くともそれ等の點に於いて釋迦所說の範圍外に出づるを許さゞるなり然らば遂に問ひ來たるべき問題は佛敎の須要義は何ぞやと云ふ事なり是れ恰も基督敎神學者が基督敎の須要義は何ぞやと今更改めて問ひ來たるが如し上に引用したる『佛敎』雜誌の論者は云ふ「佛敎と外道とを精密に區別することは到底得べからず同じく人類の能力より出で均しく印度人の產物なればなり佛者は三法印の有無を以て佛敎と外道とを別つと雖も外道必ずしも三法印に背かず佛敎必しも三法印を嚴守せざるなり」と若しその言の如く三法印を以ても佛敎通有の特

に有するか連綿たる歷史上の關係を有するが故に皆之を佛敎と云ふか若し然らば是れ恰もユニテリアン敎義を奉ずる者が歷史的關係を有するの故を以て自らクリスチャンと名乘ると同じ而も歷史的關係を有するもの必ずしも創唱者の原初の思想を維持せるものにあらず漸次發達を爲すに連れて原初の思想の缺けたるをば補ひ過れるをば正すは固より可なり而も斯くして成りたるものを以て創唱者の本意なりと云ふは多くは後人の臆測揣摩に出でずや若し補ふべく正すべくんば一時は外道と稱して彈訶したりし者に取る所あるも敢て妨げず而も斯の如くしゆいて尙ほ必ず創唱者の原始の眞意を開發したりと云ふべきかカント、フィヒテ、シェルリング、ヘーゲルは連綿たる歷史上の關係を有す而も必ず先人の本意が後人によりて開發されたりと云ふべきか

或は佛なる者は一時代に現れたる一人物に限れるに非ず佛の本躰が時々形を取つて此世に現れ而して先佛の說きたる所は後佛之を承けて更に其深意を開く諸佛相繼いで其間敎旨に幾多の變遷進步ありと雖も皆是れ佛なる一本躰の說法に外ならざるが故に此等を總べて佛敎と名づくと云はんか佛三身の說などを以て

ふ佛教は釋迦佛の所說ならざるも可なり又必ずしも今日の大乘ならざるも可なり而も尙ほ何の故に特に之を佛教とは名づくるか佛說か非佛說かの論は素と釋迦と名くる印度古代の一人物の所說なるか否かの論なり何者と定めず唯だ眞理を覺れる者の所說なるか否かの論にあらず若し唯だ覺者の教を以て佛教と云はゞ佛教なる語は最も便利なると共に又極めて寬濶なる名稱となる何人も我が覺者と見る所の者の教を名けて佛教と云ふを得ん予輩は佛教と云ふ時に特別に想起する者の釋迦佛なるを以て至當のことと考ふ恰も基督教と云へばナザレの耶蘇を想起するが如し而も素と基督なる語は耶蘇なる一人物の固有名詞にあらず委しくは釋迦と名づくる佛と云ふべき如くに耶蘇と名づくる基督と云ふべきなり今日に於ては佛教と云ふ以上は釋迦佛に何等かの特別の關係を有せざるべからざる也

然らば釋迦の死後多くの星霜を經る間に多人數の手によつて成りたる大乘教又今日所謂大乘教に更に一步を進めたる或一の教門(大乘の小乘と異る程に大乘とも異れる教門)をも能く佛教と名づくべくば此等は皆如何なる特別の關係を釋迦

其卑陋なる一面は獨り大乘創唱者の罪に非ず當時一般の通想の然りしが爲なり則ち其功も當時の社會にあり其罪も當時の社會に在り故に其除くべきものは時勢に依て之を除き得べく取るべきものは時勢の產出し來るに從て新たに取るも不可なきなり此の如くにして大乘教始めて活物たるを得るなり

又曰はく

大乘果して佛說なりとせば釋迦佛の價値は大乘を非佛說なりとするよりも高し但し大乘も小乘と共に不完全なる點あるを認めざるべからず大乘果して非佛說なりとせば釋迦佛の價値は大乘を佛說なりとするよりも低し但し大乘の小乘に勝るとを認定するに就て何等の障害ともならざるなり大乘の價値は佛說なるが故に高きにあらず眞理を含むと小乘よりも多きが故に高きなり余輩は大乘非佛說、佛說唯小乘の明證ありとても其の爲めに大乘を捨てゝ小乘を奉ぜんと企つるものに非ず云々

論者の趣意甚だ明瞭、此の如きは先入の感情に束縛さるゝ通常佛者の能く言ひ得ざる所、予輩はその論旨のなべて公明なるを喜ぶ其の論じて「大乘諸宗の盛衰興廢一として遺弟の念力に掛らざるはなし佛說なると否とは其運命を左右する所以に非るなり」と云ふに至つては言ひ得て最も痛快、予輩は此の如き大膽なる又明快なる論者の言には耳を傾けざるを得ざるなり然れども論じてこゝに至れば其謂

啻に釋迦の所說の不完全なるのみならず大乘そのものも既に現にその形を成せる所を以て無上の法門と見なすを得べきか歷史的發達を語る人が一旦大乘非佛說論に許す所あるやその自然の傾向は現在の大乘を以て更に開發進步し得る者となすにあり何となれば大乘の信ずべきは唯だその眞理なるが故なり而して眞理非眞理の判決は遂に各個人の判斷力に訴へざるべからず而して其の各個人の判斷力の向ふところ必ず大乘に於いて非とすべきものなきを期すべからざればなり釋迦中心說は破れて遂に各個人の理性を中心とするに至らざるべからざるなり

近刊の『佛教』(雜誌)を見るに一論者あり大乘非佛教說論の拒み難きを說き而して論じて曰はく

大乘教は一方には形式を小乘教に取り他方には充實を吠檀達數論等の諸派に取りて構造せられたらん然れども當時一般の俗想は婆教諸派にも小乘佛教にも透入せるが故に大乘創唱者も均しく之を信受採用したらん大乘教が一面に高妙なる教理あるさ同時に他面には又卑淺陋劣の分子あるは恐らく是が爲ならんされば其高妙なる一面は獨り大乘創唱者の功にあらず當時此の如き材料を供給すべき學說ありしに依る又

ずやその如き牽强附會の說は爲さゞるべし
釋迦の所說は消極的に誤れり(即ち缺けたる所あり)と云ひ得べきのみならず又積極的に誤れりと云ひ得ざるか婆羅門敎にも多く見る如き幾多の怪誕は經典の中に記されたるが故に、釋迦の所說なるが故に之を信ずべきか若し今日の科學的證明に反する怪誕は信ずべからずとせば少くともそれ程は釋迦の所說を積極的に誤れりと云はざるべからず或は又此の如き怪誕は釋迦の自ら信せし所にあらず唯だ衆生の根機に應せむがために當時の俗說を假り用ひたるのみと云はんか上に云ふ牽强附會の說とその牽强附會なる點に於いて何の選ぶところぞ若し又或基督敎神學者が耶蘇基督に於いて取る所は其科學的智識にあらず宗敎的眞理にあり宗敎的眞理に於いて全からば基督の宗敎上の權威に毫も缺くる所あらずと云ふ如くに釋迦の科學的智識と他の智識の範圍とを別つべきか而も既に大乘を以てその所說にあらずと見たる以上は宗敎上必要なる智識に於いても釋迦の不完全なることを許さゞるべからず斯く不完全なるものを以て我が信仰の中心となすを得べきか如何

教は倒れざるべからざるに至らん何となれば縦令ひ大乘を奉ずるも之れを奉ずる所以は釋迦の説なるが故にあらずして眞理なるが故なりと云ふに至るべければなり釋迦の所説なると否とは大乘を輕重するに足らず釋迦の所説を奉ずる理由の如何に拘らず若し其所説が悉く眞理ならば之を信ずるに妨ぐる所あるべからずと雖もそを悉く眞理なりとは豫め定むべきにあらず否な其所説の完全ならざることは大乘非佛説論より見れば必ず承認せざるべからざる所なり何となれば小乘に勝れる大乘は其所説にあらずと見ればなり釋迦は十分大乘を悟得し居りたれども唯だ之を説かざりしのみ時代に應せむがために自ら説かずして時機の熟するを待つて其後世の徒弟をして之を説かしめたる也と云はんか若し此の如き牽強附會の説を爲すべくんば何の説をか爲し得ざらん大乘は佛説にあらずと容したる以上は如何なる證據を以て釋迦は之を悟得し居たれども唯だ口に説かざりしのみと云ふを得べきか釋迦を以て十全の覺者なりと豫め信せざる以上は斯く云ふべき理由なく又大乘を以て其悟得せる所となさゞる以上は彼を十全の覺者と見るを得ず歴史的研究の結果として大乘非佛説論を唱ふる程の人は必

なるものを解釋せむと力むる傾あり恰もバイブルに對する高等批評の勢力を得來たるや其批評の結果を容れて以て基督敎々義を維持せむと力むる神學者の輩出したるが如し彼れと此れと其揆を一にする亦自然の趨勢なりと謂つべし然れども大乘非佛說論は如何なる影響を在來の佛敎に與ふべきか其當然の趨勢は遂に何の處に到るべきか其必然の結果を悉く承認して而も尙は佛敎を遵奉し得べしとせば其の謂ふ佛敎は如何なる意義に解せらるべきか

通常我國の佛徒が佛敎の極意と見做したる大乘は佛說にあらずとなし釋迦の自ら說きし所は大乘に比して劣るとせらるゝ小乘の外に出でずとなし其謂ふ小乘なるものもそが淵源要素を外道に仰げる所ありとし釋迦一人の口より出でたりと言ひ傳へたる三千の法門も實は長き年處を經て發達變遷し來たりたるものに外ならずとせば如何夫れ大乘非佛說論を容すと云ふは今云ふ程の事を容すと云ふの意味ならざる可らず而して之を容すの結果如何予輩の見る所に從へば其結果は遂に釋迦を以て本尊となし凡べての標準極致を彼れに求むる佛敎の破滅に至らざるべからず他の意義に解したる佛敎は兎も角も釋迦中心說を固持する佛

るの一致なり一旦無趣味となりし世間は無限の趣味を以て我れに還り來たる一家一村の事妙に我れを勞するの價値あるものとなる我は之がために勞して他の奪ふべからざる滿足を覺し來たる而もその滿足は醉生夢死する者の滿足にあらず理想を追ふによりて生ずる滿足なり吾人の精神的生活はこゝに至らざれば安んぜざるべし即ち其生活の進歩に三段階ありて最初の段階は主觀が客觀を離れずして存在する時期、次は主觀が客觀を離れ之に對して自己の獨立を持せむとする時期、最高の段階は主觀が再び客觀に還り自己を其中に發見して高等なる一致を成就するの時期是れなり予輩はヘーゲルの所説に深奥なる眞理の存することを認めざるを得ざるなり

（明治廿八年七月發行、六合雜誌第一七五號）

大乘非佛說論の結果

此頃佛者の中には大乘非佛說論に注意を傾くる者あり就中進步的思想を懷ける佛徒の中には研究の趣くところ大乘佛說論の證據の擧り難くして却て非佛說論の根據の強きを看取し早く此の非佛說論を取り入るゝも不都合なきやうに佛教

ず寧ろ唯だ無對峙と名づくべし而も對峙なく衝突なきが故に不平なく悲憤なく怨恨なし客觀の掟は取りも直さず主觀の掟にして其間些も分離なし現實の外に理想なく生活なく客觀上定まれる風俗習慣に遵うて毫も疑ふ所なし即ち何心なく我が非我に合し自己が世間に合し理想が現實に合し居れるの狀態なり是れには一種の美ありと雖も要するにこは小兒の無邪氣なるの美に外ならず吾人の精神的生活は永く此の時期に停まるを得ず我と非我との對峙を覺識するに至り又此れと共に一切の衝突と不平とを感じ來たる是れ精神的生活の危機なりこゝに立ちて曾て平穩なりし初期を顧みれば寧ろその慕はしくして現在の惱しきを感ぜずばあらず而も全く初期に還るを以て滿足すべくもあらず何心なく田畝に起臥する農夫の慕はしくして而もその機械的生活の貧しく趣味なきを意識せずんばあらず吾人の精神的生活は混沌的一致の初期に還らずして富贍なる眞正の一致を覺識する第三期に上らざるべからず是れ非我を離れ世間を卑下したる我が非我の中に世間の中に我を發見し來たるの時なり非我と相分れたる我が再び非我と相合する時期なり此の一致は差別を沒するの一致にあらずして差別を含め

世間往々右陳ぶる如き悲境に沈淪する者あり殊に今日の如く變動の多き、刺激の劇しき世に在りては幾多有爲の青年にして斯かる境界に陥るものあるを見る彼等は客觀と離れ世間と獨立したる自己を覺識するに至れるを自ら嗟歎せり彼等は寧ろ何心なく田畝に起臥する農夫を羨む而も又農夫の如く唯だ機械的生活を送るに滿足せず彼等の心事の憐むべきはさることながら是れ要するに吾人が精神的生活の通過すべき一時期を未だ通過し了らざるの致す所なり彼等は敢て下等なる利欲のために自己の獨立を固うせむとするにあらず彼等の理想の高潔なる、寧ろ嘉すべきものあり而も尚ほ專ら非我を排して差別の我を立てむとするに止まるは未だ主我の(即ち我が強きの)弊を去らざるものなり彼等は未だ非我の中に我を忘るゝことを知らず尚ほ差別我を自覺することの強きに過ぎ未だ非我の中に我を忘るゝによりて我を發見するの妙機を解せざるなり

吾人が精神的生活の初期は未だ我が非我に對し理想が現實に對して獨立せざる時なり故に彼れと此れとの衝突なし而も其一致は差別を含まざるの一致(貧しき一致)なり混沌として分れざるの一致なりこの如きは未だ眞の一致と云ふべから

全く非我に外ならずとなす故にこれを卑下して我を其のために勞することを屑しとせず非我なる世間は唯だ我れを限り我れを縮め我れを抑ゆる者と見られ一家一村一郡の事皆な我れには相應しからずと思惟せらる而も斯く世間と相離れたる我に對しては世間は常に頑としてそを限りそを縮めんとす此に於てや我と非我との衝突は免るべからず我は非我を卑み其の何のために存在するかを了解せずと雖もその非我(即ち我に取りて少しの趣味だも無き世間)は依然として我と對峙す我は如何かすべき我は此世に生活する一切の信仰と趣味と勇氣とを失はざるを得ず是に至つてや厭世はその必然の結局なり啻に世を厭ふのみならず遂には我れをも厭ふに至る非我を卑むのみならず之と相容れずとなしたる我れ自らの理想をも疑ふに至る世間の束縛を脱して獨立せんとし自在ならんとしたる我れなるもの(我れの理想なるもの)も是れ遂に一の空想ならざるなきか噫我は如何かすべき放恣淫蕩非我を忘るゝと共に我をも忘れんか果して能く之を忘れ得べきか寧ろ此の現世を辭して或は一切を忘れ得るの望ある闇黑の界に入らむか噫我は如何にすべき

予輩の必要と認むる文躰の大改良に一歩を進むるものなればなり

（明治廿八年六月發行、六合雜誌第一七四號）

精神的生活の三時期

吾人が精神的生活の進歩に一大危機あり精神の生長するや必ず一度は此の危險なる時期を通過せざる可らず而もその此處に滯止する間は幾多人生の過誤と悲慘とに陷る人生の悲事恨事多しと雖も概ね皆この時に起こり來たる謂ふところ危機とは如何なる時ぞ自己が世間と相離れ理想が現實と相分れ我が非我に對し主觀が客觀に對して獨立する時即ち是れなり此時期に於いては我れに對する世間のあることを知るのみならず世間に對する我れのあることを自覺す世間に對する我れのあることを自覺するのみならず其の我れなる者が世間(即ち非我)の束縛を脫して自由自在ならむことを欲し之を離れて自己の獨立を保たんことを力む此の時の我は非我と相分立して專らその差別又獨立の方面を自覺したるの我なり主觀は客觀を排して之を我れの外に置き客觀の中に少しも我れを發見せず非我は

所謂和學者輩は力めて之を冷笑し去らんとするの傾ありと誠に怪しからぬ次第にして彼等の任務を曠うせる者に非ずや個々の點は兎も角も大躰の趣意に於てかゝる改良論を冷笑せむには之を非とする確乎たる議論なかる可らず多くの和學者輩は眞實確乎たる反對論を有するか何ぞ之を發表するに吝なる實は徐に讀みもせで唯だ之をけなさんとするにはあらざるか聞く所にては彼等の中少なからぬ部分の人々は維新以後紊れにみだれたる文法の吾輩の盡力によりて漸く古法を守れるやうになりたるものを今又た兎角の議論を爲さば一には世人を惑はしめ一には吾輩の切角收めたる功績と勢力とを害ふの恐あり關根氏の論の如きは贊成するは素より非、之を駁するも却て其評判を高うして徒らに世人をして疑惑を起さしめんを恐ると云ひて只管之を不問に附せんと欲するが如くなりとぞ老輩なる國學者の頑陋なるは言ふも詮なきことなれど斯かる姑息の思想を懷ける者當今屈指の和學者と稱せらるゝ若輩の人々に多しとぞ其姑息は笑ふに堪へたれども亦我文運と敎育との爲に歎くべきことにあらずや予輩は關根氏の如き知名の和學者が奮然蹶起一般和學者の迷妄を破らんことを希望して止まず是れ

々あり予輩は先づ着手し易きは文法文躰の變更なりと考ふその大躰の方針に於いて定まる所あらば少しづゝにてもこれが實行に着手するは敢て困難の業にあらず唯だ着手の決心を爲せば足れり故に予輩は愼嚴に文字論を稽査する傍には先づ文章語の改良に從事せんことを勸告す是れ今日我國の言語學者及文學者の任務なり文法論の如き固より深く我國の言語を研究するの要あれば俄に決了すべき問題にはあらずと雖も其着手の難易は文字の改良に比して同日の談にあらず予輩は廣き意味にての文躰論(文法論をも含む)を先づ着手すべき我文壇の大問題なりと考ふ

予輩は右云ふ文躰論の着手として頃日關根正直氏が「早稻田文學」に掲げられたる如き議論を歡迎す予輩の見る所にては關根氏の論せらるゝ如く從來の文法の制限を寛うするは言ふ迄もなく尤もなることにして喜んで同意する所なるのみならず予輩は百尺竿頭一歩を進めて更に口語に近づかれんことを勸告す俗語脈の研究に其脚を投せられんことを熱望すそは兎もあれ氏の論の如きは頗る歡迎すべき者なるに(縱令ひ歡迎せざる迄も頗る注意すべき者なるに)聞く所によれば世に

覺ずるに廢することの極めて不便にして其損失の堪ふべからざるを云ふなるべし之を外にして廢し得られざる理由はなし果してその如く漢字は利益あるが故に廢すべからざるか是れ實に問題なり公平に云へば漢字存廢の利害は未決の問題なり予輩は只だ爰には其問題の決して忽にすべきものにあらざることを主張す議論の結果は何れに結着すとも必ず一應は大に論ぜらるべきものなることを主張す唯だ漫然今日の勢ひ漢字の廢止は行はるべからず文字の改良は成就すべくもあらずと云ひて之を不問に附せんとするは予輩の取らざる所なり何ぞ彼等論者が我文運の將來と敎育の發達とを慮ることの不親切なる

文字論は其影響する所甚だ大なり故に一旦その決着して實行の運びに至らば他の事は言はずして定まるもの多からん文法文躰の如きも自ら改まる所あらん然れども文字論と文法論とを一にせんは非なり文字論の影響の重大なる代りにはこは俄に決せらるべき問題にあらず其論の決する迄は文章語論は棚に片附け置くべしと云ふが如きは問題の性質を了解せざるの誤謬なり文字の如何に改めらるゝに拘らず又或は遂に改められざるに拘らず文法文躰に改めらるべきもの多

予輩の知る者に一老媼あり其幼孫の小學に在りて更に一級を進まん時には別に敎師を撰びて其日課を復習せしめざる可らずと思ひ居たりしに近頃小學讀本の頗る平易になり少しくむづかしき文字には皆假名の附けあるやうになりしが故に別に師匠を求むるの必要なく無學問の我れ如き者も其のさらへを見てやることの出來て大に樂になれりと語りき思へ今日の兒童が現今の文字と文躰とのために如何程無益の辛酸を嘗めつゝあるかをアベセ二十餘字を學び且口語をさへ解し得ば一通りの書物を讀み得ると別に文章語を學び又數多き漢字を記憶せざれば文章は讀みも書きも出來ざると其利害得失何ぞ言ふを須ひん現用の文字又文躰の不都合なることは事理明白にして予輩の今更喋々するを要せざる所なれども如何せん世人の未だ多く此に冷淡なるを、特に怪しむ平生文明の利器を云々し事々に文明の趣意に基ける進歩改良を唱ふる一派の論者にして文字論並文法論には相關せざるものの如くなるを今日に於いて文字文法論を輕視するは我文學の未來を思はず敎育の進歩を慮らざるの甚しきなり

漢字の廢し得られざることを云ふ者あり今日の勢ひ漢字を廢し得ずと云ふは畢

唯眞實に此問題を思はざるの致す所なり既に久しき習練を經て綴りなれたるものに取りては或はさまでの不都合を感ぜず又時には却て一種特別の趣味あるが如くに思はるゝ所もあらんが文章と口語との懸隔の餘りに遠きは文の効用を害ふこと甚だ大なり之を口語との懸隔の僅小なる英獨佛等の文章語と比較せば其便益の差異如何ぞや特に兒童に作文を敎ふるに當りては其不便不都合は實に言ふに越えたるものあり小中學校に於ける作文なるものの如何に敎授せらるゝかを見よ兒童自らの感想を陳ぶるにあらずして唯だ聞き得たる或は書物中に探り得たる語句を(恰も初心の詩人が詩語碎金の文字を列ぶる如くに)列ぶるに過ぎず手紙を書くと云へば更に又一種無類の文句を列ぶることを習はざるべからず而して小中學敎師の頑冥なる强ひてむづかしき漢語を排列せしめ漢文躰を摸擬せしめずんば心に安んせず口語に近き文は文章にあらずとして之を斥く和學者は亦古代の文法を遵奉せざる文は文にあらずとして之を卑しむ噫何等の頑愚ぞ迷妄ぞ而も是れ今日の常態なり是れ偏に文章なるものに關する迷信の未だ除去されざればなり

文字論並文躰論

此頃文字論及文法論の稍〻世間の注意を引き來りたるは予輩のまことに我文學又敎育のために賀する所なり然れども世間一般が此論の必要を感ずること尚未だ淺きに似たり有識の論者と雖も之を輕視して顧みざる者少からず中には文字文法の改良を唱へたりとて到底行はるべきことにあらざれば先づ從來の儘にして之を自然の成りゆきに任すべしと考ふる者さへあり此の如き放任主義は文字製作等の甚だ爲し易からぬを思へば一應尤もらしきことなれど更に考ふれば是れ唯だ深く問題の關する所を思はざるの過にして之を放任して顧みざるべき理由は萬々あらざる也若し眞に我文學の發達と敎育の進步とを思はゞ縱令ひ其事の實行には幾多の困難ありとも文字と文法とは必ず一應は精細に鄭重に熱心に論ぜらるべき問題なり現在我社會に行はるゝ漢字と假名との併用が修學上實用上吾人をして無益の勞力を消費せしめ之がために敎育事業に一大損失を招き來たすは明白なる事實にして此事に氣附かず又此に何等の改良をも欲せざるは是れ

の生命は大に害されたりと云ふ者多し或は變動の結果として多少斯くも見えたる所あらんが予輩は大躰上斯く云ふべき理由を發見せず宗敎の生命は保守派に盛にして進歩派に衰ふと云ふ輩は唯だ從來見慣れたる者ならでは宗敎的ならずと思へるなり彼等は受洗人の少きを以て宗敎的熱心の衰へたりと考ふ彼等の多くは宗敎と云ひ基督敎と云ふ名に迷へり宗敎なるものは遂に上等社會には其痕迹を絶つべしと考ふるが如きも亦同一の誤謬に坐するなり

大躰の精神を唱ふると組織を綿密にするとは各〻その時あり今は大躰の精神に重きを置いて綿密なる組織の成立を將來に期すべき時なり然らずんば却てその組織なるものに妨げられん組織を急にせざるは是れ却て之を大にするの道なり何ぞ必ずしも多くの事を人に敎へんがために組織を立つることを速にせん進行の大旨を看破する者は能く是によりて其精神の皷舞せらるゝ所あるを自覺せん

（明治廿八年六月發行、六合雜誌第一七四號）

滿足せんは難し寧ろ宗教の基礎を磐石の安きに置かんには自由討究を取り入れたるものならしめざるべからず然らずんば却て宗教をして唯だ下等人民間のものたるの非運に陷らしめん研究的精神を許容するか將た之を排斥して遂に宗教をして學識ある社會に留まることを得ざらしむるか孰れか其の一を選まざる可らず

研究の精神方法を云ふ所の宗教は縱令ひ學識ある社會の一小部分に行はるゝとも其勢力甚だ微弱なり宗教としては大に其熱誠を缺けり是れ事實の徵する所也と云ふ者あらんかこは唯だ一を知つて二を知らざるものゝ言なり一見宗教的熱心を缺く如くに見ゆるは是れ却て或社會に眞實其宗教の勢力の維持さるゝ所以也加之予輩はその宗教としての熱心の必ずしも缺乏せるにあらざるを見る宗教的熱誠なしと云ふは宗教的熱誠なるものを見る眼の狹にあらずや其宗教的として見慣れたる熱心にあらずば熱心にあらずとなす是れ根本的誤謬なり此根本的誤謬に陷れる者は宇宙に對する崇高壯大なる感情にも宗教的熱誠なしと考ふ我國に此頃批評的研究の叫ばれてより自由派なる者又進步派なる者のために宗教

失へるものなりと是れ決して然らず予輩の見る所にては宗敎界内思考の精神方法を云ふの必要は決して消滅したるにあらず今尙ほ精神方法に眼を閉ぢたる信仰の永く其儘にてあられざることを認めざる者多きにあらずや人心は機躰的一致を有する者にして其一部分の變ずると共にまた其他部分の變せざるべからざることを悟らざる輩多きにあらずや吾人に熱情を與ふるものは豈獨り一種の信仰個條を墨守することのみと云はんソクラテースが其思索したる事柄よりも寧ろ其精神と方法とによりて天下後世を動かしたることの偉大なるを思へ

唯だ一敎會一宗義の中に育てられて少しも他を顧るの必要なき處には或は自由研究を唱ふるの必要もなく凡べての人をして祖先代々相傳へたる信仰に安せしむることを得ん又安心決定を以て宗敎の能事終れりとする方面よりしては斯の如きは最も望ましきことならん然れども我國の如きに於いては是れ到底行はるべきことにあらず少しく考ふることをする人々は一敎會一宗義以外を顧みざるを得ざるなり而して一旦之を顧みて自他の根據を問ふに至れば自由討究の精神は遂に抑ゆべからざる也今日の我國に於いては全く自由討究を排除したる宗敎に

一好例なるべし國家は理性の發現したるものとしてヘーゲルの重きを置く所、而も詮ずれば其の重きの存する所以はそれが理性發展の機關となればなり即ち國家の價値は理想の世界的進化の機關たるに外ならざるなり世界的進歩の機關たることを忘れては國家は遂に其光榮と尊嚴とを失はん

國家の目的を世界的進歩の上より見ざる國家主義は陋固なり世界的進歩の國家的組織によりて成就せらるゝことを見ざる世界主義は空想に失す强大なる國家と國家との競爭によらずしては人類の進歩は實現さるべくもあらず國家主義を唱へんには須らく此理を看取すべし國家主義と世界的文明の主義と豈に氷炭相容れざるものならんや將來我國の教育も前陳したる如き國家主義に立たしめざる可らずと考ふ

（明治廿八年六月發行、六合雜誌第一七四號）

宗教的熱心と自由討究

或は云ふ方今の問題は思考の方法如何と云ふよりも寧ろ確信すべき教義は何ぞやと云ふにあり今日に於いて事珍らしげに宗教界に自由討究を唱ふるは其時を

理想上の根據を得るなり個人と個人との悉く調和されたる完全なる社會に到達せざる間は個人と個人との爭は免る可らず却て各〻一特色を代表する點に於いて全力を盡くして相爭ふべし是れ唯だ爭はんがために爭ふにあらず爭ふことの社會の進歩に缺くべからざればなり此の如く國家と國家とも亦時に全力を盡して相爭はざるべからず自己を保存せずば如何で其天職を全うせん一特色を代表せざる國家は世界歴史の競爭塲裡に永く其地歩を占むることを得ざらん進歩を來たすの爭は特色と特色との衝突なり斯く見るによりて始めて國家の相和するも相爭ふも共に正大なる意義を含むこととなる也

前陳の思想は素より目的ある進化の人類の成りゆきに行はるゝことを許容せるものなり予輩は盲目的變遷を以ては遂に人類歴史の眞實の意義は解せられずと考ふ予輩は國家主義に哲學的根據を與へんとせば其の哲學思想は須らく目的ある進化(teleological evolution)を説くべきものなることを主張す若し國家勃興に大動機を與ふるの哲學あらば是れ必ずや予輩の今唱ふる理想的進化を説く所のものなるべし惟ふにヘーゲルの説ける國家主義の如きは哲學的根據を有する國家主義の

を增さんがために曷ぞ之を採ることに力を致さゞらん人類の進歩を眼中に置かずして一國家の天職なるものあるか國家の天職を思はずして國家主義は能く高壯偉大なるを得べきか予輩が國家以外を見ざるの國家主義は其正當なる堅牢なる基礎を缺くと云へるは是れが故なり

一國家は何故に能く世界人類の生活に祝福を與ふべきか他の國家の取りて代り得ざる特色を具へ之れを以て人類の進歩を助くればなり此の如き特色を有するの自信なくして如何で其天職を語るを得ん一人にして衆德萬善を備へ得ざるは能力限ある個人に存するの約束なり一社會の進歩は個々人の特色の相寄りて以て增進せらるゝ如くに世界人類の進歩は特色ある幾多の國家の協力によりて成就せらる而も其特色の完全なる調和を得ざる間は彼我の間衝突競爭の存すべきは勿論なり是れ强ひて避くべき事にはあらで却て人類の進歩に缺くべからざる條件なり故に國家と國家とは時に相戰はざる可らず國民は自らを强うして他に抗するの力を養ふべきなり我れ强からずんば我天職を如何せん我が人類の進歩に與ふべき特殊の祝福を如何せん是に於てか忠君愛國なるものも高尙偉大なる

的に關聯せしめざるは予輩の取らざる所なり但だ問ふべきはその謂ふ國家主義の如何なるものなるかなり

予輩は國家以外を見ざるの國家主義は正當なる堅牢なる根據を有せずと考ふ其の如き國家主義の陋固褊狹に失するは必然の弊なり予輩はその如き國家主義を以ては吾人に高壯なる理想と偉大なる希望とを與ふるに足らずと考ふ陋固褊狹の弊を救はんには如何すべき予輩は曰はん其道國家の目的をして世界文明の進步に離れしめざるにありと一國家を建つるは啻に其國家の存在のためのみにあらずその存在は世界人類のために負ふ所ありと見ば如何是れ國家をして一層高尙なる又宏大なる基礎を有せしむるものなり我國家は世界人類の生活に祝福を與へんがために存在すと見ば誰か其國民たるもの高壯偉大なる理想と希望とを以て燃えざらん又誰か世界の潮流を見て之に處するの道を講ぜざらん此の如くにして如何で其國家の臣民として抱負の大ならざらん何人か忠君愛國の至情に熱せざらん焉んぞ頑冥陋固唯だ內に安ずることのみをせん外に取つて以て我を益すべきものあらば我れが一國民として世界に屹立するの天職を完うするの力

の掲げられて更に完全なる高等なる一致の要求せられずばあらず從來敎育家を始めとして國家主義を言ふ者最も事理に明なる少數の人々を除いては概ね國家以外のものを其眼界に置かず國家を立つるの目的又價値如何ぞと云ふが如きことは彼等の絶えて胸中に想ひ浮べざる又浮ぶるを好まざりし所なり只だ一國家そのものをのみ見てその謂ふ國家主義の鞏固なる如くに思惟したりし也故に其弊や往々陋固に失し自ら狹うして誇り喜び安ずるが如きの傾ありき然るに斯かる思想を以てしては却て國家主義そのものの根據を弱うする所あるは久しく發見せられではあるべからず徒らに大和魂を誇るのみにて世界文明の大勢に思ひ至ることのなきを非するの聲此頃或る注意すべき方角より聞こえ來たる是れ當に然るべき所なり予輩は此聲の更に明に聞こえむことを願望す之を忘るゝは國家を過るの端緒なればなり惟ふに世界文明の進歩を離れては國家なるものも亦其正當の根據を失はん敎育及其他の事に國家主義を稱ふるは敢て非なるにあらず否予輩は却て最も熱心に國家主義を唱ふるものの一人なり宗敎にさへ多少國家主義を注入するの必要を認む宗敎を唯だ出世間のものとなして之を國家の目

き俗物の少からざる等の理由のみを以ても美術の要求と道德上の要求と相容れざることのあるは上に陳べたる所の如し然れども廣き意味にての道德を語らば此の衝突は道德と美術との衝突にあらずして寧ろ道德内の局部間の衝突と見るを可とす蓋し予輩の所見にては美を發揮し實現せしむることは眞理を追慕發見することと等しく人間生活上の道德の一部分なればなり常に所謂道德は實は道德の最要部分を指せるのみ然れども此點に就いては爰に詳論するの用なし

（明治廿八年五月發行、六合雜誌第一七三號）

國家主義の解釋

（敎育の方針）

敎育は須らく國家主義に立つべしとは最早論ずるまでもなき明確なる眞理として承認され且その所謂る國家主義なるものも論を要せずして其意味の明瞭なるが如くに思惟するが滔々たる世間の風潮なりしかども近來また少しく事の他面を言ふの聲を聞くものの如し事若しその一方に偏すれば必ずや早晩また其他方

上之を取締るの理由あるは否む可らず然れどもその果して風俗上害あるか否かは亦大に習慣によることなれば少しく其の如き裸躰書を見慣るゝに到れば風俗上或人々の思ふ程の影響はあらざるべし此點に就いては歐米は我國に比して頗る自由なり而も歐米の俗我國俗よりも膚を露すことを忌まずと云ふにあらず却て或點に於ては我國俗の方之を忌むことの少きものあり又歐米の俗衆我國の俗衆に比して必ずしも審美眼の立ちまされりと云ふにあらず而かも裸躰書の特に風俗を害ふを聞かず彼地の俗衆は唯だ之を見慣れたるのみ裸躰書に關しては從來の習慣よりも尚ほ少しく自由を與ふる所あるも其風俗に及ばさん影響は特に憂ふべき程のものにはあらずと考ふ然れども眞實に善良なる風俗を害するの點あらば此點に於いては美術の要求は道徳の要求に屈すべきなり風俗を害してまでも美人の裸躰を書くの用なきは勿論なり

事物を實世界より斷ち離して遊離せる影象と見る點に於いて觀美心は道徳上須らく避くべき所の危險を冒すことなきか觀美的心構は若し之に耽らば一種の不道徳に陷るものにはあらざるか如何爰には之を論ずることをせず唯だ觀美眼な

實世界に於ける肉感肉情を以て之を迎ふる者に取りては其裸美人の畫は未だ美術品として存せざるなり餘りに肉感肉情欲念をのみ表出せるものは之を實世界より遊離せしむるに難し春畫の美術品として見難き所以こゝにあり故に慾情をして遊離せしめんには多くは其おぼろげなるを要す又其他の要素(心靈的生活の他部分)と密に結合する所あるを要す美人裸躰の畫は春畫と等しからず而かも畫工の描き方により又觀る者の眼によりては能く春畫に墮落することあるべし是に於いてか道德上風俗上之を非難するの理由を生ず

非道德的事物も亦能く美術の主題となる或人の云へる如く(ルナンなりしかと覺ゆ)シーザル、ボルヂヤの如き大惡人もさながら暴風雨の美なる如くに美なり而も是れ必ずしも觀美心と道念との衝突せるものにあらず只だシーザル、ボルヂヤの品性も吾人の心靈的生活の一面(頗るイントレスチングなる一面)にして而して之を遊離せる影象として見るが故に美象の一となるなり然れども若し彼れの如き奸物を見て之を壯として之に倣はんとするものあらば是れ既に觀美的境界を脱せると共に道德上風俗上難ずべき者となるなり美人裸躰の畫も亦此の如し風俗

も姑らく之を斷ち離して別に完了せる一個躰若しは一世界として浮ぶるに觀美的心構の祕訣は存するなり遊離されたるものは素と實世界に於いて吾人の關心する所なりし一切の感想(心的生活の內容)なり而も之を吾人の關心する實世界より切斷し去る故に一面より見れば悉皆吾人の關心する所のものなれど又一面より見れば吾人の關心するものの外にありDisinterested Interestなる語此に至つてその意味あるを覺ゆ而かも斯くの如く遊離されたるものは皆能く美象を成すにあらず美象を成すものはその內容の適當に表彰されたる者に限る即ち吾人のスピリチュアル、パーソナリテーの能く其表彰を發見したるもの是れ美象なり實世界に於いては實と非實との對峙のために吾人の心靈的生活が未だ善く適合せる表彰的形躰(Embodiment)を取らざるに姑く遊離せる世界に於いて之を取りて活如として存する是れ美を觀る心の中に一種言ひ難きの滿足を覺ゆる所以なり

論じて此に至れば裸躰畵の如何なる意味にて美術品なるや知るに難からず美人浴後の畵を觀、これを遊離したる影象とせず又吾人の之に對する凡べての感想をも遊離したる感想とせず實世界に於けるものを欲望するの欲望を以て之に接し

あらずと云ふべき理由なし予輩は肉情の必ずしも美を汚すものにあらざることを主張す然らば美人の裸躰畫を見て肉慾を燃すものも尚ほ能く觀美的境界にありと云ふべきか豈に夫れ然らんや幾多の慾念を想起するは毫も妨げず但し觀美の境にあらんには之をして遊離したるものとなすを要す官感も之を遊離せる官感となすべし情緒も想念も之を遊離せるものとなすべし欲念も之を遊離せる欲念となすべし必ずしも其の強弱を云はず只だ遊離せるものとなせば足れり(官感又情感は遊離せしむべきも欲念は遊離せしむるを得ずと云ふに十分なる理由を見ず)遊離せしむるとは姑く日常の實世界實生活との關係を斷つを云ふ實世界との關係を絶つて唯だ心面に遊離して懸れるの影象となす所に觀美的作用の要は存するなり姑らく實生活との關係を斷ちたるものなれども之を非實と見るにあらず寧ろ實と非實との對峙を脱せしむるなり(吾人の實世界實生活は其如き對峙を以て充てり)心面に遊離して懸れるの影象なれども之を客觀と區別して唯だ主觀の所造とのみ見るにあらず寧ろ主觀と客觀との對峙を脱せしむるなりその如く遊離せしめられたるものは素と實世界實生活に於いて經驗したるものなれど

想なるものの美の內容となることを否ます而かも是れ只だ理想なるものが吾人の心的生活の最高要素をなせばなり

予輩の見る所にては吾人の心的生活に於いてイントレスチング(interesting)なるものの全躰、是れ即ち美の內容となるものなり究覺すれば吾人のSpiritual Personality是れ即ち美の內容なり而して肉欲肉情なるもの(一切肉に屬すること)も之を意識する方面より見れば亦吾人の心靈生活の一部分をなすと謂はざる可らず男女間の欲情の如きはその生活中の頗るイントレスチングなるものの一なり晉に此の如きもののイントレスチングなるのみならず罪惡の如きも亦然り故に惡人も亦詩中の人物となすに適す而して之に對する者は亦之に同感する所あるなり蓋し罪惡なるものも吾人のスピリチュアル、パーソナリテーの一方面を表はす者なればなり人の或は全く肉情肉感を離れて美人の美を味ふと云ふものあるも予輩は其言の果して其實驗を表出したるものなるかを疑ふ

然らば則ち欲念、取りわけ肉感肉情、又取りわけ男女間の情慾(但しこれは肉に屬するもののみにはあらず)に訴ふる所あるの故を以て美人の裸躰畫を眞正の美術に

を味ふの甘さを想起するの要素なしと云ふを信せず物色の美の如き、物形の美の如きも生理上の作用によりて眼感又筋肉感に覺ゆるの快味を想起することなしと云ふを信せず繪畫音樂の如き詩歌戯曲の如き皆吾人の心裡に生起し衝突する數多の欲念情緒を描出せるもの、而して之に對する者の胸中また之に應ずるの欲念情緒のおぼろげながら生起せずと云ふを得るか若しその生起することなくば如何にして詩中の人物に同感するを得ん又之に同感すること無くして如何にして其の詩の美を味ふを得ん佳人才子の奇遇を小説の上に讀む者又は其の劇に演せらるゝを觀る者若し自ら佳人を求め才子を慕ふの念を浮べず又之に遇うて歡ぶの情を意識せずば何ぞ其小説演劇を面白しとせん高尚なる審美眼を以て美人の畫を觀ると云ふも其美を歡ぶの心裡には多少肉感肉情のおぼろげながら生起する者なしと云ふ可らず其膚の豐腴潤澤なるは何故に美なるか祕藏なく云はゞ之に觸るゝの快感の想念せらるゝことが少くとも其時の心狀の一要素たるに相違なし素と男子に女子を慕ふの心(即ち一種の欲念)なく女子に男子を求むるの心なくば何故に特に女子の美はしく特に男子の美はしく見ゆるぞ予輩は所謂る理

は或は一にして足らざらんと雖も少くとも其最も主要なるものの一は男女間の肉情を想起せしむることに存するや明なり而して或論者は一切吾人の欲念を催すものは眞に美と觀るに足らず些かにても欲念を以て迎ふる所あらば是れ決して美を觀、美を樂しむの心と云ふべからずと考ふ此の如き論者の立場(たちば)より見れば欲念の中最も強大なる種類に屬する男女の情を意識せしむるものは素より啻に風俗上害ありと云ふのみならず美術品としても排斥すべきものなるや論を待たざるなり

觀美心と欲念との關係如何予輩は美學上所謂官感學派(センシユアリスチツク)の所説を全受するものにあらず然れども凡ての官感上の快樂又その欲念の働が或は其後景を爲し或は其の一要素を爲すことなくば美的快感の起るべき所以を解せざるなり理想なるものを以て美の内容となす論者と雖も如何にして美象が吾人に快感を與ふるかを心理的に説明せんとするに當つては多少官感又慾情に關するものを引き來たらざるべからず予輩は色づきたる柿の實を美しと觀るとき(予輩は之を畫きたるもののみ美と見てその實物を美と見ざるの理由なしと考ふ)その美感の中毫も柿

せん或は之を彫刻して置物となすも誰か之を非美術的若しは非道德的のものと見ん殊に想像的人物に至りてはその如何程裸躰なるものあるも人の之を咎むることをなさず例へば仁王の如し斯く論じなば必ず云ふ者あらん赤子若しは仁王の裸躰畫裸躰像の如きは今の論にあらず此等は如何に之を凝視するも毫も汚穢なる情慾を催ひ來たることなければなりと嗚呼之を解げしたり一派の論者が非難する所のものは無邪氣なる赤子若しは餘りに人間の情に遠き仁王の如きに就いてにあらずして既に十分人間の情慾を意識する程に成人したるもの、取りわけ婦女子、又取りわけ美婦人の裸躰畫若しは裸躰像に就きてならん然らば何故に美婦人の裸躰畫は最も非なると問はんに是れ觀る者をして最も多く劣等なる情慾を意識せしむるの媒介となればなりと答ふるの外なからん美婦人の裸躰そのものの醜なるべき理なし若し醜なる所あらば是れ唯だ其社會一般に行はるゝ道德的感情(即ちその所謂風習等となれるもの)を害うて不快の感想を起すの處に存するならん何故に其社會の風習は裸躰を露はすことを忌むか何故に之を露はすことをば野蠻の情態として卑下するに到りたるかは社會學上の問題にしてその原因

るも我國民の氣質の改むべき所をば改めて更に健全なる雄壯なる國民たらしむるは固より予輩の切に望む所又實際力むべき所なり此邊國民教育の深く注意すべき所とす

（明治廿八年五月發行、六合雜誌第一七三號）

觀美心と肉感

觀美心と道念との關係に就いては種々論ずべきことありて此頃八釜しき裸躰美人畫論の如きも要するに之に屬する一問題に外ならず抑も美術として裸躰畫の許容すべきものなるか否かは爰に煩しく論ずるまでもなし唯だ裸躰なるの故を以て之れを書き之を刻みたるものをば美術と云ふべからざるの理由はあらず予輩は天然物皆必ずしも美なりと云はず然れどもその生物界に存在する者の如きは概ね內在的意匠の表彰されたるものとして頗る高等なる美を現はせる者なることを疑はず生物の一として人躰は何故にその裸躰の樣〻に於いて美象の一なるを得ざるか實際我國に於いても裸躰を書き若しは彫刻し而して人の之を見て毫も怪しとせざるもの少からず赤子又は力士の裸躰畫の如き誰か之を見て怪しと

るものは我國民の重きを置く程に重きを置くべきものなるかは別論なり但し堅固なる國家を爲さんには忠義心は少くとも其主大なる要素の一たらざる可らざることは爰に斷言するも不可なからん我が懷抱する理想の爲には粉身虀骨するも毫も厭はざる精神は偉大の事業を爲すに堪ふる資格の少くとも一大部分をなすものならずや

之を要するにラッド氏は我國の封建時代の如何なるものなるかに十分注意することを爲さず又我國が其時代を去りて未だ日の淺きことに十分の注意を加へずして論せられたるが故に特に我國民の氣質に基けるものと唯だ歷史上通過すべかりし時代の結果とを十分に別かたれざりし嫌なき能はず故に又我國民の眞實あるよりも一層之を感情的に描かれし嫌なき能はず氏の云へる如く偉大なる道德的影響の來りて我國民の氣質に大變革を來たすにあらずば我等は到底大國民となる可らざるものなるか否かに就いては予輩は只だラッド氏の預言の成就さるべきか否かを見んのみ我國民の氣質に感情的なる所あるは予輩の承認すべき所又深く自ら顧みるべき所なるは決して否むを要せず又如何なる方法を以てす

唯だ主君に對する忠義の爲のみに非ず凡べての事に於いて如何にオノル(Honour)を重んじたるかを知らずば武士間に於ける自殺の心理は解すべからず廉耻と云ひ義理人情と云ひ弱を扶けて强を挫くの義侠と云ひ皆我國民(武士のみならず)の胸裡に蟠まれる道義的觀念にして是等は決して獨立の價値なきもの(即ち只だ忠孝の方便)としてのみ想念さるゝにあらず只だ彼此の間輕重ありて輕きもの重きものと衝突すれば前者は後者に處を讓らざるべからずと思惟するのみ我國民が社會的道德の上に於いては忠義心に特に重きを置けるは論なし然れども他を皆獨立の價値なきものと見るにあらず縱令歐米人が忠義心の外幾多の獨立の道義的關係を承認すとも其間輕重の別を立てずと云ふべからず又其相衝突する塲合なしと云ふべからず其相衝突する時に於いては輕きが重きに處を讓らざるべからざるは當然のことならずや但し社會により國民によりて輕重の別を異にするは言ふまでもなし(究竟すれば如何なる原理に從うて一切の衝突の塲合を處すべきかは常識の範圍を脫して倫理學に入れるの問題なり)其別を異にするの故を以て一國民を評して獨立の道義的觀念に乏しと云ふべき理由なし果して忠義心な

象にのみ注意して全躰を看過せるの嫌なき能はず若しラッド氏深く武士道の精神を解せられたらんには氏が我國民の道義的觀念に關するの論は頗る其面目を改めたるならんと思惟す例へば然諾を重じ信義を重じ且之を實行したること武士の間に於けるよりも更に立ち優れるの例を示し得るや武士に二言なしと云ふ諺もあるを思はざる可らず我國は封建時代を去りて未だ多くの年處を經過せず事務的道義の念に於ては(故に金錢又時間等に關しての觀念は)殆ど何事も商賣的なる米國人と我國人と大に相異なる所あるは勿論なるが是れ必ずしも我國民の氣質の然らしむる所と云ふ可らず我國民が商業的ならぬ封建時代を去りて尙ほ日の淺きことを記憶せざる可らず歐米人より見て我國人の爲す所時に甚しく道德的觀念に背けることのあると等しく我國人より見ても歐米人の爲す所實に可笑しき程小供らしく又卑劣なることありラッド氏が我邦人の明瞭なる道義的觀念に乏しきを云へるは寧ろ道義的觀念の彼我相異れるを示すものには非ざるか

ラッド氏は日本人には忠義と云ふ一道義を除いては他に獨立の道義なしといへど是れ未だ能く我國民の道德的意識を解せざるの誤謬なり武士が身を棄つるは

して多く據る所を求めざるべからず

予輩は我國人の感情的なることを承認す然れどもラッド氏の證明せむと欲したる程感情的なるやを疑ふ激變の多かりし一時代にあらはれたる現象の上に見ゆる程には感情的ならずと考ふ意氣相感ずることの強く曾て革命的事變に狂奔して政躰の變更常なかりし歐洲の一國民に比して日本人は特に甚しく感情的なるかラッド氏は感情的氣質は學術の研究に適せずと云ふ然れども今日に於いて我國民を評して學術に適せずと斷じ得るか近世科學の研究も亦我國人の能くせざる所にあらず今日の事態を以て見れば商業に於いては或は日本人は支那人に一歩を讓れる所あらんも科學的研究及發明に於いては遙に其上に位せり支那人の歐米に遊ぶ者概ね科學を能くするよりも寧ろ文學に長せることを表はさずや我國の商業も亦唯だ其の今日を以て將來を卜すべからず我商業が漸次東洋に發達せむとするの徵候は看取するに餘りあり

忠孝に關し約束を守ることに關し又殊に金錢に關する道義上の觀念は我邦人と歐米人との間に差異あるは勿論なり然れどもラッド氏の論は只だ一面に於ける現

に注意し置くべきは氏は多く現今我國の過渡時代に於けるの現象を取つて其の論據となしたれど此の如き現象は頗る心して引用すべきものなること論を待たず過渡時代の異常の現象の中にもさすがに國民の氣質を曝露するものもあれど又全く變則のものもありて直に之を以て國民の特性を推知す可らず氏が云へる一介の書生の身を以て大事業に任せむとする青年豪傑の多き、政黨の分裂常なくして未だ大黨派の組織されざる、忠孝てふ感想に激せられて種々奇態なる行爲に出づるが如き是れ皆多少國民の氣質を表はせる所もあらんと雖此等は又特に今日の如き過渡時代に於いて立憲政治の運用も未だ其練習の初歩なるに起因し且唯だ極端なる保守的反動の一面に起因したる所もあれば直に取つて以て國民の特性を推斷すべからず過渡時代には亦其時代に處するの樣々に國民氣質の發表する所あるは勿論なれど特に感情的ならぬ人民も劇變の時代に在りては或は感情的なるが如きの行爲に出づることありラッド氏の論は氏が日本の歷史に通曉せざるの故を以て多くは只だ現代の事件を取りて其論據となしたる所、論法上遺憾の點なりと謂はざるべからず尙一層氏の論を强うせむには日本古來の歷史に徵

其人民亦斯の如し一見誠に喜ぶべく親しむべく禮儀あり親切なる又奇とすべき人民なりと雖も此の美しき上層の下には確固たる道德的觀念を以て統理せられざる國民的感情の烈火の潛めるを見るなり

ラッド氏の論旨は以上記載せる所の如くなるが其の我國民の氣質を指摘したる大躰の點に於いて頗る見るに足るものあるを疑はず但し我國民の一時に熱して久しきに耐へざる、時に奮勵刻苦して事を成すことあるも氣がはりのし易き、鋭敏怜悧なれども堅牢雄大の處に乏しく、事物に感激するの甚しき時に異常の行爲を敢てする、即ちラッド氏の所謂感情的なるは是れ屢〻自他の評論に上りたる事にして此點に於いて眞實我國民の深く自ら考ふべき所あるは疑ふを要せず、ラッド氏が我國民の幾多の特質を其所謂感情的氣質なる一中心點に歸せしめて之により て說明を試みんとしたるは氏の論に於いて最も見るべきの點となす

前段抄錄せざりしかどもラッド氏が其論旨の證憑として引用したる事實の中には適切ならずと思はるゝものあれどこは一外人の論としては殆ど免るべからざる所又甚しく氏の論旨を害ふ程のものにもあらざれば爰に云はざるべし但し爰

逢へば早く既に「仕合がない」と諦めて手を措く此の如き氣風は佛教によりて多少涵養せられたる所あらんも是れ皆日本人民の感情的氣質を表する者に非ざるはなし

日本人民の氣質の感情的なるを蓋し疑ふべからず其行爲に幾多の矛盾の存する如きも此氣質によりて解するを得ん是れその人種の氣質として深く根ざせる者なるが如し之を變更せんには永く又廣く波及すべき大影響の來たるあるを要す日本は必ずや尙ほ今後も文明諸國の注意を引き又多くの讃辭を呈せられん殊に自ら感情的なるものの喜ぶ所たらん然れども强大なる道德的影響の斯人民に大變革を來たすことなくば世界の人民中一國民として決して偉大なるものとは成るを得ざるべし

日本の風土と其人民の氣質と如何なる關係を有するか固より容易に答ふべき問題にあらず只だ其間相比較すべきもののあるに注意するは不可なからん日本は山水の美に富めるの地、是れ實に美術を勸め冥想を催ふすの地なり然れども又噴火山地震洪水颶風の國、美にして奇なる地層の下には恐るべき破壞力の宿れるあり

にあらず身を賣るも厭ふ所にあらず忠義のためには人の能く忍んで詐僞を働きたるをば毫も怪まざるのみか小説戲曲に著して之を賞讃せるもの少しも珍しとするに足らず忠義の外殆ど獨立の德義として承認せらるゝものあるを見ず正直といひ約束を守ると云ひ男女の間を正うすると云ひ皆獨立の德義と見做されざるが如し。

日本人の如く怜悧なる人民にして商業に適せりと云ふ可らざるは一見奇なるが如くなるも其原因の一は彼等が氣變りのし易きことにあり東洋を遊歷したる者は皆知らん信用を置いて可なるは日本商人よりも寧ろ支那商人なり利害を精算して短氣を起さず失敗することあるも落膽せず約束を守りて眼前の小利のために迷はざる是れ皆感情的なる日本人の爲し難しとする所なり感情的氣質は俠客を作るべきも商人を作らず

一時烈火の如く感情に燃えて一事業に熱衷するも一旦其爲し遂げ難きを見るや忽ち之を抛て顧みず實に其心事の洒落なる驚くに堪へたり日本人は早く運命を見て之に安ずるに急なり一時の激昂一時の熱心に似合はず些少ならざる障碍に

之を不調子ならしめ不恰好ならしむるを惟ふに日本國の如きはあらざるべし日本人民の心を支配する唯一の叉凡べてを侵蝕する德義は先づ國君に對して制限なく忠なるを次いで父母に孝に主人に忠なるを是れなり一般日本人民に取りては忠孝が至高至大の德行、凡べて他の德行は是に從屬すべきもの、是に比較しては殆ど價値なきものなり一旦忠義に感激するや彼等の敢て爲し得ざるの行爲なし其人民の歷史には此處の山腹、彼處の水頭殆ど忠憤義烈の跡を語らざるものはなし自及して忠を盡すと云ふが如きは其の最もありふれたる事跡なり些細の事のためにも切腹するを以て榮譽とす而して彼等の感情の激する所之を爲すを辭せざるなり名も知れざる一女子が聊にても主上の宸襟を安じ奉り國家の躰面を維持せんために思ひ迫りて自殺を遂ぐる如きは是れ實に日本風に行へるなり其心情の愛すべく憐むべきはその穩健なる常識に乏しきと相對して一種異樣の觀を呈す

日本人は忠孝のためには如何なる事を爲すも辭する所にあらず外人の眼には最も卑劣なる殘虐なる行爲と見ゆることをも敢て爲す詐僞竊盜の如きも辭する所

基礎に置かれ明瞭なる概念を缺けり日本人が自然界を愛するの心は能く其感情的氣質を示す和歌の如きは之を示して餘りあり

日本國の現狀を見るに才氣ある青年が君主、國家、又は其の特に貴重する理想のために燃えたつばなりの心情を懷いて事業を創始せむとすることの多き殆ど他に其比例を見ざる程ならん一介の書生の身を以て學術に社會に宗教に或は改革者或は先導者或は預言者を以て任ずる者何ぞ夫れ夥しきや日本の學生の中にはその滿腔の熱情を以て懷ける目的のためには隨分勤勉勞苦をも辭せずして能く賞讃すべき成蹟を擧ぐる輩も尠からず其の心情の愛すべき未だ曾て彼等に勝れる者に遭遇せしことなし然れども彼等の熱情は往々にして浮誇に陷る所あるを免れず唯だ感情に激せられ實際の如何を顧みずして徒らに空中樓閣を畫くの弊あるを免れず

漠然たる而かも高尚なる又人を鼓舞する力ある道德的感情(即ち所謂穩健なる常識に遵うて形づくりたる生活の規律とは區別すべき又倫理上の問題に關する明瞭なる思想とも區別すべき感情)が人民の行爲を支配し之を高潔にすると共に又

とが日本人民の特性なりと思はる

夫れ感情的或は感激的氣質(Sentimental temperament)はくさぐさの刺激に應ずるに敏に(殊に感情の邊を以て之に應じ而して明瞭なる論理的分析を爲さず)其意志の動くや突飛にして忽ち挫け易きを以て其特性となす此の如き氣質は動もすれば政治上の調和を來たすべき實際の事情の斟酌をなすこと又絕えず一事業に勉勵して倦まず撓まざること又學術上の精微の理を闡發するの忍耐力を持すること又高遠なる思想及感情と日常の綿密なる事柄との間に確固たる關係を立つることを難んず之を難んずる代りに斯かる氣質は頗る美術に適したる所あり即ち是れ人をして雅趣あらしめ巧手ならしめ又天來のものならんが如き思ひ附きを懷かしむる氣質也

日本人の生活は其如何なる關係に於ても右陳ぶる如き感情的氣質の特徵を表示せざるはなし日本人が自然界に對する心搆へは感情的にして學理的ならず又實務的ならず而して此の心搆へは數百年間神道及佛敎の感想に宿され又之によりて養はれたり神道は先祖崇拜と自然崇拜との混淆にして此兩要素共に或情念の

少しく予輩の意見を附記せむと欲す

ラッド氏曰く日本人の爲す所を觀るに其の矛盾に富めることは外人の眼には奇異に感ぜられざるを得ず或社會上並政治上の感想に於いては殆ど一人をも遺すことなく合躰しながら一貫せる政策を固持し得ること數ヶ月を出でず大主義の下には須らく忍ぶべき小異のためにも政黨は絶えず分裂し遜讓に過ぎたるまでに禮儀を重んじながら時に他人の感情を害することの極めて甚しき行爲に出で犧牲的精神を表はさんとするの切なる、些細の事にも死を見る歸するが如くありながら屢〻(アングロサクソン人の標準を以てすれば)最も惡むべき卑劣卑怯の行爲を敢てし或方面に向つては極めて精緻なる美術的感性を有しながら又他の方面に向つては驚くべき程凡べて配置の宜しき釣合の正しきをば求むるの念に乏しく至極高尚なる感想を懷いて而かも最も惡むべき罪惡を犯すに躊躇せず此の如きは一見實に奇異の觀を呈するも一たび之を人種的心理の上より考ふればその何故に然るかを見るに難からず然らば日本人の如何なる人種的性質が之を然らしむるかと云ふに惟ふにその感情的なることを以て之を説明し得ん實に感情的なるこ

泰然たらんは己を知れる者にあらずば能くせざる所なり

我國民の大覺悟と大智慮とを要する恐くは今日の如く切なるはあらざるべし今日は是れ國民進行の首途なればなり諺に云ふ一年の計は元日にありと我國民は今日に於いて自重心と大抱負とを懐いて屹然自立し奮勵すると共に又宜しく自己を知りて其の足らざるを補ひ其弱處を强うすることを努めざるべからず今日に於いて我國民が己を顧みて我が氣質を考ふるも亦一要務なりと思惟す

本年一月發兊のスクリブナー雜誌に米國エール大學敎授ラッド氏が日本人の氣質を論じたる一文あり(Mental Characteristics of the Japanese)ラッド氏は先年我國に來遊し數月間滯在したることあり親しく我國人の性質を觀察すること唯だ數月間に亘るのみなりし氏の論としては割合に臆測揣摩の謬見に陷ること少く割合に熟讀に價ひするものあり氏は其論を以て心理學上日本人の氣質を觀察したる者となし力めて好惡の念を去りて其判斷の妥當ならんことを求めたりと云へり氏は米國の學者中著名なる者の一なり近時特に心理學上の著述を以て知らる氏が論の一顧を價ひするものなることは特に疑ふを要せず左に其論旨の大要を紹介し且

遂に殺了すべければなり國民の抱負の大なるは誠に嘉すべし抱負の大なるはおのづから其民をして偉大の決心偉大の奮發從つて又偉大の事業を爲さしむるの力あるものなればなり然れども苟にも自重の念に厚く抱負の大なると己惚の心とを混ずべからず智ある者は己を知る而して己を知るの智を缺く者は遂に蹉跌することなきを得ず國民は自己を知らざるべからず

思はざる功業を樹て思はざる稱讃の聲を聞き企てて成らざるなく進んで取らざるなきが如く感せらるゝ時に方りては特に國民は自己を顧みて輕躁浮誇の擧動に出づる莫からんを要す順境に在りては逆境に逢はむことを忘る可らず事皆意の如くなる時に或は一頓挫を來して國民をして自己を顧みる所あらしむるは却てその如き頓挫なきに優れり國民の意氣軒昂他を睥睨して得々たるに際し其躰面を傷くるが如き所業の其自國民によりて爲され又は其收獲せむと期したる利益と光榮との思はぬ大障碍物によりて妨げられんとするが如きは國民の味ふべき經驗の一として決して望ましからぬ事にあらず此の如きは世界的大勢力の一たらんと欲する國民の須らく待ちまうくべき所にして而して之を待ちまうけて

的根元を知悉すと云ふが如きことは敢てせずとも若し成るべく我執の念を去り一家の事一國の事人類の事に身を配し己れ其系統の一部分をなす事を思ひ鞠躬努力せば不安の心念生ずるの餘地なからん然れども若し尚ほ天地の實相を探らんとの念止み難くば先づ安心立命と云へる念を去り科學的研究に身を委ね而して後哲學の考究をなせ科學の十分なる智識なくして哲學を研究するが如きは決して青年の得策にあらず哲學は決して玩弄品の如きものにあらず之を究めんと欲するの士は須らく大なる素養なかるべからざるなり、

(明治廿八年四月發行、六合雜誌第一七二號)

日本人民の氣質

世界列國の豫想せざりし又自國民と雖も必ず然るべしとは豫期せざりし光榮ある事業を爲し一躍して强國の列に加はらむとするが如き時に方りては其國民たるものは亦深く自ら顧みて其現在の眞實の位地及價値を看取せざるべからず國民自重の精神は飽くまでも之を堅固にするを要す自屈の念は現存する生氣をも

なる探撿をなし己れ一人の研究を以て足れりとせず實驗場を立てて多數の助手を使用し且つ廣く天下に材料を求め統計をなし己が一生に研究し能はざる事は之を其後人に讓り前代後代相共同して力を盡すに非ずや斯の如き廣大なる研究をなしてさへ尙ほ一微分子の運動一細胞の特質一心狀態の性質を解釋する事容易ならざるに非ずや然れども彼れ科學者は學究は己れ一生に於て成就すべきものに非ず人類の始より終に連るべきものにして己れは只其一極微部分を明らかにし之を後人に傳ふれば則ち足れりと覺悟し敢て成功を專有する事を欲せず己が力の限を盡し人類の有する智識に一片の增加をなし得るを己が喜びとするなり是をかの哲學者宗敎家が主觀的想像をなし勞する所極めて微かにして而かも全宇宙の實相を探らんと望み己が勝手に宇宙を解釋し己れ一代に一世界觀を構成し而かも安心立命の爲めに一世界觀を構成し己が成功を見て誇らんと望む心念に比するに其差異幾何ぞや斯の如くして得たる世界觀なるものが宇宙の眞を探ると云ふ點に於て果して幾何の價値をか有する根底確かならざる世界觀を賴みとして安心立命をなさんとするは抑も危險の事ならずや縱令天地萬物の絕待

始めたる事業は一世一代に成就すべきものに非ず子々孫々に至て始めて稍〻成就の途に就くべきものなる事を思ひ已れ其一隅の基礎を築くとの覺悟をなし假令狹くとも一箇の系統に身を配するは寧ろ吾人をして眞正の安心立命の地に達せしむるの途にあらざるべきか若し夫れかゝる日常平易の人事に滿足する能はず更に天地の眞相を知らんと欲せば先づ眼前の實物を精細に研究し其の奥妙を窺ふ事をせざる可らず天地を學ばんと欲する學者の心は愼重嚴格ならざる可らず根據なき架空の想像說を立てゝ天地の實相を探り得たるが如く思ふは自ら欺くの大なるものに非ずや宇宙は無邊無際なり我れわが智力の有限なる事を忘却し此の無限の天地を一夜に達觀せんと欲す荒唐無稽も亦甚しからずや放膽傲慢なる自稱哲學者は一粒の砂塵をも解釋する資格なき者なり況んや天地をや天地の眞相を悟得する哲學者たらんと欲せば先づ科學者の勉强と忍耐と覺悟とを有せざる可らず古來科學者にして天地間に行はるゝ諸法則を發見したる者にして刻苦碎礪の功を積まざりしもの一も之れあらざりしなりダアヴヰン、ヘルムホルツ、ヴントの如き學者が事物を研究する法を見よ彼等は實物に就て極めて綿密微細

我執主義を脱し己れ一箇は宇宙一大系統中の極微分子なりと悟り而して其各極微分子が系統全躰の生命の一部分を爲し其進行の一段階を爲すと見又之を爲すが其各自本來の目的なりと考ふるは吾人に安立力行の地を與ふるの所見にあらざるか概して科學の研究乏しく客觀的事物を學ぶ事尠く宇宙を系統的に觀ずる事を知らざりし時代及國土に於ては厭世退隱的の傾向增長したるが如し地動說出で進化論出でて以來人類が如何に多望に如何に爽快に發育舒暢したるかを見よ箇々人に就て考ふるも亦同樣なり唯我に執着し主觀的の考察のみをなす間は人は決して多望和樂の境に入る能はざるなり相關相持の一大系統中に在り乍ら我れ一箇單獨孤立する如く思ふは大なる僻見ならずや宇宙の進行は永遠より永遠に亘り其目的は永遠より永遠に成就されつゝあるなり然るに我れは僅々四五十年の短時限に於て己が目的を成就せんと求むるは大なる謬見たらずや宇宙の進行を離れて我の進行あるべき筈なく宇宙の目的を離れて我れの目的あるべき理なし然れども宇宙は一大系統を組織し無限の進行をなすものなる事を思ふ能はずんば一家一鄕の一系統をなす事を考へ此の系統の爲めに其の力を致し己が

織し山川草木亦然り一國一家に至りても其内の事物は相互連結し一の系統を形ちづくるなり而して又是等諸種の系統は相連結して更に大なる系統を組織し宇宙のあらゆる事物は此最大系統の生命を增長し其目的を達せしめんが爲めに生滅しつゝあるが如し勿論箇々の事物は夫れ自らの生命と目的とを有すと謂ふを得べし然れども畢竟此事物は全系統の生命の爲め目的のために存在する者にあらずや絕待平等の方面より見ば全法界に進行なるものあるか目的なるものあるかは茲に論せず近世科學の硏究する現象界に就いて見れば其進行其目的を語るも敢て不可ならず一方より見れば箇々事物の變轉は卽ち全系統に多少の變化を生ずるものなるに相異なく又箇々の事物なくば全系統もなかるべきは勿論なれど其作用行動の上より觀ずれば主となるべきは全系統にして箇々の事物は其系統の進行の段階を爲し其系統中の一局部として自己の特殊の形態を保有するに外ならず是れ近世の科學より歸納し得べき結論にして科學は益〻精密に箇々の事物を硏究するに從て愈〻宇宙を系統的に解釋するの必要なるを發見するに至りたるなり然れば吾人が有すべき世界觀なるものは亦宇宙的系統的ならざる可らず

事に非ずされども安心立命を求むる頗る急なるが爲め深く學問研究する事をなさず極めて淺薄なる見識を立てて一種の小世界觀を構造し其中に籠居し一時の偸安をなす者の甚だ多きは實に憫然の至なり彼等若し此小世界觀を以て眞に滿足するを得ば尙ほ且つ可なりと雖も氣の毒なる事には人生實際の出來事は常に此箱庭の如き小世界觀に衝突し彼等をして安慰の念あらしめざるが如し彼等の心中綽々たる餘裕なきは畢竟唯我を基礎として世界觀を構成し其の內に住居するがゆゑなり安心立命とは種々なる解釋もある可けれど實は是れ一種の私心を滿足せしめんとの念より生じ來るものに外ならず我一己を以て宇宙の中心となし私欲をのみ滿足せしめんとすればこそ天を怨み人を咎むるが如き厭世的心念も發るなれかの己が一身をのみ潔くせんとする偏狹なる道德家が寬宏の度量なくして常に他人を敵視し而かも己が胸中に和樂の情なく遂に隱遁の念を發するが如きも亦是れ一種の我執主義が其人の根蔕をなすが故なり何程刻苦學問をなすも我執を去らざる限りは決して安心立命の地を得る事能はざるべし天地萬物一として相關相持ならざるはあらじ日月星辰は相結合し一の系統を組

敎は皆不完全より始まりて人智の進むと共に漸次完全の點に進歩しつゝあるなり天啓なるものの存することを云ふは必ずしも非ならず但だ其天啓を一國民一時代にのみ限るとするは非なり己が信ずる宗敎を人に與へんとするは一片の好意深く謝すべきものありと雖も猥りに一宗敎をのみ帝王とし凡べて他の宗敎を奴僕視し且つ其功を奪ひ去らんとするが如きは豈正大の心と謂ふ可けんや

（明治廿八年四月發行六合雜誌第一七二號）

小世界觀

多くの青年中には絶えて人生の問題に思を注がざるものあり或は多少人生問題に思を注ぐも驚く可き程の迷信を抱て滿足する者あり是等は我輩の論ずる限りにあらず只稍〻思想あり敎育ある青年が人生問題を考ふるの餘往々悲哀厭世的の心念を生じ失望落膽するに至るは我輩の深く遺憾とする所也此類の青年は多少哲學神學などを學びたる徒の中に其多數を占め居るが如し人生の悲哀を感ずるの餘哲學神學等に身を委ね以て安心立命の地を作らんとするは決して不可なる

世界萬般の事物の如く同一進化の法則に從て具躰的のものより漸次高尙のものに移りたるは疑もなき事實にして孰れも皆宗教進化の段階をなすものに外ならず假りに天啓教ありとするも其天啓は人間の智力を以て把捉せられざる可らざるものなれば人間は其實只己が智力の程度に從ひて其所謂天啓を了解するに過ぎざるべし然れば半開若くは無教育の人民が天啓なりとて此上もなく貴び居たる所も今日より見れば不都合の廉多かるべきは固より理の正に然る可き所なり此見解より云はゞ如何なる天啓教も一方に於ては人間教なりと云はざるを得ざるなり此見易き道理を思はずして猶太人若しは其他の一種人民に有し居たる宗教のみが天啓にて萬古不易のものなり他の國民が有し居たる宗教は人間の腦髓より出でたるものにて眞理を示すものにあらずとし若くは猶太の宗教を標準として他の宗教の眞僞を判ずるが如きは頗る僻見と云はざる可らず世界の人間の心は富贍多様のものなり此富贍多様なる心念より發出せるものなれば世界に存する宗教の多様なるも亦怪むに足らず又世界の人間の心念は進化止む時なきものなり此心念により保育せらるゝ宗教豈進化變轉せざる理あらんや總べての宗

猶太人が未開の程度にありし時は夫れに相當したる宗教觀念を有し漸次開明に進むに從て其宗教觀念も亦變化したりと云ふと何ぞ異ならん果して然らば希臘の宗教思想が漸次に變化したるも印度及其他の國の宗教思想が變化したるも皆是れと同樣なる行路によりてしたる也只猶太人の考へたる神と希臘人印度人等の考へたる神とは其趣同一ならざれどそは是等國民の特質上より潤色せられたるものにて猶太人は猶太人らしく神を考へ希臘人印度人等は希臘人印度人らしく神を考へたるなり要するに一を天啓敎なりとせば他も亦天啓敎なりと云ふに不可なし一を人間敎なりとせば他も亦人間敎なりと云ふ可らずや其起原及發達の趣に於いて彼れ此れと無限の距離を存せざる限りは一をのみ天啓敎と見做し他を人間敎と云ふべき理なし而してその如き無限の距離は予輩の見る所にては確實なる研究の證明し得ざる所なり

基督敎の神に關する觀念が漸次變化したる模樣と他宗敎の神に關する觀念が變化したる模樣と頗る相類同並行するはスペンサー等も既に事實に徵して詳論したる所にしてそを茲に述ぶるの遑あらずと雖も要する所彼も此も宗敎は總じて

てさへ尙ほ神を考ふるに半靈半形的の思念を以てしたるにあらずや降て天主敎希臘敎及新敎中に於ても數多の宗派は種々なる辯解をなすにも拘はらず未だ全ゝ偶像敎的臭味を脫したりとは云ひ得ざるなり基督敎の歷史は其發端より今日に至るまで偶像敎的宗敎觀念が漸次變じて靈性的宗敎觀念となる進化の一大歷史をなすと云て可なるにあらずや是を宗敎に關する人間智識の進化と云はずして神の直接なる啓示なりと云はゞ何れの宗敎かしか云はざるものあらんや多くの基督敎神學者は說をなして曰く猶太人の宗敎的思想が具躰的より漸次抽象的に變化し來りたるは是れ神が啓示をなすに當り其時代人民智識の程度に相應したる形式に於て之をなしたるが爲也一概に靈性的宗敎觀念を與ふことも到底彼等の了解し得る所にあらず故に初めに具躰的のものを與へ後に靈性的のものを與へたるなりと如何に高大なる天啓も人智を以て了解されざる以上は天啓なきと一般なれば神が智力の程度に應じ其啓示の法を變へたりとは洵に道理あるの說なり然れども此說は是れ一方より云へば猶太人が或る時代に於て有したる宗敎思想は全く其時代智力の程度相應の思想なりしと云ふと何ぞ異ならん即ち

宗教に關し特殊の觀念を有し居たるは他の國民が己が宗教に關し特殊の觀念を有し居たると同様なるものにて其所謂聖書なるものは他の宗教の經典と同じく多數の偉人が想像し思考し經歷したる事柄を記載したるものにして畢竟ずるに當時の社會の產物たるに外ならず若し野蠻人の拜物教より漸々進步して哲學者の宗教的觀念となるを以て宗教に關する人間的智識の進化なりとせば曷ぞ獨り猶太人が宗教に關して有したる智識をのみ人間的智識の圈外にあるものと云ふべけんや聖書中に顯はるゝ古昔の猶太人は等しく是れ一種の偶像信者なりしにあらずや元來猶太の宗教なる者は國民的宗教にしてバビロン人がベルを神としアッシリア人がアススールを神とじヒリステ人がダーコンを神としアラビア人がアルラーを神としたると同じ意義にて猶太人は耶和華を其神となしたる也初めに猶太人の拜したる耶和華は實に人間的の性質と欲情と怒と嫉と復讐の念と後悔の念とを有し居たる神なりしなり然るに夥多の預言者詩人等は種々なる情況上より此神を靈化し聖化し遂に理想的の無上神と變化せしむるに至りたるなり然れども斯の如き變化を生ずるまでには長き歲月を要せしなり基督の時代に於

來に於いて其價値に於いて相比すべからざる劣等のものと見るが常なり佛敎徒が悉く他の敎旨を指して外道と云ふが如きは其一例なり然れども天啓敎と人爲敎との區別をなして昔時猶太國に發生したる一宗敎をのみ指して天啓敎と見る歐米の多くの神學者に於いては右云ふ習癖の最も著明なるを見る彼等は縱令ひ他の一切の宗敎一切の哲學等を指して全く誤謬を以て成れるもの分毫の眞理なしとは云はず却てその漸次眞理に進みたることを許容すとも尙ほ唯一の天啓敎と他敎とは全く其由來と性質とに於いて異るものなりと考へ其間に越ゆべからざる懸隔を置かんとす方今我國に於いても斯かる論を爲す者少なからざるが故に予輩は尙少しくこれに就いて論ずる所あらんと欲す

多くの歐米の神學者が新舊約書を以て神が其唯一の選民たる猶太人に直接に與へたる啓示となし之を除きては眞正の宗敎一も存在する事なしと考ふるの心を以てすれば神に關して二種の智識あり即ち一は人間の力を以て神を探るより生じ來れる朦朧たる智識にして他は神が直接に人間に啓示したる明瞭なる智識なりとの劃然たる區別を立つるは尤至極なる見解と云ふを得べしと雖も猶太人が

世界には天啓なるものを要すとするも其天啓は必ずしも一國民に限り一時代に限り一經典に限れるものと決定するを要せず予輩の所見を以てすれば人間智識の進歩その者を外にして天啓なるものを求む可らず人爲と見るべきもの亦必ずしも天啓と見られざるにあらず天啓と見らるゝもの亦必ずしも人爲と見られざるにあらず人間社會の進歩開發する現象を見て人爲に出づると爲すべきか將た天爲に出づると爲すべきかと問ふは詮ずる所一株の草花の生長し發蕾するは其草自らの爲す所なるか將た其草自らの爲す所なると共に宇宙なる一大系統の偉大なる勢力の發現する所にあらざるかと問ふと同一趣に歸すべし人間は意志を有し自覺を有する點に於いて草花と相異れども論じて窮極の處に到れば人爲と天爲との關係は右の如くに見ざるべからずと考ふ予輩の所見は斯くの如くなれども今は之を論ぜず唯だ天啓の實在を云ふと一宗教をのみ天啓と見るとは別論なることに注意せむと欲す是れ予輩の屢〻論じたる所なれども世に此區別を明にせざる論者少なからず總じて一本尊一祖師を立てて只管之を信奉する人々は其本尊其祖師の定むる所を以て唯一無二完全無缺の眞理とし他の教旨をば全く其由

扶持誘掖し驕傲無禮を擊肘壓倒し世界の私心を根絕し道德上の帝王となりて世界に君臨するは日本が其特質上より世界の文明に對してなすべき最大寄與にあらざるか我輩は日本が天地大道の化身となりて萬國民を警醒する大抱負大覺悟をなすべき時機の到來せるを見て忻喜措く能はざるものあり

(明治廿八年四月發行、六合雜誌第一七二號)

天啓の所在

吾人は能く自力を以て自己を其數多の罪惡と苦患との中より救ひ得る者なるか吾人の自力を以て蓄積する智識は能く天地と人生との歸趣を明にするに足るか能く吾人の一切の需用(殊に宗敎的需用)を滿足せしむるに足るか吾人は己れの作爲するものの外別に天上より來る光明と救助とを求むる所なきか一言に云へば所謂天啓なるものは人生の竟に不必要となし得ざるものには非ざるか如何是れ深く考ふべき問題也然れども此問題と特に何れの國民間に起りたる一宗敎のみを以て天啓敎となすべきかと云ふの問題とは全く其意義を異にせり假りに人間

し今日の如く多少の力量を有する國となりしは實に此元氣と覺悟とありしが故なり我輩は日本人には種々なる缺點あるを知るものなり日本人は尙ほ幾分の修練と困難とを經過せざれば決して大國民となる能はざるを知るもの也然れども世界中に於て大義名分の爲めに奔狂し忠誠の爲めに一身を抛つ事土芥も啻ならざる民ありとせば先づ指を日本國民に屈せざるを得ざる可し至誠の極或は輕卒の擧動に出で大事を誤る同胞なしとす可らずと雖も身を殺して仁を爲すの覺悟をなすに於て極めて敏速に死して悔なきもの日本人の如きは世界國民中多くあらざる所也日本人は道德義務の念に沸騰する國民なりと云ふとも誰か非なりと云ふものあらん果して然らば日本が世界の文明に對し寄附すべき最大のものは道德上の敎訓にあらざるか日本は道德上に於て世界の師表となり世界より私慾の氾濫を排除するの一大任務を有し居るにはあらざるか日本帝國が開闢以來絕海に孤立し世界の腐敗の外に超越し淸潔美麗なる風土山川に養育せられ君臣父子夫婦兄弟朋友の道正しく大躰上より云へば殆んど理想的の國家を經營し來りたるもの他日大に世界の腐敗を掃蕩するが爲なるにはあらざるか天下の微弱を

無言なり識者先覺は大勢を悟了し之をして聲あらしめ形あらしめざる可らざるの大任を負ふ也若し偉大なる先覺ありて此大勢が言はんと欲して言ふ能はざる所を國民に宣傳するあらんか國民の心は譬へばせかれたる水の堰を開かれたる如く滔々大河となりて其進むべき所に流れ行かん我輩は一日千秋の思をなして日本國民將來の覺悟抱負を宣傳する大指導者の出でん事を希望して止む能はざるなり然れども我輩姑く維新時代に立ち返り當時の英雄偉人が思惟したる所を見る時は其中倘ほ我國民が今日の覺悟となして可なるものあるを發見せずんばあらず維新の俊傑多くは天下を以て自ら任じたるの人なり彼等は如何なる事を以て日本の抱負とし如何なる事を以て日本の覺悟としたるや彼等は大義名分を四海に布くを以て日本の抱負とし權謀術數を去り至誠世界に立つを以て日本の覺悟とし一視同仁天地の大道を躬し天に代りて世界の横道を説破討伐剿誅し萬國安全の道を示すを以て日本の天職と考へたるなり其の元氣の壯宏なる轉人をして奮興措く能はざらしむるものあり此元氣と此覺悟とありしが故に維新の改革は成就せられ鎖港攘夷の固陋心は打破せられたる也維新以來日本が駸々進歩

なし來るものの如し我日本の國土の如きは東西兩洋を括約するの地を占むるに而かも古來未だ曾て世界大勢破裂の現場とならざりしは頗る怪むべき事なり大勢破裂點は支那印度邊に起發しペルシャを經て西漸し歐洲諸國を横ぎり太西洋を渡り米國に達したるなり若し此大勢再び其起發點に歸るべきものとせば必ずや先づ我日本の國土を以て其破裂點とせざる可らず我日本が世界諸國民注意の燒點とならんとするの豫報は既に世界に傳播されたり日本は遠からずして世界文明の潮流に對し一大寄附をなすの地位に立つべきは火を賭るよりも尙ほ明白なるものあり然れども日本は世界の文明に對し如何なる寄與をなすべきかこは今日我國民の覺悟によりて定まるべき者にして寄與すべき事柄の詳細に至ては今日より之を明言し得可らずと雖も少くとも日本國民の特質上より一種の斬新なる寄與をなすに至るべきは過去に於ける各國寄附の模様を見て明らかに之を推す事を得るなり何をか日本國民の特質と云ふや日本國民は世界に對し如何なる抱負を有すべきや是れ今日の識者先覺が深思熟慮すべき一大問題たり世界の大勢は日本人を躰して如何なる事を世界に宣傳せんとしつゝあるか大勢は無聲

爆裂するものの如し而して其破裂の餘波は數十百年に亘る事ありと雖も其破裂するは實に一刹那の間にあり而て此破裂は實に其破裂の座となりたる國土を以て世界文明の寄與者たる資格ある者なる事を吹聽廣告するなり余輩近世の歴史を讀んで私かに思ふ世界の勢が歐米の土に破裂するの時限は最早過ぎ去りつゝあるにあらざるかと歐米諸洲今日の運動は頗る盛なるもこは寧ろ過去破裂の餘勢により動くものにして大勢破裂の中心點は漸く東方の國土に廻轉しつゝあるにあらざるかと疑ふ太古に於ては東洋の國土は實に世界の勢の破裂點となり世界文明の潮流は其源を東洋に發したりし也東洋の諸國民が世界の活劇を演じ偉大の功績を奏したるの日に於て西洋諸國は憐れにも暗黑の裏に蠢動したりき然れども世界大勢の轉ずる所如何ともす可らず東洋諸國は此勢の去ると共に漸く沈靜し支那印度を始め埃及アッシリア、ペルシャの如き皆化石の狀態に陷りたるなり而して此間世界の陽氣は西洋暗黑の地を攪破し希臘時代以來今日に至るまで所謂西洋の文明なるものを發顯せしめたり然れども陽氣大勢の廻轉間斷なきものにして永く一所に止まるものに非ず今は再び東洋の國土を以て其發顯點と

自由を發達せしむるの舞臺となし獨人は科學及政治上より世界に一大寄與をなすを以て其抱負となし佛人は人間的の思想感情を世界に廣布するを以て其任務と信じ居るなり而して是等諸國民が文明の潮流に力を致す模樣を見るに終始間斷なく力を致す事甚だ稀にして恰も流星の天に顯れて忽ち滅するが如く極めて短き時限中に於て其國民特有の性質上より斬新なる寄與をなして世界の文明を鼓舞し一度其職分を盡し了れば其國は疲勞衰頽して時機再び到來し元氣恢復するまでは永く沈靜の狀態に沒するものの如し尤も一方より見れば諸國民は間斷なく世界の潮流を潤澤しつゝあると謂ひ得ざるに非ず然れども最も著く世界の文明を鼓舞し諸國民注意の燒點となり世界を震動風靡するの國民は一時代に於ては大抵たゞ一あるのみ希臘の盛なるに當てや世界の諸國は睡眠の中にあり羅馬起れば希臘は既に廢たれたり近世に於て佛國廻天動地の活劇を演ずる時は英獨後へに瞠若として退き米國獨立自由の旗幟を植つるに當ては世界の諸國呆然として爲す所を知らざるものの如し斯の如く世界の勢なるものは同時に各所に發顯するものには非ずして一定時には一定所を限りて其集合點となし此點に於て

する所のものなり即ち彼れの思想は徹頭徹尾倫理的なりしなり

（明治廿八年三月發行、六合雜誌一七一號）

國民の抱負

太古は漠たり史筆以來世界の文明は全躰上より觀察すれば滔々として進行しつゝあるなり而して世界諸國の歷史の河流は遲速の別こそあれ遂には世界歷史なる一大潮流に朝宗するの運命を有するものゝ如し然れども世界の文明に力を致すに於て各國其趣を異にせざるなし古昔に於て猶太人は地上に神の王國を建つるを以て其覺悟とし希臘人は文藝學術を傳播するを以て其天職とし羅馬は世界の帝王を以て自ら任じ蠻夷の襲擊を受くるの曉に於て尙ほ世界の女王たるの位置を保ち遂に政權を剝奪せらるゝに及んでは法王政を建てて精神的帝王となり世界に君臨したり降て近世に至り英人を見るに彼等は己が運命は海上權を掌握し遠隔の地に殖民をなすに在りと信じ米人は其國土を以てあらゆる方向に自主

道徳心にありとしてホイッティアーは此に其脚を立したるなり

千八百七十六年又一友に文して曰く

人生と天地との畏こき奥義は時に殆ど吾を壓し倒さんとす何者の、何處に、何處より、此等の疑問は時に吾をして息をも續がざらしめんとす畢竟ずるに吾人の知れる所それ如何に少なきぞや吾人の心はその信仰の錨を唯だ二つ或は三つの事に固く下ろし得るのみ其中眞先に又最も確かに下ろし得るは神が我等の父なる事これなり

"The awful mysteries of life and nature sometimes almost overwhelm me. What, where, whither? The questions sometimes hold me breathless. How little, after all, do we know! and the soul's anchor of faith can only grapple fast upon two or three things, and first and surest of all upon the fatherhood of God."

然れども謂ふ所神とは何者ぞや神が我等の父なりとは如何なる意義ぞホイッティアー曾て謂へらく「我が見る所を以てすれば我は正、善、慈としての、一言に云へば仁愛としての神を信ず」と("For myself, I believe in God as Justice, Goodness, Tenderness,—in one word, Love.")彼れが窮極の據處とする神は吾人の道徳的理想が實在者として存

神是れ我等の確認する所なり科學及批評の主張し得ることの何はありとも神が吾に信なり義なり慈なり仁ならんことを求めらるゝは自明の眞理にして此眞理をば動かす能はず而して神吾にしかあらんことを求めらるゝを以て吾は彼れ自ら彼れの吾に求めらるゝ所のものなるを知る

"The foundations seem breaking up. I only hope that if the planks and stagings of human device give way, we shall find the Eteranl Rock beneath. We can do without Bible or church: we cannot do without God; and of him we are sure. All that science and criticism can urge, cannot shake the self-evident truth that he asks me to be true, just, merciful, and loving; and because he asks me to be so, I know that he is himself what he requires of me."

是によりて觀ればホイッティアーは近世科學の向ふ所いかなる舊信仰を毀ち得とも吾人の道念のみは動かし得べきにあらず而して神を認むるも此の道念により又神の何者なるかを知るも此の道念による即ち此によりて神の正義仁愛なることを換言せば其の道義的（モーラル）存在（ビイング）者なることを知ると考へたりしなり然れば其根本思想はカントが吾人の道德的理性の要求として神を認めざる可らずと云ひしと同一ならずや近世科學の如何なる襲擊を受くるも唯だ安全なる隱れ家は吾人の

を表彰するに最も適切なる美術即ち詩に於いて這般の進歩の要せらるゝを見るなり

（明治廿八年三月發行、六合雜誌第一七一號）

詩人ホイッティアーの信仰

近時ますく進歩し來りたる科學的研究の結果は幾多明識深慮の人をして其信仰の動搖を感ぜしめたり知見の明精感應の敏捷なるものにして誰か能く全く近世科學の云ふ所に其耳目を閉ざすを得ん詩人ホイッティアー亦近世科學が宗敎上の舊信仰に來したる變化をば冷視し得ざりし一人なり左に揭ぐるその書簡の數句は以て其心裡の經驗を窺ふに足る千八百七十年一友人に贈れる書に曰ふ

基礎とする所壞れ去るが如くに見ゆ予は唯だ望む若し人の工夫し設けたる板張と足場との毀れ去りたらんには吾人は其根底に永久の巖を發見し得べきことを我等はバイブル無く敎會なくてもあるを得神なくてはある可らず而して

は觀美心の優れたる(委しくは觀美的性能のゆたかなる)を證するなり然れども主題を取ること自然界に多くして人間界に少きは未だ眼界の十分擴張されざるに基く我國人が美を觀るの性能はゆたかなれども尙ほ之を開發せしむべきの餘地は廣し若し天地の美を觀るに敏なるの眼をば更に一層人生の美に轉ずることを學ばゞ希くは先人未發の美境のこゝに闢かるゝものあらん狹く見れば醜なる如きものも亦高等美を彰すに妨あるべからず紛々擾々たる人世煩惱の衝突し生類の苦悶する娑婆素より是れ美術の好題目なり美は優にこゝに現ずるを得るなり此等の好題目は只だ美術家の手を藉りて詩歌繪畫の美を成すと云ふのみならず自然界そのものに美を觀じ得る如くに人間界そのものにも亦之を觀じ得山川卉木のみ美なるにあらず牛馬鷄犬のみ美なるにあらず人界亦大に美ならずや觀る者の眼を以て見ば人生は是れ一個の好風景なり佛教的思想は其至極の處に於いては決して斯かる境界の美を觀るに妨げあるものならず或方面に於いては能く之に和する所あり又我國の美術家が現に此境界の美を看取すること必ずしも淺しとせず然れども一層の進歩を要するは此方面にあらずや殊に人生

形骸を適當の表彰となせるの想に係れる美にあらずして寧ろ形骸を餘りに狹しとなせるの想に基ける美なり西洋美術批評家の語を假りて云はゞクラシカル、アートの美にあらずしてロマンチック、アートの美なり佛教的感想は希臘人が女神の美を彫刻したるの心とは大に異る素より我國の美術家が繪畫に彫刻に詩歌に人身と人生との美を顯せるもの決して少なからざれど其の自然界の美を觀るの割合に人間界の美を彰すことを敢てせざるが如きは佛教的感想の制限を受くるが其一原因とはなり居らざるか

自然美を觀るは技藝美を觀るに比すれば難し野蠻人及小兒は自然の美を賞するの心に乏し彼等が美を觀るは先づ玩具裝飾等の技藝品に於いてす其然る所以はハルトマン等の說く如く既に美術家の假象として作りなしたるものよりも自然物は假象として觀るに(卽ち實世界を脫せしむるに)難きによるか將た他に其理由の存するあるかは爰に問はず兎に角自然美は吾人が自然界に見出す所のものにして之を觀んには吾人美術家として自ら我想像を働かしむる所あるを要す最もよく吾人に自然の美を敎ふるものは畫家詩人なり故に自然の美を觀るの眼ある

き泰西詩人の一なり

我等は何故に自然美を解するの深きに比して人間美を賞することの多からざるや何故に西洋美術の如く好んで人生を以て其美術的作爲の主題となさゞるか此の如きは素より容易く答ふべき問題にあらずと雖も少くとも其原因の一に數へらるべきは佛敎的思想にあらざるべきか佛敎の極意とする所を云はゞ或は煩惱即菩提娑婆即寂光土と說かん然れども其の通俗に廣く解せられたる所に從へば人身は決して淨美なるものにあらず寧ろ汚穢を褁める皮袋に外ならず紛々たる人生は決して美妙の世界にあらず寧ろ厭離すべくも美として之を愛すべきにあらず汚穢なる人身又紛々たる人生に比すれば青山綠水は淸しとなすに足る春花秋月は厭ふべき所少なし人生の汚濁に對せんよりは明媚なる山川に向うて我胸襟を淸うすべし素より此の如きは觀美心以外の眼(Unaesthetical interest)を以て人身と人生とを觀たるものなれども通俗佛敎はまさしく其の如き非觀美心を以て之を觀るの傾向ある也佛畵佛像素より一種の美を現せざるにあらず然れども是れ其形躰その者に宿れるの美にあらずして寧ろ形骸を忘れ果てたる狀態の美なり

Little we see in nature that is ours;
We have given our hearts away, a sordid boon!
This sea that bares her bosom to the moon;
The winds that will be howling at all hours,
And are up-gathered now like sleeping flowers;
For this, for every thing, we are out of tune;
It moves us not.—* * * * * * * * *

（天地を觀るも其中に我に屬するものを發見せず、我等は卑劣なる贈物として我が心を棄てたり、月に對して懷(ふところ)を露はす海を看るも、常に好んで咆哮する汐風の、今は眠れる花の如く打しづまれる風景にも、我等は毫も感動せず、我等は凡べて此等と調子を同うせず）

自然界に對するの愛情、是れウォルヅウォルスが當世に宣傳せむとしたる大教訓なるが此教訓は予輩風流人民に取りては敢て珍らしとするに足らず我等は實利主義なるウォルヅウォルスの國民よりも多く我に屬するものを天地の風光に發見す此等と調子を同うせざるものにあらず否な我等は同じき調子の我と花月とに通せるを感ずウォルヅウォルスは最も善く我儕に解せらるべき又愛せらるべ

らん然れどもその自然界を探つて技術の主題となす程には人間を取りて之が美を發揮することに力めざるが如し固より繪畫に彫刻に詩歌に人間を主題となせる者少きにあらず又之を主題となせる者に表れたる技倆も決して卑しと云ふ可からず而も尙ほ比較的に云はゞ重きは自然美を闡發するにあるが如し(爰に云ふ自然なる語は狹義に用ふ)是れ或人々の旣に論じたる如く我國の美術と西洋近世の美術との一差異の點と見らるべし

我國人は自然に對して親密なる同情を有す其の山水を愛し其の花月を賞するの心は何物を以て之を譬へん我等は風雲卉木の自然界に對して決して他人にあらず他人の疎情を以て之に應接せず恰も同一生氣の彼我に通へるが如くに感ず車を挽く一傖夫と雖も糸を繰る一賤婦と雖も自然美に對して一種の眼孔を有し特殊の心情を懷く彼等すら尙ほ風流の何物たるを解するなり

ウォルヅウォルス當世の流俗のます〳〵俗にして毫も同情の眼をひらいて自然界を觀ることを知らず胸中些しも風流の念を宿さゞるを慨歎して歌うて云へらく

ども假令ひ絕對の眞理を看取し哲學組織を成就するに至らずとも尙ほ哲學者らしき安心の道なきにあらずレッシングの云へる如く神若し右手に一切の眞理を藏め左手に眞理を追ひ求むるの心を握りその一を擇べよと云ひ給はゞ假令ひ左手の賜には疑惑の迷路の伴ふありとの附言を聞くも尙ほ跪いて左手の賜を受くる、亦大に可ならずや絕えず眞理を追ひ求むるとの中に豈に安心の地なからんや眞理を慕ふことに安心せざるは未だ誠に眞理を慕はざるの致す所なり豈に眞理を得るをのみ安心の境界と謂はん或誠實なる學者の云へりし如く若し眞理を求むるの心に驅られて我が行くべき處と思ふ方へ進みゆくの故を以て我を地獄に墜す神あらば地獄に墜つるも何ぞ憂とするに足らん吾人は少くとも是れ程の哲學的安心は懷き得ざるにあらず哲學者らしき安心豈に必ずしも得難からんや

(明治廿八年三月發行六合雜誌第一七一號)

自然美と人間美

我國の美術家が自然界の美を看取するの心に富めるは一の著き事實と見て可な

することを揀ばん其の如き目的に達せんには兎に角或一物によりて後生安樂を得と信ぜば足りぬべし或は云はん我は彼の一物によりては後生安樂なるべしと信ずる能はずと何故に信ずる能はざるか其理由なくんばある可らず而して若しその信仰の理由を明にせんとせば竟に長く哲學的思想と相離るべからず世間宗敎を信ずる者の多くはその如き嚴密なる意味にて信仰の理由を求めず之を求めて法華たるにあらず門徒たるにあらざるなり而も人の若し之れを求むるに至らば如何

若し強ひて安心せむと欲せば吾人は隨分如何樣にしても安心し得るものなり世を幻夢とあきらめ心を死灰となして安心し得る者もなきにあらず沒道義的迷信を以て安心し得る愚夫愚婦も多からずや予輩はまゝ宗敎的安心の吾人が心的生活を窒息せしむるものあるを認むその安心の弊の甚だ大なるを認む不安心も亦吾人を警醒せしむるに缺く可らざるものなることを忘るべからず何ぞ必ずしも安心をのみ求めんや

若し一哲學組織を完成して之によりて以て安ずることをせば固より可なり然れ

の解答を與へたるなり世人の多くが宗教的信仰を持するはその如き思想を歴たるものにあらず而も一旦如何なる信仰の窮極的なるかを知らんとせば(此一念の萌芽したる以上は)竟に此哲學的思想は全く驅逐せらるべきにあらず假りに一派の哲學者の云ふ如き絶對若しくは本體なるものは何時まで追ひ求むるも竟に吾人の捕捉し得べき所にあらず窮極的信仰はその如き高遠空漠なる處に存せずして他に在りと決斷せば是れ取りも直さず哲學的問題に一の解釋を與へたるなり懷疑を以て哲學的詮索を沒せんとするも尚ほ哲學思想の範圍を脫したる者と云ふべからず心中一たび哲學的思索の要求を感じて立ちし上は哲學を沒するには更に哲學を藉らざるべからず或は唯だ假りのものとしても多少の哲學上の決斷を爲すによりて始めて我が當座の所見に安ずる所あるを得るなり世に哲學を排して別に安心の地を保つと云ふもの多くは麁末なる哲學思想を以て哲學を遣らんとするに外ならず彼等は實に麁末なる哲學者なり

若し偏に安心することを以て目的とせば何によりて安心するかは必ずしも問ふ所にあらず何ぞ敢てまのあたり彌陀の來迎を看て死すると基督の聲を聞いて死

思想と分離せしむることをせず其哲學的思想に之を承認する十分の根據を求めずば休せざるなり

事物の根據を求め立言の理由を尋ぬるも何處にか窮極の處なかるべからず哲學者も亦之に直接して之を會得するの外なしと云ふ予輩これを非とせず豈に必ずしも默契直識の妙境なしと謂はんや更に理由の尋ぬ可らざる又尋ぬるを要せざる實驗自覺の境界なしと謂はんや若し此の如き窮極の據處を名けて宗教的信仰と云はゞ哲學は實に宗教的信仰に立つ者なり此の如き意味にての宗教は誰れか之を要せずと言ふべけん予輩は世の往々宗教を無用視する者の見る所餘りに淺膚なるに驚く宗教は人心の一大事實なり眞心を持する者何處にか其信を置く處なからんや或は冥々裡に窮極の信仰を持する者あり或は明に之を看取する者あり予輩は古今聖賢の心底に横れる宗教的眞理あるを想ふ但だ若し何者の其聖賢の心底に横れるかを明知せむとし窮極的信仰を窮極的信仰と知りて保持せむとせば是れ既に脚を哲學的研究の範圍に投じたる也更に理由の問ふべからず又問ふを要せざることを知りて信ずるは是れ既に哲學的問題を思ひ浮べて之に何等か

捨てよと云はんか何者かその證據の十分なるか否かを決する噎竟に人智の範圍は脫すべからず若し哲學的硏究を以て人生の眞旨を推知するを大膽なりと云はば二三文書の幾多の批評を加ふべき者に記載しある奇蹟を證據とし又は自己の腦中に描ける標準に照らして完全無缺と思ひ定めたる歷史上の一人物を證據としてこゝに天啓を得たり神の權化を得たり人智以上の據處を得たりと斷ずるは亦頗る大膽なりと謂ふべからずや

世間哲學者と稱すべき程の者は素より少數に限らざる可らず然れども多少の哲學的思想を有する者は哲學者と稱すべき者よりも遙に多からん而も尙は人類の多部分は毫も哲學的硏究に指を染むることのなからんは言はずして明なり若し安心を得ることが人生の一大要求ならば哲學を以て如何なる種類の人々にも之れを得しむる事の爲し得べからざるは論を待たず併しながら是の故に哲學は吾人に安心を與へ得ざる者なりと揺いなでに斷了するは甚しく誤れり或種類の人々は兎角の哲學上の根據を定めずば十分なる安心を得ず又其根據を定むるにより て之を得る者あるは事實なり彼等は今日所謂宗敎を承認するも之を全く哲學的

但だ世間宗教的信仰に依る者は多うして哲學的思索を解する者は少しと云はゞ當れるに近からんか之を今日の世態と云ふ誰か否むことをせん而も若し少數は多數に倣ふを要すと云はゞ太しく非なり

人間以上の大智大能大悲の者を信じて安心せよと云ふ予輩必ずしも之を否まず而も是を以て人智の範圍を超越する所以の道なりと考へ人智以上の確實なる判斷に賴るが故に人智の判斷に賴れる哲學とは比ぶべくもあらずと云はゞ予輩は其の何の意たるを解するに苦しむ天啓なるが故に神託なるが故に神と等しき救世主なるが故に具足圓滿の大覺者なるが故に之を信仰し之に歸依して安心するを得と云ふか何によりてその果して天啓神託救世主大覺者なることを知るか噫是れ竟に人智の判斷に賴る者にあらずや

甲は彌陀佛の大慈大悲を信ぜよと云ふ乙はアラの不可變の命令を知りて之に安ぜよと云ふ丙はシヴァ神を拜し苦行を積みて罪を脫離せよと云ふ予輩は其孰れに賴らん彌陀の本願基督の贖罪吾人の信ずべきは何れぞや人智を措いて何か之を決する者ぞ一には十分の證據あり他には十分の證據なし故に彼を取つて此を

能くすと云はんか何が故に宗教は之を能くすと云ふ宗教には人智以外の憑據ありて人をして其知力的研究推理詮索に依らしめず直に自力以上の大能者に歸依せしむるを以て能く吾人に安心を與ふと云はんか宗教は果して之を與ふる者なるか其の目的は實に之を與ふるにあらん而も之を與へ得るか吾人は何故に直に自力以上の者を認めて之に歸依すべきか

某々宗教の說く所未だ萬人の信仰を繫ぐに足らず故に其宗教は少くとも或人々に對しては其說く所を以て安心の道を呈し得ざる者なり是れ其宗教の罪にあらずして之を信ぜざる者の罪なりと云はんか爾か云ふべくば何故に某々哲學の如何なる種類の人々にも遺す所なく安心を與へざるは其哲學の罪にあらずして之を承認せざる者の罪なりと云ひ得ざるか人或は某宗教の說く所を信じて疑はざることが事實ならば人或は某哲學を絕對の眞理として疑はざるとも亦事實なり予輩はスピノーザが自己の哲學に立ちて安せざりきとは思ふ能はず從容として死に就きしヂョルダノ、ブルーノーが我が哲學思想を眞理なりとせざりきとは思ふ能はず何ぞ必ずしも哲學は吾人に安心を與へず宗教は之を與ふと云ふべけん

哲學的安心

人しば〳〵疑ひ問ふ哲學は吾人に安心を與へ得べきかと請ふ先づ予輩をして問はしめよ何をか哲學と云ふと若し天地の歸趣を覗ひ人生の眞旨を觀るものを以て哲學と云はゞ哲學豈に吾人に安心を與へ得ざるの理あらんや

疑ふ者は必ず遮り言はん哲學果してその如き者なるか假ひ哲學は天地の歸趣を覗ひ人生の眞旨を觀るを以て其目的となすも果して其目的を達し得るものなるかと

斯く疑ふ者は概ね東西古今の哲學史を見て並べて失敗の歷史となす人智を以て天地人の祕密を探らんは到底徒勞に屬すべしとなす故に人智を以て天地の歸趣人生の眞旨を明にし而して之を明にするによりて吾人の安心の地を定めむとするは恰も天空の盡くる處を求めむとするが如く竟に其志を達するの期あるべからずと云ふ

然らば何によりて以て安心立命の地は得らるべき哲學の能くせざる所宗敎之を

度を卑くせよとのみ謂はんや營養を客みて効果をのみ獲んとするも天然の理法は之を容さず併しながら所謂生活の高度は無用の奢侈と無用の娯樂とを包含せざるもの稀也豈に質素にして而も養ふ所に缺けざるの道なしとせんや吾人の守るべきは此の道なり堅忍不抜の精神を養ひ吾が活動をしてます〳〵盛ならしめんには多少の娯樂を要す勞作せんには休息も亦缺くべからず而も娯樂せんが爲に娯樂すと云はゞ是れ未だ人生の大務を解したる者にあらず寧ろ更に大に刻苦勉勵して盡す所あらんが爲に(其大勞作に堪へんが爲に)暫く娯樂すと云はゞ或は人生の正路を過まらざるに幾からんか予輩はカーライルと共に勞働の神聖なることを唱ふ誠實なる勞働是れ宗敎なることを唱ふ

國民の大發達を遂げんには愼むべきは娯樂を追ひ求むるの心なり、勵精刻苦、務めて撓まざるの精神なくんば國家の大業も恐くは中途にして挫折せん何によりてか此精神を養はん予輩は武士道を更に發揮するを以て今日又將來の一大要務なりと考ふ宗敎なるものも武士道の精神に融和せむことを要するなり

(明治廿八年三月發行、六合雜誌第一七一號)

の明識を以てすべし若し從來の武士道に弊處あらば其の狹隘なるにあり廣くせられたる武士道是れ我國民の宗敎ならざる可らず

快樂主義を斥くるは必ずしも慾望を壓抑するの謂にあらず慾望を壓抑するは活動の根源を絕つなり欲する所求むる所あればこそ吾人は動いて休まず進んで止まらざるなれ必要は發明の母、欲求する所あるが故に之を充たさんために種々の工夫を回らす但だ予輩の拒否する所は快樂を窮極の目的として慾望すと云ふと是れなり吾人は實際快樂をのみ慾求する者にあらず又慾求すべき者にあらず吾人の慾望は尙ほ他に其向ふ所を有す又有すべきなり吾人が或理想を實行せむが爲に奮然蹶起我身を棄つるに至るは何ぞ必ずしも快樂を得んことを以て目的とするものならんや吾が欲する所を得ば固より快ならん而も快ならんことを目的として欲するにはあらざるなり千艱萬苦を嘗めて尙ほ屈せざるは理想に對する大慾望あればなり

力を消磨して養はずんば何處にか更に用ふべきの力を得ん躰力を衰へしめて只管心力を盛ならしめんことは生理と心理との許さゞる所、予輩焉ぞ偏に生活の程

る間は或は其驕氣其腕力其智力によりて世界を横行し所謂泰西的文明なるものを繼續し得んも是れ唯だ物欲的生活を高からしめ得る間のとのみ若し娛樂を追ひ求めて之を得るにあらずば大活動を爲すを得ずとせば此の如き民人は果して能く人類中最後の勝利者たるを得べきか

西洋の學者間には公然快樂主義の稱へらるゝあり（而して之れに倣うて此頃我國にも之を唱ふる者あり）西洋の道德的觀念亦固より高潔なるものに乏しからず然れども快樂主義の一事に於いては予輩は之を我國の思想に比して寧ろ其の西洋に盛なるを見る其宗敎に於いても娛樂主義の纒綿する所あるを認む東洋に於いては快樂說めきたる思想あるも之を西洋のに比すれば多くは消極的にして積極的ならず小乘佛敎の如き是れ其極端の例なり固より其消極的なるは吾人の活動を防止する傾向あるに於いて其弊處を露はす活動を抑ふるは素より不可也而も吾人は積極的快樂主義によらずして活動的ならんを要す須らく大理想を現せんが爲に無窮の活動に堪ふべきなり武士道は之を發達せしめば庶幾くは此需用に應ずるに足らんか吾人は宜しく武士道の精神に併すに廣く宇內の時勢に通ずる

雄偉なる行爲は此傾向の生ずる所にあらずして他に其心地に宿れるもの即ち娯樂主義ならぬ武士道の存するあるに歸せざるべからず人若し快樂を味ふを以て人生の目的となさば假令ひ理論上甚しき不都合なき迄に辯じ得るとするも(予輩は之をも疑ふ)人をして奮然蹶起刻苦勉勵せしむるの動力に於いて之をストア學若しくは武士道に比して大に缺くる所なきを得べきか我國民の須らく其双肩に擔ふべき大業を想はゞ今日に於いて最も抑ゆべきは娯樂主義なり予輩は娯樂を事とせんよりは寧ろ刻苦主義に遵はん

歐米人は其生活の程度の高く且娯樂を供する物質的方便の數多きを誇る然れども又是れが爲に其多數人の當惑しつゝあるを見るべし彼等は生活の程度の高からんことを求めて休まず娯樂の增加せんことを求めて休まず然るに其多數の民人即ち下等社會は之を求めて得ざるが故に煩悶しつゝあるにあらずや其不平と騷擾と暴戾とはますく增進しつゝあるにあらずや歐米の下等社會ばかり禮儀を知らざる道義をわきまへざる者はあらず物欲的生活の高等ならんを欲し快感娯樂を追ひ求めて之を得るを以て人生の目的なるが如くに思惟し而して之を得

所あり倫理上の主義の差別は人物の差別の發表したるものに外ならぬか將た理論上見る所の差別が實際の行爲を變ずるの力あるか爰に之れを論せずと雖も兎に角其間關係の存するあるは事實なり即ち倫理主義の如何は實際的行爲の精神に係はる所なしと云ふべからず快樂主義を取るか將た之れとは全く趣を異にするストア主義の如きものを取るかは個人並國民の氣象に淺からざる關係を有するなり

予輩は武士道なるものの我國民の志氣を養成するに與つて大に力ありしを認む千辛萬苦を辭せずして或理想の爲に粉身韲骨する献身的精神の我國人の心裡に宿れるもの是れ多くは武士道の賜と云ふべきなり若し今日我國民が世人の心目を驚かしめ又は之を爽快ならしむる行爲を成すことあらば是れ主として武士道の力によれるにあらずや献身的精神は是れ武士道の生む所而して此精神を生む武士道なるものは決して娛樂主義の者に非ず人或は我國民を評して春は花秋は月常に娛樂を是れ求めつゝありと云ふ予輩は此の如き評者の見る所の甚だ淺きを知る然れども假りに我國民は殊更に娛樂を追求する傾向なきに非ずとするも其

ども宗教の方面に働いては理由を追ひ求むる推理的作用に依らず寧ろ想像若しは直覺に依賴して肉眼に見るべからざる世界を描くに至るこの故に驚駭の念に基ける知識的要求の多少宗教の起源に關する所あるを容すも直に宗教を以て究理心の生む所なりとは云ふ可らずされば宗教は神學に先てりと云ふに不可なし又神學と相混ず可らざる者なりと云ふに不可なし然れども上に論じたる如く究理心の十分起りたる後に於いては宗教は神學と全く相離るべき者にあらざる也

（明治廿八年二月發行、六合雜誌第一七〇號）

武士道對快樂說

國家の將に隆盛ならんとし而して尙は排除すべき幾多の困難の眼前に橫れる時に當りては最も要すべきものは堅忍不撓聊も艱苦を辭せざるの精神なり娛樂を追ひ求むるの心是れ最も恐るべきものとなす夫れ倫理上の主義なるものは專ら理論の範圍にあるものにして其實際の應用必ずしも理論に於いて相異る程相異るものにあらず然れどもその主義の如何は亦おのづから實際上の事と關聯する

其中永く保持すべからざる分子の含まれることをも否む可らざれば神學的思索の向ふ所遂に在來の宗敎的意識に變更を來たすことあるを免れず假ひ吾人の宗敎的意識は吾人の理解力を以て了解し盡す可らざる者とするも其意識が時に究理心の要求によりて變動さるゝことあるは否む可らず斯く宗敎は神學に先ちて存在しながら神學によりて變更さるゝ所ありと云ふは必しも直接に神學の影響を蒙らずして宗敎的意識の發現生長することあるを拒否するにあらず吾が人生の種々雜多の經驗は殊更に神學的思索を假らずとも殆ど不知不識の間に宗敎的意識に影響して之を變せしむることあり斯くして吾人の宗敎的生活に於ける些小ならざる發達の成し遂げらるゝことあるを疑はず爰には宗敎の起原は論究せざるも天地の現象に接して吾人の幼稚なる心に起る驚駭の念が宗敎の起原及發達に關係する所あるとは疑を要せざらん而して此驚駭の念は究理研究の心を生むものなり故に多少の知識的要求と宗敎の發達とは相離れざる者なれども此知識的要求是れ取りも直さず究理心の要求なりとは云ふ可らず驚駭の念は學問の方面に向ひてはますく究理の心を勵まし遂に宏大なる哲學の組織を促すに至れ

なるか或は人間の如くに喜怒哀樂する而も全智全能至正至仁なる獨一神なるか或はスピノーザの云ふ如き萬物の本躰たる所の神なるかに拘らず宗教的信仰は些も變更する者に非ずと云ふを得べきか宗教的信仰は變更するも宗教は變更せずと云ひ得べきか豈に爾かく云ふべき理由あらんやその拜する神の何たるかは其宗教の何たるかに大關係を有す拜する神の變ずるは宗教の變ずるに非ずや而して神學上の思索が神てふ觀念を變ずるに至ることあるは否むべからざる事實なり其の如き點に於ける神學の變動は取りも直さず宗教の變動にあらずや夫れ神學の目的とする所は啻に一定の神てふ觀念を定め置き(その神の存在を承認し置き)而して是を證據するの道をのみ講ずるにあらず存在すと認むべき神の何者なるかをも討究せざる可らず故に神學の變動を見て宗教に關する所なき者なりと云ふは非なり

宗教的意識は一面神學に先てども又一面神學によりて影響さる神學は既に吾人の宗教的意識に存在するものを理解せんと力むる者なりと云ふは非ならず然れども吾人の宗教的意識は全く明瞭なるものにあらず又その現在の狀態に於ては

看取して神の存在を承認せば是れ一傖夫と雖も既に神學的研究の道に出立せるなり少しく事物の道理を考ふる者に在りては多少の神學的思想の其宗敎的信仰に附着せざるは稀なり而も必ずしも神學的思想の附着せるにはあらず未だ究理心の要求に從ひて神學の組織を始めざる時に方つても宗敎的信仰は何ほ存在し得る也又究理心の勃起したる後に於ても時に或は理由の何たるを問ふことなくして唯だ何となく或宗敎上の事柄を眞しやかに思ふことなきにあらず然れども一旦究理心の勃起したる後に於いては永く其の如き宗敎上の事柄と究理的思索との關係を打棄て措くを得ず或は其事柄には更に理由を問ふべからずとするか或は問ふべしとするか如何にか之を思ひ定めざる可らず則ち宗敎と神學とは相混ずべきものにあらざれども亦た永く相離るべき者にはあらざるなり啻にその永く相離るべからざるのみならず神學の變動が宗敎的意識に影響せざるを得ざることあり宗敎的意識の中先づ最も吾人の注意を引くべきものは神てふ觀念なるが此觀念の變動は取りも直さず一方には神學の變動なると共に又一方には宗敎の變動なりその云ふ神なる者の或は木石(若しは木石に潛まれる怪力)

るも之を窮極の根據と知りて此に立つは是れ究理心の働きたる結果に外ならず夫れ或は窮極の根據は直識すべく頓悟すべく信仰すべきも其據つて立つ理由の得て語る可らざるものならん然れどもその以上の理由を問ふ可らず又問ふを要せずと知りて之を承認するは是れ既に脚を神學の領内に入れたるなり一言に云へば神學は信仰する事柄の理由を問ふによりて起るものなり神學と區別したる宗教は理由を推究せずして我心に納むる信仰なり故に其理由の問ふべきものなるか又問ふ可らざる者なるかをも意識せざるなり之を意識するは是れ既に究理心の動きたる後の事にしてやがて神學的所見たるなり若し其究理心の動きたる結果として一信仰の事柄をば或は窮極の事實(即ち更に理由の問ふ可らざる者)と見或は更に深奥明斷なる理由の尋ぬべき者と見て之を承認せば焉ぞ此承認を神學上の事に非ずと云ふを得んや例へば一傖夫あり之に告げて天に在ます全智全能の神を信ぜよと云ふ者あらんに彼若し其信仰の理由を尋ね而して天地萬物の妙なる意匠を現はすを聞き之が造化主の(原因結果の理に從ひ)莫かるべからざることを聞き且其造化主の全智全能ならざる可らざる道理を聞き而して此道理を

き概念を取りて云はゞ木石を崇拜する或は子女を殺して供物とする野蠻人の宗敎も文明國の人民に行はるゝ高等なる宗敎も共に同じく宗敎なるに相違なし共に同じく宗敎なるが故に同一不變の所ありと云ふ意義にては固より神學の動搖に連れて宗敎の變化することなかるべし然れども是れ單に宗敎を其平等の方面に就いて見たるもののみ斯かる意味にて宗敎は神學の變動と共に動く者にあらずと云はゞその謂ふ宗敎は未開人の禽獸崇拜を取るも高等なる基督敎若しくは佛敎を取るも毫も擇ぶ所なきものを指せるなり若し是の如き宏濶なる概念に充たすに具象的內包を以てせば宗敎は全く神學の動搖と痛痒相感せざる者なりと云ふ可らず然らば此兩者は何故に相混ずべからずして而も痛痒相感ずる所あるか何故に一の破壞は取りも直さず他の解躰となることあるか此兩者の如實の關係は如何

神學は一種の學問なり學問は究理心の生む所なり故に神學に於いては只だ何心なく信ずることをせずして必ず其信仰の理由を尋ぬ假令ひ事物の理由は極りなく追究し得べき者にあらで何處にか窮極の根據となすべき者なかる可らずとす

神學と宗教

論者あり曰ふ神學と宗教とは相混ず可らずと誠に然り此兩者は相混ずべき者にあらず然れども全く之を分離して彼れ此れ相關せざる者の如くに云ふは甚だ非なり神學の變動は宗教に及び宗教の變動は神學に及ばざるを得ざることあり神學の破壞は是れ取りも直さず一宗教の解躰なることあり固より一種の神學は亡ぶとも人類に於ける宗教的生活の全く停止するにあらず其生活は新なる形を取りて發現せん啻に其生活の宿さるゝ形骸の改まるべきのみならず宗教的生活そのものも更に新生面新意義を發揮し來らん而してこは一宗教が他の宗教に其處を讓るものにあらずや若し人類の宗教的生活の全く停止せざるを見て神學の破壞と共に宗教は破壞せずと云はゞ是れ恰も一種の神學は廢たることあるも神學なるものは廢たれずと云ふに伴し宗教なるものゝ亡びざる如くに神學なるものも亦亡びざればなり吾人に究理心の宿らん間宗教に伴うて神學なるものは已む時なかるべし然れども是れ唯だ宗教又神學を其概念の上より見たる者のみ最も廣

の手に觸れては醜惡ならんとす然れども是れ豈に宗教家の本色ならんや唯だ其弊なるのみ今日は是れ諸の教會が其傳道の精神と方法とを一新すべき時にあらずや請ふ其方針をして社會の實際的救助を計るに向はしめよ

社會の救助は固より唯だ形躰上の事若しは一般道德上の事のみを以て足れりとすべからず深く心靈の根底に及ぼさゞる可らず此點に到つては眞正の宗教的信仰を起さしむる是れ即ち社會救助の一要部分なりと謂ひつべし此故に予輩の意は宗教的信仰の差異はありながら一致協力し得る實際的事業のみを以て社會救助の全躰を蔽ふと云ふにあらず併しながら若しそれ程の實際的事業をだも成就し得ば社會に對する宗教の一大任務は果されたりと云ふに不可なし今日の宗教は未だ之を果すの位地にあらず敢て問ふ此事業の爲に宗教家の今一層廣く又固く團結するは當今の一大要務にあらずや一大美事にあらずや

（明治廿八年二月發行、六合雜誌第一七〇號）

宗敎家の爭は哲學者の爭にまさりて遙に高雅なりと云はれん優美なりと云はれん而も宗敎家の爭の往々醜の醜なるものあるは何ぞや未だ所謂宗旨根性を惡魔の世界に投せざればなり

宗敎家の宗旨根性が如何に社會に於ける實際的道德の進步を妨害するかを見よ若し上に陳べたる如き美しき精神を以て彼等が實際的事業の爲に團結することをせば社會道德の進步は大に今に增して見るべき者あらんを此に出でざるは誠に悲むべき限りならずや宗旨を異にしながら社會の實際的道德の爲には相結ぶと云ふ事がその實際的道德を强固ならしむる、必ずや大なるべし然るに今日に於ては假ひ宗敎家が社會の實際的救助に一臂の勞を致すことあるも倘これに宗旨敵（かたき）の心を混入し恰も其事業の成功を以て我宗旨を誇るの方便と爲さんとする者の如し動もすれば彼等は云ふ我基督敎を見よ此の如き公益を社會に與ふるにあらずや我佛敎を見よ此の如き慈善の事業によりて此の如き慈悲心を衆生に示すにあらずや我保守派を見よ我進步派を見よと恰も各自社會の道德若しくは福祉を進むることを以て我宗旨の招牌となすものの如し善美なる事業も陋固なる宗敎家

にあらずや而してその如き社會の實際的救助は個人別箇の働を以てするよりも團躰の結合力を以てするの遙に功を奏し易きは何人も看取し得る所にあらずや而して宗教家が此事業に負ふ所の任務は些少ならざるに非ずや然らば何故に此事業の爲に今一層廣く又一層固く團結することを爲さゞるか何故に毎に宗派心をして此團結の妨害たらしむるか近時宗教界は大に社會の實際的救助に就いて目覺むる所あらんとするが如し然れども未だ十分に此事業の必要と性質とを看取し得ざる者の如し若し今日の教會が教理の差異は敢て之れを輕んせざるも而かも親密に手を携へて社會の實際的救助に盡し得ること又斯くして此に盡すの必要なることを悟らば何物か今日の社會に取りて之れに過ぎて幸なるあらん之を悟らしめざるは所謂宗旨根性の存すればなり尙ほ互に宗旨敵（かたき）を以て相見ればなり希くは此の如き陋固なる心は之を取つて惡魔の世界に棄て去らん若し宗教家なる者時に或は教會的制度或は信仰個條に就いては爭ひながら尙ほ綽々然として互に友愛の手を取つて社會の實際的救助に從事せば世間何の爭か之よりも美なるはあらん爭も此の如くんば有るは却つて無きにもまさらん此の如くんば

らんと考ふ此の故に予輩は毎に宗教の上にも自由討究を主張するなり批評的研究は宗教の大勢上より見て決して憂ふべきことにあらず予輩は徒らに信仰の差異を隱蔽し之を不必要なるが如くに言ひ做して以て強ひて一致を裝ひ破綻を彌縫せむとすることの愚なるを知る予輩は寧ろ差異ある所は明らさまに差異ある所として時に或は之を爭ふことを辭せざるべし予輩は全く論爭を忌む者にはあらざるなり

然らば即ち宗教界をして闘論爭議の修羅場たらしめんか宗旨爭ひをして益々其氣焔を高からしめんか豈に是れをしも望ましと云はんや予輩の熱望する所は一方に於いては教理信仰上の差異懸隔を明白にし時には之に就いて爭ふことのありながら他方に於いては共に手を取て共同の事業に從事する餘地を存せむこと是れなり宗旨爭ひの忌むべきは唯だ教理を爭ふと云ふことに存せず寧ろ其爭の及ぶところ全く共同の事業を爲し得ざらしむるに存す何をか手を携へて爲すべき共同の事業と云ふ社會の實際的救助是れなり宗教的信仰の相異るに拘らず此點に於て(社會の實際上必要とする所のものに就いて)所見の一致和合するもの多々ある

想にかなへる者とはいはめ所謂宗旨爭ひの存するばかり宗敎の躰面に取りて悲むべきはあらず然れども信仰の差異は現今の社會に在りては埋沒し得べくもあらず眞正の宗敎として必須なりと思惟さるゝ信仰の個條を論議せば異說紛々容易に纏る所を知らざるべし當今の趨勢にては寧ろ差別をこそ增せ衆人の一致を來たすの望ありとは思はれず細目に重きを置かざる論者ありて唯だ神を信仰するを以て宗敎の唯一要件となすとせんか必ずや他の論者出でて否な是れのみを以ては宗敎の眞旨を盡す可らず宗敎として是れが上に靈魂の不死を敎へざる可らずと云はん嘗に其の如く多くの論者が各〻我が必要と信ずる個條を提げ來りて論辯せむとの待ち設けらるゝのみならず其の信仰すべしと云ふ神の何たるに就いても議論百出俄に決し難かるべし理想的宗敎は吾人が理想的人間とならざる間は到底人界の事實として覩ることを得ざるべし

かるが故に予輩は今日の狀態に於いては强ひて信仰の一致を計るとの無益ならんことを知る今日の大勢に從へば如何に相異り相隔たるとも各〻その信ずる所に進みゆいて强ひて其差異懸隔を埋沒せざるが却つて宗敎の進步に取りて利益あ

玉に相違はないと、互にせり合ひ、あちらへたくり、こちらへ取り爭ふうちに、取り落して、玉は微塵に碎けたれば、たゞ世界ばかりであつたと申すことじや、ナント味のある面白い話ではござりませぬか、チト考へて御らうじませ

鳩翁道話等の唱道したりし所謂心學は神儒佛三道の確執を離れて專ら誠實に心を研くことを以て道の本旨となしたるものなれば或は之を彼のピエテスト等の敎旨に比するも可ならん何敎何宗と云ふ名稱に拘泥して狹隘なる天地に齷齪たる輩らのある間だ明德の玉の譬喩又指環の說話は古びずと云ふべき也

（明治廿八年一月發行、六合雜誌第一六九號）

宗敎家の一致

若し予輩をして理想的宗敎を描かしめば必須の事件として枚擧せんもの決して二三に止まらざるべし先づ萬民を通じて同一なるをば其一要條件とせん只だ期する所に於いてのみならず事實に於いて世界的宗敎となりてこそ宗敎たるの理

のじやと云はれた、ソコデ和尚がそれは結構なものじや、かねて聞いた明德の玉歟、ドレ拜見いたさう見せさつしやれと手に取つてつく〴〵見て、イヤ〳〵御亭主これは明德の玉ではござらぬ、我方でいふ面向不背の玉といふものじや、さても貴公は仕合な人じや、隨分此玉を信心さつしやれ、中々明德の玉とは天地の違ひじやと云はれました、亭主は合點せず、イヤ〳〵それでもこれは明德の玉に違ひござりませぬと、せり合うてゐるところへ、神主どのが來かゝつて、これは店さきで何を爭ふのじや、ハイ私が明德の玉をみがいてゐますれば、この和尚がそれはちがふ、面向不背の玉じやと云はれますゆゑ、せり合うてゐまする、神主どのが聞いて、ドレ〳〵おれが見きはめて進ぜう、見せさつしやれ、ハヽア皆違ふた、これは明德の玉でもなし、又面向不背の玉でもないと云へば、二人は口をそろへて、ソンナラ何の玉でござります、サレバ〳〵この玉は我方に云ふまが玉といふ物じや、中々貴樣がたの云ふ玉とは違ひますと云へば、和尚が腹立てゝ、ドレ見せさつしやれ、ヤッパリ面向不背の玉じや、亭主氣をいらつて、其玉をひつたくり、イヤ〳〵明德の玉に違ひはない、神主も目に角たて、かの玉を又ひつたくり、ヤッパリまが

を欲せざりしならん但し汝等各〻其指環の不思議力を現さんと努めよそは指環の正眞なるか否は此力を現すと否との外に之を決するの途なければなり種々の偏僻をもて狹められざる博愛の心に勵めよ若し汝等の後世子孫其指環の不思議力を現すに至りなば其時こそは再び此法庭に來よ我に勝れる賢明の判官此座に在りて汝等の訴を裁くならんと斯く謹直なる判官は答へ了りぬ

このレッシングの說話を讀めば鳩翁道話の明德の玉の譬喩を思ひ出でずばあらず是れ同樣の事情の中に現れたる同趣の思想の消息を傳ふるものに外ならねばなり鳩翁譬を設けて曰く

さる方に學問ずきの人があつて、毎日先生のかたへ通はれましたが、或日何か店でとぎ物をしてゐらるゝ、折ふし宿坊の和尙さまが通りかゝつて、これは何をしてござるぞ、ハイ〳〵とぎ物を致して居ります、それは何をおとぎなさるのじや、されば此のごろ先生に明德の玉を授かりましたが、先生の申されまするは、これは是れ大切の玉じや、捨てゝ置くと曇がかゝる、折〻切瑳琢磨というてとぎみがきをさつしやれと申されました、さるによつて只今明德の玉をといで居りまする

タンは答へてさるにても各〻その祖先より傳へたる信仰をば最と善しと思へるはよからずや請ふ先づ我をして彼の小話を終へしめよと云ひつゝ語りつげらく彼の三人の子は遂に法庭に訴へ出でけるに判官は告げて曰ふ汝等は我れ必ず此のもつれを解かんと思へるか將た眞正の指環の自ら口を開くまで待つの心あるか待てしばし吾れ聞く正眞の指環は之を有てば神と人とに愛でらるゝ不思議の力の具はれるとか此事是れ汝等の訴を決するものならずや吾れ問はん汝等の中誰をば他の二人が最も優れて愛するか汝等何故に默して答へざる各〻の指環の不思議力は如何にぞ汝等唯だ己をのみ最も勝れて愛するか噫汝等は皆迷へる虚言者ならざるか汝等の指環は何れも皆正眞のものにはあらざらん正眞の指環は或は失せたらんが故に汝等の父は之に代へて三つの指環を作らしめしならんかゝれば(判官は尙ほ語を接いで曰へらく)若し汝等我が判決に代へて我が勸告を聞くの意なくんば疾くこゝを去れ若し我が勸告を聞かば我は告げて云はん汝等各〻其指環を父より得たりしならば各〻之を正眞のものと信ずるに不可なし恐くは汝等の父は此後たゞ一箇の指環の其家を專領せむことさ

できものに相傳へよと命じたり之が讓りを受けたる者は兄となく弟となく其家の主となるにぞ定まれる斯くも相傳へて或代に至りけるに父三人の子ありて皆均しく愛でたかりければ何れを選びて何れを棄てんことも爲し難く其心の引かるゝ儘に一人々々に指環を讓らんとぞ約しける父將に死なんとしたるに何れの子にも其約を破らんとの心苦しきにさりとて指環は一つ如何でかは之を三人に讓り得ん彼は竊に玉工を召し寄せて費も力もな惜みそ此の指環につゆ違はざらんものを二つ作りてもてこと命じぬ玉工之を作りて持て來ぬるに父自ら何れをそれと見分けかねければいと喜びて一人々々其子を呼び三つの指環を與へてぞ永く此世を辭したりける父の逝きにし後三人の兄弟は如何にせし各〻其指環を攜へて家の主たらんと呼はりぬ相疑ひ相つぶやきけれど如何にせん遂に何れを正眞の指環とは知れざりけりスルタンよ我等が間の正眞の信仰も惟ふに此の如けん

斯くナタンの語り出でけるやサラデン異しみて如何に〳〵我が問に答ふる所この如きか指環は然らん戲れなせそ教は然らじと我は思へりと云ひければナ

ふも不可なからん彼のレッシングが其神學的劇詩と云はるゝ「ナタン、デル、ヴァイゼ」に於いて其主人公をして語らしめたる名高き指環の説話の如き是れ亦當時の進歩したる宗敎思想の消息を漏らすものに外ならずスルタン、サラデン當時賢者の聞え高き猶太人ナタンを呼びて汝は猶太人我はモハメタン而して我等の間にクリスチャンあり汝の如きはゆめ考ふる所なくして唯だ偶然授けられたる信仰をば其儘に懷抱する者にあらざるべし我は汝の奉ずる信仰の理由を聞き以て自ら學ぶ所あらんと欲すとて彼をして猶太回々基督三敎の優劣を論せしめんとしたりし時ナタンの以て之に答へたる譬喩是れ即ち指環の説話にして人のよく知れるが如く其梗概は次の如し

ナタン曰く請ふ先づ我をして一小話を語らしめよ昔し東方にいとも貴き寶玉の指環を有てる者ありけり此寶玉百の光彩を放ち且之が持主をして神と人とに悅ばれしむる不思議の力を具へたりされば彼の持主此を片時も其指より離すことをせず又幾久しくこを其家に傳へよと命じたりしも尤もの事ぞかし彼れは其子の中優れて愛でたきものに其の指環を遺し而して子々孫々常に最も愛

レッシングの指環の說話と鳩翁道話の明德の玉の譬喩

プロテスタント敎の歐洲に起りし以來其宗敎は分派に分派を生じて相爭ひ相軋り彼は此を見て宗敵となし此は彼を呼んで異端となし所謂宗旨爭ひのその極點に達したる時に當り又た一方には其如き狹隘なる宗派的感想を脫したる濶大なる議論を稱ふる者の出づるあり宗敎上に言論の自由を主張し宗旨間に寛容の精神を勸めたる者彼のスピノーザの如き彼のロックの如きあり又眞正の宗敎は諸敎派各〻其趣を異にする所の敎義信仰等にある可らず一切に通じて違はざる無雜不動のものならざる可らず吾人の理性に照らして相戾るものなる可らずと思惟して彼の所謂自然宗敎を唱へたるディストの如きあり又外形の儀式を輕んずると共に神學說にも重きを置かず只管心と行との淸からんことを力め是を以て宗敎の神髓となしたるピエテストの如きありき當時の進步したる宗敎思想と眞正の宗敎的精神とは頑陋なる神學者輩に宿らずして却てピエテスト等にありきと云

なすの妥當なるを見ず惟ふに論者が吾人の合理的判斷を討究の標準也と云ふと佛教の根本的原理を其標準也と云ふとは恐くは標準なる語の意義を異にして用ひたるならん佛教の硏究は佛教理を明にするを以て目的となすは勿論のことなれども其教理の眞正無妄なることを示すを以て其批評的討究の目的とは見る可らず予輩は此の如き約束を有する硏究に自由又は批評的なる形容詞を附するの正當なるを見ず然るに論者の云ふ所斯の如き約束斯くの如き目的を豫め定め置いて而して强ひて之を自由討究と呼稱する弊はなきか論者は曰く「今や理哲諸學は是れ九十五種の外道のみ諸種の宗教は是れ儒道二教のみ是等の諸學諸教に對して佛教の眞理を開顯す是れ豈に破邪顯正の本義に非ずや是れ豈に自由討究に非ずや」と予輩は其果して自由討究なるかを疑ふ予輩は論者の如き壯志ある硏究家に向つては百尺竿頭一歩を進めんことを切に勸告す教旨の宏大自由なるを以て誇れる佛者が尙ほかゝる拘泥を離れざるは如何ぞや論者にして若し眞に自由討究の精神を以て猛進せば其應に取るべき道は明なるに非ずや何ぞ其應に行くべき行路に向つて尙ほ一歩を進めざる

（明治廿八年一月發行、六合雜誌一六九號）

は眞理也合せざる者は非眞理也と云ふ如き巨大なる假定を置けるの研究を批評的と名くるは如何論者も云へる如く佛三身の說の如きは佛敎の敎理證明されたる上ならでは毫も學理上の價値なきものならずや而して佛敎の敎理は果してその如き價値を有する者なるか否かを硏究する是れ批評的研究に非ずや佛敎の根本的原理に合ふと否とを以て果して眞理なるか非眞理なるかを決すべきや是れまさしく自由討究の問題に非ずや論者は曰く吾人の討究せむとする所は新たなる哲理を證明せんが爲に非ずして佛敎なる一種特別の敎說を討究せんと欲する者也佛敎とは旣に說示されたる敎說にして其範圍原則亦た一定せり然れば之を討究せむには必ず佛敎に依つて以て其討究の範圍の方針を定めざる可らず是れ佛敎の根本的原理を以て標準となす所以なりと論者の意佛敎の研究は其目的佛敎と稱せらるゝ一宗敎の敎理を明にするに外ならずと云ふにあるか(恐くは此意ならん)然らば是れ只だ研究の範圍及目的を示せるのみにて恰も耶蘇敎の研究は耶蘇敎の原理を明かにしプラトーンの哲學の研究はその哲學の眞意を明かにするを以て目的となすと云ふと同じく余輩は之を合理的判斷と共に討究の標準と

して悉く皆同價値の事實又眞理の如くに思ふが是れ保守的佛教徒の通弊なり豈に批評的研究の必要なしと云ふべけんや且夫れ菩薩羅漢の如きに至ては「其意見の相反對し學說の相一致せざる者極て多し」若し細しく其所說を撿すれば「奇怪なる分類不思議なる概括種々異變なる概念定義證明等ありて吾人の首肯し得ざるの點尠からず是等の教說豈に悉く疑問なしに通過すべけんや是批評的研究の必要なる所以なり」と云々

以上掲げたる論者の言に對して予輩は一々尤も也と云ふに躊躇せず予輩は特に佛教家中此の如き明快の論を爲す者あるを悦ぶ然れ共論者が自由討究の標準を論じて是れ吾人の合理的判斷と佛教の根本的原理との二者也と云ふに至つては予輩は其意を解する能はず合理的判斷を以て自由討究の標準となす予輩は其意を解するに苦まず然れども佛教の根本的原理を以て其標準となすと云ふは何の意ぞや合理的判斷を標準として此に隨順する者を眞理とし違背する者を非眞理とする如くに佛教の原理に合する者を眞理とし合せざる者を非眞理とするの謂ひなるか豈に此をしも自由討究と云ふべけんや佛教の根本的原理に合するもの

輩は其論の氣力あり新生氣を帶べるを悅ぶ惟ふに此の如きは佛敎徒中最も新鮮の空氣を呼吸し最も當世の要務を知り最も拘泥を離れたる少壯者の筆に成りしものならん而も此の如きものと雖も尙ほ一大假定を置いて其所謂批評的硏究を束縛せむとするの嫌あるを見る予輩は此の如き論者の大に共に語るべき者たるを信ずるが故に爰に少しく其論旨に就いて言ふ所あらんと欲す

自由討究に反對する佛敎家中の頑固者流は曰く自覺々他覺行究滿せる佛陀の敎法に向つて批評的硏究を試みんとするは自ら忖らざるの甚しきなり又菩薩羅漢の論と雖も一たび佛陀の準許を經たる上は全く佛說と同一の價値あれば焉ぞ凡夫の批評を容るべけんやと而して右云ふ自由佛敎論の筆者は此の如き頑固者流の反對に答へて曰く佛陀は普通の人類を超越したる高大圓滿の覺者なるに相違なしと雖此の如き事は佛敎理の硏究證明せられたる後にあらざれば毫も世上一般の人々を服するの力なし且又佛陀の所說にも既に四悉壇の差別ある已上は中には世俗に隨順せむが爲に印度古來の傳說及婆羅門の敎說等を應用し又眞諦第一義を說示せむが爲に種々の譬喩方便を設けたるは明瞭なるに此等を簡別せず

ず是れ恰も學校の生徒が其教師に向つて兎に角に我が及第すべきことを假定し置いて而して後我を試驗し呉れと云ふに似たり世に是よりも其生徒に取りて安全なる試驗あらんや然れども之を試驗と云ふべきか彼の佛徒の云ふ所の如きは是れ豫め批評的研究に向つて其證明すべき結論を約束し置けるに異らず此の如き約束を以て縛りたる研究を特に批評的と名くるは如何その云ふ所は耶蘇教家中其經典の高等批評を論じて是れ素と耶蘇教の諸宗教に卓越したることを證せんが爲に外ならずと云ふと何ぞ擇ばんや然れども是れ概ね一方に於ては批評的研究の已むべからざることを看取しながら又一方には未だ全く從來の先入と拘泥とを脫離し得ざる者の暫く居て安せんとする立脚地なりその如き人々の暫くその如き地に立つは深く咎むべきにはあらざらん寧ろそが思想變遷の中途に於ける自然の一現象と云ふべきなり而も予輩は彼等に向つて百尺竿頭一步を進めんことを勸告す彼等の應に取るべきの道は見難からざるにあらずや

佛教徒の發刊する雜誌の數多きが中にも最も活氣あり最も見るに足る一雜誌は屢〻自由討究批評的研究の聲を掲ぐ此頃も自由佛教論の緖言と題する一文あり予

りて悦ぶべきことなりと考ふ又若し之を一佛敎の爲にのみ計らずして廣く我國の宗敎全躰の狀勢上より考ふれば予輩はこの如き氣運の最も賀すべきことたるを疑はず蓋し斯くの如くにして社會の進步に伴うて其宗敎も亦進步すべければなり

惟ふに佛敎徒中自由討究批評的硏究の遂に抑ふべからざることを看取したる者少きにあらざるべし然れども其徒の中純乎たる硏究者として脫離すべきの凡べての先入と拘泥とを能く脫離したる者幾何かある予輩は疑ふ其徒の多くは尙は未だ或る大なる假定を置き而して其假定の範圍內にありて自由討究批評的硏究を云々するにあらざるなきやを此の如くんば未だ眞實自由討究批評的硏究の精神を得たる者と謂ふべからず概ね彼等は世に佛敎の大眞理を發揚せむが爲に之に批評的硏究を試みると云ふにあらずや後世の附加せる所若しくは附會せる所若しくは解釋せる所は遂に批評の利劔を以て斷たれんも釋迦牟尼の說きし所卽ち眞實の佛敎は秋毫も磨滅すべからざる絕對の眞理なりと假定し而して此假定を維持せむが爲に批評的硏究を爲すと云ふは予輩はその何の意たるを解する能は

奇を好む者のある如くに保守派の中にも唯だ〳〵頑固なるを是れ悦び新説に抗するを以て力量あり確信ありと思ひ誇れる者少きにあらず然れども此の如きは必ずしもこゝに云はずして可なり以上論じたる所により保守派の根據を洞察せば保守的反動の起らん時其眞價値を判斷するに希くは惑ふ所なけんと信ず

（明治廿八年一月發行「六合雜誌第一六九號」）

進步的佛教徒の立脚地

近頃佛教家中當世の要務に闇く徒らに死文を懷いて高臥安眠する老朽の輩と稍〻新鮮なる空氣を呼吸し現時の人心を動撼する大問題に接觸し佛教と雖も更に新に批評的研究を試みらるゝの已むを得ざることを看取したる青年僧侶との間にます〳〵較著なる懸隔の現せむとするは蔽ふべからざる事實なり予輩は之を見て久しく惰眠を貪りたりし佛教に新活氣の生せむとする一兆候として賀せずんばあらず自由討究批評的研究の聲は假令ひ或部分の佛教徒に苦痛を感せしめ又或社會に於ける佛教の威嚴を損すが如く見ゆることあるも大躰上佛教の發達に取

理を發見せずとするも全躰宗教なるものは之を行ふに須らく傳來の威嚴を以てし批評若しは討究なるものを容るべからずと思惟して而して一般人民の信仰を繋がん爲に宗教上の保守論者たる者少からず彼等は曰ふ宗教としての勢力を維持せんにはユニテリヤン教たらんより寧ろ日蓮宗たれ羅馬加特力教たれと

（五）今又少しく動機の卑近なる者を擧げて云はんに宗教上の革新を稱へんとせば先づその僧侶としての、その牧師としての位地を失ふの覺悟なかる可らず然るに之を失はゞ口を糊するの困難は固より眼前に迫り來る牧師の職業換へばかり困難なるはあらず信仰の合理不合理抔と八釜しき事を言ひ立てて藪蛇を出ださんより寧ろ默するに及かずと思はんは人情の然らしむる所なりと云ふも敢て人情を誣ひたる者にはあらざるべし予輩は思ふ此の如き動機は世の所謂宗教家を動かすには餘りに卑近なりと云はん者はなからんと世に所謂る宗教家のみ豈に獨りその如き特別なる人間ならんや此事又宗教界の保守的傾向に力を添ふる者たらずんばあらず

上に掲ぐる數個條の外恰も革新を主張する人々の中徒らに輕躁なる者徒らに新

極めて輕薄なるか若しはすぐれて敢爲の勇ある者にあらずば人概ね舊信仰を毀つて新信仰を建つるに躊躇すべし自ら考へ直すの勞は既に世に考へある所を考ふるの易きに比して固より同日の論にあらず多くの人は之を敢てするをば餘りに苦しとなす餘りに煩しとなす

(三) 少しく神學上の問題を考ふる人々と雖も之れを考へ直すことを敢てせざる者の多きは今云へる如くなるがその如き問題に毫も關心せざる者は更に之よりも多からん多くの信者はその一旦教へられたる所を以て滿足す彼等は信仰上の難問に關して苦心する如きこと至つて稀なり是れ宗教界の革新派が概ね少數に止まる一大理由なり

(四) 凡そ古より先祖代々傳はれるものは後世を支配する一種の力を有す新しきものは俗に所謂るヤスッポク思はるゝの失あり古きものには一種の莊嚴神聖なる所あり而して此莊嚴と神聖とは一宗教の感化を强うするに於いて太しく有力なるものなり且又久しく人心を繫ぎたるものには何處にか毀つ可らざる眞理の潜まれるが常なり或は自らはその如くに特更に舊信仰を神聖なりとし之に大眞

（一）單に事業を成さんが爲に保守派たる者あり傳道に從事するも社會的運動を起さんとするも之を從來既に定まれる信仰に從ひ定まれる組織に依りて爲すは新立脚地に立ちて創始するに比して甚だ易し故に革新的宗教事業には失敗多く保守主義には（全く吾人を滿足せしむるに足らずとも）多少實功を目撃するの利あるが如くに思はるゝなり之を今日我國の基督教會に就いて云へば從來の精神と組織とに從へる傳道の現に澁滯せるは事實なれども今又新なる方針に從うて之を爲さんとするも未だ其組織の成らざる其根柢の深からざる眼前に於いて成功を見むことの難きは殆ど期して待つべき所なり是に於てか舊信仰に歸れ舊信仰に歸れと云ふの聲は今將にそこかしこに聞えんとす予輩は今日の基督教會に於いて事業を擧げんが爲に保守派たる者の少からぬを見る此輩は必ずしも舊信仰その者に忠なるにあらず唯だ兎に角に事業を爲さんが爲めに之を保守せむとするなり少しく事を成すの志氣ある青年にして特に此種の論者あるを見る

（二）一旦我が安心立命の地と頼みたる處を去つて新に其地を得んとするには甚しき苦痛を感ず宗教上の安心を破らるゝばかり苦しきものはあらず此邊の事に

なる以上、人間がこの如き人間なる以上は保守と革新との爭あるは免る可らざる所、人をして擧つて革新に傾かしめ擧つて保守に傾かしめんとの爲し難きは固より論を待たず保守派は革新に反對しつゝ遂に進歩に打勝たるゝによりて其職分を完うすべく革新派は頑固なる抵抗を受けて失敗に失敗を重ねつゝ遂に進歩を來たすによりて其職分を全うすべし保守的精神の强固なる敢て憂とするに足らざるなり實に今日の如く宗敎界に於ける革新の呼び聲の盛なる時に當つては遠からずして更に甚しく頑固なる保守的反動の來らむことを豫期せざる可らず是の如き反動の待ち設けらるゝ今日に於いて如何なる因緣が保守派の根據又勢力となるかを洞察するは其反動に誘はるゝ者に取りても又誘はれざる者に取りても必要の事と思惟せらる

保守的精神が社會の一要素として缺くべからざることは上に論じたるが如し其大根據も固よりこゝにあり然れども嚮に論じたる保守の大眞理以外種々の因緣が其勢力となりて人をして革新的精神に反抗せしむ予輩は簡單に之をこゝに列擧せん

人を敎へて信仰せしめ歸依せしめ安心せしめむと務むる宗敎、僧權と儀式との神聖莊嚴なるを以て世の信心を繫がんとする宗敎が每に〳〵保守的傾向を有するは毫も異しむべきことにあらず故に自由討究若しは批評的研究てふ如ぎ者と宗敎の信仰とは動もすれば水火相容れざる如くに思惟せらる是れ一理なきにあらず然れども革新の止む可らざる豈に獨り宗敎に於てのみ然らずとせんや若し全く批評的精神の要求を拒んで毫も革新する所なくんば宗敎なる者の遂に社會の或部分に於て其勢力を失はんは防ぐ可らざる所也今日高等なる基督敎若しは佛敎を信ずる者にして誰か能く禽獸崇拜若しは木石崇拜を以て滿足せん宗敎の進化誰か之を拒むを得ん然れども宗敎と保守的精神との相密着することの甚しき、今日の如く自由討究批評的精神の呼び聲の盛なる時に於ても所謂宗敎家の保守的傾向は其討究其精神に頑强なる抵抗を爲して已まざるなり此の如き抵抗の存する是れ當に然るべき所にして大躰の釣合上却て悅ぶべきことと云はざる可らず進步主義を懷く者に取りても保守的抵抗の頑强なるは强ちに憂とするに足ず傍に此の如き抵抗ありてこそ進步主義の實功をも奏し得るなれ世が此の如き世

だ働かざる力めざる思はざる死物ならんや活潑々の勢力を見ずしては千變萬化の物界の實相を洞察し得たりと云ふべからず吾人は動かざることを得ざるの運命を有する活物なり若し生長せずんば老衰せざる可らず若し老いざらんと欲せば日に壯ならんことを力めよ日に新に又日に新ならずんば吾人の心はその既にある所よりも更に邪惡ならん一社會の一狀態に靜止し而して退歩せざらんことを欲するは恰も止水の腐れざらんことを欲するが如し習得したるものを保守せむと欲せば須らく更にその以上のものを習得すべし取らざる者はその既に取りし所のものをも失はん故に曰く保守をして獨り保守たらしめんと欲するも得べきにあらざるなりと

之を要するに保守は全く革新を離る可らず革新は全く保守を離る可らず保守は革新の中に宿さるゝの保守革新は保守に支へらるゝの革新ならざる可らず社會の事物此兩要素を缺いて全きを得るはなし然れども或事物に於ては特に保守的傾向の強くして革新の行ひ難きものあり啻に然るのみならず革新を爲すは殆ど其事物を亡ぼすが如くに思惟せらるゝものあり宗教の如き即ち是れ也

此の保守の性なくば事々物々一瞬時も安立することなかるべし指して一事物と云ふべき者さへもなからん世に安靜確固なるもの何處にかあらん若し一旦得たる所を忽にして失はゞ或は只だ變化なるものはあらんも進歩と云ひ生長と云ふべきものはあらざるなり吾人の學びたる所は之を記憶するを得故に學に進むことを得るなり一たび作爲したる事は再び之を爲すの傾向即ち慣習を得故に事物に熟練するを得るなり祖先の經歷したる事は之を子孫に遺傳するを得故に人間社會に進歩生長なるものあるを得るなり吾人若し一段階を踏まば先づこゝに止まらんを要すこゝに其脚を立して始めて其以上の段階に登るを得るなり社會に保守的精神の缺くべからざる誰か之を疑はん全く此精神を撲滅せむとするも爲さるべきことにあらず然れども保守なるものも其反對の精神の之に衝突し之を鞭韃するなくんば保守そのものの目的を全うする能はず保守をして獨り保守たらしめんとするは是れ却て退歩を誘ふなり希臘古代の哲人の云へる如く世界は恰も腐敗せしめざらんには常に撼り動かすことを要する化合物の如し自己の狀態を保ちて安からんことを欲するが如くに見ゆる物躰なるものも豈に唯

人は知らずして詩人たることある如くに識らずして哲學者たらんとすることあり哲學の研究は遂に已む可らざるなり世人を擧りて醫師たらしめ畫工たらしむ可らざる如くに之を擧りて哲學者たらしむべからざるは論を待たず但だ人生には哲學的研究の絶ゆべからずと云ふ誰か之を拒むを得ん其研究の遂に絶ゆ可らずば希くは人生の大活動を截すべき大思想の組織さるゝを見んこの如くにして吾人の心靈は活くるを得ればなり焉ぞ無氣力なる懷疑に迷ふことをせん

（明治廿八年一月發行六合雜誌第一六九號）

宗教界に於ける保守思想の根據

物躰に惰性あり人心に習慣の性あり物として自己の狀態を保存せむとせざるはなしこの保存の性なきは恰も自己なきなり一箇の自躰あると其自躰を保存せむとするとは一にして二ならず動物界に在りて自衞の性として現れ人間社會に於いて所謂保守的精神として現はるゝもの其根本を尋ぬれば一なり皆諸物が各自の性を保たんとするに外ならず

躰に於ても宇宙の眞理の一面は慥に描かれたりと謂うて不可なし但だ其萬人を滿足せしめ得ざるは眞理の全面を覆はざればなり夫れ哲學は人心と天地と相觸れたるの結果にあらずや種々の人物が種々に宇宙を想見するは其種々なるが故に必ずしも皆過れるにあらず但だ天地と人生との極めて富贍なる、一人物の所見を以て之を盡す可らざるなり天地人生この如きものならばこの如くに種々の人物の眼を以て種々の方面より之を窺ふ是れ當然の事ならずや

斯くの如く皆天地人生に容れられ而も未だ之を充たし得ざる種々の世界觀の相踵いで起る是れを吾人が心靈の生長と云ふは非耶人類の哲學の歷史は其の思想的生活の歷史なり未だプラトーン出でざるアリストテレース出でざるカント出でざるヘーゲル出でざりし時よりも今は宇宙を觀るに更に多くの方面よりす吾人の思想的生活は更に富贍なるものとなれり哲學の歷史豈に唯だ思索推究の失敗をのみ語るものならんや

吾人の常識には思想の明瞭ならざる者その齟齬するもの頗る多し吾人は日常之を明瞭にし之が齟齬を去るの必要を感ず而して是れ哲學研究の端緒に外ならず

見ゆるも其實其思想の全躰の滅亡し去るにあらずその幾多の思想は後人の新組織の中に入りて保存せらる先人の建てたる家その儘は永存せずと雖もその刻みなしたる柱石の悉皆破壞さるゝにあらず先人の哲學の全く顚覆したるが如くに思はるゝは之を其組織の總躰に就いて見ればなり科學的研究の結果が確實に保存されて哲學的思索の然らざる如くに見ゆるは蓋し是れが故なり科學研究の保存さるゝは專ら事物の局部に關するものなればなり哲學の常に顚覆するは其全躰を總合せむとすればなり哲學的思索も其局部に就いて見れば保存さるゝもの決して尠しと云ふ可らず

一大組織の全躰は永く保存されざるが如きも又全く吾人の思想界に一組織として其跡を絶つにあらずデモクリトスの世界觀もプラトーンの世界觀も今の世に尙ほ其勢力を失はず惟ふに機械說と云ひ目的說と云ひ種々の方面より天地人生を見盡したる後にあらずば恐くは天地人生の眞相は看取し得べからざらん古來の大哲學的組織の過れるは其徹頭徹尾迷妄なるがゆゑにあらずして寧ろ眞理の半面に過ぎざるが故なり啻に其組織の局部の保存さるゝのみならず其組織の總

あらずして何ぞ彼の美術なるもの(哲學を遊戲と云ふと同じ意味にて)遊戲と云はれざるか天才の所造として プラトーン又ヘーゲルの哲學は何ぞフィデアスの彫刻ラファエルの繪畫セーキスピヤの劇詩に劣らんや若し美術家の所作が人生を飾るものならば哲學者の哲學思想も亦人生に一種の光彩を添ふるものなり何人の作を完了具足せる詩作と決し難き如くに至極の哲學も亦得て求むべからざらんも古今の大世界觀は之を壯大なる智力的所作と見て吾人の之を嘆美すべき豈に秋毫も大劇曲に劣らんや

哲學的研究は啻に遊戲とのみ見て吾人の所得の一部分をなすにあらず問題の解釋は未だ定まる所なしとするも解釋すべきの問題は哲學の歷史によりてますます其性質の明ならんとす哲學の歷史は難問題の解釋を示さずとするも何處に難問題の潛まるかを示さんとす而して吾人の思索の解かんとして解きかぬる問題の眞實如何なるものなるかを洞觀する是れ吾人の知識に取りての一大所得にあらずや一大發見にあらずや

且又た先人の建てたる哲學組織が後人によりてその根底より覆さるゝが如くに

き最後の若しは唯一の根據となさばこゝに忽ち種々の問題は萠芽せん何は兎もあれ自己の意識のみは疑ふ可らずとなさん何程のものの其意識に含まれるかと問ひ起さゞる可らず純粹無雜の實驗を以て疑ふ可らざる根據となさんか謂ふ所實驗は何程のものを意味するか噫吾人は遂に思索せざるを得ず推究せざるを得ず是れ吾人が思想の運命なり

懷疑を唱ふる者は屢〻云ふ哲學の歷史は吾人が思索推究の失敗を物語るものに外ならずと然れども其歷史を見て唯だ失敗の連續と云ふは事實を得ず若し失敗を物語らば其歷史は得る所あるの失敗を物語るなり先づ假りに之を吾人の智力的遊戲と見るも吾人は全く得る所なきにあらず壯大なる遊戲を爲したりと云ふこと是れ旣に吾人の所得にあらずや若し唯だ衣食住に缺く可らざるもののみを以て人生の必要と云はゞ已みなん爾か云はずんば衣食足れるが上の遊戲は是れ亦人生の一種の必要にあらずや若し小兒の遊戲を無用視せずば何すれぞ大思想家の遊戲を無用視せん鉦大皷は後に至つて遊戲の器具とならざる故に小兒の之を以て曾て遊びたりしは迷妄なる乎試に思へ人生の半は(趣味深き半は)是れ遊戲に

組織の如くに永久不動のものたるを得べからざらんと寔によし哲學の歴史は未だ吾人に完全なる組織を示さず吾人は未だ易ふべき所なき世界觀を發見したりと云ふ可らず今後も恐くは（人智の限りある以上は）完了具足せる哲學的組織の案出せらるゝことなからん一哲學者の建てたる所惟ふに後の學者によりて改造されん或は其根底より改造されん然れども改造さるゝことあるを以て其建設を思ひとゞまるべき理由とはなす可らず豈に吾人は一狀態に停止するを得ずして他へ移らざるが故に其狀態に至る可らずと云ふの理由あらんや吾人の思想は是れ窮まらざる活動を意味するものにあらざるか思索し思索して已まざる是れ人心本具の性質にあらざるか其目的にあらざるか看取すべき不動の眞理はこゝにあらざるか

請ふ先づ懷疑なるものを思ひ見よ極りなく疑ふは是れ疑を疑ふなり絶待の懷疑は自殺せざる可らず何故に天地の大原人生の目的の人智によりて知られざることを知るか之を知ると云ふ既に理由なくんばあらず何處にか疑ふ可らざる所なくんばあらず底なき懷疑は自滅せざるを得ず若し一事物を捕へて之を疑ふ所な

れば哲學を排すと云ひつゝ一種の哲學を主張す懷疑的ならぬ一種の哲學よりも懷疑說を主張するを安全なり堅固なりと思ふは未だ懷疑の何たるを知らざるなり吾人の腦裡に硏究心の宿れる以上人生の岐路に惑ふことある以上は全く哲學的思索を脫せむとするも豈に得べけんや

啻に一世界觀の已むべからざるのみならず大活動は大思想の之に伴ふあるを要す興國の氣運をして挫折せしめざらんと欲せば大世界觀の人心を維持するあるを要す大思想なくして天下後世に偉業を垂れんと欲するも得べからず予輩は今日の我國に於ては必弱き懷疑を望まず雄大なる思想の建設を願はずんばあらず然れども目下容易に看取し得べき所の懷疑的傾向が若し將來の大建設の前兆となるならば予輩は寧ろ大に之を賀せん新なる大建設は先づ大懷疑の之が爲に地盤を掃除するあるを要す歐洲近世の哲學的大組織も懷疑を以て始まれりと云うて可なり予輩は懷疑の氣風をして必弱き小懷疑に止まらしめず壯大なる建設を誘致する大懷疑たらしめんことを欲するなり

或は云はん今後哲學的大組織の建設せらるゝあるも是れ亦古來現れたる幾多の

是に於て乎現今少しく新空氣を呼吸し自ら考ふることをなす人々の中には天地と人生との問題に對して懷疑に陷れるもの少しとせず予輩は懷疑的氣風の少壯なる思想家を襲ひつゝあるを見る也實務家は多くは素より天地人生の深奥なる問題に深く關心する所もあらざれば紛々たる哲學者の議論を以て煩しとし益なしとす宗敎家は哲學は以て吾人に安心を與ふるに足らずとなし之に對する懷疑を利用してその謂ふ信仰を保持せむとす多少哲學的頭腦を有する者も未だ曾て解けざる天地人生の大問題に面し古來の學者の失敗に鑑みては動もすれば懷疑に安せんとす現今我が思想界には未だ大哲學の組織を見ず多くの思想家は一種の懷疑說の襲ふ所とならんとすと云ふは非耶

然れども吾人遂に一種の世界觀なくして已まんとするも得べからず希臘古代の懷疑學派の見處を取らんか是れ一種の世界觀也是れ天地人生の問題に一種の解答を與へたる者なりと云ふも不可ならずヒューームの懷疑說に處らんか是れ固より一種の哲學なりコントのポジチヴィズムを奉せんか是れ亦種々の思索の問題の解釋されたりと思惟するにあらずんば奉ず可らざる一種の哲學なり人動もす

敗に終れりしが如くならずや。

世の改造を以て任ずる者ソクラテースの運命に遭遇せざるは稀なり、但だ多くは其模型の之よりも小なるのみ。彼が受けし所の誤解は等しく之を受けざる可らず。改造的事業も亦難いかな。併しながらソクラテースの精神は遂に亡びず。永久の勝利はソフィストにあらず、又彼を陥れし保守的反動にあらず、彼れの握る所たる也。改造的事業に從事せむ者、之を思うて以て自ら慰め自ら振ふを要す。時勢の急流に臨み聊か感ずる所ありて此文を作る。

（明治廿八年一月發行、六合雜誌第一六九號）

懷疑を破す

儒佛の道を基礎としたる世界觀も維新以來の思想の激變に接しては搖動されざるを得ず然らば他に確固なる哲學的組織を求めんか潮の如くに漲り來る泰西の新思想も唯だ相爭ひ相軋れる種々雜多の所見を示すが如くなるのみ東西古今の哲學者は各〻我が見る所を主張して議論百出何の處に歸着するやを知るべからず

クラテースは能く之を看取せり。　彼は心底より研究の途に已むべからざるを感じて立てり、新智識の必要を感じて立てり、彼は一面ソフィストに許す所ありし也、否ソフィストたりきと云ふも不可なし。　然れども又た素より其輩の輕薄と狼藉とを以て滿足する者にあらず、彼が目的は破壞にあらずして建設にあり、批評討究の已むべからざるを知ると共に又た素より道德を磐石の安きに置かんの必要を感じて立ちし也。　ソクラテースを知らんには此邊の動機を明にせざる可らず。其目的は素より道德を維持せむにありき。　然れども之を維持せむには其據つて立つ所の觀念を明にせざる可らず、今にして唯だ問ふ所なくして舊時の風儀を遵奉する、是れ決して道德維持の道にあらず、倫理的觀念を更に討究するの要求は遂に拒むべからず、寧ろ此要求に從ひ其討究を運ばしめたる處に於いて道德を建立すべしと云ふ、是れソクラテースを奮起せしめ二十餘年一日の如くアテンの市街に彷徨せしめし所以の精神也。　彼は此點に於いて保守的反動と相容れざりき。保守派は彼を見て危險なりとせり、ソフィストの一人に外ならずとせり。　彼は遂に之と衝突して毒盃を傾けざるを得ざるに至りき。　彼が一生の事業は恰かも失

昔時希臘の文物ますく隆盛の氣運に向ひ學術技藝競ひ興るや、社會の組織亦其趣を變せざるを得ず、舊時の風俗慣習道德宗教亦其在來の狀態を維持し得ざらんとす。何心なく祖先の風儀を是れ守り、其掟に遵うて敢て疑ふ所なく考ふる所なかりし時代は既に過去のものとなり了れり。假ひ其時代の稚き心を如何に美しとすればとて、復た之を呼び返へすべくもあらず。此時に方りソフィスト等出でて時勢の急變益〻甚しく、舊物の破壞は遂に其停止する所を知らざらんとす。古來世の尊信を繫ぎたるものも批評的撿査を免れざらんとす。此の批評的精神の要求は遂に抑ゆべからず。ソフィストの時代は希臘思想のまさに經過すべかりし一段階にして、是れ其進步の歷史の一局面たりしなり。而もその流弊は亂暴狼藉を極め浮華私慾を是れ事とするに至らむとせり。是に於て乎、アリストファネス一派の保守的反動起り來り、古來の權威及風儀の根據を問ひ尋ぬる批評心を危險なりとし、之を抑へて以て祖先の美風を維持せむと欲したり。此時に出でゝ此等兩者の中間に立ちたる者をソクラテースとす。問ひ究むことをせずして只だ其儘に舊時の權威と所傳とを信受せむは、當に此時に於いて望むべきことにあらず、ソ

らず、破壞も亦敢て難しとせず、但だ改造は失敗に失敗を重ぬるにあらずば、之を成し遂ぐるの道なけん。改造を非難する者は動もすれば其失敗の殆ど豫期し得べきを云ふ。憂ふる勿れ。偉大なる成功は幾多の失敗の之に先たざる可らず。世の先導者たらん者誰か失敗の苦味を嘗めざらん。我が計畫は亡びん、然れども眞に當世の改造の需用に應じて起りしものならんには、必ずや後世我に繼ぐ者出でて我志を成すに至らむ。我が試みし所の者其儘は成就の幸運を有せざらん。我が計畫は寧ろ其形を變へて後の繼承者の偉業の中に成就されん。我が一生の事業は亡びて亡びざるなり。謂はずや、麥粒地に墜ち其形を失はずば數十百倍の實を結ぶを得ずと。實際的改造に從事せん者、己が生涯に成功を見むことを願はずして寧ろ蹉跌し失敗せむことを期せよ。寧ろ失敗を以て我が榮譽となすも亦可ならずや。何人も皆ルーテルたらんを願ふべからず。寧ろ其先驅となりて火刑に處せられんも亦以て自ら慰むるに足る。我れ一たび失敗せむか、是れ後人の成功を早うするもの、我れ再び失敗せむか、又更に之を早うするものなり。失敗は改造者の仇敵にあらず。請ふ、即坐の成敗を以て改造の要不要を云ふ勿れ。

るなり。文學に哲學に改造作振すべきもの何ぞ數ふるを須ひん。作振改造の元氣、是れ今日に於て最も養ふべき所ならずや。我等は何を以て今後の世界史に大飛躍を試みんとする。噫、収縮的滿足ほど我國運を妨害するものはあらず。無窮活動精進不退轉の元氣と及び之に基ける革新改造の必要と、是れ今日聲を勵まして稱ふべき福音にあらずや。

今に當り改造の必要を言ふ者、必しも其人に乏しからず。然れども一方に其必要を大聲疾呼する人或は他方に於ては老朽維持すべからざる者を維持せむことに力め而して是を當世の急務と云ふ。一方には極めて明敏なる批評眼の他方には恰も盲目に作しかるが如き、予輩は往々之を今の論者に見る。政治及社會の組織には根本的改造を主張する輩時に或は宗教的信仰及制度の如きには久しく一社會に行はれ而して其社會に於ても革新の必要のます〳〵感せられつゝある舊物その儘を取り來りて之を採用せむと計る。此の如きは今云ふ論者の種類に屬せずや。片目的改造は未だ以て吾人を滿足せしむるに足らざるなり。

然りと雖も世間改造の事業ばかり成し難きは非ず。保存は必ずしも爲すに難か

守的反動の勃起するに至りしなり。然らば則ち我が社會の事既に改造の餘地を存せざるか。豈に夫れ然らんや。今にして早く已に既得のものを以て滿足する收縮的氣風を生せしむるは、何者か我國運の進步を害する之に過ぎたるあらん。實着なる進步は我が從來の經歷を以て起點となさゞる可らず。寔によし。然れども是れ只だ起點なり、改造の起點なり、焉ぞ革新の餘地なしと云はんや。國粹保存と云ふ、必ずしも不可ならず。然れども何をか其所謂國粹となすかは頗る沈思すべき所とす。予輩は我が君臣の關係の古來美しき歷史を有したるを喜ぶ、予輩は之を以て他の邦國に誇るに足ると考ふ。然れども更に沈思せんことを要す、我等は世界に誇るに足る大文學大哲學大宗敎を自ら創始したることあるか、世界史の大勢に何の加へし所あるか。予輩は寧ろ我が大歷史を過去に求めずして將來に求めむことを欲す。誰か云ふ、我社會の組織に改むべきものは存せずと。種々の社會的問題は今にまさりて我が經世家の頭腦を痛ましむるに至らん。道德宗敎、是れ亦我が思想家の難問題たらんとす。陋固なる漢學者は儒敎を以て滿足せん、頑迷なる僧侶は佛敎を懷いて高臥安眠せん。然れども社會の大勢は之を顧みざ

るの望ましきことを疑はず、數多の嘉みすべき事業の基督教會の信仰によりて今なほ爲されつゝあるを見る。不十分ながらも歐米の社會がその今日の秩序を保ち得る所以のもの大に其從來の宗教に負ふ所あるを知る。然れども其根據地たる歐米に於いてすら基督教は將に其舊狀態を保ち得ざらんとす。予輩は之を斷言するに憚らざるなり。今や或は第二の宗教改革を待ち設くるも、誰か之を據處なき妄想と云ふを得ん。今にして信仰に制度に改造の必要を認めざるは、是れ却つて其宗教を危うするものと謂ふべきなり。

現今歐米諸國が社會の組織に哲學的世界觀に宗教的信仰及制度に改造の必要を感ずる斯の如し。何人か此等の改造を以て其當今の要務にあらずと云ふ。何の世か久しく唯だ破壞を以て滿足せむ、今日の要求は改造にあり。人は屢〻輕忽なる改革に懲りたり、今日の呼び聲は實着なる改造にあり。實着ならんことを欲すと雖も、改造を求むるの心は之が爲に害はれざる也。

維新の大業このかた我國に於ける諸般の改造は殆ど指を屈するに遑あらず。故に一時はその餘りに急遽ならんことを恐れ、我が國風の歐化し去らむことを憂へて、保

中、最も保守に傾く者の一なるが、而も變遷はまたその途に免るべからざる所、又その進化せざるは却つてその頽敗を誘ふの因緣たらずばあらず。此理は姑く措くも、當今歐洲の宗教が一大危機に逼りつゝあることは決して看取するに難からず。教會の先導者たるべき者の中、固より未だその安眠を攪破されず依然として舊信仰舊制度に安せむとする者も尠きにあらざれど、滔々として襲ひ來る新潮流に對しては遂に天下の耳目を覆ふべからず。强ひて全く我心の門戶を閉ぢて甚しく今日の時勢に闇き者にあらずんば、少しく思慮することを知れる人にして誰か心中多少の搖動を感せざらん。久しく歐洲の人心を統治したる基督教は素より全く湮滅に歸するの憂はなかるべし。その人情に適切なる、その深奧なる眞理を含蓄する、何人か之を否むを得ん。然れども尙ほ久しく文明諸國民の心地に宿らむには、其形を更ふべき所ある、また疑を容るべからず。夫れ基督教なるものは人類の宗教的進化の歷史に於ける一大事實なり。宗派的感情若しは其他の一種の先入を以て臨む者を除いては、誰か之に對して敬意を有せざらんや。其教會の經驗は深く吾人を教ふる所あるに足る。予輩は基督教的思想の尙ほ廣く人類を化す

の社會組織も、靜に之を窺へば、嘆美すべからざる者の多かることと、こゝに深く問ふを須ひず、是れ其明達なる人士の自ら承認する所なり。

人生に深甚なる關係を有するもの、社會の組織に過ぎたるはなし、而して之に改造を要するの切なる、明にこれを歐洲の今日に見るを得。今又眼を轉じて、吾人の思想界を統御する哲學的世界觀を窺ふに、其歐洲今日の狀態は如何。歐洲今日の哲學は、之を支離滅裂と云ふも、また甚しく過當の言にはあらざらん。へーゲルの大組織破れて此かた、之に繼げる者はやうやくハルトマン等の哲學に過ぎず。局部々々の研究はますます精細を加ふる如きも、未だ大綜合大建設を見るに及ばず。へーゲルがその一時の支配權を失ひしも、固より當に然るべき所ならん。而して之に代つて局部々々の實驗科學的攷究の盛なるは、是れ亦進步の一段と見て賀するも可ならん。而も偉大なる哲學的組織は遂に莫かる可らず。今や既に歐洲の哲學界は新建設を求むるの聲を揚ぐること頻なり。其哲學的改造を必要とする、恐くは今日にまして切なるはあらざるべし。

深く人心の根底に浸潤する宗敎的信仰は如何。元來宗敎なるものは、人間の事の

改造的事業

今や眼を社會の何れの方面に轉ずるも、或はあらはに或はかすかに看取し得べきものは深く其内部に横れる改造の必要也。少しく耳を欹てて聞く者は必ずや右より左より革新的事業を願望するの聲に接せん。何の世か多少の改造を要せざらん、而も之を要する今日の如きは稀れなるべし。改造の要求は遂に拒むべからず。是れ空想に出でしにあらずして實際的必要に生じたる者なればなり。

方今歐洲に於ける社會黨の運動を始めとして諸種の所謂社會改良の方案は、是れ何を示すものなるか。經濟的機關は遂に何等かの改良を要せずして已む可らず、貧富の對峙は或は政治家の手腕を以て或は宗教家の感化を以て如何にか之を改むるの道なかる可らず。從來此邊の事には保守に傾けりし基督教會も今や漸く目覺めて、其の一臂の勞力を此に致さんとす。文明國を以て稱せらるゝ歐米諸邦

ざるなきかを審にせず、又「基督の本意」と題する章の如き論議すべきものの多々あるを知る。然れども此の著書の大躰の趣向に對しては予は實に最も熱心なる同情を表せざるを得ず。予は此書の出でて世人の深く之に注意せむことを切望せずんばあらざるなり。

我邦に於ける基督敎の將來は敎外の人と雖も須らく留意すべき所なるが、これ殊に其敎徒に取りての最要問題たるは論なし。今日の敎勢を如何せんと、是れ少しく識見ある敎徒の互に發問する所にあらずや。基督敎傳道の主眼と方針とは今日に於て大に改めざる可らずと、是れ有爲の人士が皆大聲疾呼する所に非ずや。横井氏の此著書の考案は實に彼等人士の注意を價ひすべき者なり。只だ一讀、急激と評し去りて此書を棄てんは、未だ之を讀むの眼識なきを證するなり。此書の發刊さるゝに當り聊か思ふ所を記し以て其序言に代ふ。

(明治廿七年十二月發行、六合雜誌第一六八號)

旨は徹頭徹尾人類的なり倫理的なり。氏の此著書に於ける所謂有神論的要素は、詮ずるに、其思想の人類的なる、倫理的なるの結果と云ふを得べし。而して氏の所論は斯の如く人類的なると共に不可知論の要素を含めり、即ち萬法の絕對的大原に關しては氏は明に不可知論者たることを自白せらるゝが如し。而も天地萬物に於けるの發現を認めて之を論ずる所、氏の言頗る凡神敎的趣味ありと云はざる可らず。之を要するに、横井氏の論旨には人類倫理的見地(及び之に基ける所謂有神論的要素)と不可知論的要素と凡神敎的要素との相交れるを見るなり。氏は此等の要素を以て基督敎會の深奥なる宗敎的道德的實驗の材料を新に選擇組織し而して一世界觀を立てむとするものなるが如し。是れ氏の新神學なり。予の見を以てすれば、横井氏の思想は實に當今の最も進步せる又最も勢力ある見地の少くとも一方面を代表せるものたるを疑はず。但し予は横井氏が見て以て哲學的思索の干涉し得ざる至極遍通不易の根據とせらるゝ所と氏の所論中多く發見さるゝ哲學的見處若しくは假定との間だに如何なる關係の存するかを審にせず、又氏の云ふ至極遍通不易の根據そのものが哲學者の思索の問題となる事柄にあら

横井時雄氏は此四五年間の熟慮の結果を取り出でて之を吾人に示さる。今日の教會は如何に此の横井氏の著書を遇せむとするか。惟ふに今日に於てはその金森氏の著書に接したる如きの心情を以て之に接することなかるべし。然れども少しく此書の思想の根底を窺ふ者は、其結論の舊神學を打破する、金森氏の所論に越ゆるとも劣らざるを知るべし。「新神學の建設」と題する章の如き、金森氏の立脚地を超ゆる數等と云はざる可らず。金森氏の著書の出づる、罵詈の聲は批評の聲と相和して聞こえたりしかど、未だ之を其根本より論破したる者あるを見ず。此の横井氏の著書に對して舊神學家中大駁論を試みる者あるか如何。

此書小なりと雖も論ずる所種々の大問題に接觸せり。予の見る所を以てすれば、此書の論旨の根底に横はる二三特殊の思想あり。横井氏以爲らく、吾人人類は遂に人類たるの立場を脱すべからず、而して人類として吾人の最も確かに覺知する所は倫理的理想を發揚實現すべきの任務なり、此任務是れ吾人に取りて最も確實最も高尙なるものなり、吾人の仰いで神とする所のもの又神ありと信ずる所以のもの要するに人類としての道心の要求に基かずんばあらずと。即ち横井氏の論

基督敎問題を論議したる者なり。　天主敎の渡來このかた現時に至る西敎傳布の歷史を知らんと欲する者はこゝに其簡明なる一小史を得たりと云ふべく、又た身を基督敎會に置ける知名の士が傍人の誹謗を顧みず大膽に其所信を吐露したる基督敎論を讀まんと欲する者はこゝに明快なる一論文を得たりと云ふべし。顧みれば基督敎會內に自由討究、進步思想、新神學の呼び聲を聞きしより茲に僅に數年、而も此僅少なる歲月の間だ思想の變遷は如何なりしぞ。　當時敢て公言され ざりし所のもの今は多くの人によりて公言され、當時聞いて驚異し忿怒し罵詈し たりし人今は多くは默して爭はず。　始め自由思想の基督敎會を驚かすや、最も銳利に最も大膽に其思想を代表したるは實に金森通倫氏の著書「日本現今の基督敎並に將來の基督敎」なりき。　氏の之を公にせしは明治廿四年六月即ち今を去る僅に三年半、而して其間だ進步的思想は大躰の點に於て金森氏の取りし方向に進みたりと云ふに不可なし。　若し金森氏をして今日に於て其書を公にせしめしならば、敎會の氏を遇する必ずや其趣を異にしたりしならん。　今や又た進步思想の著明なる一代表者たる且つ金森氏の著書に先ちて既に「新神學」の呼び聲を揚げたる

に影響する所ある、決して淺小にあらず。此の故に或は之を賛し或は之を排するの聲を聞くこと頻りなり。今や我が社會に於ける基督教の位地は吾人の注意を引くべき一大問題なり。此書に論ずる所の如き、啻に基督教徒のみならず苟しくも我が文教に留意せむ者の須らく考慮すべき所とす。人若し此書を通讀して其眞意の存する所を看取せば、必ずや予が言の過らざるを知らん。

此書エスイト社の俊傑ザヴィエの來朝に筆を起こし、天主教禁止に至る迄の經歷を畧述し、轉じてエスイト社の起原を說き、羅馬希臘兩教會の分離差異を論じ、再び轉じて其兩教會の我國に於ける近時の傳道の狀況を叙し、次にプロテスタント諸教派の渡來より其今日に及ぶ迄の傳布の歷史を掲げ、而して總じて基督教傳道の現に澁滯したるの因緣を論じ、從來の所謂傳道てふ觀念の改めらるゝにあらずんば方今の狀勢を救ふ可からざることを說き、其舊觀念の根據たる舊神學の破壞さるべき所以を論じ、新神學の建設さるべき基礎を開き、基督の本旨の那邊にあるかを探り、而して終りに今日に於て決行すべき傳道の方針を示したる者なり。この書の前半は我邦の基督教小史と云ふべく其後半は今日までの歷史に鑑みて我邦の

深き理由あるを而かも予輩の見を以てすれば宗教の進化は歷史上の一人物を以て本尊とするに止まらざるなり然しこれに就いては更に後日に論ずる所あるべし

（明治廿七年十二月發行、六合雜誌第一六八號）

横井時雄氏著『我邦の基督敎問題』の序

横井時雄氏過ぐる數年間の熟慮の歸する所を叙述して一書を成し、予に之が序言を求めらる。予此書の世に出でむことを望むや切なり、因つて敢て一文を草し以て之が序に代へむことを諾す。然れども横井氏が後進の一友なる予輩の如きに其著書の序文を求めらるゝ、既に常例にあらず、予がこゝに陳べむとする所、亦恐くは尋常一樣の序言を以て見るべからざるものあらん。蓋し此書の論旨に就き予の考ふる所を忌憚なく吐露し以て其序となせばなり。

始め西敎の我國に傳播し來りて漸く其根底を深うせむとするや、德川幕府之を嚴禁し、爲に久しく其痕跡を絕ちたりしが如きも、輓近泰西文物の輸入さるゝと共に再び侵入し來り、復た之を驅逐し得べからざらんとす。而して其敎旨の我が風敎

心を解せざる者の言なり以上陳ぶる如きの意味に解したる信仰は感情及意向の邊の基礎として十分想念智解の要素を包含す若し斯る意義にての敎徒をクリスチャンと云はずば今日の敎會に於てはクリスチャンと名くべからざる者の少からざるを見る予輩はその如き意味にてのクリスチャンの增加せむことを願はずんばあらず予輩はその如き意味にての基督敎を唱ふ若しその如き意味にてのクリスチャンなる名稱は保存するの要なしと云ふ人あらば予輩は强ひて之を保存せんことを勸告するの必要を見ざるなり

基督の人物品性に對する欽慕敬仰の念は必ずしもその猶太人としての世界觀に結ばれるものにあらず一個人の世界觀とその人物品性とは素より相關る所なきにあらざれども亦おのづから相分るゝ所あり天地萬物の構造と其原因とを思考せし所の基督を師とすると其人物を敬慕するとは混同すべきにあらざる也

歷史上の一人物を以て宗敎の中心とするに至りしは是れ其一大進步なり世に勢力ある大宗敎は概ね歷史上の一人物を以て其敎祖となせり(若し例外ありとせば婆羅門敎ならん)見よ人物に對する敬慕の念を以て敎徒の最要資格となすことその

find stand upon it; not Paganism only, but far higher and truer religions,—all religion hitherto known. Hero-worship, heartfelt prostrate admiration, submission, burning, boundless, for a noblest godlike Form of Man,—is not that the germ of Christianity itself?"

と云ひしは屢〻讀んで其意味の深長なるを覺ゆ而して予輩の見る所を以てすれば此の欽慕敬仰の念は人物品性に對するものを以て最要とす是れ一宗教の教徒と一學派の學徒との相異る所なり基督なる人物の千百載の下畧ぼ吾人に想念さるる程にその性行の記錄されたる書典の存することは是れ其教徒たる者に取りての一大幸福なりその如くに教祖の性行の知られざる宗教に於ては種々の想像を以て之を補ふか又は品性上の連結に代ふるに教理上の規定を以てするの不幸に遭遇せざる可らず人若し欽慕敬仰の念に差等ありと云はゞ予輩は只だ誠意を以て敬慕するを要すと云はんのみ尙ほ未だ以て或は教徒と名くべきか或は名くべからざるか判定し難き境界ありと云はゞその如き境界の存することを否むの要なきなり又必ずしも基督に對する敬慕の情が他の聖賢に對する敬慕の情を妨げず彼に專らなれば此に薄からざる可らずと云ふは未だその如き眞人に對するの

予輩の考ふる所を以てすれば教徒がその教祖に對する關係の最も重要なるものは品性上の連結なり殊に今日の基督教神學の如く教義の一定し難きもの多きに當りては予輩は基督なる人物に對する欽慕敬仰の念を以て基督教徒たる特徴の最も重要なるものとすることの妥當なるを見る而してその基督なる人物は固より之を福音書中に求むるの外なし假令ひ福音書は之を基督の傳記として見んには幾多の批評を容るべき餘地ありとするも之を精讀せば其大躰の點に於て略ぼ基督なる人物の浮び來たるを覺ゆるなり又假令ひその思ひ浮べて以て基督となす所のもの人によりて多少其趣を異にすともその福音書中に看取する基督に品性上欽慕敬仰の念を以て繫がるゝ者は之を基督教徒と名くるに於て不可なし又當に是を以て基督教徒たる最要の特質となすべきなり又是を以て教徒たる最要の資格となさば所謂信仰てふ者に附着する種々の迷想と弊害とを排除し得んカーライルが

"No nobler feeling than this of admiration for one higher than himself dwells in the breast of man. It is to this hour, and at all hours, the vivifying influence in man's life. Religion I

は名くべからざるか請ふ所謂堅固なる信仰てふ者の何事を意味し何者を含蓄するかを示せ必ずやその中に既に神學上の問題の潜在するを見ん吾人の神學上の思索の得て動かすべからざる根本觀念ありと云はゞ請ふ之を明示せよ或は之を指摘して云はん基督の神性及其贖罪を信ずる是れ最奥の根據なりと或は云はん否な從來云ふ如き意味にての基督の神性及贖罪は必須のものにあらず是れ寧ろ神學の範圍に屬して搖動し得べき事柄なればこゝに根據を置くべからず搖動すべからざるは有智有情有意の神を信ずることと是れなりと斯の如く基督教の信仰を以て所謂有神論と同一ならしめんと欲する者あり或は此の如き有神論是れ取りも直さず神學上又哲學上の大問題なるを見て信仰の最奥の根據を單に吾人の倫理的心識の上に置かんとする者あり第一者の云ふ堅固なる信仰は第二者の云ふ所のものと同じからず第二者の云ふ所は第三者の云ふ所と同じからず又或は一種の神祕的信仰を以て最奥の根據となさんとする者あり「堅固なる信仰」を以て神學的思索の進歩を規畫せむとする必ずしも非なるにあらず要は唯だその謂ふ堅固なる信仰の何者たるかを示すにあり

存すべきものにあらず而して其智解上の要素(即ち心理學上の語を以てすれば信仰に於ける想念的要素)は是れ取りも直さず神學上の問題に屬するものにあらずや若し信仰に於ける感情及意向の邊を以て最要のものとせば何事を信ずるかは寧ろ第二等の事件と爲り畢らん若し又信仰すべき事柄(即ち想念的要素)は直覺し得べく論議すべからざる至極のものなりと云はんか然らばその如く吾人の直覺し得べき想念の何たるかを問はざる可らず而してその如き想念は信仰の根據たると共に又た神學の出立點たるべきものならずや如何なる想念を以てその如き出立點となすべきかは是れ神學上の大問題にあらずや彼を信ずるは非なり此を信ずるは是なりと云ひて信仰する事柄に是非の區別を立つる以上は神學と信仰とは全く分立し得べきものにあらず神學は如何に搖動するも信仰に取りては聊も痛痒を感ずる所なしと云ふ可らざるなり

屢〻聞く某教會に於ては信仰極めて堅固なり故に其神學上の進歩甚だ多望なりと是れ豈に豫め神學の動くべき範圍を「堅固なる信仰」の中に規畫せるものにあらずや如何なれば若しその云ふ「堅固なる信仰」の範圍外に逸出せば之を神學の進歩と

之を要するに信仰と哲學との關係は佛教徒も亦明に辯ぜんことを要する問題なり佛者の信仰は科學に觸れて毫も搖動する所なきを得べきか

(明治廿七年十一月發行、六合雜誌第一六七號)

教祖と教徒

(クリスチャンとは何者ぞや)

今日の如く基督教神學の搖動しつゝあるに際しては何を以て其教徒の特質となすべきぞ何が故に或部類の人々を特に基督教徒と名くべきぞ基督教神學は如何に搖動するも其教の信仰は變易すべき者にあらずとなし神學と信仰とは區別するを要すと思惟し而して其信仰を維持することを以て基督教徒の特質となすべきか果して信仰と神學とはその如くに分離し得べきものなるかその謂ふ信仰は何を信ずるの信仰なるか宗教に云ふ信仰は固より唯だ智解上のものにあらず然れども其包含する感情及意向の邊を信仰する事柄(即ち智解上の要素)と相離さば恰も躰質なき形に伴しからん信仰に於ける感情及意向の邊は智解の邊なくして

佛教內の超越的事實は世間一般の學者に取りては更に價値なき臆說に過ぎざれど佛教徒に取りては一分の確信なりと云はんか耶蘇敎徒も亦その信ずる耶蘇敎の超越的事實はその敎徒に取りて一分の確信なりと云はん唯だ各自我等敎徒に取りては一分の確信なりと云ふ間は何ぞ彼を以て此を難じ此を以て彼を排するを得ん何を以てか其是非を分たん佛教徒は云ふ我が一分の確信は佛敎の理論と實行とに照らして證するを得と耶蘇敎徒は曰ふ我が一分の確信は耶蘇敎の理論と實行とに照らして證するを得と何を以てか其是非を別たん常理に照らしては或は奇怪なる事柄も佛敎に入りて之を實證すれば其妙理其妙味を看得すと云はんか是れ多くの耶蘇敎徒が其敎義に就いて等しく唱ふる所に非ずや基督敎徒としての實驗が其敎旨の無上の證據にして若し之を缺かば其妙理と眞味とは遂に看得すべからずと云ふにあらずやクリスチャン、コンシヨスネス(基督敎徒の意識)が神の存在又基督の冥助を證すとまで云ふにあらずや此の如き立場にありて論ずる間は何を以てか耶佛の是非を判せん佛曰欲學我法者唯證即知と耶蘇曰人若肯行其旨、則必知斯道或由乎神、或我由己而言と

て其指示に合するが故に佛三身の理も承認すべきもの也と云はゞ是れ佛教の信仰に哲學以外の地步若しくは根據を與へたる者に非ず故に佛教も亦古來絕えざる哲學論爭の渦中に投ぜられざるを得ず若し又哲學と雖も其最初の出立點となすべきものありてこは寧ろ哲理の據て立つ信仰と名くべきものに非ずや而して佛教に所謂信仰はまさしく此處に存在するものに外ならずと云はんか然れども何を以てかその如き出立點とする是れ哲學上至難の大問題なれば佛教の信仰を斯る處に存すと解すればとて其信仰は遂に哲學的論爭の外に逸出し得べからざる也さすれば佛教の信仰は哲學以外優に別根據を有すと云ふべからざる也且又科學に對する關係は如何に考ふべきぞ佛身の論の如きは科學の能く到達せざる範圍に位する者なれば科學は之に是非の判定を下すべからずと云はんか斯く云はゞ多くの基督教徒が其幾多の信仰の個條を科學の範圍外に置くと同一なり何を以てか汝が汝の信仰を科學の範圍外に置いて其累を避けんとするは非なれども我れが我れの信仰を科學の範圍外に置くは是なりと云ふを得んや何を以て汝が奇跡を信ずるは非なれども我れが奇跡を信ずるは是也と云ふを得んや

に照らして考へざる可らざるなり
頃日佛教徒の發兌する一雜誌を見しに中に左の如くに論じたるものあり曰く佛教徒の云ふ如く若し釋迦にして果して三身具足ならば其一生の行爲悉く普通歷史の範圍に屬するものと局定すべからず例せば彼の天台十妙の中神通感應說法の三妙の如き顯露祕密の不定教の如き一音異解の如き是れ皆普通歷史の及ぶべからざる超越的事實なり此等の事實は世間の學者に取りては更に價値なき一種の假定說なるべしと雖も佛教徒に取りては一分の確信なり何となれば佛教の理論及實行に照らすに此の如き超越的事實の存在を認許せざるを得ざれば也と云々諭によし若し果して釋迦が佛者の云ふ如き意味にて三身具足のものならば其一生の行爲には普通の條理を以て計るべからざる所あらん然れども何によりて釋迦の三身具足なることを知るか若し之を論立するにも一種特別の道理を以てすと云はゞ世間既に身を佛門に委ねたる者の外は誰か能く之を信ぜん一般普通の道理に訴へ(即ち通常所謂吾人の理性に訴へ)て之を論立せんとせば遂に科學若しくは哲學に對して辯解するの勞を取らざる可らず哲學又科學の論究に訴へ而し

仰の本旨と近世科學の研究の精神並に結果との關係を云ふの差あるのみ佛敎も亦科學に對して辯解の辭を費さゞるを得ず其經典に說く所悉く近世科學の敎ふる所と契合するか或佛者は佛敎の歷史的研究を論じて佛敎史は尋常一般の史家の許さゞる事柄をも包含せざる可らず靈驗奇瑞と雖も佛敎に於ては一概に排斥すべからずと云へり然れども何故に他處に於ては排斥して可なる靈驗奇瑞を特に佛敎に於ては保存すべきか若し靈驗奇瑞の中歷史研究の方法に從うて十分事實と見做すに足るべき證跡の發見さるゝ者あらば何ぞ佛敎に存すると他に存することを問はん其存在を承認するに毫も妨ぐる所あらざるべし(或基督敎研究者はその如き尋常一般の史學的證據法によりて基督の復活の事實なることを證せむと試む)若し又佛敎には佛敎特殊の(而して世間不通)の道理ありと云はん歟而も此の如くに考ふるを科學の精神に契合したる者と云ふべきか素より佛敎に存する事柄もその奇怪なると否とを問はず皆科學に取りての研究の材料たるに相違なし然れども是を以て佛敎には特別の道理ありとは云ふ可らず特別の道理ありて佛者が誇稱する佛家の歷史をも科學的史家は一般の研究法又普通の條理

あらずと斯く主張する輩恐くは現今の信徒間には甚だ多からん或は又基督教の教ふる所今日の吾人の眼界に於ては科學と相合せざる點なしと云ふ可らざらんも信仰には別にその根據の存するあれば假令ひ今日の科學の立場より結論したる所と相合せざるが如く見ゆる點あればとて直に之を敝履の如くに棄てんは大早計の譏を免れず姑く兩者を併存し置くの優れるに若かず或は將來兩者の一致を發見し得るの高位地に達することもあらん故に吾人現今の知識の範圍に於ては兩者多少の相容れざる如き所あるも之を併せ存して尙ほ後日の發見を待たざる可らずこは萬の事に限り有る吾人の免る可らざる所也啻に然るのみならず斯くすることこそ却つて經驗を基礎とする科學的思想の本趣にかなへる者とは云はめそは謂ふ所科學研究の結果が自然界に對する經驗に憑據する如くに信仰上の事柄も亦宗教心の實驗に依れるものなればなりと斯く考ふる者に乏しからず兎に角科學と基督教的信仰との關係は中世紀以來の問題にして但だ中世紀に於ては羅馬教會の教ふる所と常人の理解力若しくはアリストテレース等の哲學に憑據せる哲理との關係を云ひ今日は多くは基督教原始の時代より開發し來りたる信

基督敎の信仰が近世の科學的研究に會うて其間多少の衝突を來たしたるは事實なり科學研究の精神方法並に結果と基督敎の信仰とは眞實如何なる關係を有するかこは種々の解釋種々の答案を以て迎へらるゝ公開の一問題なり或は云ふ兩者は多くの點に於て相容れざる所を有すと或は云ふ兩者は全く合一する者なりと或は云ふ兩者おのづから其範圍を異にす範圍異るが故に其敎ふる事件に於て同一なりとは云ふべからざるも又相反する所はなしと斯くの如く幾多の解釋を呈出し得べく又實際之を呈出する者あるなり曾て基督敎會の敎ふる所と科學研究の結果とが衝突したる如きことあるも是れ只だ當時の敎會が見て以て敎義となしたる而も基督敎信仰の要義にあらざる所のものとの衝突にして其信仰の眞旨との衝突にあらず若し羅馬敎會又は或プロテスタント敎會の所見を立場とせず原始基督敎の本義即ち基督の基督敎を取りて見ば毫も科學と衝突する所あるを發見せず創世紀の創造說又は三位一躰論の如きはゆめ基督敎本義の存する所に

哲學とは全く異別の範圍に屬して彼れ此れ相係はる所なしと思惟せらるゝに至りぬ而して是れスコラ哲學の末路なり佛敎は一面哲學の如くにして又一面宗敎なり故に宗敎的信仰と哲學的究理との關係は素よりその度外視し得べからざる問題の一なり哲學的立脚地の變動は佛敎の信仰に何程の影響を及ぼすべきか或は哲學と佛敎とは同躰なるが如くに云ふ佛者なきに非ず又哲學以外に佛敎的信仰の地歩の存すと考ふる者もあり佛敎に於ける信仰の要素と哲學的思索の部分とが如何なる關係を有するかは今日に於ては更に新しき意味を以て佛敎徒間に論ぜらるべき一問題なり佛敎には佛敎特別の道理ありて而して其特別の道理より見れば靈驗奇瑞等の信仰も毫も不條理なるものにあらずと云ふべきか全躰道理なるものはその如く特別のものたるべきか佛敎には通ずれども他には通せざるものを能く道理と名くべきか如何

以上陳べたる如く佛學とスコラ學風とは種々の點に於て相類似する所あり故に佛學を評してスコラ風ありと云ふも決して失當の言にあらざるべし

（明治廿七年十一月發行、六合雜誌第一六七號）

よ彼れが反對合一の理(コインシデンシヤ、オッポジトールム)を說き此理あるが故に神は至大なると共に至微なり無限(神)即有限(萬物)也又凡べてが凡べてを具有す(オムニア、ウビクエ)と說く所誰か之を佛者の云ふ圓融相即の理と相比せざらんや圓融相即と說けば是れ佛教獨得の又絕倫の妙理を掲げ得たる者抔と思ふは未だ東西古今の思想の歷史に昧きの致す所也獨逸神祕派等に見ゆる凡神教的傾向は中世紀の學者がプラトーン派(殊に新プラトーン派)の學說に接したるの結果也とは云へ是れ亦以て當時の基督教に養はれたる宗教的意識を理解せむと試みし者に外ならざれば之を中世紀の一產物と見るに毫も妨ぐる所あらざる也

(八) 信仰と道理との關係是れスコラ哲學を喚起したる根本問題なり宗教的信仰と哲學的究理とは合一する者なるか彼と此とは如何なる意味にて契合するか此兩者の關係を考ふることの如何にスコラ哲學の發達變遷衰頽は懸れりしなり信仰の道理に合する者なることを證明せむとする是れエリゲナの發表したるスコラ哲學の大目的なるが同じく其兩者の調和を說くにもアンセルムの說とトマスの說とは其趣に異る所ありトマス等の全盛時代を經て末期に及んでは遂に宗教と

且又中世紀の全思想界を通じてプラトーンとアリストテレースとの二大學流の共在することを見ずしては其教學の歴史は解す可らず、又特に其教學の後期に於ては彼の獨逸神祕學なるものの興起するあり元來神祕派なる者は狹き意味にてのスコラ哲學の傍に別に一流をなす者なれども是れ亦等しく中世紀の基督教的宗教心を言表せんとしたる者なれば之を除いては能く當時の教學を解す可らず而して獨逸神祕學の説く所を窺ふ者は皆その如何に通俗に謂ふ基督教的有神論と異れるかを知るべし而もこは當時の教會に主要の位地を占めたるドミニカン僧の一人なるエックハルトの説き出でし所也エックハルトの神祕説を讀まむ者はその凡神教的傾向を有すると共に大に佛教に類似する所あるに氣附かんその神躰を論じ差別の個々物を論ずる所佛教に云ふ平等と差別との論に比照して其眞意の殆ど相區別し難きものありエックハルトをして佛者の説を聞かしめば是れ予に取りて毫も珍らしき思想に非ず大に我意を得たる所ありと云はん且又獨逸神祕派には屬せざれど中世紀の末葉に出でて恰も其殿り若しくは新時代への過渡となれるニコラウス、クザーヌスの哲學が如何に種々の要素を含蓄するかを見

として用ひたる所のものも概して漢文なり拉甸語が中世紀の學問界を專領したると漢文が佛者間に行はれたるとは全く同日の論にはあらざるも而も兩者の共に一般に教學用の文として用ひられ而して人民の言語の(學問的用語としての)發達の措いて顧みられざりしばその相似の點の一なり而して此點亦注目するの價値あるなり

(七) 或は云はん佛教には數多の宗派あり中世紀の教學には是れなしと誠に中世紀の教學には佛教に於ける如き數多の分派は存在せず然れ共其思想界に種々の傾向の共在若しくは衝突するあるを見ざるは未だ中世紀の學相に昧きの證也試に其前期に就いて看よダイアレクチックに依賴するスコラ哲學の中流に實在派と唯名派との劇烈なる爭論あり加之其中流以外に「聖ヴィクトル」の寺院を根據とせる神祕者流あり又プラトーン風の物理說を喜べるコンケス人ウィリヤム等の如きあり學流の論爭甚だ盛にして彼のアベラルドがシャンポー人ウィリヤムに論抗して之を破り一世の大名を博したる如きを見れば坐ろに佛者間の對論を想ひ出ださゞるを得ず後に至つてはトマス派とスコートス派との盛なる論爭あり

學者の明快にして美術的なる論述の躰裁と太だしく其趣を異にする一見して明なり佛學とスコラ哲學とが其講述の躰裁に於て斯く相類似するはその各〻が一種の論理學に結べることに多少の關係ありスコラ哲學がアリストテレースの論理學に憑據せるは恰も佛學が因明を以て其機關となせるが如しスコラ學者が三段論法を用ふる處に佛學者は宗因喩の三支作法を用ふ

(五)佛書の講述は斯くの如く乾燥にして規則がためなると共に又た好んで煩雜なる區別を弄ぶ一語を解釋するにも數義を分つが常なり書物の名稱(即ち題目)にさへ七八種の意義を掲げ來り讀者をして未だ論旨に入らざるに先づ題目の講釋に疲れ果てしむ佛者が煩瑣なる區別を悦ぶは彼の「毛髮を劈く」と云はれたるスコラ學者に優るとも劣らず若し中世紀の學風を煩瑣哲學と云ふべくば等しき理由を以て此名稱は佛學にも與へらるべし

(六)中世紀に於ける學者間の用語は拉甸語なりき當時のスコラ學者の著述は皆拉甸語を用ひ之を以て唯一の敎學用の語となしたり人民の俗語を以て敎學論述の用に供せんとするが如きは彼等の思ひも寄らざりし所なり佛者が敎學用の文

識の如き多少心理的詮索なきにあらず然れども佛者の攷學は多くは概念の分析追究にありて實物に就いての歸納的研究にあらざるなり中世紀の學者にもローヂョル、ベーコンの如き頗る實物的研究に心を傾けし者なかりしにあらず然れども其大勢の此にあらざりしや明なり是れ近世の實驗歸納的學術が中世紀の學風と大にその面目を異にする所なり

(四) 講說の躰裁に於て佛學とスコラ哲學とは酷似せりスコラ學者は概ね先づ論旨とする所の命題を置き次に之が解釋を揭げ又之に對する種々の非難を列ね而して一々三段論法の規律に從うて其正否を辯じ來たる其言論の法甚しく規則がためにして極めて乾燥なり其講述の躰裁概ね一定の模型に從ふ之を名けてスコラ風と云ふ而してこは佛者が六合釋等の規律を立てゝ佛典を解釋すると頗る相似たり先づ所因を叙し次に題目を釋し而して後妨難を彰し本文を釋する等殆んど千篇一律なり秩序ありとは云ふべきも規則がために過ぎたり且つ其論述の道は概ね分析的にして綜合的ならず演繹的にして開發的ならず斯く講說の極めて乾燥にして優美の趣を缺ける所佛學はスコラ哲學に髣髴たり此等兩者が希臘哲

に富めるを佛教に於ても各宗その定説とする所ありその憑據する所の經論あり而して其經論の註釋にも亦更ふ可らざる標準と見做さるゝものあり假ひ多少解釋の自由はあるも定説をば其根本より覆すことを許さず佛者とスコラ學者との考ふる所其最初の假定に於て既に相同じからずや彼れは眞理は釋迦の說ける所に盡きたる者なれば佛徒たる者只だ之を解釋し遵奉するを要するのみと云はずやスコラ學者は凡そ神學上の要義は敎會の定むる信仰の中に含蓄すれば只だ吾人はその道理にかなへる所以を明にせば足れりと云はずやオーソリテーを貴ぶ點に於てスコラ哲學と佛學とは其趣を同うせり(佛教の中にも禪宗の如きありと云はゞ中世紀の思想界にも神祕學者の一流あり以て相比すべし)

(三) 先人の定說を標準とすることは佛學の研究並にスコラ學者の議論をして書物上のものたらしむるの弊あり彼等の思想は書物の上より得來たるにあらざればの冥想の中より案出するなり彼等の學問は自然界の實物を取りて之を穿鑿し之を試驗するにあらず彼等の爭ふ所は多くは書物の上にあり彼等の研究は概念を弄ぶにありて實物を探ぐるにあらず倶舍の如き多少物理的研究なきにあらず唯

を構成し且保護したる者を誰れぞと云はゞ一に之を僧侶と名くる宗教的團躰に歸せざる可らず故に一言に云へば佛學は宗教附屬の學林に於て生長したる者と謂ひて可ならん（スコラ哲學生長の塲處も亦僧侶を集めたる「學校」にありしなり（故にスコラ哲學の名稱あり）佛教僧徒の如く世俗を棄て、寺院に入り法服を纏ひ妻帶せざる所謂る出家の團躰によりて中世紀の神學は論究されたるなりこは佛學と中世紀神學とが共に宗教に密着したる者なることに附隨する外面の事情に過ぎざるが如きも是れ亦兩者を相類似せしむるに與つて決して力なきものにはあらざるなり

（二）中世紀哲學と佛學との各ゝ宗教と相離れざる者たることが其兩者をして更に深き處に於て相類似せしむ何の處に於て相類似するその共に先輩の定說を貴んで之を論議の規矩準繩となすに於て頗る相似たりアンセルムは教父等を其憑據として引きアルベルト、トマス等はアンセルムを引き後の學者はアルベルト、トマス等を引く教會の正當と見定したる學說これ彼等に取りて動す可らざる標準なり見よスコラ學者の著作が如何に先輩の言說を集めたる者又之を註釋したる者

に得んや感ずる所ありて此師道論を作る

(明治二十七年九月發行、六合雜誌第一六五號)

佛學とスコラ哲學との相似の點

佛教の哲學と歐洲中世紀の神學とは其旨意に於て頗る相異る所あるは勿論なり前者は十二因縁等の教説を初歩として遂に一眞實躰の萬法に即して離れざることを教ふる凡神教的見地に上らんとする者後者は彼の所謂教父の決定したる教旨を起點として基督教的有神論を組織せんとするものその所説の內容に大に相違の點あるは云ふまでもなし然れども其講説の躰裁を始として凡そ教學の形式に於ては頗る相似たる所あるを見る啻に共に宗教に密着したる一種の哲學と云ふ點に於てのみ漠然相類似するにあらず幾多の輕少ならざる點々に於て(只だ一見して思はるゝよりも)その甚しく相似たる所あるを見出だし得べし

(一)佛學とスコラ哲學とは共に宗教的階級の內に在りて開發講究されたる者なり但し在家の人にして佛理を研究したりし者固よりなきにあらず然れども其學

忠なるよりも道に忠なればなり此の故に曰く予輩の所謂一念を以て弟子に臨むは是れ最も其才を長じ其器を大にする所以なりと而して弟子をして有らん限りの能力を開發せしむるは是れ薫陶の本旨を得たる者にあらずや

斯くの如くにせば豈に獨り弟子の器を成すと云はんや師たる者亦た自ら其志を成すと謂ふべきなり若し己れよりも大なる者の出でて我道を開發し我技を精巧にせば何ものか我志を成すに於て此に過ぐあらんや我が志す所偏に道の至極に達して之を世に闡明するにあり何ぞ必ずしも我が成す所にあらずんば可ならずと云はんや何人の手に成るを問はず只だその成し遂げらるゝに至らば可なり此の如くにして始めて私心を去り拘泥を離れたりと謂つべし何を以てか我弟子中に我れに優る者の出でて我道を改むるとあらんを恐れんや寧ろ眞に我が道よりも大なる道を闡明する者の出でて我を繼承するあらば我志はこゝに成れりと謂ふべし故に曰く我れに優る者を造らんとの一念を以て弟子に臨むは是れ最も我道を成し我志を遂ぐる所以なりと此一念を懷いて忘れざらば焉ぞ師道の興らざるを歎かん若し此一念を懷くことなくんば師道の衰へざらんことを欲するも豈

之を引いて己が志を傳へ而して爲し得べくんば之をして己が道よりも更に大なる道を發見せしめ以て天下後世の師表と爲らしめざる其故他なし己れよりも偉大なる者を我弟子の中に得而して其才を伸べしめ其器を大にせしめむ爲に何物をも惜まざらんとはせずして却つて但だ他に己に取つて代る者のあらんことを是れ恐るればなり己れよりも小なる、己の自由になし得る手下をのみ驅り集めて餓鬼大將たらんとする是れ豈に師道を得たる者と云ふべけんや斯程にまで卑屈ならずとするも唯だわが知れる所習へる所を傳ふるのみを以て師たる職分を盡せるが如くに思惟し絶えて後進をして其鬱勃たる才氣を伸ばさしむることに力めず己れを棄てゝも己よりもなほ偉大なる者を得んことに思ひ至らざる者豈に少しとせんや我が道我が技に忠ならずして寧しろ己れが虚榮と安逸とに忠なる者は弟子を己れよりも大ならしめんとはせずして寧ろ其才を伸ぶるの途を塞がんとす此の如きは是れ決して師たる者の心事と云ふ可らず己れに優れる者を得んことを努め而して若し之を得ば之に凡べての物を與へて惜まざるをこそ眞に師たる者の心事とは云ふべけれ其心事何を以て此の如くあるを得るか他なし己れに

授業に不親切なる教師あらんことを願ふも得べからざるなり師にして斯くの如くんば弟子たる者豈にまた勤勉至らざるなからんや嚴師の己れに望む所決して輕小ならざるを自覺せば弟子たる者謹愼なると共に又自重の念を起さゞるを得ず謹愼なる自重の念是れ實に大業を成すの大動機なり師は己が苦心の結果として悟得したる我技我道を弟子に授けんとす弟子を見る豈に他人の如くなるを得ん我れに親しき者我衣鉢を傳へんとする弟子に及くはなし師豈に弟子を愛せざらんや而して我よりも大なる者を得以て我技を更に精くし我道を更に大にせむとす豈にまた弟子に接するに敬を持せざらんや師此の如くに弟子を愛敬す弟子安ぞ其師を敬愛せざらん斯くして何處にか師道の與らざるを歎かん

若し己に優れる者を得むと念うて其弟子に臨まば師は必ずや之をして其才を伸ばさしめんことに努むべし之に努むる是れまた師たる者の大責任なり然るに世に所謂る先生者流は弟子に其才を伸ぶるの地を與ふることに務めず唯だ却つて己が位地の堅固ならんことをのみ是れ圖る故に後逸己れが手に合はざる者あれば動もすれば之を阻外せんとす英氣己れが壘を磨する者あれば之を憚忌す何ぞ

先生なる者少しく留意して見ば己が弟子の中に己よりも大なる者の潜伏するあるに逢ふ恐らくは思ひ半ばに過ぎん然るに世に師道の興らざるの歎を聞く是れ大に先生なる者の己れに優れる者を求めんとの一念を以て其弟子に臨まざるに原由せずや

此一念を以て臨まば師たる者は自から謹嚴なるべし放恣怠慢の情は宿るに其處なけん師たる者動もすれば其弟子を輕んず己れに優るものを作らんとはせず却て間々己れよりも小なる者を作らんとす故に師德を保持する能はずして屢〻門弟の指す所となる若し己れに優る者のあらんことを思ひ又そのあらんことを願望し之を得て以てこれに己が懷抱する所を傳へんとせば何人か謹嚴ならざるを得んや又此の一念を以て臨まるゝの弟子にして誰かよく謹愼ならざらんや此の如くんば師弟共に大責任を負うて立つことを自覺す敎へ敎へらるゝ事の共に人生の大事件たることを自覺す師弟の約を結ぶことの決して苟めならぬことを自覺す師たる者己れよりも大なる者を其弟子の中より出さんとす安ぞ我全力を振うて其の敎訓に任せざるを得んや何を以て我勞力を惜むことをせん此の如くにして

概ね師よりも小なり是を以て弟子は其師に勝らずとの語は多く事實の證する所たり然れども是れ要するに一流派の祖となる者は素より稀有の材器にして常人の之に及び難きが故と又た弟子となりて其流派に屬する者はおのづから其遺旨を墨守して之に違はざらんとするの意向を生ずるが故とに因る然れども若し師に優る弟子の出づるあらば何物か其師に取り又天下後世に取りて之に過ぎて幸なるあらんや出藍の譽ある者事實に於て決して之れなしとせず又之れあらんことをこそ師たる者の本願とは爲すべけれ造化世相の新祕密に觸れんは固より俊傑の士を須たざる可らずと雖ども若し之が繼承者となりて其遺志を開發し更に其業を大にする者なくんば其發見も實に發見の効を奏せざらん創業者如何に偉大なりと云ふとも其志を成就する豈に其獨力の能くする所ならんや繼承者の偉大なる必ずしも創業者の偉大なるに下らず世間師の功を稱するの餘り弟子の眞價を見ざるに過ぐることなきか姑く一門派を創始すべき豪傑の士について云はず世間普通の所謂師なる者について云はゞ己れに優れる者を其弟子中に發見するの必要と義務とは更に大なり又之を發見せむは決して難きにあらず世の所謂

するかは其教授の死活に大關係を有す專門教師に在りても師道の重んずべき豈に普通教育家の下にあらんや誰か云ふ其師道なる者は徒だ一學科一技術に關する知識を與ふるに於て盡くると予輩は進歩せる學生を教ふる者の常に懷抱すべき一念あるを見る豈に啻に其教の世道人心に渉る者に於てのみ之れありと云はんや一技術を授くる者に在りても亦た然りとす治國經世の道を講ずるも一技藝を授くるも共に均しく之れを通貫すべき一念あり此一念や苟くも師たる者の忘るべからざる所にして而も動もすればその忘れられんとするは奈何ぞや此一念を何とかなす

凡そ師たる者は如何なる心術を以て其弟子に向ふべき其常に服膺すべきもの一にして足らざるべしと雖も予輩は其中特に一事の爰に取り出でて云ふべき者あるを見る思へらく師の學生に對するや己れに優れる者の其中に出でんことを求めて倦まざるを要すと請ふ少しく予輩の意のある所を説明せしめよ

そも弟子は其師に勝るべからざる者なるか凡そ一門を開き一流を創むる人々は千萬人に勝るの天質を具ふる者而して其弟子となりて其流派を汲む輩らは其器

かるべし今日に於ては敎育に組織を要し幾多の機關を要することと何人も疑を容れざらん徒だ漫然精神の如何を云ふも若し之をして實効を奏せしむるの道なくんば敎育の目的は固より全うさる可らざらん然れども組織なる者は要するに形骸の如し之を活かしむる者は精神なり兩者の完備是れ固より最も望む所と雖も已むを得ずんば徒らに組織の備りて精神の振はざる者を棄てゝ寧ろ活ける精神の不完全なる組織に宿れる者をば揀ばん敎へらるゝ者を死活せしむる是れ專ら敎ふる者の其敎を授くる精神の如何に懸れり師道の衰ふる主として此精神を忘るゝの致す所ならずや

予輩は殊に既に進歩せる書生を敎ふる者の心事に就いて云ふ所あらんと欲す抑も專門の業を授くるは固より純全たる敎育の目的を以てするにあらず狹き意味にての敎育なる者は大學に上ぼして專門の科を授くるに先ち小中學に於て專ら從事すべき所とす然れども若し進歩せる學生に專門の科を授くるは如何なる精神を以てするも可也唯だ其科其業に關する知識を與ふれば足れりと云はゞこは甚しき誤謬と云はざるを得ず專門の知識を授くるに於ても如何なる心術を以て

宗教的臭味を有せざるを以て其完美の面目と思ふことの迷誤なるを斷言して憚らざるなり

（明治廿七年九月發行、六合雜誌第一六五號）

師道論

近時屢〻教育界の腐敗を慨歎するの聲を聞く敎育は是れ國民の元氣を涵養する所以の者にして國家永遠の隆盛を計らんには必ずや深く敎育の精神と其組織とに注意せざる可らず社會は須らく敎育界を監視する極めて嚴密なるべし分毫も之をして腐敗の臭氣に感染せしめず一歩も之をして邪路に迷はしめざらんことを要す世間今日の弊を論ずる者の言を聞くに概ね或は敎育家たる者に健全なる道念の缺乏せるを云ひ或は敎育組織の餘りに機械的なるを云ふ今玆には此の如き有り振れたる疎大なる評言の如何程事實を穿てる者なるかを論せず然れども敎育家たる者の精神とする所の如何が其敎育を死活せしむる急處なることは論なかるべく又此點の深く今日の現狀に照らして講究するを要する者なることも論な

て逆ふなき社會的道德の觀念に基ゐせば足れり他に求むる所あるを要せずと然れどもその如き道德的觀念は十分明晰なりと云ふを得べきか且又儒敎の有力なりし所以は眞實唯此の如き觀念にのみよるか外に哲學的若しは宗敎的見地のありしに由らずとするか予輩は天道てふ如き觀念の敎育的勢力として儒敎の感化を及ぼすに與つて大に力ありしを認めずんばあらず而して唯だ天と云ふ觀念のみ(漠然たる者にてはありながら)宗敎的若くは哲學的臭味を帶ぶるにあらず性と云ひ道と云ふ如き是れ亦一種の哲學的見處を表示するものにあらずや啻に一般の世人に於てのみ天若しは天道てふ觀念の有力なりしにあらず儒者と稱する輩に於て亦此等の觀念が其の持論の根據として有用の者たりしを見る若し總べて此等の宗敎的若しは哲學的臭味を帶ぶる觀念を排除せば儒敎はその實際及ぼしたりし感化を能く及ぼしたりしならんか予輩の疑ふ所なり予輩は前陳の理由により普通敎育の唯だ若干の道德的觀念を以て根據として他に出づることなきは實際の事情に於ては已むを得ざることなりとするもこは決して敎育の爲に賀すべきことにはあらずして寧ろ悲しむべきことなりと考ふ予輩は敎育主義の毫も

ふ倫理的觀念がヘルバルトの所謂敎育に如何なる關係を有するかは爰に贅せずして可なり全く哲學的世界觀を度外視して整頓せる確固たる有力なる敎育說を立て敎育主義を實行し得んと思ふは一大誤謬たらずや予輩は普通敎育と雖も若し十分に其目的とする所を達せんとせば必ずや一世界觀に基き一人生觀を以て透徹する者ならざる可らずと考ふ何ぞ必ずしも一種の臭味を有するを非とせん而して其臭味の哲學的なると宗敎的なるとは其根底に於て容易に判つべきとに非ずプラトーンの若くはスピノーザの若くは王陽明の世界觀の如きは誰か其根底に宗敎的臭味なしと云ふ兒童に向つて固より安心立命の道如何を論ずべきに非ず然れども安心立命の道を悟得して自ら此に立つことをせざる者の構成したる敎育組織にして豈に善く完美の敎育たるを得ん誰か云ふ人間を敎育するに人生觀なくして可なりと

論ずる者あり曰く儒敎の如きは宗敎的信仰を假らず而も善く堅實有力なる德育の基礎となるを得その謂ふ仁義忠孝の觀念を以て今日に至るまで如何に深大なる又善美なる感化を我國人に及したるかを見よ敎育は實に此の如き萬人に通じ

肝を傾けて之れを學生の肺肝に注がむとする如き者は危險也とて斥けざる可らず此の如くにして始めて無臭味の教育主義を全うするを得ん此の如くんば無臭味は則ち無臭味たるべきも之と共に又た無氣力なるを奈何せん予輩は此の如きを以て決して教育の本旨を得たる者とは考ふる能はざるなり予輩は寧ろ出來得べくんば徹頭徹尾一世界觀を以て貫きたる教育の行はれんことを望む若し實際に於て此の如き教育を行ふに困難あらばこは只だ現時の狀態に於ける已むを得ざるの不幸にして決して教育の完美なる面目とは云ふ可らざるなり

教育學者は曰く教育の目的は有德の爲人を造るにありと然れども若し教育の組織を案出する者に於て眼中明晰確固たる道德的觀念なくば能く其目的を達するを得べきか又明晰確固たる道德的觀念は全く一世界觀若くは一人生觀と離れて立つるを得べきか予輩はその甚だ難からんことを思ふヘルバルトの教育說の據つて立つ所の倫理的觀念なる者も唯之を其儘に受けんは知らず若し之を更に明にし更に其根據を探らば到底ヘルバルト一家の哲學的見處に溯らざる可らず而して其正否を判せんとせば必ずや一哲學的世界觀を離れては爲す可らず而も其謂

孰れか有効有力なる孰れか人たるの又國民たるの品性を養成する教育の本旨を實行するに適へる予輩は後者を以て最も之に適へる者とは思惟し得ざる也若し甲論乙駁一定し難きの故を以て宗教的信仰を教育に加味す可らずと云はゞ晉に宗教のみならず一切の哲學的所見をも全く排除せざる可らず誰か云ふショーペンハウヱルの説く如き哲學的見地を以て教育の根據となすは可なれども佛教を以て其根據となすは不可也と豈にカント若しはスペンサー若しはフォイエルバハの如きが懐抱する世界觀は以て教育の基礎となすべきも基督教的世界觀はしかすべからずと云ふべき理あらんや哲學は固より學童の解し得べき所にあらず然れども一哲學的世界觀の上に建てられたる教育主義と然らざる者との間には大差なくんばあらず若し全くその如き世界觀以外に教育の地盤を定めむとせば遂に偏せず黨せざる代りに無特色無生氣なるを以て其面目となさゞる可らざらん此の故に中學校に於て又師範學校に於て倫理を講せしめむとせば成るべく圭角なき成るべく一流の定見なき成るべく折衷的なるべく皮相的なる講述を事とする輩をば選び少しく自家悟得の見地を有し主義を有し學説を有して我肺

可らずと云ふと教育なる者の本旨が絶待に爾かすべき者にあらずと云ふとは決して之を混同せざらんを要す然るに世に之を混同して本來教育なる者は如何なる情況に於ても聊かも宗教的信仰を容る可らずと考ふる論者あり而もこは苟くも宗教なる者の道理上存在す可らざる者たるか若しはその教育に取りて無關係の者たるかを論證したる上ならでは唱ふべからざる所なり現今の情況に於ては宗教的信仰の相違又た其道理上の眞否の決定し難きの故を以て一宗一派の教旨に教育主義の基礎を置かんは害多くして利少なしとするも若しその如き情況の存せざる時もあらば教育に宗教的信仰を容るゝは何の故に不可なるか假令ひ右の如き情況の尚ほ多少存するありて此が爲に一方には幾分の困難と損失とを來すとありとするも宗教的根據に立つの故を以て有力なる教育を施し得而してその之を施し得るの利益は其損失を償うて遙に餘りあらずとするか抑も一種の世界觀を具へ而して深く之に根ざしたる教育とその如き世界觀なく天地と人生との歸趣に對して何等の定見もなくして只だ通俗に云ひならしたる忠孝等の(其判然たる意義を尋ぬれば明答を得難き)若干の道德的觀念を基礎としたる教育とは

て府立若しくは州立の學校に宗派的臭味を入るゝことの實際に於て爲し難きは甚だ明なり啻に此の如き實際上の必要に迫らるゝ處に於てのみ然るにあらず傳來の宗派を妄信することを止めて廣く宗派上の大問題を考ふる者の中には其疑問の容易に決し難きを見て一般の敎育を宗敎的信仰に結びつくることに躊躇する輩も少からず如何なる信仰をか正確無謬と云ふべき又總じて宗敎的信仰なる者は其根底に於て何程の眞理をか有する此の如きの問題は千種萬別の答案を以て迎へられ精思明辯の學者と雖も之を決するに苦しむ然るを如何に確實なる宗敎的信仰なればぞ之れを少年の胸裡に注入せんとする甚だ覺束なき限りならずやと斯く思慮する者に乏しからず是を以て從來同躰一味なるが如くに思はれし敎育と宗敎とは分離せむとするの傾向を顯はせる處なしとせず普通學校課程の一科として宗敎に代ふるに脩身を以てするの傾向なきにあらず故に敎育と宗敎との關係は我國に於てのみならず歐米に於てもまた一問題たるなり

普通敎育をして猥りに宗敎的臭味に感染せしむ可らざるの理由は上來陳ぶる所の如くなるが然れども敎育を社會現時の狀態に於ては一宗敎的信仰に結ばしむ

通教育は尋常一般の社會的道德別言せば一國民としての道德を養成するを以て其精神其主眼となし一歩たりとも其以外に走りて出でざらんことを要すと思惟せらる啻に一宗教を選ぶの困難なるが故のみならず總じて宗教なる者を快からず考ふるよりして無宗教と云はんよりは寧ろ非宗教と云ふべき教育主義を主張する論者も頗る多きが如し此の故に普通學校に於て苟にも一宗教に加擔するが如きことは固よりある可らず而も一般に宗教的信仰を迷妄として之を排斥するは敢て不可なきが如くに屢〻論ずる輩あるを見る此の如きの論は普通教育の宗教的臭味を帶ぶるを非とするよりして却りて非宗教的と名くべき一臭味を帶ぶるに至りたる者なり

宗派的臭味と普通教育との分離は啻に我國に於てのみならず歐米諸國に於ても又之を主張するの聲を聞く歐米に存在する宗教は一言に云へば基督教なれども其宗派の區別は甚だ多く又其相互の懸隔も決して尠々ならず羅馬教徒は新教主義の學校へ其子弟を送ることを嫌ひ新教派の教徒も亦羅馬教徒の學校を悦ばざるべし新教派の中にも亦此點に於て相互の確執なきにあらず此の如き場合に在り

る公立の學校に於ては其教育の主義として一定の宗教を選ばんは特に我國の如きに在りては殆ど實際に爲し能はざる所なり或は先祖傳來のまゝに或は一個人の所見として佛教を信ずる者あり又は心底より之を排斥する者あり耶蘇教ならでは眞正の宗教に非ず又た之を除いては以て教育の基礎となすべき者なしと(縱令ひ少數に止まるとも)考ふる輩もあれば又た痛く之を嫌惡して我國家に禍ひするものは即ち此教なりと信ずる人々もあり神道家と稱する者もあれば又た一切宗教と名のつくものを排擊して餘さゞる論者もあり此の如き狀態なれば公費を以て維持する普通學校に一定の宗教主義を布かんは幾多弊害の淵源たるべきこと火を視るよりも明かなり信教の自由は各人の良心に保持すべきものとせば兒童の父兄の非とする一宗教的信仰を強ひて其兒童の幼稚なる腦裡に注入するが如きことある可らず若し又父兄の好みに從つて何れなりとも一宗教主義の學校を選ばしめんとせば教育主義を異にする幾多の學校を併べ設けざる可らず斯くては教育制度の一致は保持し難かるべし此等の事の當に然るべきは我國現時の教育家に於ては殆ど論ずるに及ばざることと思惟せらるゝに似たり是に於てか普

るや佛者は動もすれば是れ未だ佛理の蘊奥を究めざるが故なりと云ふ豈にこれをしも答辯と云ふべけんや平等一如の眞如に即して千差萬別の諸法無始無終にあり諸法是れ實相なりと云ふ然れども如何にして然るを得るかと問ひ來れば予輩は遂に予輩を滿足せしむべき者を佛理に見る能はず一に即して多と云ふ是れ問題なり解釋にあらず理事無碍事々無碍と云ふは易し之を說くは難し若し之を解說し了するを得ば恐くは古來幾多の哲學者を苦めたる大問題はこゝに釋然として解けん予輩は以爲らく佛の所謂る圓融相即は問題にして解釋にあらずと

（明治廿七年九月發行、六合雜誌第一六五號）

宗教と教育

當今教育を論ずる者の言を聞くに教育の背くも宗教的臭味を帶ぶるは其本旨に違背せる者となすが如し蓋し現時の情態に於ては普通教育をして一宗教的敎旨の專領する所たらしめざらんことを欲するは惟ふに止むを得ざることなるべし一宗派の私に設立する所の者は云はず一般の國民を養成するを以て其目的とす

を求めんとせり是れ彼等の問題となし、所なり只だ一即多多即一と云ふは其解答にあらず何が故に爾か云ひ得るかを明示するを要す世に所謂一元説又多元説を取る者あり然れども絶對的一元若くは絶對的多元を取る者の跡を看るに必ずや救ひ出だす可らざる多くの困難に陷る故に之に繼いで之が困難を濟はんと欲する者は必ず一元を以て多元を沒せず多元を以て一元を覆はざらんことを力むは是れ根本的問題のある處にして而して又根本的困難の伏する處なり何が故に一に即して多なるか多に即して一なるか予輩の見る所を以てすれば一即多多即一を云ふ者は未だ問題を解けるにあらず唯だ解くべき問題を掲げたるのみ曰く眞如は躰なり諸法は其相なり平等一如の躰に即して雜多異別の諸法あり諸法に即して眞如あり則はち一にして二、二にして一と然れども何故に然るか誰か此を以て自明の眞理と云ふ予輩は如何にして其然るかの説明を聞かざれば休せず何故に眞如の水は其躰に於て平等一如なるに諸法の波を擧ぐるか起信論に從つて無明を云はん歟無明對眞如の問題は幾多の困難の圍繞する所となる賴耶縁起と云ひ眞如縁起と云ひ未だ以て予輩を滿足せしむる者を見ず人の此等を難ず

革新を試みる者の佛敎徒間に起らんことを希望して止まず而して大乘敎の理論にはその如き革新に進行するの起點たるべきもの無きにあらざるは佛敎に取り又佛敎の行はるゝ國民に取りて幸なることゝ云ふべきなり

かゝる革新を二三學僧の机上の辯論に止めしめずして之を佛敎の實際的組織に移さんは固より只だ利巧氣(げ)に圓融相即の妙理などゝ口走つて悦ぶ凡僧の能くすべき所にあらず必ずや大識見大膽略を備ふる材器を要す若し佛敎の實際的組織に大革新を施さずば其社會的活動は遂に見るを得ざらん佛敎の革新は今や實に大手腕を待ちつゝある也

圓融相即　一なるか一にあらず多なるか多にあらず多ならざるか多ならざるにあらず一ならざるか一ならざるに非ず異に非ず同に非ず異に非ざるに非ず同に非ざるに非ずと予輩は斯く云ふことの易くして斯く言ひ得べき理由を明示することの難きを見る唯だ斯くの如しと云ふ豈に吾人思索の問題を解釋したる者ならんや

古來數多の哲學者は萬有の一にして能く多を存し多にして能く一を存する所以

は厭世的思想家ならずや說かるゝ邊に於ても行はるゝ邊に於ても理論に於ても實際に於ても佛敎の傾く所は厭世にありしなり理論と實際とは必ずしも相伴ひ相適ふ者とは云ふべからざるも今日迄の經過に徵すれば佛敎の實際と其理論とは決して全く相離れたるものにはあらず其實際をして然らしめしには安ぞ其理論の與かる所なしと云ふべけんや

殊に原始的佛敎の著明なる厭世觀なりしことを誰か拒むを得ん後世其理論の益〻廣く且巧になるに從ひ厭世觀以外に地歩を拓かんとするに至りしは佛敎の一大變化なり而して今日に迨では殊に此理論上の見地を利として之を厭世的臭味に埋沒されざらしめ曳いて以て大に其實際的社會的方面をも革新してその佛敎の原始的狀態に對するの懸隔をば更に大ならしめんとするは是れ又甚しき變化にあらずや此の如きに至つて尙ほ之を釋迦の敎と云ふべきか予輩の疑はざるを得ざる所なり然れども何ぞ名稱に拘泥するを須ひん善く思ひ善く斷ずるの佛者は名に拘りて遂ぐべきの改革を遂げず却つて唯だ無益の辯護を勉むるが如きの愚を學ばざらんその當に釋迦の敎と云はるべきか否かに拘らず予輩はその如き大

る者あり而も是を以て佛敎の大旨は本來厭世に偏する者にあらず圓滿の眞理なりと云ふ豈にかの所謂る辯護者の言に似たるの嫌あるを免れんや此の嫌あるを免れずと雖も兎に角或佛者輩が此邊に注目し來りて佛敎從來の厭世的傾向を轉ぜんと欲するは久しく佛敎を宿して其一大宗敎的勢力となせる我國の社會に取りて大に賀すべきことならずや蓋し佛敎從來の厭世的傾向は我國運の振興に害するところ輕少ならざればなり既に佛敎の實際的方面に多少の變化を與へたりし我國特有の文明は更に此點に於て之に一層の變化を與へんことを希望す夫れ佛敎の實際的傾向の今日に至るまで常に厭世的なりしことは否む可らざる事實なりその實際ありし程に厭世的にありたればこそ(結果の善惡は姑く置き)深大なる感化を數多の民人に及ぼしたりしなれ而して予輩は今日に於ても尙は佛敎は大躰上厭世の臭味を脫せずと考ふこは佛敎家と雖も虛心平氣に考ふる者の拒まざる所なるべし啻に實際的方面に於て厭世に傾けりしのみならず佛敎理の說かるゝ邊に於ても其大躰の彩色は厭世的たりしなり娑婆即寂光土とは說きながら尙ほ厭世の臭味は認むるに餘りありき巧なる理論を弄ぶ若干時間の外佛者

を以て我が心を勞せんや讀む者予輩が本意のある處を看取せば大幸

厭世耶非耶　浩瀚なる經典を有し數多の教義を包含する一大宗教を辯護せむと欲し其のありとあらゆる經論を繙いて其の目的に便ならんものを探り求めんとせば是れ決して爲し難きことにはあらず而も是を以て其教旨の眞相を捕捉すと云はゞ甚しく過れり教旨の眞相を知らんには其宗教大躰の上に於て眞實如何なる趣を呈し如何なる傾を有するか又實際如何なる方向を取つて活世界に處し來りしかを見ざる可らず然るに辯護を事とする者は只だ其塲合に於て都合よき處をのみ取つて是れ恰も其全躰の傾向なるが如くに云ふ宗教的辯護者の爲す所東西其揆を一にす是れ他なし實を矯めても名を保たんと欲すればなり豈に能く拘泥を離れたる者と云ふべけんや

佛教は厭世教か非か之を說いて純全たる厭世觀となさんか固より其厭世觀の今日の趨勢又穩健なる常識に合せざるや明なり如何にか說かん恰もよし大乘教の說くところ小乘教とは異りてその謂ふ諸法實相の理は厭世観以外に餘地を存し得ざるにあらざるを見て此點を揚げ以て佛教從來の厭世的傾向を矯めんと欲す

更非難を加ふべきにはあらざらんが而も之が爲に牽強附會の説を爲すは決して取るべきことにあらず其の自ら處る所の立場よりせば最早其名稱の如何には關心する所なかるべきに倘ほ強ひて一名稱を以て名乘られんことを欲するが如きは要するに感情の然らしむるところ感情の働も亦妙なるかな急激なるユニテリアン主義を取る人々の中にさへ倘ほユニテリアン敎はその起源と來歷とに於て依然基督敎なりと主張することに努むる者なきにあらず是に於てか基督敎なる名稱は極めて尨大不定の者となりて唯だその敎徒とのみ聞きては其の懷抱の殆ど判定し難き程なり例へば今の神學界に於て唯だ有神論者とのみ云ひては未だ以て其意見をたしかむべからざるが如し便利の爲に設けたる名稱も是に至つては豈に不便利ならずや然れども予輩は人の此の如き名稱の動搖に迷はざらんことを勸告す名稱以外に吾人の安立すべき處あるなり名稱と共に其心を動かす者は是れ眞理その者を求めずして只だ眞理の名稱を求むる者なり寂然一室中意象極分明なる時悟り得たる所を名けよと云ふ予輩はその名け難からんことを恐る實に名稱の外吾人の生命と安心とを繫ぐ處あるなり何すれぞ畢生辯護と拘泥と

する所は正さしく此の如き千古不磨の大道にあらざる可らず然れども一宗教をして古今に照らし東西に通じて成るべく攻撃を受くるの餘地なからしめんとし而して其多くの特色とする所(而も又その特色たると共に撃破せらるゝの恐多き所)をば擧げて之を不要義となし以て辛うじて其宗教の命脈否な名稱を保たむとするが如きは予輩はその餘りに名稱の保存に執着する者にあらざるなきやを疑ふ予輩は切に東西古今の諸聖賢が悟得したる千古不磨の大道に立たんことを欲す其秘奧を窺はんことを欲す然れども之を窺はんと欲するには徒らに一宗教の要義不要義を云々するを要せず名稱を離れて寧ろ直に聖賢の心證せし所を尋ぬべし一祖師を起點として實際的便益の爲に後人が假りに造り設けたる言ひ傳へたる名稱に迷ふ勿れ

古來の聖賢中吾人の最も敬服する而して他に比して特に自ら其教旨を繼承開發せむと欲する所の者あらば從來の慣用上一名稱の下に就くも固より不可なるにあらず然れども其名稱に拘泥せむ必要は毫末も存せざるなり從來の關係上又實際的効用上在來の(世に重きをなす所の)名稱を保存して強ひて之を棄てざるも殊

失ひたる後にも尚は努めて之を保持せむとする是れ人情の常なり若し一朝にして其名を以て呼ばれざるに至れば實に光輝ある一大資格を亡し去りたるが如くに感ずる人の其名を以て己を呼ぶことを肯せざるあれば之を怨み之を怒る此の故に名に拘泥して之が爲に厭はしき煩はしき淺ましき辯護を事とする者世に多かり而も此に至つては遂に名の奴隷たるを免れず何ぞ拘泥と辯護とを離れて大自在の眞理界に我身を托せざる名に執して實を忘るゝは例へば昔時の理學者が自然界の實物を採つて之を研究することをば爲さずして只だ種々の臆説を搆へ以て古人の假造したる名稱を保持し得ばこゝに眞理研究の職分は全く畢ると思惟したりし如し幾十百年此の如きの辯護に勞するも豈に眞理の片影だも捉へ得んや實在に就いて自ら發明悟得する所あらんと欲する者は須らく斯くの如きの辯護と拘泥とを去るべし之を去らばおのづから別に清風に吹かれ光明に裹まるゝの天地あるを發見せん

一宗教の最も肝要とする處と然らざる處とを別つは固よりよし予輩は天下に通じ萬世に亘りて動かざる大眞理の上に立たんことを欲す而して宗教の最要處と

せんや屢〻聞く通常の神學に云ひ來りし意味にての基督の神性、贖罪、又惡魔の存在等は不要義なりと論者只だ比較上此等を信ずるも信ぜざるも不可なしと云ふに止まらずして若し單に眞なるをば取り眞ならざるをば棄つるの立脚地に在りて云はゞ如何予輩は論者の何故に百尺竿頭一歩を進めて此にその懷抱する所を明言せざるかを異しむ

辯護又拘泥　語に曰く名は實の賓と而も名必しも虛なる者にあらず爰に一事物あらば人必ず之に一名稱を與へんことを欲す爰に一敎旨あらば之に一特名を附してそを他敎旨と相別つの用あること勿論なり一旗幟を樹てゝ同志の輩を糾合せむと欲し一團躰を結んで世に行ふ所あらんと欲し一主義を持して之を後世に傳へんと欲するや一名稱を撰んで之が表號となさゞる可らず名稱は散在せる個々物に一致の連鎖を與へ其働作を敏捷ならしめ其存在を鞏固ならしむ名稱豈に全く虛なりと謂はんや否なその虛ならざるのみならず人久しく之を呼稱すれば遂に一種の戀着心を生じて名に拘るが爲に實を枉ぐることあるに至る殊に己が安心榮譽生命と恰も同躰不二なるが如くに感想し來りたる名は業に已に實を

豈に之を信ずると信ぜざるとの伜しく眞理なることあらんや而して眞理に就くと非眞理に就くとは大差なしと云ふべけんや或は云はん基督教徒として若しくは佛教徒としては其教の不要義を取るも取らざるも聊も輕重する所なしと然れども是れ只だ他教の者と相簡ぶ上に就ての言のみ基督教徒若くは佛教徒と云ふ上より見ればとて眞理に就くと非眞理に就くとは全く輕重なしと云ふの理なし世に要義と不要義との區別を論ずる者は屢〻云ふ此れ程は要義なり故に信ぜざる可らず此より以外は不要義なり故に信ぜざるも不可なし然れども信ずるも亦可なりと恰も多く信ずるは可なれども少く信ずるは不可也と云ふに似たり即ち其謂ふ要義以外に信ずるは可なれどもそれより以内に信ずるは可ならずと云ふなり然れども多く信ずると云ふこと豈に必ずしも少く信ずるに比して是ならんや多く信ずるを是なりと云はゞ苟くも要義と撞着せざる限りは幾多の迷信を信ずるも可なり教會に所謂る聖者の奇跡を行ひしことを信ずる固より可なり豈に此のみならんや釋迦が奇跡を行ひしことを信ずるも亦何の不可かあらん蓋し若し要義とする所前者を信ずると相衝突せずば豈に必ずしも後者を信ずると相衝突

予輩は固より小異に拘りて紛爭を事とするを悦ばず事の大小本末を誤りて無益の確執と猜疑とを宗教界に見ること少からざるを慨歎す故に教旨の要義と不要義とを區別して不要なる者に無用の論爭を費す代りに一層高く要なる者を揚げてこゝに確固たる立場を置かんことを賛成す然れども只管に大同をのみ揚げて小異を沒することに力むるは亦た一の僻事なるを認識す小異豈に必らずしも不要義ならんや小異若し之を大同に比せば不要義ならん然れども小異は小異として之を是非するの價値なしとせんや小異は何れに就くも各人の自由なりと云ふ是れ只だ大同を根據として一致和合を圖らんが爲に云ふべきことのみ絕對に小異は何れに決するも可なりと云ふべき理由のあらんや若し小異の爲に大本の一致を破らんとすることあらば余輩は固より力めて小異の爭を沒して大本の爭ふ可らざる處に一致せんことを勸告す而も若し其小異は何れも等しく眞理なるかと問はゞ予輩は豈にその如き理あらんやと答ふべし然るに世に不要義を云ふ者動もすれば之を信じ又た之を信ぜざることの絕對に等しかるが如くに云ふ某々の信條は不要義にして之を信ずるも可なり之を信ぜざるも不可なしと云ふとも

るに至りぬ今日に於ては保守的神學者を除いては多くは福音書中の或者に記載しある處女の孕みて耶蘇を生みきと云ふ一話の如きを信ずるを以て必須のものとはせざるべし蓋し此の如きは道理上信じ難しと云ふ理學者の非難は姑く之を措くも歷史的批評に照らして既に頗る疑はしき所あればなり此等の理由により基督教の要義と不要義とを別たんことを望むの聲頻りに起り現今我國に於てもまた屢〻之を聞く

啻に基督教に於てのみならず佛教に於ても夙くよりその宗派的差別の夥しきの故を以て若干の根本的要義により其教旨を所謂外道と區別するの必要に迫られその謂ふ三法印又一法印なるものを掲ぐ然れどもこは古代印度に於ける論爭の渦中にありて造り出されたる者にして固より佛者は今日に到るまで高く之を掲ぐれども今日は又た今日の新たなる問題に接して其主張する佛教なる者の要義と不要義とを新たに分つの必要に遭遇することあらん殊に彼輩のうち心竊に佛教の革新を圖らんとする者無きにも非ざるべければ夫等の輩は一層速に此必要に面接するならん

めたる所に過ぎざるを見てかの所謂る教會的神學と原始の基督教とを決して混同すべからずと云ふの聲盛に起ることとなれり又近世科學及哲學の攻擊を受くること頻りにして之に對して從來の幾多の信仰個條神學說を悉皆保護せんは頗る困難なることなれば徒らに許多の信條を固守して却つて全躰の危厄を招かんよりも寧ろ其中の或者を拋棄して自餘の者を救はざる可からずと思ふに至りぬ基督教の根本的教義をして近世學術の攻擊に當らしめんとせば成るべく動かし難き心靈上の者のみを以て其要義となさゞる可らず是に於てか聖書に多く記載しある奇蹟の如きも之を信ずるを以て必須とせずと云ふ論者も多くあり又基督教の神髓はカントの謂ふカテゴリッシェル、イムペラティーフの外にあらずと唱ふる學者さへもあり啻に近世の科學等より來る外部の攻擊に應ずるの便を計りてにはあらず聖書その者の批評的研究の精しくなりし以來その中に記載しある一切の事柄の皆事實なりしか又基督の本意と弟子等の附加せし所との差別は如何と云ふ如き問題群起し來りて之を裁斷せむとの決して容易ならざれば基督を信奉するに於て必須のものと然らざるものとを區別するの必要更に一層深く感ぜらる

教論數則

要義と不要義 夫れ基督教又佛教の如き大宗教は數多の歳月を經過し數多の民人に行はれて遂にその今日呈するが如き狀態を成すに至りたる者なれば其教相に於ても少々ならざるの變遷ありその各〻包容する宗派に於ても僅少ならざるの差別あり然らばその如く變遷し來りたる又その如く多派に分れたる教旨は何を以て其本來の又普通の要義となすか幾多の分爭と變移とはありながら尙ほ同一名稱を冠る宗教たり得るは何の特色あるによるか苟くも其名稱を以て稱せらるゝ宗教たる以上は缺く可らざる所の要義を何とかなす斯る問題は必ずや起り來らざる可らず殊に基督教神學に於ては近代歷史的硏究の振興し來りし以來後世の諸教會が必須の個條と見做して固守したりし所必ずしも初代教會の信奉せし所にあらず寧ろ其經歷の中途に他の哲學的考說の影響によりて造り出だされたる者の少からぬを見又教會々議なるものによりて決定されたる所謂る信仰個條の必ずしも基督の本意に契合するにあらず唯だ是れ當時の教會の正當と認

んことを希望する新躰詩の時期には若し今の和歌の時期をして全く無効の者たらしめずば少くとも言辭の蕪雜ならざることに於ては過去に優る所あらん予輩は方今稍々和歌の盛ならんとするをして徒らに一時の流行に止まらしめず今云ふ如き効果を遺さしめんことを切望す然れどもその遺し得る所畢竟ずるに今云ふ如き者の外には出でざるべし思ふに將來の國詩に一大光輝を添へん者は新躰詩の更に大進歩を遂げたる者なるべし今日の新躰詩の多くは蕪雜なるの故を以て其將來を輕んずべからず他日大開發の望を屬すべきは舊式の和歌にあらずして新躰詩にあり我國詩の發達を思はゞ奬勵すべきは新躰詩なり我國詩の歷史に新紀元を開かんと欲する者は新躰詩によりて創始されたる新傾向を取つて進まざる可らず予輩は一時沮喪せむとする新躰詩の更に勃起し來らん日あるを望み又遠からず其日の來らんことを信ず

（明治廿七年七月發行、六合雜誌第一六三號）

三十一文字は之を一種の歌躰として存し置く價値あること固より論なし又之によりて多少幽玄なる或は崇高なる感想の詠み得られざるにはあらず然れども從來の歌躰によりて壯大玄妙なる思想を充分に陳べんことの難きは世に屢〻論ぜられたる所にして今更玆に贅するを須ひず狹隘なる短歌式に縛らるればこそ此頃やかましき剽竊か暗合か判せられざる如き歌も多く出で來るなれ此頃の歌論は頗る叢々たる如きも眞實此によりて國詩の進歩に益する所は幾何ぞ當今頻りに和歌の持て囃さるゝ如きも是によりて國詩に如何なる新生面の開かれんとする予輩の見る所を以てすれば現今少しく頭を擡げたる歌人輩の歌論並歌作が我國詩の發達を助け其新生面を開くことに於ける功績は曾て幼稚なる新躰詩の爲したりし所よりも倘ほ少なるならん然れども今日姑く新躰詩の隱れて和歌の頻りに持て囃さるゝは將來に於て新躰詩の言辭をして蕪雜ならしめざるの効果は或はあらん曾て新躰詩の續々現出せし時を新躰詩の小時期と云ふを得ばそれに踵いで來りし今の時をば和歌(殊に短歌)の小時期と云ふも不可なからん而して又遠からずして新躰詩の時期の再來せむことを予輩は豫言す余輩の將來大に興起せ

尙は景樹の開きし時代にありと云はざる可らず和歌決して衰へだるにあらず然れども景樹の爲しゝ程の一飛躍をだも彼れ以後には未だ爲し得たりし者あるを見ず世に所謂歌人は尙ほ從來の狹隘なる範圍に籠居し之れを己が天地と觀じ居れり

近頃宮内省派の歌人に向つて頻りに攻撃を試みる者あり其歌を評して或は歌格を知らざる者と云ひ或は氣骨なしと云ひ或は亡國の音とまで嘲けり罵る此の如き罵詈攻撃の起る是れ幾分か歌才の左程迄にはあらざるに宮内省派の歌人の獨り時を得顔なるに起因する所もあらん宮内省派の歌今は決して活氣ありと云ふ可らず然れども之を攻撃して軟弱と云ふ人々の自ら詠ずる所を見るに雄たけびなどさも勇しく吹聽して世に示す所の者概ね唯だ獅子が吼ゆる虎が怒る太刀を揮る馬に跨る等の語を連ぬるに過ぎず彼等は此等の語を連ぬれば歌はすなはち丈夫振りとなると思惟せる者の如し元來雄大の想なくして唯だいかめしき文字をのみ列ぬるばかり不自然なるはあらじ或人々が一二の新聞紙に出だして丈夫振りなどと稱して得意がる歌多くは此類の不自然のものならぬはなし。

とは殊更爰に云ふを要せず八田知紀の歌風を知り又今の高崎正風氏の景恒の門に出でしを知り又女流の中錚々の聞えある(其歌の優美なる點に於ては殆ど當今第一と稱すべき)税所敦子の如きも亦同じ流を汲めることを知る者は如何に桂門の影響が御歌所に顯著なるかを解せん十一年前御歌所の人々の主唱により景樹の四十年祭の營まれし時税所敦子が

雲ゐまでにほふ言葉の花さかり
をしきは君に見せぬなりけり

と詠めりし其言葉の花盛は桂園の芬香を放ちし者と云ひて可ならん桂園翁の四十年祭を營むと云ふその事が既に翁の影響の如何に大なるかを表示す宮内省派の歌は一言に云へば香川風に化せりと云ひて不可なからん而して宮内省派の歌が今代の一般の歌風に影響したりしことは亦決して淺小ならず香川景樹は實に顯著なる痕跡を近代の和歌の歷史に遺したり景樹は德川時代最後の又最大の歌人と云ふべく明治の和歌は尙ほ未だ彼れの範圍外に出でざるなり今の世に歌人多しと雖も何人かよく新版圖を開拓したるぞ和歌の歷史を叙せむとせば今日は

ひ之を掲ぐるも廣く讀者の注意を喚起せむことの到底望み得べからざりしに今は然らず新躰詩はほと〳〵其影を隱くして三十一文字の歌のみ盛に新聞雜誌に掲載せられ讀者も亦之に注意を與ふるものの如しこは近年に於ける文界現象の一變遷と見て可ならん

四五年前より切りに香川景樹の歌風を稱讃するの聲處々に起りて一時は桂園遺芳又桂園叢書などと題して景樹及其門人の著作日記等を續々發刊せしことありしがこは今日の如く歌人をして其頭を文界に擡げしめ新聞紙上盛に和歌を募集せしむる程の氣運に向はしめし一徴候とも見らるべく又其一原因とも見らるべし近時の歌風を見るに陰に陽に景樹派の影響を示せる者甚だ多し當今の歌風は景樹が出でて論難攻擊至らざる處なかりし時のものとは大に其趣を異にし押し並べて景樹の指導せんと欲したりし方へ向ひ來りし者の如し桂門の流を汲むとまでは云はざるも又其歌論に於て歌風に於て慊ざる所はありとするも多少景樹の影響を蒙らざる歌人は甚だ少からん殊に此頃或人々に宮內省派と名けらるゝ歌人等に於ては其影響の甚だ著きを見る御歌所の歌が並べて景樹風に靡けるこ

り

現今我國の宗敎界の進歩派は概ね上來陳べし方向を取りつゝあるが如し本*誌本號に揭げし横井時雄氏の論文の如きは基督敎的進歩派を最も著明に代表する者と謂つべし進歩的思想家の應に取るべきの道はこゝにあり進歩派は實に此の如き道を取りて進みつゝあり或は嚮に陳べし進歩派の要義の第一段にのみ居て未だ逡巡その歩を運ばせざる者もあらん又既に其二段に進める者もあらん苟くも第二段にある者同じく進歩派として共に相語るを得ん然れども最も相合同して其事業を一にし得べきは固より第三段の所見に於て意氣相投ずる者なり今日我國の進歩派の合同は此の如き意味にて成就するを得んと信ず

（明治廿七年七月發行、六合雜誌第一六三號）

*本誌本號さは六合雜誌第三百六十號をいふ

近時の和歌論

一時は新躰詩なる者盛に持て囃され新聞雜誌に揭げらるゝ者とし云へば多くは此躰のものにして從來のみそひと文字は何となう古めかしき樣に感ぜられ縱令

同じ程に濡るゝにあらず古今の聖賢君子と雖も此點に於ては差別なくんばあらず故に何人を繼承すと云ふも全く等しとは云ふ可らず是に於てか基督敎的進步派あり佛敎的進步派あり是れ要するに其最も繼承開發せむとする所の異るに生ず此點に於ては各〻自己の所信に立ちて他と爭はざる可らず何の點にまでも平等無碍なる可らず何處にか差別を存せずんば其所信は肉なき血なき生命なき抽象的骸骨たるに過ぎざらん進步派は斯くの如くにして差別と平等との二面を存するなり故に今云ふ差別の點に於ては基督敎的進步派は固より佛敎的進步派と爭はざる可らず佛敎的進步派は婆羅門敎的進步派と爭はざる可らず然れども其各進步派たる以上は其繼承する宗旨を以て人類の宗敎的現象の一部分一段階と見るに躊躇せざるべし此故に繼承すると共に更に開發せざる可らず先人に學ぶと共に自ら悟得せざる可らず我が唱ふる所古人の道たるに止まらずして我。道たらざる可らず古聖賢に承けて而して又我が經驗悟得する所を以て更に傳承の寶玉を研き之を後人に傳へざる可らず眞理は古聖賢の胸裡にのみ宿らず又新しく我心底に湧き出でん昔時に現れし歷史上の一人物のみが天啓の機關にあらざるな

中我が最も繼承開發して以て人類の宗敎的發達を扶けんと思惟する所の者あり先人は今人を待つて更に其道を開發し今人は又更に後人を待つて其道を皇張せむことを要す孔子の悟得せし如く釋迦の悟得せし如く基督の悟得せし如く我等も皆其道を悟得せむことを要す然れども其最も私淑する所の誰にあるかは人によりて全くは同一ならず此點に於て縱令ひ將來天下の進步派の皆悉く合同一致するの期ありとするも今日の狀態に於ては然らず或は最も基督に私淑するあり或は最も佛陀に私淑するあり固より古今の聖賢君子は相共同して人生の救濟進步を成就する者なるを知る宗敎上の眞理は一經典の專有する所ならざるを知る然れども殊に何れを繼承開發せば以て最も天地の大道を明にし人間の理想を達するに効あるべきかは同じく進步派と云ふと雖も其見る所を異にす今人の爲す所如何に獨發の見に富むとも亦必ずや多少先人に承くる所なかる可らず孔子も承くる所あり釋迦も承くる所あり基督も承くる所あり眞理は日光の如くに吾人を照らし天啓は膏雨の如くに吾人に降る日光は同じく日光なり膏雨は同じく膏雨なり之に照らされ之に濡るゝ者は皆生を得ん然れども何人も同じ程に照らされ

の結果とはおのづから別物也進歩派は只だ研究の方法のみの謂ひなるか否然らず今日の所謂進歩派には其研究によりて得たりと信ずる多少の結論あり然らば其結論の要義を何とかなす曰く宗教的眞理は一宗教一經典の專有する所にあらず各〻多少の特殊の點はありながら又あるが故に皆要するに人類の宗教的現象の一部分一段階に外ならず天啓は一時代一國民にのみ限れるにあらず若し神が此世に化現することありとせばそは歷史上の一人物にのみ限れるにあらず此世の救濟は實際一人物にのみ出で一人物にのみよりて成就さるゝにあらず古今東西幾多の聖賢君子の共同の働なりと云ふ是れ進歩派の根本的見地なり此見地を取るか否かを以て其思想の進歩派に屬するか保守派に屬するかを決すべし他は必ずしも云はずして可なり上に云へる研究の精神と方法とを取れば今云ふ見地に到らざる可らずとする是れ進歩派の主張する所にして其堅城鐵壁とする所實にこゝにあり保守派はよく之を破り得べきか。

（第三）然れども總べての進歩的論者は皆漫然一切の宗教を親愛すべき交友と云ひ悉く普通的眞理を包有すと云ふに止まらず其研究の結果として宗教的現象の

の宗教的現象の一部分と見る豫め獨斷的偏執を以て取捨選擇を爲さず狹隘なる事實を根據として覺束なき演繹を爲さず若し舊神學が其研究の起點並根據を道理と一バイブルとに取らば進歩派の論者は之を吾人の(廣き意味にての)道理心と人類一般の宗教的現象とに取るべし一言に云へば進歩派の研究は無假定にして批評的なりと云ふを得べし惟ふに少くとも研究の精神方法並に起點に於ては進歩派の云ふ如くならざる可らずこは苟も研究的位地を取る者の何人も承認すべき所とす誰も研究的位地を取りながら我は其研究を束縛する獨斷的假定を置くとは云はざるべし然ども實際上種々の假定に左右せらるゝ者甚だ多し進歩派なる者は力めて其研究に於て公平ならんとす何ぞ必ずしも舊きを厭はんや何ぞ必しも新しきに執せんや研究の精神方法の如何は公に言語に發表する所よりも寧ろ心底に潜める(時としては自らも氣附かざる)意向によりて決せらる眞實研究の精神に於て曩に云ふ所の如くなる者は皆手を取つて共に語るを得べきなり

(第二) 右云ふ如きの精神方法をもて研究し而して其結着する所或は一宗教一經典をのみ信すべく他は皆虚僞なりとするに至るやも知る可らず研究の方法とそ

はゞ今日の狀態に於てはオルソドックスならざる敎會は多かるべし此の如きの狀態を見れば基督敎會內に於ける言論討議の自由は佛敎徒間に於けるよりも遙に大なりと云はざる可らず例へば淨土眞宗に身を投せんか如何にその言論を束縛せらるゝよ基督敎會內の進步派は佛敎徒間のよりも大膽なり「我等佛敎徒は今懷疑時代に入れり」と叫んですら尙ほ彼徒は其先輩より種々の苦情を鳴らさるゝにあらずや

進步派なる者は如何なる處へ向うて進まんとする其大躰の傾向は何の點にあるか同じく進步派と云ふと雖も時と處とに從うて其面目必ずしも相同じからず進步なる文字は素と是れ抽象のものにして其如何なるを意味するかは塲合によりて差別あり今日我宗敎界に所謂進步派は何を以て其特色とする思ふに進步派の要義とする所(第一)其硏究の精神方法並起點に於て獨斷派と異れり進步派は獨斷的假定を置かず豫め一定の宗敎を絕對の眞理とし而して後に硏究を運ばすことをせざるなり彼等は世間多くの經典の中一バイブルにのみ眞正の宗敎的敎理の籠れりと假定せざるなり彼等が硏究を運ばすや先づ佛敎をも基督敎をも人類

評法を以て古今東西の宗敎的現象に臨まざる可らずと云ふは是れ彼等進歩派の承認せむとする所なるべし彼等若し眞に一切の假定と先入とを去つて近世の批評的硏究法に從うて佛典と其敎理と其歷史とを攷究せば遂に如何なる結論に達すべきか予輩は從來佛者の多く唱へし所とは頗る其面目を異にすべき者あらんと信ずるなり

基督敎會內の進歩派の傾向は如何其敎會に於ける進歩保守兩傾向の軋轢は佛敎徒間に於けるよりも著るく從つて其敎會內の進歩派は佛敎社會のよりも其旗幟鮮明其活動壯大なり總じて此の如き現象に於ては基督敎徒常に先じて佛敎徒之に倣ふ者の如し兎に角我國諸宗敎の中最も活動する者は基督敎と云はざる可らずオルソドックス敎會以外にありと認められ來りたる者は殊更云はずオルソドックス敎會內に於ても此數年間進む者は益〻進み來りて遂に多くの所信に於て他と千里の隔を爲す者のあることは否む可からざる事實なり所謂オルソドックス敎會內に於いて旣に其神學上取るところの位地の多くのオルソドックス敎會以外の者をも凌げる人々あり此輩のあるを以て其敎會をオルソドックスならずと云

道の根本的教理」てふ如き語を掲げ來りたるは耶蘇教家の既にしば〳〵論じたる又今なほ論じつゝある「何をか基督の教の神髓となすか」と云ふと同じ問題に面接し來りたる者と云はざる可らず進歩的耶蘇教家は云ふ從來教會の墨守したる教義信仰は必ずしも基督の教の神髓と云ふべき者にあらず其必要の部分と云ふべき者にあらず必要の部分と不必要の部分とを分たざる可らずと彼等神道家も亦神道に於ける必要の部分と不必要の部分とを分たんとするにはあらざるか然らば何をか神道の必要の部分となさんとするぞ

近頃或佛者が佛教史林なる雜誌を發兌して佛教の歷史的研究を主張しつゝも尙ほ其研究に於ては佛者として特別の眼を以て佛教的所傳を見るが故に世間通常の歷史家の研究法並批評法とはおのづから其趣を異にする所ありと云へるに對して佛教徒間の一雜誌はこは未だ百尺竿頭一歩を進めざる者なり何ぞ必ずしも特別の眼を以て見るを要せんや既に特別の眼を以て見ると云はゞ眞に史學的研究の精神を得たる者と云ふ可らずと論じたる如きは是れ幾分か進歩的佛教家間の消息を漏したる者にあらずや先づ吾人は先入的假定を棄て同一の研究法並批

は常に不承知ながらも已むを得ず進歩派に引かれつゝ動き來りしが如し昔日急激と云ひ異端と云ひて彈訶したるの位地に保守派(其の甚しく頑迷ならざる者)は今や漸く移り來りて而して今の進歩派を又過劇異端と稱して忌み嫌ふにあらずや之を要するに宗教界に於ける運行變移の主動力は常に進歩派にあるなり我國各宗教の進歩派は如何なる方向を取つて進みつゝあるか是れ深く吾人の注意すべき所とす

神道家中一派の機關たる一雜誌は頃日論じて曰く現今の神道家たるもの其神道の根本的教理を失はざらんか其の教訓を儒佛に取り其箴戒を回耶に藉るも何ぞ躊躇すべけんや日月は天下の日月なり眞理は天下の眞理なり敢て個人の私すべき者にあらずと何ぞ其口吻の舊神道家に似ざるの甚しきや例へば之を平田等の曾て唱道せし所と比較せば其差異如何ぞや神道家も亦近世思想界の大勢に接したるの結果として頗る其面目を改め來らんとする者の如し然れども彼等進歩的神道家が如何なる道を取つて如何程の事業を宗教界に爲さむとするかは未だ將來に屬する問題にして今は唯だ漸く一小歩を爲したるに過ぎざるなり兎に角神

於ても同樣の現象あるは蔽ふ可らざる事實也此進步保守兩派の旗幟ます〱鮮明にして或は進む者はいよ〱其向ふ處へ走るべく或は止まる者はいよ〱頑として其舊信仰に執着すべく又或は兩者の間に彷徨して彌縫的若しくは折衷的若しは溫和的位地を取る者も多かるべし其中最も吾人の注意を要するは各宗教内に於ける進步派の動靜なり蓋し社會の大勢より見れば運行の動力は常に進步的傾向を取る者の方に存すればなり進步派は時に或は失敗し或は岐路に走り或は却つて眞實の進步を來さずして危害を釀すこともあらん保守的傾向も固より人事の一要素として缺くべきにあらず然れども其要は進步的傾向を引き停めてそが釣合を取るにあり譬へば船躰の搖動を防がんが爲めに船底に重荷を置くが如し船躰を動かすものは其の重荷にあらずして蒸汽力にあり溫和派の如きは固より保守進步の兩傾向の衝突に生ずる危害を少うする者なれども要するに社會運行の主動力にはあらず溫和派は屢〻微弱なる折衷主義に陷り而して古來人目を新にする大事件の折衷主義によりて成就されたる者あるを見ず彌縫主義に至つては固より云ふに足らざるなり殊に近世に於ける宗教界の變遷を觀るに保守派

に角此等の點に於て佛者は輕少ならざる困難を感じ又輕少ならざる攻擊を受くべきなり(第三)社會の進步に關する實際上の問題よりして佛教は又輕少ならざる非難を受けざる可らず實際之を受けつゝあるなり即ちその厭世的と云はるゝ如き此邊の問題に於ける最要の者ならん此非難に對して佛敎家は切りに大乘敎の厭世的ならざることを辯じ來りしが佛教を厭世教にあらずと云ひ去ることの頗る無理なるを見て今は厭世樂天の兩眞理を其圓滿の敎理に合するなどと主張せんとするが如し然れども佛敎の實際的傾向の厭世的たることは否む可らざる事實にして而して此點よりして來る非難は容易に避く可らざる所たり且又佛敎理が殊更に我國躰に合するなどと云ふ如き牽强附會の說も破れざる可らざるなり

(明治廿六年六月發行、六合雜誌第一六二號)

我宗教界の進步派

我國の宗敎界を觀るに保守派と進步派との分別はます〳〵著明ならんとする者の如し啻に基督敎會内に於てのみ然るにあらず佛敎社會に於ても又神道家間に

に投せざる可らず予輩の見る所によれば佛敎に對する論難の中左の三點の如きは先づ最も手近き者にして向後此等の點に關する論爭は日一日より盛ならん(第一)西洋哲學の方面よりして佛敎に向ふべき攻擊の先づ最も手近きは實驗的哲學の立脚地より來る者ならんスピノザ、シェルリング、ヘーゲル等の哲學が受くると同じ攻擊を佛敎は實驗主義の哲學より受けざる可らず又之と共に近世の科學的思想は佛敎家の云ふ奇跡靈驗を其儘には許容せざらんとす故に或佛敎家は或耶蘇敎家が奇跡靈驗を以て其敎の必須の部分とせざる如くに亦之を以て佛敎の必須の部分とせざらんとす此處進步的佛敎家と保守派との分れんとする點の一なるべし奇跡靈驗のことは姑く之を斷ずるに難からずとするも佛敎の如き哲學が實驗的哲學に對する論點には佛敎家の大難題となるべき者の幾多存せずばあらず(第二)佛典の歷史的批評よりして佛敎家に取りては困難なる問題の生ぜざる可らず佛者が釋迦の所說と云ひ來りし者果して皆然る乎大乘非佛說の如き再び盛に論ぜられざる可らず若し夫れ大乘は佛說にあらざるも可なりと云はん歟然れども此を公然許容することが佛敎從來の面目に如何なる影響を及ぼすべきか免

あらずと雖も予輩の考ふる所に從へば宗敎その者の觀念と哲學てふ者の觀念とが多くの論者によりて解せらるゝ所とは其趣を異にするに至らずば到底此兩者の和合を見るに至らざらん予輩の見る所を以てすれば眞實の意味にては哲學は其根本的見地に於て一宗敎たらざる可らず而して世に云ふ宗敎は亦一種の哲學たるに外ならず若し此兩者を分たば只だ構造の方法に精麁の別あるを以てすべし通常宗敎と名けて哲學より區別するものは實は麁なる哲學に外ならず哲學と名けて宗敎より區別する者は實は精なる宗敎に外ならず此頃トルストイ伯が獨逸倫理學協會の問に答へて宗敎ありて始めてそれに適合せる哲學の起ると云ひしは其意義を明にせば大に眞理あることと考ふるなり予輩は哲學を以て非宗敎的のものと考ふるの理由あるを見ず予輩は又飽く迄哲學を一種の智識的遊戲となすに反對す哲學は吾人の安心立命を求むる者に外ならず而して宗敎も亦同じく之を求むる者に外ならざるなり

一宗敎としての佛敎と哲學との關係は佛者なほ之を明にせむことを要す若し唯だ信ずと云はゞ耶蘇家の信仰と何ぞ揀ばん若し理を云はゞ紛々たる論爭の渦中

るに外ならず從來我國に於ては佛教は哲學上の論敵として儒者を有したるに過ぎざりしが西洋哲學に接したる以後は然らず佛教は哲學としても枕を高うして眠り得べきにあらず一切の哲理は既に釋迦の說き盡せる所にして一點を加ふ可らず一畫を去る可らず至大圓妙後人は只だ之を遵奉すべきのみ一歩をだも進むるの餘地なしと云ふが如きは佛教徒は之を信じて疑はざらんも獨立不羈の哲學的研究家の許認する所とはなる可らずヘーゲルの學徒も一時ヘーゲルを以て哲學の頂上となし古來の哲學的發達は是に至つて其圓滿の極に達したりと思惟したりしなり哲學の紛爭は遂に休すべからず佛教家が佛教と哲學とを同一視せざらんことを欲し哲學以外に宗教としての立脚地を安置せんとするは誠に意味あることなり然れども彼等はよく中世紀末葉のスコラ學者の遭遇せし運命に遭遇せざるなきを得るか

宗教は哲學的窮理以外に安置さるべき者なるか將た哲學的思想の變遷するに從ひ變遷することを免る可らざる者なるかその變遷するも亦敢て厭ふの理由なき者なるか此等は固より詳論を要する問題にして數言を以て茲に決定すべき所に

しく爭ひ來たりたる所にして又今後も永く其相爭ふ所たらん
何故に一時佛教家は哲學以外に佛教なく佛教以外に哲學なきが如くに云ひなしたるか是れ哲學を以て耶蘇教に當る最も鋭利なる武器と信じたればなり彼等はおもへらく佛教は其哲學を以て啻に耶蘇教の上に立つのみならず凡べて西洋の思想界に對抗するを得るなりと西洋は實驗的物理の學に長じ器械の術には進歩せるも哲理の研究に於ては遙に佛教に劣れり哲學は是れ佛教特有の長所此の如きもの西洋の思想界にはあらずと(少くも佛教家の或者は)思惟したりし也然るに西洋哲學に關する智識の增進するに從ひ西洋の哲學にもをさ〳〵佛教に劣らざる深大高遠なる窮理のあるを見殊にプラトーン以後ヘーゲルに至る迄大哲學者輩出して各〻特殊の見を立て論難紛爭窮まる處なきを見たる者は佛教を以て此爭論の渦旋中に投ずるも亦幾多攻擊の衝に立たざる可らざることを看取せずんばあらず之を看取したることが或佛者をして佛教を哲學論爭の外に立たしめんとする一源因にあらずや哲學の論爭や紛々擾々たり佛教豈に獨り論難攻擊を免れんや若し佛教をして哲學たらしめば是れ之をして古來數多き哲學の一種たらしむ

佛教と哲學

佛教家は一時大聲疾呼して佛教哲理の高大玄妙なるを稱へ之を以て耶蘇教家に當らんと欲するの極佛教と哲學とはさながら同一不二なるが如くに云ひ倣したることありしが今は少しく其主唱する所の趣を異にせむとするものの如し彼等の中或者は論ずらく佛教と哲學とは同一視す可らず佛教は宗教としておのづから哲學以外に立脚の地を存せざるべからず哲學上の紛々たる爭論には佛教てふ宗教は毫も痛痒を感ずる所なく其根據は未來永刧磐石の安きにあらんと此の如く宗教をして哲學的攷究に拘らざらしめんとするは是れ取りも直さず耶蘇教家の往々唱へたる所なるがその果して爲し得べきのことなるかは容易に論定す可らざる一大問題なりかの所謂る合理的宗教を主張する者は哲學と宗教との分離を許容せざるならん合理と云ふは哲學上見て以て理ありとなす所に合するの謂ひたらざる可らず若し宗教上の合理と哲學上の合理とを相分たば何ぞ殊更に合理的宗教と云ふを要せんや右云ふ問題は合理的宗教論者と其反對論者との間に久

云はゞいざ知らず爾か云はざる限りは其批評が一個人の私に望む所とは反對の結果に出でしの故を以て批評家を責むるはいはれなきことなり歴史的批評の主義に從ひ佛教の書典を研究するの極其古來の傳説を破壞するに至るも可なりと云はゞ何ぞ批評家として獨り聖書の價値に關する教會の傳説にのみ低頭平身するの理あらんや此等の點に於てよく拘泥を離れたる批評家は幾何かある拘泥を去らずして只だ皮相の批評を以て滿足を買はんとする偸安主義都合主義辯護主義は眞に偉大なる確信を起すの道にあらざるなり急速の妄信は知らず眞乎に偉大なる確信は十分に批評的精神を滿足せしめざる處に生ず可きにあらず一たび權威傳説に默從することを止めて自ら獨立の思考を爲すに至らば批評心は到底抑壓すべき者にあらず唯だ之を其根底より滿足せしむべきのみ今日の弊は皮相の批評に安じて小建設を急ぐにあり因循姑息只管に事なかれがしと願ふにあり急進過激を嫌うて却て進取の志氣を沮喪せしむるにあり嗚呼何人か能く眞理の爲に進歩の爲に猛氣を用ふる者ぞ

（明治廿七年六月發行、六合雜誌第一六二號）

然的分子は果して打破す可らざるか聖書は他書とは異りて只だ人爲にあらず神爲の部分あるか此の如きは是れ應に批評を待つて始めて決すべき問題にあらずや此の如きの假定を置いて論ずるは此頃或佛者が佛教の歷史的研究を主張するに當り奇跡靈驗と雖も佛典に云ふ所は抹殺すべきにあらずと假定して而してその如き假定の上に建てたる硏究を史學的批評と云ふが如し彼れと此れと未だ其拘泥を離れざるは一なり聖書の批評は素より其超自然的分子を打破すべき者と定れるにあらず然れども又之を辯護すべき者と定まれるにもあらず故に高等批評の正否を論ずるに當りては一教會の信仰を打破すると否とを問ふ勿れ破壞に至ると否とを云ふ勿れ只だ批評法の其正當の規律に協へるか否かを問ふべきのみ而して其規律は特に聖書の超自然的分子を救はんが爲に設くべき者には非ざるなり眞個の批評家は破壞をも敢てするの膽力なかる可らず教會の紛爭を起ししの故を以て頑固者流を反動せしめたるの故を以てブリッグス氏の論の如きをすらも尙ほ聖書の高等批評家として言表すまじき所なりと云ふは何の意ぞや教會の平和と聖書の超自然的分子とを保持することを以て高等批評の目的なりと

何ぞ紛爭を恐るゝことの爾かく甚しきぞ思へ凡べての改革はその如き偸安主義の產む所なるか

吾が從屬する一敎會の和平をのみ其畢生の目的とする實務家は知らず苟くも眞理を闡明することを以て我任とする眞個の學者は今少しく其眼孔の大ならんことを要す偸安主義の實務家の考ふる所を以て學者の本領と思惟するは妄も亦甚しと謂つべし偸安主義の批評家は眞個の批評家にあらざるなり高等批評の何たるを論じて尙ほ我敎職を失ふを云々し頑固派を激せしむることを云々し敎會の紛爭を云々す彼輩よく批評の何たるを知るか彼輩曰く批評は穴探しの謂ひにあらずと然り穴探しの謂ひにあらざると共に又辯護の謂ひにもあらず聖書の批評を論ずる者動もすれば先づ聖書に關する一大假定を置いて曰く聖書は人の作る所にあらず神と人との作る所なり故に其神爲の邊を攷究せむには神より來る聖靈の祐助に依らざる可らずと曰く如何なる批評を爲すも妨ぐるなし但だ其結果聖書の超自然的分子を打破せざらんことを要すと此の如き莫大なる假定を置いて而して之を批評と云ふ皮相の批評とは即ち此の如き者を謂ふなり聖書の超自

を得たりとなし批評恐るゝに足らずと叫ぶ世論の狹隘なるに容れられず思想界の窮屈なるを歎ずる基督教會内の學者輩が其内に向つて爲す所を見るに往々老婆心に縛られ都合主義に制せられ自由なる大飛躍を爲し能はざるものの如し若し少しく其論の一頭地を抽んでゝ舊來の所信に反し獨立の方向に進む者あれば教會目前の都合と平和とを以て畢生の目的とする輩は教勢に害ありとなして之を疎せんとす彼等は云ふ教會一般の知識の程度を顧ずして突然神學若しくは聖書に關する新説を吐露し他の蒙を啓かんとして却て一般の攻撃を招き遂に異端論者たるの醜名を博するは愚の至りならずやと而してたま〳〵かのブリッグス氏の如きが忌憚なく我所見を吐露するを見れば是れ徒らに頑固派の忿怒を買ひ爲めに我教職をまでも剝がるゝに至る者となし而して此の如きは自他に益する所なしと云ふ若し高等批評なる者が教會の紛爭を起し自己の教職を失ふて異端論者たるの醜名を得るに至るものならば宜しく教會の爲に聖書の爲に之を撲滅すべきなりと云ふ批評家も誰れも彼れも教會の内にありて皆おとなしからんことを要すと云ふ斯の如くにして教會も安泰ならん學問界も和平ならんと云ふ噫

の結論に進み行くことをさへ敢てせざらんとするにあらずや彌縫主義都合主義が歷史家の胸宇を狹からしむることや大なり斯る彌縫主義と都合主義とを以て眞に士氣を振興し國運を隆盛ならしむるを得むと思ふは甚しく惑へり人心は欺いて以て振はしむべき者にあらず國家の成立に於て其由來に於て自ら欺いて以て吾元氣を振起せむとするは豈に難からずや何ぞ隱蔽するを須ひん彌縫するを須ひん起たんと欲せば宜しく眞實の價値によりて起つべし凡そ偉大なる自信は我眞實の價値を認むるよりして來る誠實なるよりして來る十分の批評を爲し遂げたりとの意識なくんば何處に偉大堅牢なる自信を建てん心中一點私に批評の襲擊を恐るゝあらば其勇や假勇なり今日我思想界に於て大建設を望まば批評に破壞に吝なる勿れ我思想界は未だ批評の時代を超過せず否な何の世か批評の時代を超過せん批評は進步の休せざると共に休せざるべし

カント曰く宗敎の神聖なるも法度の莊嚴なるも批評の前には跪かざる可らずと然るに批評の爲めに累はされざらんことを欲するは是れ宗敎家の通弊ならずや時に批評の進擊を避くるの道なきに會へば姑く皮相の批評を容れて而して滿足

は其の如き頑陋なる當世の氣風にあれども又其一半は固より學者自らに存す彼等は曰く理論は漸次に行ふべし急に之を行はゞ却て世を惑はしむるの虞ありと而して直言讜議を避けて力めて蛇の如くに迂回せむとす目前の都合は論理的結論よりも貴しとせられ忌憚なく眞理を吐露せむよりは目下の平和を保つに汲々たらんとす十年以前に比すれば今日は寧ろ臆病なる學者に富めり今の學者は相誡めて云ふ苟にも革命を語る勿れ破壞を云ふ勿れ之を云はゞ我位地を失はんと然り當世に處するの道は只管おとなしきにありおとなしくば何れの處にも容れられおとなしからずば何れの處にも彈訶せらる

何故に斯くは學者の卑屈ならんとする學問界の窮屈ならんとする惟ふに是れ皮相の批評に滿足して只管建設を急ぐが故にあらずや今少しく大膽に又根本より批判すべき事件世に少しとせず然るに少しく忌憚なく舊來の傳說習俗を批判せむとすれば直に之を危險と云ひ破壞と罵る試に見よ我國史の研究の如きも忌憚なき批評を恐るゝの故を以て些々たる考證的穿鑿に流るゝの弊はなきか歷史家自らが其研究の結果を恐れ他に之を傳ふることを憚るのみならず己れ竊に其必然

批評的精神

我國現今の思想界を觀るに學理的考究批評的研究の必要を唱へながら膚淺の究理皮相の批評に滿足して只管建設を是れ急がむとするの傾向はなきか一時は古來の傳說風俗習慣を自由に批判して憚らず遂に其思索の到達する處從來の所信を破壞するに至るも理の當に然る所として敢て顧みざりしが如きに今は則ち然らず我思想界の破壞時代は既に過ぎ去れりとなし成るべく從來の基礎を保存して之が上に建設せむことを以て當今の急務となす者の如し故に破壞なる文字は今は殆ど非理有害の所業をのみ意味する者と解せられ己れと論を異にする者を惡しざまに云はんには之を罵つて破壞的と云ふに若くはなしと思惟せらる少しく當世の流行に違反するあれば忽ち破壞論者と名けられ暴論危言を弄する者と目せらる而して學者は己が所說の破壞的と云はれんことを恐れ努めて其言論を圓滑にし以て時流に和せんと欲する者の如し方今の狹隘なる氣風は學者を小膽ならしめ左右を顧みて低語せしむ學問界をして爾かく窮屈ならしむる罪の一半

ること多からん故に一分科學の研究をして遺憾なからしめむには之を他と相離れたる者と見る可らず諸科學を通觀する普通根本の見地より瞰下するの必要あるなり分科的詮索を離れては普通根本の觀念を正確にす可らざれど普通根本の觀念によらずしては分科的詮索を完うす可らず分科的智識の分離しゆくと共に又之を綜合せざる可らず而して綜合の見處は分科的智識を蹈臺となすを要すれども又之を超越せざる可らず

歐洲に於ても分科的研究のます〳〵其步を進めつゝある傍に大統合を求むるの聲漸く聞え來らんとす西洋の哲學も永く當今の如き狀態に打棄て置かるべきにあらず來らむとする世紀に於ては恐くは大建設の成就せらるゝあらん分科的智識の膨脹すると共に之を緊約する必要あり一本元を提げて衆理に通ずる見地なくんば吾人の智識界は殆ど其煩雜に堪へざらんとす

（明治廿七年五月發行、六合雜誌第一六一號）

心理學あれば犯罪的心理學あり特に近來盛に研究さるゝ生理的心理學の如きは專攻の學者にあらずんば到底之に通曉し能はざるに至らんとす斯の如く諸般の研究が各〻一專門科として分離するの傾向にあることは否むべからざる事實にして而して又その如き專門的研究が吾人の智識を精確ならしむるに必要なることは明なり智識と實在との原理を尋求する哲學が分科的研究によりて益せらるゝことは云ふまでもなく全く分科的研究の結果を顧みずしては徒らに空論妄議に流れて據るべき事實上の根據を失はん今日に於ては米國心理學雜誌記者の云へる如く實に生物學心理學等の實驗的分科學が哲學に其有用なる觀念を與へつゝあり然れ共一分科學は如何程獨立の者として研究さるべきか其研究には其出立點として或假定を設けざる可らざるは勿論又其研究の趣くところ他の學科の範圍に接觸し來らざる可らず心理學の如きは少くとも其感覺の論に於ては生理學に接せざる可らず其知覺の論に於ては知識學に觸れざる可らず又其討究の到るところ遂には心と物との關係の純理哲學的問題を度外視し得べからず若し又力めて其詮索の範圍を限らば攷究を其中途にして停めざる可らざ

止め地盤の片隅より漸次に耕耘し而して其組織的結果は之を將來に待たんとする者の如し故に局部の研究は枝葉を生じ精密に精密を重ね審問專攷休する處を知らず是れ蓋し翼を搏つて渺茫たる天空にさまよはんよりは縱令ひ遠きに至らずとも大地の固きに步せむことを欲すればなり或學者はおもへらく哲學は一學科と云はんより寧ろ心理論理審美倫理等の幾多の相異れる學科の總名に過ぎず即ち哲學なる者はなく但だ若干の哲學的攷究あるのみと此の如きはまさしく當今の學問分離の傾向を言表せる者なり嘗に哲學が其影を隱くして之に代りて心理倫理等の科學的研究の膨脹せむとするのみならず倫理學の如きすら一學科として研究せむには餘りに庬大に餘りに雜駁なりと唱ふる學者もありベルリンのシンメル氏は其近著道義學緒論を世に公にしたる。の趣意を陳ぶるところに曰く方今物理學てふ表題を以て一著述を試みる者の無きが如く倫理學も亦一著作となすにふさはしからぬ者と見做されん日の來るべし倫理學は其實心理上歷史上等の若干の研究に分たるべき者なりと心理學の如きも今日に於ては甚しく其範圍を廣めて種々の名號を帶ぶる心理學あり嬰兒心理學あり民族心理學あり異狀的

轉じつゝあるを見る今日は却て嬰兒、頭腦、感官、癲狂等に關する個々獨立の研究が其見處觀念を哲學に與へつゝあり云々

右心理學雜誌記者の云ふ如く方今學問の傾向は總じて個々別々の範圍を區劃して先づ其區域に於て夫々に穿鑿を盡さむとする者の如し研究の區域は分れに分れ專門に專門を生じて素と一學科と見做されし者今は幾多の分科となれり哲學も亦此分離の大勢に襲はれたり一時歐洲の思想界を風靡したるへーゲルの學派其勢力を失うてより哲學は恰も支離滅裂の情態に陷り既に其組織を完了して漸く過去に屬し去らんとする一二大家を除きては大哲學者は求むれども得べからず心理學者は少からず論理學者智識學者も尠しとせず美學者はあり哲學史家はあり然れども哲學者と云ふべき者幾何かあるこは強ちに哲學的元氣の沮喪したるにのみ原由すと云ふ可らずへーゲルの哲學の傾きしより其如き大綜合大建設を危んで寧ろ姑く根抵を固むることに全力を致さむとする是れ其主因たらずんばあらず傍らには物理的諸學科の其探究の區域を數多に分割し實驗的歸納的研究法を用ひて駸々として其武步を進むるを見之に倣うて以て先づ急速の大統合を

物語等の出現せし時を指すべきならん然れども此時に於ても叙事的分子の抒情的傾向を凌駕せしとは云ふ可らず我國民は其天質に於て叙事詩的人民たらずして寧ろ抒情詩的人民たらざるか此の如きは是れ應に日本文學史上の大問題となすべき所にあらずや

(明治廿七年五月發行、六合雜誌第一六一號)

學問の分離

本(明治廿七)年一月發兌の米國心理學雜誌(アメリカン、ジョルナル、オヴ、サイコロヂー)は其冊尾に附記して曰くピ子ル並にエスキロルが佛蘭西に於て癲狂に關する規律ある研究を創始したるは其憑據する所ロック並にコンデヤックの哲學にありきグリージンゲルはヘルバルトに從ひジャックソン並にメルシエーはハーバート、スペンサーを遵奉せり教育の研究も獨逸に在りてはヘルバルトの哲學多くは其根據となり英米に於いてはスペンサー風の思想流行す斯くの如く癲狂又教育の研究も從來其根本的見處を當時流行の哲學に取りたるが今は漸く其風潮の

る所もありしに何故に其種々の分子の相併んで發達せずして古今集に至りては殆ど全く抒情の者にのみ横領せらるゝに至りしか或は云はん三十一文字の短歌式が叙事詩の發達に障碍を與へたりと然れ共何故に和歌は三十一文字の形式に窄めらるゝに至りしか是れ研究を要する所なり三十一文字の短歌式が和歌をして專ら抒情詩たらしめしよりも寧ろ抒情的傾向の素より和歌に存在するありて之が其如き短歌式を隆盛ならしめし一原因たりしにあらずや和歌は云ふも更なり總じて我文學に於て抒情的分子を盛ならしめしには佛敎は如何なる關係を有するか其原因を全く佛敎の影響に歸すべしとするか佛敎渡來以前の文學に於て既に抒情的傾向の存せざりしか歐洲近世の文學は叙事詩の時代にあらずして抒情詩の專横する所たり是れ當今思想界の大勢の然らしむる所なり然れども歐洲の文學は曾て大叙事詩的時代を通過せしことありき我國の文學は其當初より抒情的傾向を有せしにはあらざるか神武東征の如き三韓征伐の如き國民の發達に取りては輕からざる出來事の全く無かりしにはあらざるに何故に之を歌ふの叙事詩を見ざるか若し我文學の叙事的時代を經過せしことありと云はゞ或は平家

進歩たりしに相違なし而して又今日多少其趣を轉じて局部の詮索に專らならんとするは更に其一進歩を爲したる者ならん一文學者若しは一種類の文學の研究に於て尙ほ手を下すべき好問題は多々あり惟ふに巣林子の著作の如きは其最好なる者ならん然れども此等の研究に精しからんと共に文學史全躰の變遷にも着目せざる可らず向後尙ほ一歩を進めて眞個の文學史を著作することに努めざる可らず眞個の文學史は國民の心裡の變遷及其變遷の因緣を描出する者たるべきなり約言せば一種の心理的研究と云ふも不可なからん若し此の如き着眼を以て好著述を成す者あらば是れ我文學史の研究に一紀元を開く者と云はるべし

我文學史上特に研究すべき問題少しとせず例せば和歌の何故に專ら抒情詩の範圍に窄めらるゝに至りしか又總じてわが國詩と云ふべき者に於て敍事的分子の抒情的分子に比して其發達の甚しく不完全なりしは何に因るか等の問題は予輩の宜しく研究すべき所なり種々の要素を含むと云はるゝ萬葉集に於てすら既に抒情的分子の遙に敍事的分子に勝てるを見る併しながら尙ほ萬葉に於ては一方には水江浦島子を詠ずる如きあり又一方には貧窮問答の如きありて頗る富贍な

あり又今日其萠芽を發しつゝある一文學者若しは一時代又一種類の文學に就いて詳細なる歴史的批評を試みることも亦我國の文壇に於ては未だ曾て見ざりし所なり而して當今の傾向が日本文學史の材料となる局部の詮索論評に委しからんとするは其研究上の一進歩と云ひて可ならん蓋し一文學者若しは一種類の文學を論ずるは國文學全躰の發達を尋究するに比して遙に爲し易きの業たるは勿論なるが啻にその爲し易きの故を以て其の如き區々の研究の流行せむとすとは云ふ可らざらん其原由するところ又頗る文學史研究に於ける着眼の進歩したるに存せずばあらず數年前の如き著作を以て滿足せずして尚ほ一層深く文學史上の變遷を究めんと欲するの致す所にあらずや予は實に文學史研究に於ける着眼の多少進歩したるを見るなり然れども予輩は更に其一歩を進めて眞正に我文學の歴史と稱せらるゝに足る好著述の現れむことを熱望せずばあらず若し研究の着眼と其方法とが共に正鵠を得ば我文學史の編纂は甚しき難事と云ふにもあらざらん予輩は局部の研究に專らならんとする今日の傾向が其道を過つて徒らに考證的詮索に流れざらんことを望む數年前兎に角文學史編述の試みられしは一

るなり

日本文學史上の問題

（明治廿七年五月發行、六合雜誌第一六一號）

三四年前不完全ながらも二三種のわが國文學史の著述踵を接して世に出でしことありしが其後史學の研究は尙ほ總じて世間に歡待せらるゝにも拘らず同樣の著作を試みし者あるを見ず今日に於ては我文學史全躰の變遷を取りて之を論ずるよりも寧ろ一文學者若しは一種類の文學に就きて其發達價値を研究することの流行しつゝあり又尙ほ流行せむとするものゝ如し文學界の觀察者又指導者たらんと務むる早稻田文學に三馬一九京傳種彥等を論じ又頗る詳細なる馬琴傳を揭げ始めたるを見又淨瑠璃史俳諧史傳等の如き未だ大に滿足すべき者とは云ふべからざるも兎に角著述者の忠實なる詮索を以て成りたる著作の世に公にせらるゝを見ても當今文學史上の研究が局部の問題に傾けることを察知し得べし三四年前の文學史樣のものも兎に角其種類の著作としては先鞭を着けたるの功績

想は以て世間の歴史に價値あり發達あることを認るに適せず佛者は必ずや其定文句を提げ來りて云はん大乘敎は小乘の厭世的なるが如きにあらず諸法實相を說く佛敎の極意は決して厭世觀にあらずと如何に當世の流行に合せむと欲して大乘の極意の厭世觀ならぬことを大聲疾呼するも佛敎なる者の大躰の傾向の厭世的なることは蔽ふ可らざる事實なり厭世的なればこそ世間に今日觀るが如き深大の影響を與へ得たるなれ然れども姑く佛敎の極意は厭世觀にあらずと云ふことを許容するも其根本的哲學思想は決して進化發達てふ觀念と親密なる關係を有する者にあらず佛敎の進化てふ觀念に親しからぬは恰もスピノザの哲學の之に親しからぬが如し佛敎は進化の哲學にあらず寂靜の哲學なり佛者にして若し人類の歴史に發達の價値を認めんとせば大に其哲學的根據を改めざる可らず今日に至る迄歴史的研究の佛敎によりて奬勵せられたることある乎佛敎は其根本思想よりして何等の幇助を歴史的研究に與へたるか今日佛者間に佛敎の歴史的研究の必要を稱ふる者あるは佛敎其者より由來せるにあらず他より來れる影響に外ならず佛敎とは緣遠き思想を當今の趨勢に連れて輸入したるに外ならざ

反對なり但だ厭世思想と歴史的變遷の價値とを調和せんと力めたるはハルトマン氏の哲學の如きならん然れども氏が歴史的進化に價値を置きたるは其厭世思想の致し丶所にはあらず寧ろ厭世觀を取るにも拘らず努めて歐洲思想界の大勢に合せむとしたるの結果なり即ちハルトマンの哲學に於ける歴史觀は(其歴史を見て以て價値あるもの、發達の趣旨あるものとなす所は)厭世思想より來れるにあらずして寧ろヘーゲル等の非厭世觀より由來せるなり厭世思想は決して人類の歴史を意味あり價値ある者となすに傾向せず寧ろショペンハウエルの如く歴史思想に乏しきをこそ厭世家の特色と云ふべけれ厭世思想の故國とも云ふべき印度の古代史のほと〳〵湮滅せるも故なきにあらず哲學宗教には偉大なる痕跡を遺しながら印度人の歴史の保存に不熱心なりし一大原因を其厭世思想の盛なりしに歸するは非耶ショペンハウエルがわが意に適ふ者として印度古代の厭世思想を稱揚せしも宜なる哉

佛敎の厭世觀を以て歴史的變遷の價値を說かむとするは豈に難からずや末法の世には何々の佛が現れて云々すると云ふ如き想像談は兎も角も其哲學的根本思

者よりも富贍なる意義にて進化なる者を解說し得たり近時諸般の歷史的研究に重きの置かるゝは蓋し斯くの如き偉大なる哲學思想に基因する所あるを忘る可らず視よ哲學史の大家と稱せらるゝ者の多くはヘーゲルの學派より出でしを總じて歷史てふ者の見樣にヘーゲルの哲學の影響したることは實に深且大なり近世の歷史觀はヘーゲルによりて一新せられたりと云ひつべし

夫れ厭世思想なる者は此世の歷史に重大なる價値を認むることをせず厭世觀に取りては歷史上の變遷は悲むべく厭ふべき盛者必衰の演劇を唯だ幾度となく繰返すに過ぎざるなり盛衰榮枯の成り行きに何等の富贍なる意味かある何處に一定の趣旨かある寧ろ世事の紛々たる擾々たるは存在に繫がるゝ迷執の致す所なり存在の羈絆を斷絕し歷史の進行を停止して寂滅に入るをこそ眞に願ふべきなれ近時の歐洲の哲學者中にも如何にショペンハウエルの歷史思想に乏しきかを見よ彼に取りては「日の下には新しき者あらざるなり」彼れに取りては歷史上の變遷に何等の趣味の存するや歷史は唯だ存在に執着する根本的過誤を繰返すに過ぎず歷史上の變遷ばかり彼に取りて意味なき者はあらず彼は實にヘーゲルの正

歴史の價値と厭世思想

近世歐洲に在りて史學の隆盛に趣きしは獨逸の大哲學者等が歴史哲學を說きしに其一大原因を歸せざる可らずフィヒテ、シェルリング又特にヘーゲルは其哲學上の根本思想よりして此世の歴史の進行に一定の趣向する所あることを認めたり彼等に取りては歴史上の變遷は意味なき事實の連續にあらず一趣意の實現されつゝある者なり故に彼等は歴史的發達てふことを其最も富贍なる意義にて語り得たり彼等には人類の歴史は盛衰榮枯の同じ演劇を幾度となく繰返すに過ぎざる者ならずして眞實其向ひ行く一定の目的を有し又其目的の實際顯現せられつゝある者なりこは彼等の哲學の根本的觀念より流出せる思想たるを忘る可らず彼等の見地よりせば實に此世に進化なる者あり近時の二大學說なる(他の點に於ては甚しく相異れる)ヘーゲルとスペンサーとの哲學も共に進化てふ大思想の上に築かれたり進化なる一語は是れ今世紀の思想界の大潮流を表示する榜標也ヘーゲルは理想的進化を說きスペンサーは只だ機械說に據れるを以て前者は後

りと云ふ如きは巧は則ち巧なれども是れ寧ろ歷史的發達てふ觀念を蔑視したる辯護說にあらざるなきを得んや是れ長年月を經過したるの發達變遷をば佛の一代に緊縮せしむる非歷史的說明にあらずや予輩は今此等の問題を細しく論せむとするに非ず但だ爰に云はんと欲する所は若し眞實史學的批評の精神を以て佛敎を其根本より討究せむとせば先づ姑く天台の五時判釋の如き臆說は疑はざる可らずと云ふこと是れなり或束縛の下に在り或假定を離れざる歷史的研究ならずして若し不羈自由なる史學的批評を奬勵せば已に業に佛者間に存在すと云はるゝ懷疑的傾向は尙ほ一層其頭を擡げ來らん

然れども身を佛門に托する僧侶輩に斯かる不羈自由の歷史的批評を望まんは或は無理なるべし特に佛敎の印度に於ける變遷發達又佛典の史學的批評は何人に取りても難事中の難事なり蓋し印度の古代に關する吾人の歷史上の知識は實に甚しく不完全なる者なればなり然れども有らん限りの道を求めてこゝに研究を運ばせずば佛敎發達の眞相は何時までも暗黑の裡にあらん

(明治廿七年五月發行、六合雜誌第一六一號)

其所謂經論に史學的批評を加ふることと是れなり汗牛充棟のかの浩瀚なる一切の經文皆是れ悉く釋迦の親しく說きし所なりと云ふ如きの傳說を其儘に信ずるを得ば佛敎の歷史的硏究に何の困難かあらん又何の心痛すべき所かあらん然れども此の如き莫大の假定を置く是れ既に史學的精神に反するの甚しきもののならずや若し此の如き假定を其儘に保存しながら尙ほ歷史的硏究の精神を滿足せしめたりと云ふを得ば基督敎の經典とする四福音書の如きは實に盤石の安きに置かれん其書の出處時代の如きは遙に佛典に勝りて慥むることを得ればなり然れども尙四福音書すら眞實基督の親しく說きし所行ひし所を記錄して毫も誤謬なきか否かに就いてはまさに嚴密なる討究を要すべし若し歐洲の學者が斯舊約書に與へたる如き嚴密なる史學的批評を彼の汗牛充棟の佛典に與へたらば其結果は如何天台に云ふ五時判釋の如き都合よき臆說の其儘に維持し得られざるは勿論なり若し鹿苑方等より般若法華に至るまで皆悉く佛說法の時期なりと云ふ如き假定を維持せば何の臆說か維持し得られざらん初に華嚴頗大の敎を說き更に衆生の根機に應せむが爲に阿含の卑近なるより漸次に法華の高妙圓滿なるに至れ

其一例ならずや我胸襟を狹うして他の思想と云へば強ひて之を排斥するの頑固主義は予輩の固より取る所にあらず予輩は寧ろ佛者中或人々が其眼を近世の思想界に放つて佛敎に就いても歷史的研究の已む可らざることを看取したるは嘉みすべきことなりと考ふ然れども其傾向は遂に如何の結果を生ずるに至るべきか是れ考ふべき一問題なり若し眞正の史學的精神を以てせば歷史的研究の後へには批評的討究の隨ひ來らざる可らず批評的精神是れ亦近世の思想界の一大趨勢ならずや

若し但だ日本支那に於る宗派の起原變遷又其祖師の傳記に關する事實等の詮索をのみ是れ務むるを以て佛敎史の研究と云はゞ此の如きを以ては佛敎の討究に一生面を開かむこと固より覺束なかるべし然れども歷史的研究は此の如きの穿鑿に止まる可きにあらず予輩の最も知らむと欲する所は佛敎の其故鄕なる印度に於て經過したる發達變遷の歷史なり支那日本に渡來してよりの歷史は寧ろ知り易からん然れども佛敎の歷史的研究を爲さむとするに當り予輩の最も知るを要するは其印度に於て如何なる發達の段階を經過したりしかと云ふ事なり殊に

蓋し我國の佛者が今世紀の學問界に於て顯著なる歷史的精神に感觸したるの徵にして其佛教に關する研究も多少其面目を改むる所あるべければなり佛教に關する書典の夥しき殊更爰に云ふを待たず然れども其攷究論述の方法に於ては未だ大に不完全なる所あるを免れず論述の方法に關する規律の細しからざるにあらず然れども徒らに煩瑣に失して却て教相の眞面目を捉ふるに便利ならず就中歷史的發達てふ觀念に乏しきは從來の研究に於ける大缺點と云はざる可らず近時の傾向は惟ふに此缺點を補はんとする者なるべし歷史的發達てふ觀念は今世紀の歐米の思想界を動かしたる一大動力也此動力が我國の佛者に與へたる若しは與へむとする刺激は遂に如何なる結果を生ずべきか今日に於ては誠に微少なる傾向も其進み行くに從うては或は思ひ設けざる現象を生ずるに至らん歷史的研究に根據せる彼の高等批評なる者はバイブルに關し基督教に關する思想に巨大なる變動を與へたりバイブル無謬說等のこれが爲に如何なる影響を蒙りしかは爰に喋々するを須ひざるべし我國の佛者が西洋の思想に對して獨立を稱へながら已に業に西洋にカブレたる所少しとせず其近時歷史的研究を唱ふる是れ亦

譬へば歌は素と謠ふために作りしものならんも後に至りては謠はざる歌の生じたるが如し尙ほ詳細に云へば此分離發達は謠ふと云ふことの上にもあるなり素と謠ふと云ふは多少の譜節はなしたらんも今日云ふが如き巧緻複雜のものにはあらざりしならん寧ろ今云ふよむとうたふとの中間に位するが如きものなりしならん而して一方には謠ふことの益〻巧緻複雜になると共に他方には謠はざる詩歌を生じたり此の如く素と劇詩を演ずと云ふも其仕打は甚しく單簡なるものなりしならんが漸次一方には其仕打の益〻巧妙を極むるに從ひ他方には唯だ机上に熟讀玩味する劇詩を生ずるの傾あるなり。

（明治廿七年四月發行、六合雜誌第一六〇號）

佛教の歷史的研究

近時佛教に關しても歷史的研究の必要を唱ふるの聲漸く盛ならむとす此頃佛教史研究を專務とする「佛教史林」なる雜誌の發刊されしを以ても知るべし予輩は歷史的研究の佛教に關しても將に興らむとするを見て之を賀せずんばあらず是れ

劇場に於ては最も進歩せる美術的要求を滿足せしむるに足る脚本の演せられて當世の好尙の前に立ちて之を指導せむことを熱望す

高尙なる脚本を演ずるはおのづから一二の劇場に止まるべきのみならず舞臺に上ぼすには適せざるたぐひの者もあらん而して此等も敢て劇詩として其價値を失はず舞臺に上ぼすに適せざる脚本と云へば恰も食ふに適せざる食物と云ふがごとくにして自家撞着のものたるに似たれど決して然らず脚本の躰裁を假るの便ありて而して舞臺に上ぼすの必要に束縛せられざる所ある是れを机上の劇詩の特色とす小說若しは敍事詩若しは抒情詩の躰裁を用ひずして劇詩の結構を假るの適切なるものあり而して又劇詩の結構に據りながら舞臺に上ぼすことを以て其目的となさゞる者は一種の自由を有する所あり机上の劇詩は俳優の技倆を假るよりも寧ろ只だ讀者の想像理會冥想に訴へて其の妙趣の感得し得らるゝ者なり此を一種の劇詩と見るに毫も無理なる所はあらずと考ふ素と劇詩は演せらるゝ爲めに作られし者ならん然れども其發達の向ふ所二分して一は演ずることを目的とする者一は机上に置いて熟讀することを目的とする者となるの傾あり

するなればなり彼等をして強ひて高等なる劇を娯ましめんとするは小兒をして鬼が島の物語を措いて高尙なる小說を玩味せしめんとするが如くなるべし然れども一般の觀客と雖も少しく人情世態の何たるを思考する者は流石に夢幻の荒唐無稽なるのみを以ては滿足せざるべしこゝに古淨瑠璃に於ては他に彼等を樂ましむる要素あり卽ち其局部に於て往々妙に人情の絃に觸るゝ所ある是れなり全躰の一致性格の發展等は彼等の注意せざる所但だ一場一齣は妙に人情を捉ふる所あれば足れり彼等は但だ徹頭徹尾寫實を事とする演劇を見ては芝居らしくなしとて滿足せず芝居らしからんには場面の夢幻的變化を要すされば迚唯だ夢幻の荒誕誇張のみを以ても滿足せず局部々々には寫實的に人情の骨髓に入るを要す此れに於ては思はず袂を濕し彼れに於ては場面の夢幻的變化に驚愕す此兩要素の相合して妙に一種の面白味を生じ一種の滿足を與ふる是れ古淨瑠璃に基ける夢幻劇の世人に悅ばるゝ原由ならん夢幻劇も全く排除すべき者にあらず然れども滿都の劇場を擧げて夢幻劇の横領する所たらしめんとするは予輩の慨歎して措く能はざる所なり予輩は演劇に於ても分業の行れんことを望む一二の

淋しく見ゆることあるは免る可らざる所なればなり徒らに時流に媚びず時好に投せずして眞に美術としての演劇又文學の一種としての劇詩の發達を圖らんには或は一二の劇場に特別の保護を與ふべき必要もあらん兎に角滿都の劇場をして悉く進歩せる脚本を採用せしむることは到底望み得べきことにあらず夢幻劇のたぐひも亦全くは擲棄すべきにあらず或段等の觀客には此の如きの劇が最も適合せる者なり惟ふに古淨瑠璃の世人に悦ばるゝ所以は一は目先の變化窮りなく場面の轉變偏に意表に出づるが故ならん又一は劇の局部に於て間々人情の微妙を穿つ處あるが故ならん夢幻の變化の忽然として來つて端睨すべからざる亦一種の興味を與へずんばあらず惡漢と思ひし者の實は忠臣なる貞女と思ひし者の實は毒婦なる如き凡そ觀る者の意表に出でゝ其驚愕の情に訴ふるものは一種の快感を喚起し來る小兒が怪談を喜ぶも同じ理に基く小學生徒に取りては寫實の極致に達せる小説よりも亞刺毘亞物語の方興味あらん大向連は云ふも更なり世に見巧者と稱する者の中尙ほ此の如き段階にある輩も少からざらん世に此種類の觀客の絶えざる限りは夢幻劇も亦た其跡を斷たざるべし此れ寧ろ彼等に適

脚本たらんとするにあり演劇界の急進家は寧ろ其著作の當世に行れんことを斷念せざる可らず若し當今の劇場に當今の俳優をして演せしむるを得て而かも舊來の弊を脱し其長處を包含する進歩的脚本を綴るを得ば誠に幸なりと雖も若し之を望み難しとせば机上の脚本をだにも作ることを力めざる可らず當時の好尚に數歩を進めたる著作の動もすれば机上の脚本たるの運命に遭遇するは已むを得ざることなり予輩の見る所にては劇詩は必ずしも舞臺に上ぼすに限るべき者にもあらず唯だ机上の劇詩と見るべき者ありと考ふ而して此の机上の劇詩が當世の好尚を高むる一原動力たる也予輩は進歩的作劇家に向つて勸めん強ひて其作の目前に行れんことを以て目的となす勿れ進歩せる好尚を滿足せしむるに足る机上の劇詩をだにも作り得ば其功績は決して埋沒す可らざらん我國の劇詩の進歩に一大刺激を與ふるを得ば其名譽は永く我國の文學史上に傳へられん縱令ひ進歩せる脚本を現今の舞臺に上ぼせ現今の俳優をして之を演せしむることとするも其の如き劇場はおのづから一二に限られざる可らず他は皆滔々として時流を追はん蓋し最も進歩せる好尚を滿足せしむる戲曲が却て時俗の眼には

所謂夢幻劇を論破し或種類の劇評家と自稱する者を罵倒するところ頗る予輩の注意を引くに足る予輩は坪内氏と共に巣林子の時代物の如きより更に一歩を進めて眞に美術眼を滿足せしむるに足る劇の行れんことを熱望して已まず近來往々舞臺に上ぼさるゝ寫實と夢幻とのあひの兒の如き脚本の拙劣なることは何處までも論明して今の自稱劇評家を警醒せんことを望む然れども演劇改良に於ける當今の要務は古淨瑠璃的脚本若しはあひの兒的脚本に代ふるに進歩したる劇詩を以てするにあり一方には劇界の迷執を破すると共に又一方には其の如き迷執を脱したる脚本の實例を示さゞる可らず然るに此事の一難業なるが故に偶ま進歩的作劇家を以て任ぜむとする者あるも躊躇して容易に手を下し得ざるならん假令ひ現行の脚本とは大に其面目を異にしたる新脚本を綴り得たりとするも其の當世に廣く行れんことを望むは難かるべし從來の慣習と觀客の好尙とは必ずや其流行に巨大なる障礙を與へん而して新脚本と舊脚本とが其面目を異にする程今云ふ障礙も大ならん故に當世に行れむことを求めば已むを得ず從來の規則に餘り遠ざからざる脚本を綴らざる可からず然れども其弊や實にあひの兒的

理學に懸れり
生理的心理學を始として凡べて心理の研究は當今斯の如く盛なるが斯學全躰の價値に就いては學者間異論なき能はず一科學として之を研究せむと力むる傾向はあれど眞實如何程科學として研究し得らるゝ者なるかは未決の論題と云はざる可らず一方には心理學を以て哲學全躰の根抵となさむとする者あれば又一方には故チヨウエツトの如く心理學その者の價値を甚だ疑ふ學者なきにあらず又チヨウエツト程には云はざるも有名なる心理學者ゼームス氏の如きすら心理學は唯だ零碎の知識を雜駁に寄せ集めたるの狀態にありと告白せり然れども兎に角心理學研究の傾向は當今の思想界を知らんと欲する者の注意を怠る可らざる所なるは論なきことなり

(明治廿七年四月發行、六合雜誌第一六〇號)

劇詩論

早稻田文學近來頻りに演劇論を載す殊に坪內雄藏氏の壯快なる筆を振つてその

行し來りたり又其外「アルゲマイネ、ツァイトシュリフト、フュール、プシヒアトリイ」等精神病論を專攷する雜誌ありて此等も心理學者の注意を引くべき者なり又英語には「ゼ、ブレーン」と題する雜誌ありて腦の生理を研究し併せて心理的現象に論じ及ぶ佛國には異狀的心理學上の著述を以て有名なるリボー氏の編輯する「ルヴュー、フィロゾフィック」(哲學雜誌)あり心理學專攷の雜誌と云ふにはあらねど佛國心理學者の研究は概ね之によりて窺ふを得べし以太利に於ても近來心理學の研究頗る盛にして殊に犯罪的心理の穿鑿に力を用ふること人のよく知れる所なり其心理學研究の狀勢は「リヴィスタ、イタリアーナ、ディ、フィロゾフィア」等の雜誌によりて知るを得ん

斯く歐米に於ける心理學の研究は甚だ隆盛なるが就中生理的心理學に注意する者の多きは否む可らざる事實なり發刊さるゝ雜誌の大部分の此れが研究に關する者たるを見ても知るべし昨年米國シカゴに開きたる萬國博覽會に於ても其塲内の一部は特に試驗的心理學に用ふる器械類の占むる所となれり先年巴里府に歐米心理學者の大會を開きたる時にも其討究の問題は主として試驗的生理的心

氏を聘すればエール大學にてもラッド氏大に心理學の攷究に注意を傾けてよりスクリプチュアー氏入りて專ら心理の試驗的研究を擔當す昨年十月エール大學心理試驗室の紀要を公にせりスクリプチュアー氏の編纂する所にして初號は主として反應時間に關する試驗の結果を載す英語にて第一等の哲學雜誌とも見るべきマインドも心理學上の好論文を掲ぐることを怠らず英國並米國に於ける心理學研究の狀勢は此雜誌に就いて窺ふを得べし別に英國には「ソサイテー、フォアー、サイキカル、リサルチ」(心理研究會)ありて臨時其紀要を公にし來れり獨逸には「フィロゾーフィシエ、スツーデエン」ありてヴント氏の指揮する生理的心理學研究の結果を公にすると人のよく知れる所なり又外に「ツァイトシュリフト、フュール、プシコロギー、ウンド、フィヂオロギー、デル、ジンネスオルガーネ」(心理並感官器生理雜誌)と題する雜誌ありて專ら生理と心理とを相併べて研究すエッビングハウス氏並ケーニヒ氏の編輯する所にしてエクスネル、ヘルムホルツ、ヘーリング、スツンフ、リッブス氏等知名の學者之に助力すラツァルス氏並シュタインタール氏は其所謂フェルケルプシコロギー(民族心理學)を唱道して特にこれが研究の爲に雜誌を發

に澤柳氏並三宅氏の云はるゝ所によりて考ふるには予は此點に於ては井上博士と爭はざるを得ず。井上博士を難せざるを得ず。予は澤柳氏並に三宅氏に同意を表する者なり。

（明治廿六年七月發行、教育時論第二九六號）

心理學研究

今年新に米國プリンストンのボールドウィン氏並コロンビアのカッテル氏の編輯にかゝる「サイコロヂカル、リヴューー」と題する心理學雜誌發行せらるピチー、スッンフ、ゼームス、ミュンステルベルグ、ラッド、デウヰー諸氏之を補助すと云ふ發兌書肆はマックミラン會社なり心理學研究上一の好雜誌を加へたるものと謂ひつべし近來歐米に於ける心理學研究はます〳〵隆盛に向ふものの如し米國にては數年前より發行するスタンレイ、ホール氏の編輯に懸る「アメリカン、ジョルナル、オヴ、サイコロヂー」ありて專ら試驗的生理的心理學の攷究に從事すハーヴァード大學にはゼームス氏のあるが上に近時心理學者として有名なるミュンステルベルグ

辯じ置けり。後に三宅雄次郎氏が哲學雜誌第七十五號に文學博士井上哲次郎氏の勅語衍義を駁せらるゝを見るに、井上博士が勅語に就いて其「何故」を解し得て古人に一歩を進めたりと公言せらるゝを、痛く非難せられたり。勅語の「何故」を論ずるは、「三宅氏の云はるゝ如く容易ならぬことなり。天子に代りて倫理を講ずる者なり。寧ろ我倫理說として世に出すの穩當なるに如かず。故に予は私見一束の中に云へり「假令ひ全く注釋を附するの必要は無しと云ふにはあらざるも、可成手近き解釋に止めて、倫理說上根本の所に迄は論じ及ぼさゞるが、却て勅語の趣旨にかなふ者ならんと考ふ、要は專ら實例に照して以て實行を勵ましむるにあり」と。其後又本誌第二百九十二號を讀むに澤柳政太郎氏も大日本敎育會に於て此點に就いて井上博士を難せられたるを見る。本誌の報道に曰く「勅語の德行に就き何故に某の行爲(例へば忠孝の如し)が德行と稱すべきや其理由を說くは却て勅語の旨に戾る者なり、然るに井上文學博士の勅語衍義は、是を以て得意とするは誤謬なりとて、井上博士を駁したり」と。予は井上博士の勅語衍義を讀まず、故に予が嚮に私見一束を草したる時には、殊更に井上博士を駁せんと欲したるにはあらず。然る

*本書第五八頁

來の宗教は耶佛兩教の和合より來らざる可らずと論ずるは意味なきことにはあらずと考ふ。有効なる一宗教的勢力たらんには佛教は、佛教たらざる可らず。耶蘇教は耶蘇教たらざる可らずと云ふべき所以を發見せず。予は一見微弱なる如き、而して耶蘇教家よりも佛教家よりも熱き同情を表せられざる、宗教的現象を輕視す可らずと考ふ。兎に角我國の將來をして全然一宗教の支配下に立たしめんとは、到底望むべくして行はる可らざる所なるが如し。一宗教を奉ずる者は其宗教の下に全國民を住まはしめんと力むべきは勿論なれども、實際は佛教耶蘇教又其兩者の衝突若しくは和合より生ずる新宗教的現象等の相研磨して始めて各自健全なるを得べきにあらずや。相磨するが故に、到底宗教界は四海波靜かなりと謠ふを得ざるべし。然れども豈に强ひて波靜かなるを願はんや。佛教なる一宗教に我國の將來を托せんとするばかりの愚策はあらずと考ふ。

(十) 予は序でに今少しく云ふべきことあり。近來教育勅語を説明して、其道德主義は斯く／＼なり、其倫理的根據は云々なりと、サモ誇り顔に唱ふる者あるを聞く。予は其如き論旨の非なることを*本誌第二百八十四號に掲げたる私見一束の中に

*即ち前掲の論文

思はず。其敎をさへ布かば萬事終れりとは考ふる能はず。其敎とても要するに人心を維持涵養する一勢力たるに過ぎず。然れども予の見る所にては今日我國は此勢力を宜しきに用ひざる可らざるの位地に立てり。佛敎をしてそれ自身の成行に放任せば、以て我國の精神的發達を完うし得べきか。予は如何にしても其如くには考ふる能はず、僧侶輩は、若し彼等の宗敎に拮抗する大宗敎なくば、復た前日の放逸と無氣力と腐敗とに陷るべし。彼等は耶蘇敎の浸入に遭うて、漸く其惰眠を醒し、今日少しく自家の腐敗を洗除するの必要を感じたりしにあらずや。且又今にして假令ひ耶蘇敎を我國に於て撲滅せむと努むるも、豈に爲し得べきことならんや。事實はその如き愚策の行ふべからざるを證せん。寧ろ耶蘇敎を容れて、之を同化するの勝れるに如かず。之を同化し得ざる程の胃弱の國民は、縱令ひ耶蘇敎及其他のものの浸入するなくも、其將來は甚だ多望なりと云ふ可らず。斯くの如き胃弱的収縮策を取るは、是れわざと自らを弱うする者にあらずや。是れ決して進歩の氣運に向へる我國今日の良策にあらざるなり。予は耶蘇敎と佛敎との混合より生ずる宗敎的現象にも頗る注意を置く者なり。予はハルトマンが將

入せむとするに於ても亦斯くの如くならざる可らず。耶蘇教は日本化すると共に日本を化せざる可らず。然らずんば之を注入するも何の益かあらん。然れごも耶蘇教は何程に日本化すべく又何程に日本を化すべき者なるかに就いては、異論なくんばあらず。是れ保守的傾向と進取的傾向の相分るゝ所たり。此點に就いては耶蘇教家の中にもまた保守と進取との區別を生ずべし。然れども兎に角く耶蘇教は日本を化せんとすると共に(全然我從來の文物を破壞して國家の存在に危險なる急劇の變動を來さんと欲するにあらずして)亦日本化すべきものなりと說く以上は、その保守たり進取たるに拘らず、我今日の國家は之を安らかに其自躰内に宿すべき者なることは明かならん。予が此文に於て論明せんと欲する所は此點にあり。此點を論明し得ば、予が目的は達せりと云ひつべし。

予は但だ茲に一言せん。右の如き立脚地を取りて耶蘇教を我國に注入せば、是れ益ありて害なきことを信ずるなり。耶蘇教は我民心に附與すべき新元氣新精神を有すと考ふる也。是れ予が全然耶蘇教を嫌ふ者と意見を異にする所なり、予は耶蘇教家が動もすれば吹聽するが如くに、其教を以て萬金丹的効能のある者とは

*本書第四二頁以下に掲げたる論文を見よ

に變動を來すと共に、また遂に我國家のものと化す可らざるの理由何處にある耶蘇敎は全然我國家と相容る可からざる者也と斷ずるは、要するに耶蘇敎に對して宗旨敵（かたき）の位地に立つ輩の論のみ。予は二三年前、我國の耶蘇敎會内に於ける傾向を論じて、現に我國の耶蘇敎を日本的耶蘇敎たらしめんと力むる者あるに同情を表したり*（六合雜誌第百十九號を見よ）。我國の從來の經歷に毫も頓着する所なくして新觀念を注入せんとしたればとて、容易に爲し得べきことにあらず、又爲し得しとて眞に我國を益するの途にあらず。新智識を與へんには、之を舊智識に聯絡せしめざる可らざることは、敎育學上動かす可らざる眞理なり。今迄の經歷を地盤とせずして新觀念を植ゑ附けんとするは、是れ吾人の心性の理法を知らざるの致す所たり。然れども亦新觀念を注入して從來の觀念に毫も變動の起らざらんことを望むは、愚昧の論たるを免れず。新觀念は舊觀念に受け容れらるゝと共に、その受け容るゝ舊觀念に變動を起す。受け容れらるゝ觀念は受け容るゝ觀念に化せらるゝ所あると共に、又た受け容るゝ觀念を化する所あり。是れ能受觀念の團躰と所受觀念の團躰との關係なり、耶蘇敎に於ける新思想新精神を我國の人心に注

欲するかは知らざれども予は云ふべき所以を發見せざるなり。夫れ進取主義なる者が一時代に於ける一國家に對して矛盾するの位地に立つことなきにあらず。然れども今日の我國家は宜しく保守と進取との兩主義を其自躰内に包含許容する者たらざる可らず。是れ我國家をして最も健全なる最も富贍なる生活を遂げしむるの途たればなり。國家なる者は如何なる塲合に於ても進歩的傾向と衝突すべき者なりと云ふべき所以はあらざるなり。而して耶蘇敎理なる者が我國家の今日の成立と相衝突する者にあらざることは、予の嚮に論じたるが如し。然らば耶蘇敎が今日に於て進取的傾向と相結び來れりとて、此を以て直に我國家又我敎育に衝突すとは云ふ可らず。但だ我國家又我敎育を保守主義の上より見んとする人々の傾向と相衝突すと云ふべきなり。

若し耶蘇敎が我國の古來の風習を打破せば、是れ即ち我國家的敎育の主義と衝突する者にあらずやと云ふ論者もあらん。然れども我國の古來の風習とし云へば一も二もなく之を打破することを以て耶蘇敎理の耶蘇敎理たる所なりと云ふが如きは、固より妄論の甚しきものなり。耶蘇敎なる者が新觀念を注入して我人心

か世に保守と進取との衝突の遂に其跡を絶つことなき所以を知る。

（九）現今我國に耶蘇教の入り來りて種々の事柄に衝突し居るは、詮ずれば、進取と保守との衝突に非ずや。耶蘇教に説く所の新觀念を我人心に注入せむとするは、是れ進んで新しきを取る者、即ち進取の傾向にあらずや。耶蘇教は我國古來の風習を破壞する者なりとて之が浸入を拒まんとするは、是れ（此點に於ては）保守にあらずして何ぞや、故に予は云ふ、今日の所謂衝突は宗教上の事柄（又それより曳き來る他の凡べての事柄）に於ける進取と保守との衝突なりと。耶蘇教が我國家に對する若しくは我國家の教育に對する衝突と云ふよりも、寧ろ我國家内の一傾向（即ち教育等に於ける保守主義）に對する衝突と云ふを當れりとす。今日に於ては耶蘇教は進取主義の旗幟を飜せり、然れども今佛教家が耶蘇教家に對して保守主義を取る如くに、耶蘇教家も亦他日我國に於て新觀念の注入に反對する保守傾向を取ることなしと云ふを保證し得んや。（佛教が初めて我國に入り來りし時に於ては佛教家は進取主義の代表者たりしと云はるべし）。耶蘇教なる者は何の時代に於ても進取主義を取る者なりとまでは（今日我國の耶蘇教家は多くは斯く云はんと

の性能なくては進取と曰ふことそれ自身が出來可らざるものとなればなり。保守なき進取は恰も記憶なくして物を知らんとするが如くなるべし。然れども適當なる程と云ふことの實際何の處にあるかゝ實地問題の懸れる點なり。進取主義を取る者は進取に重きを置くを以て時務に適切なる者となす。保守の傾向を取る者も全然進歩を拒否するを得ざるべし、但だ保守に重きを置くを以て當世の務となすなり。然るに當世に最も適切なる方策は其實二途あるにあらず、但だその完全なる方策を一人にして完全に看取することの難きが故に、相異る人々が相異る方面を見て相摩し相補はざる可らず。眞理は唯一なり、然れども吾人の限り有る心には散裂して映じ來る。散裂するが故に、衝突なきを得ず。吾人の識見は到底完全を期す可らず、然れども一社會の一員として生れたる以上は(又特に其社會の中層若しは上層に位する以上は)何の邊にか我見處を定めて以て當時に盡す所なかるべからず。斯くせざれば社會の活動は停止すべければなり。而して何の邊かに我見處を定めば、他人の見處と衝突する事のあるは素より覺悟の上ならざる可らず。八方美人たらんとするは、遂に八方醜婦たるに終らずや。是に於て

（八）前段陳ぶるが如き衝突は、詮ずれば、何と何との衝突なるか。是れ人の常に口にする所の保守と進取との衝突にあらずして何ぞや、惰性と動性との撞着にあらずして何ぞや。而して一國家一社會の眞個の福利（其の存在の目的）は保守と進取、惰性と動性との宜しき釣合を保つによりて得らるべきなり。一社會が一狀態を取りし以上は、其の狀態に靜止するの惰性なかる可らず。然れども活物なる吾人の組織する社會は又永久に一狀態に靜止すべき者にあらず、變化せざる可らず、生長せざる可らず。何の點に於て何程に變化するが正當なるかは時によりて異るべし。但だ靜止と變化との傾向の互に時に取りての宜しき釣合を保つを要するとは何人も爭はざる所ならん。斯くの如くに言ひ表はしたる眞理は偏頗なき眞理ならん。然れどもこは抽象の眞理に過ぎず、此眞理に實地問題の衣を着けしめんとする時には人によりて其見る所を異にす。蓋し如何なる釣合が當時に取りて最も宜しきかと云ふことに問題の解答の懸ればなり。而して此點に於ては人によりて其意見を異にすべし。進取主義を取る者と雖も、適當なる程は保守の傾向をも許容すべしと云はざる可らず。蓋し一狀態に達せば、その狀態を維持する

此大患を除かんには、彼等は當時の國家に衝突せざる可らず、故に彼等は國家の爲に亡ぼされざる可らず、國家は國家の爲に彼等を亡さゞる可らず、彼等は其時代に於ける社會の不平家なり、當時より見て治安を妨害すと謂はるゝ如き者なり、又た實に當時に取りては治安を妨害する者たるなり。故に彼等は囹獄に繋がれざる可らず、遂には水火を踏んで死せざる可らず。當時の國家は彼等を窘迫するの義務あり、彼等は當時の國家に窘迫せらるゝの義務を有す。窘迫するも、窘迫せらるるも、共に均しく人間社會の進歩の上に於ける約束也。是れ人生の最大悲劇ならずや。彼等は當時の社會に在りては最も忌むべきの汚名を擔うて地下に入る。彼等死後の社會は彼等を尊崇して、或は先覺者と名け或は偉人と名け或は志士と名く。己が祖先の殺したる先覺者の爲に國民は青空に聳ゆる頌德碑を樹つるにあらずや。人間の社會は斯の如き者なるが故に志士をして苦心多からしむる也。何故に吾人の社會の進歩は斯くの如き高價を以て買はるべき者なるかは、哲學者の頭腦を勞すべき大問題ならん。然れども其何故に然るかに拘らず、其事たるや人生の大事實なり。

すべき(故に其國家に對しては毫も撞着せざる)幾多の傾向の相衝突することのあるのみならず、また時には其國家全躰の一時代に於けるの狀態と或傾向とが相衝突することなきにあらず、而して其如き傾向をも一概に有害なりとて排斥すべきにあらず。其當時の國家は實に之を排斥するに相違なし、之に負はしむるに亡國不忠等樣々の惡名を以てすべし。然れども其國家の永久の利福と進步との上より見れば、一旦は其傾向の之と(即ち其一時代に於けるの國家と)相衝突する事あるを要す。其時代の國家の狀態と相衝突する者なるが故に、其如き傾向を代表する人々は其國家の爲に排斥せられざる可らず。彼等は此が爲に其生命を棄つるに至るべし。國家は國家としては彼等を亡ぼさゞる可らず。其國家を刺激して當時の狀態を脫せしめんが爲には、彼等は其國家の爲に亡ぼされざる可らず。彼等の云ふことを一時に、急激に、直ちに聽かば、變動の過大なる、遂に其國家の存立を危うすることあるべし。故に彼等は當時の國家に對しては矛盾する位地に立てる者と云はざる可らず。然れども彼等の憤激猛進するなくんば、國家は長く其舊陋なる狀態に遲々として、一時の安寧を買はんが爲に遂に千歲の大患を釀すに至るべし。

但だ其國家の包含許容すべき他の傾向と相衝突すとの意に外ならず。而して其如き反對の傾向と共に耶蘇教も均しく我國家に包含許容さるべき者たるなり。元良博士の意は正に斯の如くならんと信ず。甲乙二個の傾向は相衝突するも、共に均しく國家の中に包含さるべき者ならば、衝突は其傾向の一方と國家との間に存するに非ずして、但だ甲と乙との間に存するなり。國家は宜しく雙方の傾向を包含して、其相互の衝突研磨によりて、みづから益し、みづから進む如き富贍なる活動を有する者ならざる可らず。斯かる活動を有せずして、但だ一方の傾向にのみ自らを合躰せしむるによりて始めて己が命脈を保ち得る如き單調子なる殺風景なる貧相なる國家ならば、其將來は決して多望なりと云ふ能はず。我國家をしてその如き者たらしめんとするは、是れ決して其隆盛を圖るの道にあらざる也。一社會の包含する反對の傾向の相衝突する時には、其衝突の犠牲となる者なきを得ず。其如き犠牲の流す所の血によりて、其社會なる活物は培養せらるゝに非ずや。ソクラテスも犠牲となれり、耶蘇も犠牲となれり。人類の歷史は實にその如き悲劇を演じ來りたる又將來にも演ずべき者に非ずや。啻に一國家の安く包含

はん。衝突は或意味にては厭はしき者なれども、又た厭ふ可らざる者たる所以を知るべし。

元良博士は曰く、人の精神は論理器械に非ず、所謂活物にして論理的矛盾に超越したる者なり、論理的矛盾恐るゝに足らず、兩者を善く調和せしむるは裁智の作用による者にして、苟も裁智を有する人焉ぞ其調和に汲々として成し能はざる所に論理的調和を求むるを須ゐんやと。察するに、元良博士の意は一社會一國家に於て幾多の反對の傾向の衝突することは免れず、否な、其如き衝突は決して恐るゝに足らず、國家なる者は宜しく其如き衝突を包含許容して但だ國民精神の裁智的作用を以て調和的活動を爲すを要すと云ふにあるが如し。予は元良博士の云ふ國民精神の裁智的作用の何たるを明にせず。然れども若し博士の主張さるゝ所は、我國に於て幾多の(例へば耶蘇教的傾向と他の傾向との)衝突の起るに際し、猥りに其一方をのみ排斥せずして宜しく反對の傾向をも相融會せしめたる富贍なる一致を圖るべしとの意ならば、予は博士に同意を表するに躊躇せざるべし。若し右の如き意ならば、是れ耶蘇教なる者が我國家の成立(なりたち)に矛盾すとの論にはあらずして、

願ふも豈事實上望み得べきことならんや。否な、反對の傾向の相摩して始めて社會は進歩するにあらずや、吾人は事物の調和せんことを願ひ其不調和なるを嫌ふ、故に衝突の存する限りは之を除いて以て衝突の存せざりし以前に勝れる所の深大なる一致を求めんとす、貧相なる一致に代ふるに富膽なる一致を以てせんとす、即ち多くの反對の傾向の妙に相融會せられたる所の一致を渴望す。然れども有りとあらゆる傾向の全く相融會したる窮極の一致は、吾人の現實に達し得べき所に非ず。吾人の現實の生活は一狀態より他の狀態へ昇りゆく不休の活動に外ならず。スペンサー氏も云へる如く、吾人の知識の範圍の廣がるに從ひ其周邊の觸るゝ所の未知の區域も廣がるべし。傖父野人は知ることも少き代りに、知らずと思ふことも少かるべし。反對の傾向を融會せしむるは更に深大なる反對の傾向を發見するの段階となる。高等なる調和(殊に其調和の眞味)は衝突を通過して始めて得らるゝ者なるが如し。衝突は調和を生み、調和は更に衝突を孕む。ヘーゲルをして言はしめば、矛盾が是れ理性の進歩の動力なりと云はん、理性の妙義は矛盾によりて動かされつゝ演じ出ださるゝ所の全法界の進化の道行に現はると云

會を通じて同一の宗教の行はれて一人として異りたる信仰を懷く者なき場合には、元良博士の論せらるゝ所は必ずしも當れりと云ふ可らず。中世紀に於て羅馬教會の歐洲に隆盛を極めし頃は、實に「一信仰一國家」と唱へしなり。予はその如き狀態の永く續くべきものなるか、又文明の進歩と共に信教の一致はますます難くなりゆくべき者なるか否かに就いては茲に論ぜず、只だ如何なる場合に於ても如何なる社會に於ても、宗教と教育との必ず衝突すべしとは元良博士の云はるゝ理由を以ては論じ得ずと考ふ。然らば則ち衝突と云ふべきことは一切無き者なるか。豈に衝突のなからざらん。現に耶蘇教なる一宗教の我國に入り來りて種々の事柄に衝突し居るを見よ。豈に衝突のなからざらん。然れども其眞相を洗つて見ば、實は何と何との衝突なるか。

(明治廿六年六月發行、教育時論第二九六號)

(其二)

(七) 吾人の如く圓滿ならざる者の組織せる社會に於ては衝突の害無ならんことを

ず。父子君臣親戚他人を見ること毫も差別ある可らずと云ふ程に判然たる觀念にはあらず。唯だその云ふ愛は(予の見る所にては)他愛的性情を擴ぐるの傾向を代表せる者に外ならず。故に此傾向に反する者とは相反すること勿論なり。若し他愛的性情を擴ぐるに反對せば、一視同仁の佛の慈悲心を何とか云はん。

(六) 今少しく他の論點より見ば、耶蘇敎の精神と日本敎育の精神との相衝突する所はなきか。元良博士は曰く「敎育と宗敎は其精神に於て相反する者なり。宗敎は各個人の自由に放任して心情の發達と共に漸々尨雜に進むべき也。修身敎育は尨雜中に統一を求むるを以て其主眼とす。換言すれば宗敎は個人的のもの敎育は社會的の者なり。故に宗敎と敎育との衝突は個人と社會との衝突なり」と。若し元良博士の云はるゝ理由を以て宗敎と敎育とは衝突する者なりと云はゞ、是れ亦獨り耶蘇敎にのみ限れることにあらず、凡べて宗敎と名けらるべき者は皆敎育と衝突すべきなり。否な、宗敎のみならず哲學も衝突すべし、詩歌も衝突すべし、何となれば哲學も詩歌も皆各個人の自由に放任すべき者なればなり、一社會を通じて同一の哲學を取れ同一の詩歌を嗜めとは命ず可らざればなり。且又若し一社

以來の歷史に通曉せる者の皆知れる所ならん」。

予が井上博士の論を見たる限りに於ては、バイブル中の文句を其前後の正當の關係より、其眞實の精神より引き離して、此れが忠孝に反す此れが勅語に反すと論せられたる所あるを見る。予は博士の爲に惜まずんばあらず。何となれば此の如きの論は淺薄の譏を免れざればなり。予は井上博士が「高等批評」なる者に目を閉ぢてバイブルの文句を論せられたるを深く惜む。予は「國民之友」に出でたる高橋五郎氏の駁論の調子には毫末も同情を表し得ざれども、井上博士がバイブルの文句のあちこちを引き捕へて之を論せられたる點に對する高橋氏の辯駁は有力なりと云はざる可からず。予は更に是等の點は論せざるべし。但だ若し耶蘇教には萬人皆神の前にて互に兄弟なりと說くを以て、其意は吾君父をも他國人をも如何なる點に於ても同一視するにあらざる可からずと論ずる如き者あらば、予は元良博士の語を假りて、其如き論者は共に「論ずるに足らず」と云はん。耶蘇教に云ふ愛は無差別の愛なりと云ふに就いても、予はその根據あるを見ず。バイブルの中には其云ふ愛は凡べての點に於て無差別なりとも有差別なりとも說きあるを見

其兄弟を憎む者は是れ謊者なり既に見る所の兄弟を愛せずして未だ見ざる神を
いかでか愛せんや」(約翰第一書四章廿節)。見ゆる君父を君父とせずして如何で神
に事ふと云ふべけんや。故に國民としては國家の統一を重んじて其元首を敬す
ることが、其國家にありての正事善行に缺く可からざる事と解せば、何ぞ耶蘇敎に
於て神を宇宙の至尊者と見ることが、國家の統一に反すと云ふべけんや。否な、そ
の如き正事善行をこそ宇宙の至尊者なる神は爲せよと命ずるなれ。故に予は私
見一束の中にも云へり、耶蘇敎理その者を以て直に國家の統一に反すとは云ふ可
らずと。(予は哲學上耶蘇敎に云ふ如き神が宇宙を支配すと論じ得と云ふにはあ
らず、哲學上その如き神の有無を判ずるは、おのづから別論なり)。但し西洋の風俗
慣習に深く浸染せる所の耶蘇敎をば其儘我國に移し植ゑんとせば、種々の事柄に
於て衝突を來すべきは固よりその所なり。然れどもこは獨り耶蘇敎にのみ就て
云ふべきことにあらず、凡べて西洋の文物を輸入せんとするに當りてはその如き
衝突あるべし。(耶蘇敎なるものは獨り歐米に特殊なる風俗習慣に浸染せる底の
者に限らざることは論ずるまでもなし、こは西洋ならぬユダヤに耶蘇敎の起りし

題を解釋せんとするは爲し得べきことにあらず。正事善行とは何ぞやと問はゞ、神の命ずる所なりと答ふるならん。何が神の命ずる所なるかと問はゞ、至善至正の神なる故に正事善行を命ずと答ふるならん。要するに、價値なき循環の論に陷らざる可らず。耶蘇教家が神に聞けりと云ふことも實は其道徳心に聞けるなり。是れ近來或人々が耶蘇教を評して道徳的宗教と云ふ所以なり。神てふ觀念によりて道徳上如何なる行爲の正善なるかを規定せむとするも遂に爲し得べからず。但だ既に如何かの行爲を正善なりと知り居らば、其後楯(うしろだて)として神てふ觀念が耶蘇教家の心には働き來るなり、正事善行を爲すに當りて是れ神の命ずる所なりと念ふの動力が添はり來るなり。カントの語を假りて云はゞ、道徳を神の命ずる所と見るなり。正善を爲すに當りて、神てふ觀念の後楯を有することが、孔子の道徳說に天てふ觀念の存すると均しく、實際の徳行を喚起する上に如何なる効力を有するかは茲に論ぜず。又倫理學上その如き道徳說を如何に評すべきかも茲には云はず。兎に角耶蘇教には君父以外に神てふ者ありとて、直に之を以て君父を尊敬するの心と衝突するとは云ふ可らざること明なり。「若し我は神を愛すと言ひて

をもて之を拜すべきなり」と云ふならん。而して何事が其神の命ずる正事善行なるかと問はゞ、彼等は要するに其時々々の最も進步したる道德心と彼等の思ふ所のものによりて判定するの外なかるべし。天に向つて、神よ何が正事善行なるかを敎へ給へと叫ぶも、神は天上より聲を放つて答へざるべし。其時々々の道德心を外にして神の聲を聞かんとするも、神の聲は聞えざるべし。バイブルを繙くも、神を愛せよ人を愛せよ基督に從へよと云ふ語は見るべきも、如何にせば神を愛し人を愛し基督に從ふに當るかと云ふことは各自の道德心が個々の事柄に就いて指し示す所によりて判知するの外なかるべし。バイブルの文言によりて、凡べて實際上の善事正行を判知せむとするも豈に爲し得べき事ならんや。バイブル豈にその如き重寶なる者ならんや。但だ神を愛し人を愛する精神又傾向を養ふの道具とはならん。然れども如何なることを爲すが一の場合に於て神人を愛するに當るかは、バイブルによりて知らるべき事にあらず。故に神に事へ其命を聽くと云ふも、要するに抽象の語なり。只だ神てふ觀念を以ては、實地の場合に何が正事善行なるかを判知するを得ず。耶蘇敎に云ふ神てふ觀念を以て倫理道德の問

べし。若し一哲學者の大眞理と信ずる所を非眞理とせよと命ずる如き國家の元首あらば、其哲學者は縱令斷頭臺上の露と消ゆるとも其信ずる所を枉ぐ可からざるにあらずや。是れ眞理の爲に其身を獻げたる學者の本分ならずや。少しく世人の攻擊に遇へば安からざる思を爲す如き腰弱き學者の多きをこそ歎ずべけれ、我身を賭しても己が信ずる所を主張する學者のあることは、少しも歎げかはしきことには非ず。一國家の元首の實際命ずることと一宗教の神の命ずることが衝突する場合なきにあらざるべし。國家の元首が學者を坑にしたる例しさへもあり。然れども何故に、何の爲に、我日本に於て(聖天子を戴ける此立憲國に於て)その如き衝突の起らざる可らずと唱ふるか。耶蘇教はみづから好んでその如き衝突を招く者なるか、その然るか否かは、耶蘇教の神が實際何事を命ずるかと云ふことによりて定めらるべし。

耶蘇教家に向うて、汝の神は何を命ずるか、汝の神に事ふるの道如何と問はゞ、我神は至善至正の神なる故に、凡べて善なる事凡べて正なる事を爲せと命ずと答ふるの外なかるべし。彼等は耶蘇の言を引いて「神は靈なれば拜する者も亦靈と眞と

なしと云ひて可ならん、何となれば宗教に云ふ神と國家の元首とが同一躰なるか若くは同位地にあらざる限りは、一宗教に於て本尊とする所は、自から其宗教上の事柄に於ては國家の元首の上に立つべき者なればなり)。然れども宇宙に於て最も尊むべきは神なりと云ふと、國家の元首は國家の至尊なりと云ふとは、必ずしも衝突すべきものにあらず。但し形式上若しくは假設上には衝突すと云ふを得べけん。何となれば若し國家の元首の命ずることと耶蘇の神の命ずることとが衝突すと假設せば、宇宙の神を信ずる耶蘇教徒は國家の元首の命に逆うても宇宙の神の命に從ふべければなり。彼等の剛膽なる、水火を踏むも辭せざるべし。然れども若し忠君愛國が取りも直さず宇宙の神の命ずる所なりと見ば、彼等の剛膽なる、死を冒しても國に盡し君に忠なるべし。宇宙の神を信ずることと國家の元首を敬ふこととが假設上衝突すと云ひ得べきのみならで、事實上衝突すと云ひ得べきか否かは、何事を實際宇宙の神が命ずるか、何事を實際國家の元首が命ずるかを判知せでは決す可らざる也。假設上相衝突すとは啻に耶蘇教に就いてのみ云ひ得べきことにあらず、他の宗教に就いても云はるべし、否な學術に就いても云はる

十八章)。此處を讀む者は、耶蘇の云ふ「我國は此の世の國にあらず」との意味を察知するに難からじ。世人往々云ふ、耶蘇教には君父の上に天父あり耶蘇ありと說く、故に忠孝に反す我國躰に反すと。眞實如何なる點に於て相反するか。(天父と耶蘇との關係は耶蘇教家の中にても、神學上の議論紛々麻の如し、此點に就いては茲に云ふの必要なし)。耶蘇教に云ふ神の國は如何なる地にても耶蘇教徒の見て以て全智全能至善至正と信ずる神の意の行はるゝ處に存在する者也。神が此無形の國の無形の王なりと云ひて可ならん。而して耶蘇教徒は此王を宇宙の主宰者なりとし、幽冥の中に吾人を支配する者なりとし、此より以上の者なしと思惟す。然れども斯く神を以て宇宙に於ける最も尊き者なりとするの點を捕へて、直に以て我國躰に反すと斷ずるは、恰も釋迦の「天上天下唯我獨尊」と云へる語を捕へて、我皇室をなみする者なりと云ふと等しからん。一國家が若し宗教の上に於て其國家の元首以上に尊むべき者なしと云はゞ、其の如き國家と耶蘇教とは矛盾することは勿論なり。(其如き國家には信教の自由は毫末もなしと云ひて可ならん、國家の安寧を害せざる限りと云ふ條件附きの自由なきのみならず、絕對的に信教の自由

一視して論ずる者あり。其非なること云ふまでもなし）。

神の國の民としての行爲には、君父に對し兄弟に對し朋友に對する日常の行爲は含まれざる乎。耶蘇教に所謂神の國の民としての行爲は、唯だ教會堂に集合して神を讃美し祈念を凝らしバイブルを讀み説教を爲すに止まる乎。若しその如くに考ふる者あらば、是れ耶蘇の云ふ神の國をいたく誤解したる者なり。請ふ尙ほ少しく此點に就いて論ぜしめよ。

（五）耶蘇十字架に磔せらるゝに先ち公廳に引かる。時の方伯ピラト問うて曰く、爾はユダヤ人の王なるやと（斯く問ひしは、耶蘇を憎惡せし猶太人等彼を陷れんため、彼みづから我は王なりと云ひしとて此言を捕へて訴へしによる）。耶蘇曰く我國は此世の國に非ず、若し我國此世の國ならば我僕われをユダヤ人に付さゞる爲に戰ふべし、然れど我國は此世の國ならざる也。ピラト彼に曰ひけるは、然れば爾は王なるか。耶蘇答へけるは、爾の言ふ所の如く我は王なり、我これが爲に生れ之が爲に世に降れり、そは眞理について證を爲さんため也、凡べて眞理に屬く者は我聲を聽く。ピラト彼に曰ひけるは、眞理は如何なる者ぞ。此事を言へる後また出でゝユダヤ人に曰ひけるは、我は斯人（耶蘇を指す）に罪あるを見ずと（約翰傳第

民としての行爲の中より宜しく除き去らるべきものならば、彼れに力を用ふる程が此れに力を減ずべし。故に是れ程の衝突は免れざらん。然れども宗教家として禮拜し念佛することは、國民としての行爲より除き去らるべきものなるか。淸閑を得て、時に俗塵を脫し心を幽冥の界に遊ばしむることは、忠良なる臣民として爲す可らざることなるか。若し又或人々の如くに神の國の民たることをば甚だしく厭世的に考へて、只だ〻〻未來を待ち望むの外なきものとせば、その國の民たると此世の國家の臣民たるとの衝突は決して免れざらん。然れどもこはその如くに耶蘇敎理を解するからのことなり、此解釋を指して直に耶蘇敎理なりとは云ふ可らず。耶蘇の敎ふる所は、此世の罪惡に對しては固より厭世的なりと云はるべし。然れども此世に在りて其罪惡を退治し世態人心を改造せよと敎ふる所は決して厭世的にあらず。苟しくも宗敎にして今云ふ程の(又今云ふ意味にての)厭世的分子を含まずば、宗敎としての効力いづくにある。耶蘇の弟子等に至りては、其中耶蘇の實際敎へし所よりも更に厭世に傾けりし事を說きし者あるは蔽ふ可らざる事實なり。(世に學者と自稱する者の中、耶蘇も保羅も初代の敎父等をも同

の國民たらしめんとすると、此れの國民たらしめんとするは、固より衝突するならん。然れども彼れと此れとは全く別の意義にての國なることを記憶せよ。(元良博士とても之を混同せるにはあらざるべし)。全く別の意義にての國民たらしめんとすることが、何故に相衝突するか。何故に同一人にして等しく彼れと此れとの民たるを得ざるか。恰も同一物を長しと云ふと共に輕しと云ひ得るが如きにあらずや。或は云はん、吾人の心身の力には皆際限あり、故に神の國の民たると日本帝國の民たるとは別種の事とするも、一方に力を盡すはおのづから他方に力を減ずる所以にあらずや、然れば多少の衝突は免れざらんと。然れども二者全く別義にての國民なりと云ふは何の意ぞやと尋ぬるに、一に於て戴く帝王と他に於て戴く帝王とが全く別義を有すと云ふの意味に外ならず。彼れの國民として行ふべき所と、此れの國民として行ふべき所とが、必ずしも相異ると云ふにはあらず。耶蘇の謂ふ神の國が未來にあらずして現世に於て成就さるべき者なることは、バイブルを解する者の皆知る所なり。「此世の國にあらず」とは、現世の事にあらずとの意味にはあらず。若し現世に於て耶蘇敎家が敎會堂に入りて神を拜することが、國

とするとゝ我國の敎育主義が我國民をして日本帝國の良臣民たらしめんとするとは、元良博士の云はるゝ如くに必ず衝突すべきものなるか。耶蘇敎の目的とする所は實に萬民をして其謂ふ「神の國」の民たらしめんとするにあり、此點に於ては分毫の疑なし。然れどもその謂ふ神の國の民たると日本帝國の良臣民たるとは衝突すべきとなるか。若し一國家の良臣民たらしめんとするとゝ神の民たらしめんとするとが衝突せば、是れは我國に於てのみのことにあらず、西洋に於ても等しく衝突すと云ふべきなり。而して一時の(又或部類の)慣習の上より云はゞ兎も角も、耶蘇敎理その者が何故に殊更に我國の敎育と衝突するかを元良博士は說かざるなり。蓋し博士にそれが殊更に衝突すとは思はれざるが故ならん。

然らば我國に於てのみ殊更に、衝突すと云ふ可らずば、何れの國家に於ても等し並みに國家的敎育の精神と耶蘇敎の精神とは衝突すと云ふを得べき乎。耶蘇は曰く我國は此世の國に非ずと。蓋しその謂ふ神の國の民たると、此世に於ける一國家の臣民たるとは、其意義に於て相異れるとを示せる也。若し耶蘇敎に云ふ神の國が日本帝國と云ふが如きの一帝國にして而して互に相對峙する者ならば、彼れ

士によれば、苟しくも宗教と名くべきものに於ては、宇宙を支配する有智有情の神あることを信じ而して吾人をして其神に和せしめんと力むるなり。神の民となると云ふは要するに其神に和するの謂ひにあらずや。然れば世界的宗教(ツオルドリリヂヨン)にてある以上は、何れも「皆人種の區別をなさず世界萬國の民をして等しく神の民たらしめんことを求むる」ものにあらずや。元良博士は佛教を宗教と見らるゝか否かを知らず、然れども若し之を宗教と見ば、是亦元良博士の意見にては基督教と共に日本教育の精神に矛盾すべきものなり。神の民たらしむると云ふことが、佛教に取りては言語上不都合ならば、人種の區別を爲さず世界萬國の民をして等しく佛に歸依する者たらしめんと力むるが、佛教の精神なりと云つべし。而して人種の區別を問はずして何人をも神の民たらしめんとすると、佛に歸依する者たらしめんとするとは、元良博士の論に取りては、何の差別かある。予はその差別のあるべき所以を發見せず。故に予は言へり、元良博士の所謂衝突は單に耶蘇教にのみ關することにあらずと。

予は一歩を進めて問はん、耶蘇教が我日本に於て我國民をして神の民たらしめん

に横はるとは如何なる意ぞ。其眼界が宇宙の廣きに亙るとの謂ひなるか。然らば何ぞ獨り耶蘇敎をのみその如きものと云はんや。又諸の宗敎をのみその如きものと云はんや。哲學も科學の全躰も亦均しく宇宙に横はると云ふべきなり。若し耶蘇敎を見て宇宙に横はると云ふべくば、佛敎も同じく宇宙に横はると云ふべきなり。哲學の如きは尙ほ更に宇宙に横はると云ふべきなり。物理學の如きも其着眼の點は唯だ一國家に限れる者にあらず、宇宙に存在する一切の物界に就いて攷究する者なるが故に、是れ亦宇宙に横はると云はざる可からず。故に若し宇宙に横はると云ふの理由を以て日本敎育の精神に矛盾すと云はゞ、耶蘇敎のみならず佛敎も哲學も物理學も皆矛盾すと云はざる可からず。要するに「宇宙に横はる」と云ふのみにては餘りに漠然たり。

元良博士が耶蘇敎を目して宇宙に横はると云はるゝの意は、其敎が「人種の區別をなさず世界萬國の民をして等しく神の民たらしめんことを求むる」の點を指すに外ならざる乎。若し此點より見て、日本敎育の精神と矛盾すと云はゞ、獨り耶蘇敎のみならず、元良博士が凡べて宗敎と名けらるゝ者は皆矛盾すべきなり。元良博

も輕しと云ふが如く、其立旨の根據を異にするが故に、衝突せざることは一見明瞭なり。若しくは衝突すとも衝突せずとも比較の出來ざる者なりとの意味にてはなきか。然からずんば何ぞ「既に論理に反す」とは云はんや。又右兩者の關係は斯の如くなるが故に、憲法は信教の自由を許せりと論じたるには非ざるか。予は「基督教青年」の云ふ所を明には解せず。然れども若しその云ふ所、右の如くならば、元良博士が「是れ大に矛盾する所なきか」と難ぜられたるの點は當らずと謂ひつべし。基督教青年の云ふ所は兎もあれ角もあれ、元良博士が「論ずるに足らず」と云はるゝ理由は如何。博士の理由は右兩者の衝突することはわかりきッて居ると云ふにあるが如し。然らば何が故にわかりきッて居るか。

(四) 元良博士は曰く「抑も基督教は人種の區別をなさず世界萬國の民をして等しく神の民たらしめんことを求むるなり。日本の教育は將來はいざ知らず今日に於ては日本人をして日本帝國の良臣民たらしめんことを以て目的とす。兩者豈衝突なきを得んや」と。又博士は「基督教青年」の語を假りて、耶蘇教は宇宙に横はり教育は國家の上に立つ者なるが故に、其衝突は免れずと論ぜらるゝに似たり。宇宙

り、一は國家の上に立ち、他は宇宙に横はる、其衝突の有無を論ずるは既に論理に反す、信仰の自由の憲法に赫々たるは是れが爲にあらずや」と。元良博士は敎育と宗敎との關係を說かんが爲に此「基督敎青年」の語を引き來りて曰く「是其要領を得たりと云ふべし。實に衝突の有無は論ずるに足らず。然りと雖憲法を楯として宗敎の自由を論ずる是れ大に矛盾する所なきか。蓋し憲法は國家の憲なり。宇宙に横はりたるものが國家の憲法を以て自分を保護するは余の解するに苦しむ所なり」と。宗敎と敎育との衝突の有無は論ずるに足らずとは何の意ぞ。何が故に論ずるに足らざるか。此兩者の衝突せざることは一見明瞭なるが故に、論ずるに足らずとの意か。衝突すとも衝突せずとも云ふが既に非なりとの意味にて論ずるに足らざるか。將た衝突することはわかりきッたる事なる故に論ずるに足らずとの意か、「基督敎青年」は、右兩者は其根據を異にするが故に、其衝突の有無を論ずるは既に論理に反すと云へり。而して元良氏は是れ要領を得たりとて之に同意を表せらる。然れども「基督敎青年」の云ふ所の意味は如何。宗敎と敎育とは、恰も甲なる一物を尺にて度りて乙なる一物よりも長しと云ひ、又秤にて度りて乙より

み向つて吾人は心情を傾け得ると云ふは誤りなり。又縦令ひ擬人の神ありとなすも、其神は宇宙を支配するに足る程のものにあらずとせば、是れ亦宗教にあらずと云はざるを得ず。それ程の神を想ひ浮べ得るに至て始めて宗教心ありと云ふを得べきか。予はその如くには考へざるなり。固より宇宙の大原として吾人の如くに知情意を具ふる者ありやなしやは大問題にして、此問題の解釋の如何に宗教のみならず道德の運命さへも懸ると思ふ者なきにあらず。其如き「ペルソナル、ゴッド」の有無によりて耶蘇教理の耶蘇教理としての運命は或は定まるやも知る可からず。然れども是れ決して宗教その者の運命の盡くる所にあらずと考ふ。斯の如き神を信ずるとが人類の宗教史に於ける一大現象なるには相違なし。然れども是れ唯其一現象にして其發達の全躰を蔽ふ者にはあらずと考ふ。予は茲には宗教なる者の定義を下さんと力めず(論じ様によりては唯だ名稱上の爭に陷るやも知る可らず)。但だ元良博士の云はるゝ所には容易に同意し難しとのことを表白するのみ。宗教の定義の如何は、予が後の論には左迄の關係なければ也。

(二)「基督教青年」と題する雜誌は曾て論じて曰く「教育と宗教とは其根據を異にせ

とを忘る可らず。

(二) 元良博士の着眼點は廣きが故に、凡そ宗敎と稱せらるべき者の特質よりして論起せらる。元良博士以爲らく、世に宗敎多しと雖、要するに其特質とする所は、宇宙を主宰する神ありとし而して其神を見て人類と等類にして完全なる知と情とを有する者とし此神に吾人は調和するを要すと說くの點にあり、若し其神をして人類の如く知情を有する者とせずば、或ひは形而上理學とは名くべきも、宗敎にはあらずと、是れ元良博士の宗敎の特質を論せらるゝ要旨なり。宗敎てふ者の何たるかに關しては、種々困難なる論點に觸れざるを得ず、故に茲には詳論するを得ざれども、但だ予は元良博士の論には容易に同意するを得ずと云はん。元良博士は飽く迄も宗敎に云ふ神は人類に擬したる者ならざる可らずと主張せらるゝに似たり。然らば擬人の神なしとする所には、宗敎は其跡を絕つと云はざる可らず。予は宗敎的と名けらるゝ者の多くが元良博士の爲に其名を剝奪せられん事を恐る。若し博士の言の如くば、プラトーンも遂に其哲理の根底に於て宗敎的ならず、スピノザも遂に其世界觀の本義に於て宗敎的ならざるべし。唯だ擬人の神にの

との衝突なるか。井上博士の論は題して「敎育と宗敎の衝突」と云ふ、然れども其論の一端を窺ふに(予は通讀せしとなし)凡そ宗敎の宗敎たる所が敎育の敎育たる所と衝突するの趣意にはあらずして、單に耶蘇敎が我國の敎育と衝突すとの意に外ならざるが如し。元良博士の着眼の點はこれに異りて、總じて宗敎と稱する者と敎育と稱する者との關係を論ぜらるゝにあるが如し。故に井上博士の如く單に耶蘇敎をのみ引き來りて、是れが敎育勅語の趣意に反すとは、元良博士は論ぜられざるなり。それのみならず、井上博士が耶蘇敎を以て非國家主義として論ぜられたる所は、悉く同意を表する能はずと明言せらる、然れば則ち井上博士が單に耶蘇敎を指して非國家主義とし敎育勅語の趣意に反すとせらるゝ點に對しては、元良博士は其鋭利なる論鋒を向けらるゝに相違なし。尤も元良博士も本誌に載せられたる文に於ては重もに耶蘇敎と我國の敎育との關係に就いて論ずと云はれたり。然れども其の耶蘇敎に就いて論ぜらるゝ所は、凡べて宗敎と稱すべき者に就いて均しく云はるべきことゝなるが如し。(是れ予の後に説明せむとする所なり。)元良博士の着眼の點と、井上博士の着眼の點との間には、おのづから差別のあるこ

とする所なり。

當今所謂教育と宗教との衝突は素と井上博士の論文によりて喚起せられたる(若しくは其氣焰を高められたる)ものと云ひて可ならん。此衝突論は曳いて他人の私の心事を臆測揣摩して浮説を傳へ、又論者の人物をまでも事々しく新聞に廣告して評せんとするに至れり。予は此の如き鄭重なる問題に此の如く鄭重ならざるいさかひの附着し來りたることを悲む。此いさかひに就いては予はこゝに云ふの必要なし。元良博士が此爭論の由來なりとて辯せられたる所は、果してよく双方の事實を盡したる者なるか否かと云ふことに就きても云はざるべし。但だ井上博士が學長の位地を得むが爲に云々せられたりと云ふが如きことは、予の辯解を待たずして、井上博士を知れる者の誰れ一人として信せざる所なり。(猥りに此の如き邪推を逞しうしたる者は其罪を免れずと云ふべきなり)。予は井上氏を知れるが故に、此點のみは元良氏と共に井上氏の爲に一言の辯じ置く所なきを得ず。他の點に就いては予は云ふを欲せざるなり。

(一) 當今云ふ所の衝突は宗教と國家教育との衝突なるか、將た耶蘇教と國家教育

*此論文にて本誌とあるは「教育時論」のこと也

當今の衝突論

（其一）

予は本誌*二百八十四號（即ち前掲の論文）に私見一束と題して、教育勅語等に關する問題に就きて聊か予の見る所を陳述し、爾後其稿を續がんと欲したれども、業務に妨げられて果さず。此頃少しく閑を得て筆を執らんと欲したるに際し、本誌前號に元良博士が宗教と教育との關係に就いて其意見を陳せらるゝに遇ふ。予は元良博士の如き名譽ある獨立の思想家が此問題に關して其議論を表白せらるゝを賀せずんばあらず。そは予が私見一束の中に云へる如く「何れの世か爭のなからざらん、爭を解くの道は默するにあらず、思ひ切つて爭ふにあり」と信ずればなり、而して有益なる爭は元良博士の論法の如くに嚴格沈重なるを要すと信ずればなり。斯く信ずるが故に、予も些か云ふ所あらんと欲す。而して幸ひに元良博士の議論に接するを得たるを以て、先づ博士が論點の何の處にあるかを討察し、併せて少しく予の考ふる所を陳べんと欲す。此問題に多少の益する所あらば、予の寔に幸ひ

許するも、佛敎理に比して、殊更に國家の統一を害する所ありと云ふべき理由を見ず。我國躰の今日の如くあるを見て、一に之を佛敎若しくは儒敎に歸するは、思はざるの甚しきなり。佛敎又儒敎の行はれたりし他の國は如何ぞや。且又非國家的と云ふも、殊更に國家的なる傾向を有せずと云ふとゝ、全然國家的に反すと云ふことゝを、區別せざる可らず。無しと云ふと反すと云ふとは、同一義にあらず。無き者は他の者によりて、補ふを得可し、反する者は相合せしむ可らず。耶蘇敎理を目して、特に國家的なる傾向なしと云ひ得とするも、(これは佛敎に就きても云はるべし、是は幾多の哲學に就きても云はるべし、)國家の統一に反すとは云ふ可らず。耶蘇敎家が、往々忠孝は耶蘇敎によらずば眞實實行さるべき者にあらずなどと云ふは、固より嗤ふべきことなり。然れども敎育勅語にある忠孝と相反すと云ふは、耶蘇敎理を誣ふるものなり。予の考ふる所は概ね斯の如し。

(明治廿六年三月發行、敎育時論第二八四號)

や。學術宗教の自由も、國家の安寧を害せざる限りに於て保護すべき者なりとて、何ぞと云へば直に國家の安寧をかつぎ出して、學術宗教の自由を束縛せんとするは、決して策の得たるものにあらずと考ふ。上に在つて政權を執る者は、此點に於ては、宜しく其眼界を大にせざる可らず。然らずんば、予は我國家の前途を見て多望なりと云ふ能はず。然らずんば、ショーペンハウエルの哲學などを嫌ふ輩の中には、その厭世的なるの故を以て、我國家の進歩に害ありとて、之を說くことを禁ずべしなどと唱ふる者も出で來るならん。佛教が我國の人心に益したる所ありと云ふを得ば、耶蘇教は又新分子を注入し、新活力を附加し、以て我社會の生活を富贍ならしむる所ありと考ふ。耶蘇教會なる者は、何時迄其組織を維持し得るかは、一問題ならん。予は固より、之を永遠なるべきものと云ふの根據を發見せず。耶蘇教會のみならず、今日歐米の文明なる者が、彼の古代希臘の文明の遭遇せし運命に遭遇せずと云ふ可らず。然れども耶蘇教會なる者が人文の進歩に益する所なしと云ふは非なり。恰も希臘文明を益なしと云ふの非なるが如し。(羅馬教會並希臘教會に就いては、論ずべき所あれども、爰に省く。)又假ひ耶蘇教理を非國家的と

バイブル全躰の見樣さへも、耶蘇敎家の中に頗る異論のあるを知る。バイブルを以て信仰行爲の標準となすなどと稱ふるも、到底一致の期し難きを知る。一言一句を前後の關係より、大躰の主意より引き離して論ずれば、隨分勝手次第の議論の出來べきを知る。バイブルなる者は、要するに猶太人民の宗敎的生活の記錄に外ならざるを知る。耶蘇敎と名くる者も、是れ只だ人類の歷史に於ける一宗敎的現象に過ぎざるを知る。然れども其敎理の中、殊更に我國家を危うすべき者あるを見ず。若し之れ有りと云はゞ、同じ意味にて佛敎理の中にも、之れ有りと云ふを得と考ふ。予は哲學上より見て、(固より予が見る所の哲學に外ならず)、耶蘇敎理を悉く辯護し得べしと考ふる能はず。バイブルにある所に就いて云ふも、又從來の神學說に就いて云ふも、哲學上酷しき非難を受くべき所ありと考ふ。然れども其敎理を見て、我國家を危うする者也として、之を現今我國に於て窘迫せむとするは、決して其當を得たる者にあらずと考ふ。宗敎並哲學に於けるの爭論は、多くは未だ終極の結着に至らざる問題に關する者なり。故に可成自由の討究を許さゞる可らず。敵と味方の兩立して相爭ふが是れ社會の進步に缺く可らざることならず

づから別論なるべし。）

耶蘇敎家の中、弊風のあることは事實なり。然れども之を攻撃すると其敎理を攻撃することは、全く同一の事にあらず。今日僧侶の中墮落せる者の多きを見て、直に佛敎理を攻撃するは、耶蘇敎家の中にあり易き習ひなるが、此れが不條理なると同じ意味にて、耶蘇敎家の弊風に對するの攻撃と、耶蘇敎理に對するの攻撃とを混同するも不條理なるべし。固より其弊風と其敎理との間に必然の關係あるやも知る可からず。然れども亦無きやも知る可かず。予は西洋より渡りし所の耶蘇敎を信ずる者が先づ西洋風に振舞ふを見て、耶蘇敎理なるものそれ自身が、その如き弊風と必然の關係を有すと斷言するは、大早計の譏りあらんと考ふ。予は耶蘇敎理を窮め得たりと云はず、然れども十餘年間、バイブルを讀みて、發見したりし限りに於ては、其中首肯し得ざる事柄のあるに拘らず、其敎理は必ずしも我國家を危うするの弊風を生じ來る者なりと云ふべき所以を知らざるなり。詩歌的の開闢說を始として、默示錄の東洋的（オリエンタル）想像に至る迄、種々雜多の事柄の記しあるを知る。啻に些細なる點に於てのみならず、重要なる個所に於ても、解釋說明の區々なるを知る。

久しく米國に滯留せし者は、何となく米國の戀しき心地のすることもあらん、永く獨逸に遊びし者は、時々には日本の社會よりも、獨逸の社會に住み度く思ふこともなきにあらざるべし。故に此點に於ては、一口に耶蘇敎なる者を排斥するよりも、寧ろ懇々耶蘇敎家に諭す所あるを要す。然れば彼等の中、彼の妙なる氣風は、今よりも益々減少するならん。耶蘇敎家の先達も、亦此には力めざる可らざるなり。惟ふに彼の勅語を拜する如きことに、故障を唱へし者あるは、一はかの妙なる氣風に基く所あらん。然れども亦誤解に基く所もあり。彼等が宗敎上用ふる所の禮拜なる語とその意義に於て混同さるゝの恐あるよりして、彼等は誤解に陷りし所あるべし。若し幾分にても、宗敎上の意義を含めて、彼等が神とする者より外の者に向つて、禮拜を加へよと云はゞ、彼等は憲法を楯として、その如き不條理なる請求に抗するなるべし。彼の禮拜なる語に、彼等自ら宗敎的の意義を附して、而して彼等自ら誤解に陷りしことは、全く彼等をのみ咎むべきにあらず。然れども今日に於ては、彼等は宜しくその如き誤解を棄つべきなり。（學童をしてしば〳〵勅語を禮拜せしむることが、果して勅語の主意をして實益あらしむる道なるか否かは、おの

する者の中、妙なる氣風を有する輩ありて、此が爲に國家てふ觀念を重ずる人々に惡感情を懷かしめたるを知る。耶蘇教家の中、國家の統一てふ事には、餘り注意せざりし者のあるを知る。近年に及んで、鄕下の牧師會は、天長節紀元節等には、相集つて、天皇陛下の萬歲を祝するを知る。然れども是は近年に始まりし事なりと知るべし。要するに此點に於ては、輓近耶蘇教家の中、著き變化のありしを認むべし。此變化は彼の所謂る國粹保存論に刺戟せられて、起りたる者なりと云ふ事は、否む可らざる事實ならん。如何に耶蘇教家が、此點に於て、彼等の必得とする所の前後少しも變更せざることを主張せんとするも、そは到底主張し得べきことにあらず。又彼等の中、物のわかりたる輩は、その如きことは主張せざるべし。彼等の中、公平なる者は、多少かの(或點に於ては甚しく謬れる)國粹論に對して感謝すべき所あるを認るなるべし。然れども、是は啻に耶蘇教家にのみ限れることと云ふ可らず。一時西洋の文物を欽慕したる者は、擧つて無闇に西洋風を吹かしめたるにあらずや。今は耶蘇教を非國家的なりなどと大聲疾呼する人々の中にも、非國家的と嘲けらるゝ耶蘇教家にも劣らざる程に、西洋に心醉したりし人もあるべし。

ことをさへも否むとは、別論なるべし。　又歐米の耶蘇敎(即ち西洋の風俗に浸染せる耶蘇敎)と然らざる者との區別も立て得られざるにあらず。歐米の耶蘇敎と、昔し猶太に起りし原始の耶蘇敎との間に、差別のあるも勿論なり。耶蘇敎を日本的に化す可らずと云ふも、日本的に化したりとて耶蘇敎は矢張り無用有害なりと云ふと、その如くに化したる耶蘇敎は最早耶蘇敎と名く可らずと云ふと、又耶蘇敎は到底日本的に化す可らざる者なりと云ふとは、同日の論にあらず。(固より日本的に化すと云ふ意味に就いても論あるべし)。耶蘇敎なる者は、遂に永く文明國の宗敎として存す可らざる者なりと云ふも、それを目して一日も早く刈り除くべき者、又到底痕跡もなく滅し去るべき者なりと云ふと、耶蘇敎は今日の如き一大宗敎として何時々々迄も文明人民の信仰を繫ぐ能はざるも、亦決して磨滅す可らざる、忘却す可らざる所の貴重なる遺物を人文の上に殘す者なりと云ふとは、固より別論なるべし。又現今の耶蘇敎會組織と耶蘇敎の活力精神とを混同すべきにもあらざるべし。

予をして、爰に予が思ふ所を、極く簡單に表白せしめよ。予は從來耶蘇敎家と自稱

に、種々の問題の混雜せるが如し。問題の雜合せるは、徒らに論爭を不明ならしむと考ふ。耶蘇敎と云ふ事が、是れ既に宏漠たる事にして、只だ之を攻擊すと云ふも、其攻擊の的とする所に、種々の差別あり。現今我國にて、耶蘇敎家と自稱する人々の氣風に、面白からざる所あるを攻擊するとは、耶蘇敎理を攻擊するとは、全く同一事と思ふ可からず。又同じく耶蘇敎理を攻擊すと云ふ中にも、從來歐米に行はれたりし神學說を攻擊すると、バイブルに記しある所を攻擊するとは、其間おのづから差(けぢ)めなかる可らず。歐米に行はれたりし神學說の中、何程がバイブルに說ける所と相合し、何程が後世の學者の附加せる(或は誤解せる)所なるかを、爰には固より論ずるの暇なし。但だ彼れと此れとを同一視す可らずと云ふことを注意し置くのみ。又耶蘇敎理を駁するにも、哲學上の位置よりして論ずると、我國體の上よりして論ずるとは同一事にあらず。宗敎哲學の上より見て耶蘇敎理を維持す可からずと云ふと、現今の政治敎育の上よりして(政略上)之を抑壓すべしと云ふとは、同日の論にあらず。又耶蘇敎に社會道德を改良する効能のあるを拒否するにも、耶蘇敎家がしば〳〵吹聽する如き、萬金丹的の効能あることを否むと、多少の効能ある

は、不可也。倫理主義の爭は、之を個人間の自由の討究に委ねて可なり。若し勅語を楯に着て、倫理說場裡に爭はんとする者あらば、予は之を卑怯なりと云はん。

耶蘇敎問題

此頃耶蘇敎が、敎育勅語の旨意に反せざるや、我國家に害なきやに就きては、頗る爭論のあるが如し。此の如きは、惟ふに予輩の自由に、眞面目に討究すべき問題ならん。只だ左右を顧みて默するが如きは、眞心ある者の爲すまじき所なり。何れの世か、爭のなからざらん。爭を解くの道は默するにあらず、思ひ切つて爭ふにあり。如何に其見る所を異にするも、心から眞理の爲に、國家の眞福の爲に爭論することならば、互に胸襟を宏うして、說く所を聞くを要す。默して一致を裝ふ者よりも、語つて反對に立つ者が、眞に敬すべく、愛すべく、貴ぶべき友ならずや。予は爰に詳論するを得ざれども、只だ一通り予の見る所を告白するは、亦今の論爭に益なきにしもあらずと考ふ。或は予の云はんと欲する所を誤解する者もあらんかなれども、誤解さるゝを恐れて默止するは、予の好む所にあらざるなり。此頃の論爭を見る

給ひたる所は、決して一國家一時代にのみ行はるべくして、他の國他の時には行はる可らざる如きの道德にあらず、宏く之を中外に施して悖らざる者也。忠孝と云ふ者、豈に何れの國家にか、何れの社會にか、必要ならざる。但だ多少個々の塲合に於て、其現るゝ狀態を異にするのみ。而して忠なる者、孝なる者は、必ず斯く々々の狀態を取るべき者なりと云ふの說明は、勅語の中には存在せざるなり。假令ひ一定の塲合に於ては、一定の應用の道を講ずるが肝要なるも、是れ只だ其塲合には、其樣に應用せば宜しからんと一私人の思ふ所に止まりて、勅語の應用を强ちにその如き狀態にのみ限るは、決して其本旨を得たるものにあらずと考ふ。若し時勢を異にせば、忠孝の說き樣をも異にして、以て其當時の社會の進步に悖らざらんが、是れ勅語の本旨なるべし。若し然らずんば、何を以てか克く古今に通じて悖らざるを得んや。强ちに勅語を名けて、何國の道德、何主義の倫理と云ひて、其根據を限るは、是れ徒らに勅語の趣旨に存せざるの爭を惹き來る者にあらずや。勅語の趣旨に存するの爭ならば、固より飽く迄も惹き來るが宜しからんなれども、此の如きは、所謂る藪を突いて蛇を出す者にあらずや。勅語を以て倫理上の主義の爭を爲す

ふことは、敢て否むの理由なからん。然れども、斯程の事を許容すると、忠孝を道徳の基本なりと放言するとは、決して同一義にあらざる也。勅語は倫理説上、道徳の基本を示したる者にあらざる故に、其中に掲げある幾多の徳行は、おのづから倫理説上絶對の者とは解せられず。倫理説上絶對のものは、衆徳の基本となりて、之を貫通合括するものの外にあらざればなり。勅語には忠孝をさへも、絶對のものなりとは、斷じあらざるなり。（忠孝の倫理説上道徳の基本と云はるまじき由は、予之を*「宗教」第十五號に論じ置けり。）

勅語は是れ何人も承認服膺すべき徳行を示されたる者にして、別に事々しき註釋を待て始て解せらるゝが如き者にあらず。假令ひ全く註釋を附するの必要は、無しと云ふにはあらざるも、可成手近き解釋に止めて、倫理説上根本の所に迄は論じ及ぼさゞるが、却て勅語の趣旨にかなふ者ならんと考ふ。要は專ら實例に照して、以て實行を勵ましむるにあり。勅語に陳べさせ給ひたる所は、國家代々の元首が遺させ給ひたる道なりとあり。而かも此道は、特に我國にのみ限れる道にあらず、「之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ、之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ」とあり。故に勅語に陳べさせ

*本書第五巻論集三〇八頁以下

ず。予が考ふる所を以てすれば、功利主義の倫理說も、亦決して勅語と相容れざる者とは云ふ可らず。勅語は克く忠なれ、克く孝なれと誨へ、博愛衆に及ぼせと敎ふ。功利主義を取る者は、功利を擧げんが爲に、克く忠なり、克く孝なるべし、又博愛衆に及ぼすべし。若し勅語が一定の倫理說を布かんが爲に與へられたる者ならば、遂に或る種類の倫理學者を坑にせざるを得ざるに至らん。是れ決して學理攷究の自由を保護するの道にあらざる也。勅語に倫理說上の意義を注ぎ込むは、是れ却て其功用を狹ばむる者と謂つべし。忠孝を道德の淵源と云ふも、之に倫理說上の意義を附せざらんことを要す。國民としては其元首を敬して國家の統一を計るが、先づ其國民としての義務の須要なる所なり、又子として一家に生るれば、先づ親を敬愛するがその子としての德行の須要なる所なりと云ふ程の意味に解するが、最も妥當ならんと考ふ。予はこれより以外の(若しくは以上の)意義を附するの必要を見ざるなり。現今の文明の程度に於ては、國家の統一は決して忽にす可らざることなり。現今の狀態に於ては、國家の統一なるものが、人類の進步を促すの道たるなり。且又我國家の過去と將來とを考へて、忠孝には克く注意するを要すと云

によりて多少其見解を異にする所あるは、亦止むを得ざることならん。而して其註釋は如何なる點にまで及ぼすべきものなるかに就いても、亦意見を異にする所あるべし。若し他人にして、其私に見る所を以て、勅語を解するの自由あらば、予も亦予の見る所を以て、之を解するの自由ありと信ずるが故に、請ふ少しく予の考ふる所を陳べしめよ。予は思ふ、教育勅語は一定の倫理說を布かんが爲に與へられたる者にあらざるべしと。蓋し勅語は國民の守るべき個々の德行を列擧したる者にはあれども、倫理を談じたる者とは見られざればなり。勅語が一定の倫理說を揭げたる者にあらざることは、最も見易きことにして、世人も概ね同意する所ならんと信ずれども、然れども人或は云ふ、勅語に從へば、倫理道德の基本は云々なり、他の道德論は皆勅語の旨意に反すと、而して恰も勅語と倫理說とを混同するが如きの言を吐く者なきにあらず。其如きの論者とても(物のわかりたる人々は)固よりあからさまに、勅語と倫理說とを混同せざるべし。然れども彼等の吐く所の言には、往々その如き嫌ひなきにあらず。假りに勅語に於て一の倫理說を揭げある者と見るも、予は何等の倫理說上の問題が、其中に解釋されたるかを發見する能は

の建設を急がんとするが是れ今日の弊風にあらずや根本的の批評を加ふべきもの何ぞその少きを憂へん大建設は根本的批評の上に基ゐせざる可らず風儀習慣權勢の尙ほ批評すべき者頗る多し予は彼の口に國家を憂ふと云ふ人々の似而非建設を急いで批評を抑へんとするの傾あるを歎せずばあらず特に道德の觀念に於て然りとす

（明治廿六年一月廿日發行、中央學海雜誌第二卷第一號）

敎育勅語と倫理說

編者曰、本篇及び次に揭げたる『耶蘇敎問題』と題する一篇は元と『私見一束』といふ題の下に倂せて『敎育時論』に揭げられたるもの也。

近來敎育勅語に註釋を附すること頗る流行す、而して其註釋なるものは、固より一私人の見て以て勅語の意義となすものに外ならざるべし。一私人の見る所なるが故に、その勅語を解するの趣に於て、彼れ此れ相異る所なきを得ず。其意見を異にするが爲に、或は相罵りて亂臣賊子とまで呼ぶ者なきにあらず。亂臣賊子と呼んで相罵るの必要は、固より之れ無かるべきも、若し勅語に註釋を下さんとせば、人

此攷究心を、此批評心を抑壓するは決して策の得たる者にあらず之を抑壓するの極は遂に曾て恐るべしと思ひしよりも倘ほ恐るべき結果を誘ひ來るに至らん火焰の害を恐れば宜しく之を漏らすの途を與ふべし權勢の長久ならんことを希はば宜しく之を殺ぐべし舊來の觀念を批評するは之に伴ふ多少の危險なくんばあらず然れども其多少の危險を懼れて批評を抑へんとするは具眼の士の爲すべきことにあらず批評心の一度其萌芽を發してよりは如何に之を撲滅せんとするも豈に長くそが生長を妨ぐるを得んや權勢の神聖なる、習慣の固定なるも豈に能く批評心の襲擊を免れんや批評心一たび起らば何物か之に抗するを得んその破竹の勢を以て進む所之に抗するは即ちみづから敗を招くなり唯だ之と和するの一途あるのみ而して之と和するは即ち只だ其求むる所に從ふの外途なきなり批評心を恐れて遁げ匿れんとする者は却て其馬蹄に懸けられん歡んで彼を迎ふる者は遂に最後の勝利者たるを得ん我國今日の形勢にして批評心を放逐せんとするも豈に夫れ爲し得べけんや寧ろ彼を歡迎するに若かず人は云ふ我等は破壞を了れり今後は宜しく建設すべしと然れども根本的の批評を遂げずして只管速成的

の社會に窘迫せらるゝの義務あり窘迫するも窘迫せらるゝも共に均しく人間社會の約束なり是れ即ち人世の最大悲劇ならずや何故に人間社會は春風に笑ひてのみ進み行くを得ざるかを知らず然れども但だ斯くの如き最大悲劇が社會の進歩に缺く可らざるの事實なることを知るルーソーの如きなくんば回天動地の大革命も起らざらん然れどもルーソーの如きなくんば社會の進歩を如何せん思へかの吉田松陰の如きは決してかの所謂良民の部類に屬すべき者にあらざるを彼等生前の社會は彼等を窘迫して至らざるなし彼等死後の社會は彼等を尊崇して或は志士と名け或は先覺者と呼ぶ社會は一の怪物なるかな社會は斯くの如き怪物なるが故に志士をして苦心多からしむるにあらずや

一國の風儀習慣にして將に舊時の狀態を維持す可らざらんとするや一時の安寧を偸むの策は之を彌縫するにあり然れども國家永久の計は之を破壞するにあり之を破壞する者は當時にありては危險と呼ばれん危險と呼ばれて社會の責罰を受くることはその甘ずる所ならざる可らず只だ何氣なく從來の風儀習慣を墨守せずしてその風儀習慣の據て立つ所を穿鑿せむとする時勢に當りて尚ほ無闇に

の所謂良民の部類に屬する者には非ず彼輩は概ね其社會に於けるの不平家なり
彼輩の言行は當時の社會より見て危險と思惟せるらゝ者也然れども若し彼輩な
くば社會は變動の分子を缺かん又それと共に進步の分子を缺かん社會の一偶に
常に此等少數の不平家の潜伏するなくんば社會は只管に舊時の狀態を維持する
に傾かん社會の健全なる生活は保守と進取との傾向がその宜しき均合を得るに
ありとせば固より其一をのみ取りて他を棄つ可らず而してかの所謂る良民なる
者は孰れの傾向を代表する者なるぞと云はゞ概ね社會當時の狀態に滿足してそ
の各自の範圍に於ける在り來りの義務を盡すとの外に其理想を有せざる者共な
らん只だ何氣なく當時の社會の慣例を守りて敢て之に違背するの必要を感せざ
る者共ならん即ち彼等は保守の傾向の由てその重きを有する所なり物理上の比
喩を用ふれば彼等は社會の惰性を代表する者と云はるべし之に反して進步主義
の率先者となる者は社會の不平家なり無事に苦む底の者なり當時より見て治安
を妨害すと謂はるゝ如き者なり故に彼等は囹獄に繫がるゝを要す遂には白刃の
下に斃れざる可からず當時の社會は彼れ等を窘迫するの義務あり彼れ等は當時

ふに猶豫せざるなり予が一個人の哲學宗教上の思想より云へば正統派の神學者は云ふも更なり彼の新傾向を取る人々にさへも或は彈訶さるゝやも知る可らずと雖も予は誠實に彼の人々の進歩的の精神を賛助すと云ふに躊躇せざるなり蓋し我國人の(少くとも)教育ある部分に於ける基督教の運命は主として彼の新傾向に懸れりと思へばなり若し我國の基督教にして彼の新傾向を放逐するの愚を學ばゞ基督教の我國に於ける位地は誠に憫むべきものとならん又若し彼の新傾向の爲めに破壞さるゝ如き基督教ならば其の破壞され行くも敢て惜む所あるべからずと考ふるなり

(明治廿三年十一月發行、六合雜誌第百十九號)

批評心

國家安寧の大本はかの所謂良民にあり社會を擧てかの所謂良民の集合躰たらしめば鼓腹擊壤して以て太平を謠ふを得ん然れども又た回天動地の大快事は無からん社會從來の狀態に安せずして或は改良と呼び或は革命と叫ぶ者は惟ふにか

此國民的精神の邊に於ける基督敎內の新傾向を分析せば總じて左の二三の點にありと云ふを得第一我國從來の宗敎は(是を其自身の發達に任しては)以て向後の宗敎と爲すに足らざる事、第二歐米の宗敎的思想を我國に入るゝの必要ある事、第三其思想をして向後我國に特殊なる發達を經過せしむべき事即ち日本の基督敎は日本古來の文化を地盤とする日本風の基督敎たるべき事此等は固より未だ大躰の方針に過ぎずして如何程此方針を實行し得べき乎又如何にして是を實行し得る乎等の細密なる實際上の問題に立入らば彼の新傾向の人々は恐くは未だ之に對する明答を有せざるべし又遽にその明答を請求し得べきにもあらざるべし只だ彼の人々が早晩如何にか此問題を解釋して是を到底實行し得べからざる不條理なる問題と思ふ者に向て答ふる所あらんことを希望するのみ

右陳述したる所は予が茲に所謂る基督敎的傾向の極く大躰の趣に過ぎざるが今日に於ては其如き大躰の趣より外に概言し得る所なしと考ふるなり又今日に於てこの新傾向の價値を判定せんは尙ほ早きに過るの恐あれども若し此論の序でに只だ一言予の所見を吐露するを得ば予は飽く迄も彼の傾向に同情を表すと云

ぎざればなり

新傾向の神學上の所説は歐米の思想と密接なる關係のあることは疑ふ可らざる事實なるが右傾向の今一の要素即ち我國民に特殊なる宗教上の發達を計らんとするの精神は其由て來る所專ら我國民がその國民的精神を發達せしめたるにありと思はる此國民的精神を基督教社會に喚起せしめたるは幾分か國粹保存論の影響もあるならんと思はるれども然れども其の源因の大躰より云ふ時はそは我國民がその國民たるの自覺を强うしたるにありと云ふの外なかるべし此國民的の自覺を喚起し來りたるには種々の原因ありて之を國粹保存論若しくは其他の一派一隅の議論にのみ歸するは非なり我國民の此二十年來經過したる發達經驗の全躰が此に至らしめたりと云ふを至當とす彼の一派一隅の議論も亦此大躰の發達經驗によりて喚起されたる一の現象に外ならざる也且又我國の基督教社會に於て著く其頭を擡げたる國民的の精神は彼の國粹保存論とは自ら異る所なくんばあらず尤も中には攘夷的の慷慨論をさへ稱ふる者あれども此も亦その出所に於てその目的に於て彼の所謂る國粹保存論と同一視すべきにあらざるなり今

向と正統派との(神學上の)最後の關係を定むるものならん然し此等の最後の問題に對しては新傾向中未だ一定の所見あるを見ず或は斷然正統派と神學上最後の關係を斷つに躊躇せざる者もあるべけれども此等の論者は今尙ほ極く少數に止まりて多數の人々は概ね此點に於ては正統派との關係を斷つを非とし若くは是を斷つに躊躇するならん要するに新傾向を取る人々の力むる所は古びたる神學上の所說を捨つると同時に宗敎的信仰の活氣を保存せんとするにあり如何にして此困難なる問題を解釋すべきかは彼の人々の現に最も苦心し居る所ならん彼の人々の多分は基督敎に於ける(奇蹟等の)超自然的の分子を敢て否みはせざるべきも亦其分子を(信仰の個條として)信ずることに第一の必要を置きもせざるべし敎義の信仰よりも寧ろ實際の善行に重きを置くならん寧ろ道德的の分子を以てアルファ又オメガと思惟するならん

予が新傾向の神學に就いて云ひ得ることは右陳べたる大躰の趣に過ぎず是れ他なし前にも云へるが如く彼の新傾向は既に形を爲せる一派の神學として現じ居るにあらずして只だ或人々の中に存在する思想の大躰の傾を表示するものに過

想を起すべし故に此新傾向の二要素は互に緻密なる關係あるものにして我國に於ける基督敎內の新現象は向後專ら此要素を淵源として湧出し來るならんと思はる

神學上の所見に關しては新傾向の取る所は種々の點に於て通常所謂る正統派の正義信仰と相合せざることと明なり例へば三位一躰、贖罪、インスピレーション等の說に關しては新傾向を取る人々の考ふる所と通常正統派の敎理と見做さるゝ所とは其の間に蔽ふべからざるの懸隔あり然れども亦それらの人々は全く正統派と關係を斷ちたるにもあらざる故若し委細にそれが名稱を下さば正統派內の(若くは正統派に近き)不正統派と云ふを適當とす思ふに彼の人々は此名稱を拒むの理由はなかるべし又敢て之を拒みもせざるべし然れども是の正統派神學に對するの位置は未だ全く判然せりとは云ふ可らず其人々の所說と正統派神學の所說との區別を探求し來らば局る所次の二三の問題に對して明答を乞はざるを得ざるべし即ち基督敎は絕對的に完全なる宗敎なる乎基督敎は自然的の現象として說明し得べきものなる乎等の問題是れなり此問題に對する答の如何は彼の新傾

多しと信ずるによる上に陳べし如く此派の特點は今旣に成れるの有樣にあるにあらず又別個の敎會を形づくる人々の擧て主張する所にもあらず只一個人として(正統派と見做さるゝ敎會內の)或人々が吐露する思想に過ぎざるゆゑ極く其大躰の趣を指摘するより外に予は爲すべき所を知らざるなり故に予の陳述は讀者の待ちまうけたるよりも或は包含する事柄の少きやも知る可らず

玆に謂ふ新傾向の思想は人多くは之を神學上の所見として評判すれども其實そが中には活力骨髓となる二個の精神ありて存するを見る即ち一は神學上進步的の精神にして又一は日本國民の特殊獨立なる發達を計るの精神是なり此の二個の精神は或は重きを前者に置き或は重きを後者に置くの差別はあるも相共に新傾向の生命活力となりて存し居ることは明なり一は知識の要求に出で一は國民の自覺に出でたる者なれども其相結合して新傾向を成すの理由は決して見難しとせず蓋し今爰に新傾向を取らんとする時には自らそを以て我國民に特殊なるものと爲さんとの思想を起すべく又若し我國民に特殊なる傾向を取らんと欲する時には自然と西洋傳來の正統派に滿足せずして別に新傾向を取て進まんとの思

ことを指定するものならん此三者の中二者は既に一應定まりたる形躰を爲し居れども他の一者即ち正統派内の不正統派と見做さるゝものは未だ定まりたる形躰を取り居るに非ず別に一個の團躰を爲し居るにあらず其思想は既に成れるにあらずして今漸く成らんとし居れるなり故に其特殊の性質には明に指摘し難き所多く其思想には未だ曖昧なる所あるを免れず又た同じく此傾向に屬する人々の間にも其所説には自ら多少の差違なきを得ざるなり且又彼の二者は「眞理」若しくは「ユニテリャン」なる雜誌にて代表され居ると見て可なれども他の一者は固より未だ其機關と稱すべきものを有し居るにあらず只だ時々其思想の幾部分の六合雜誌等に現はるゝあるのみ又前二者に於ては主要の論説は今尚ほ多くは外人の手に出づれども後の一者は全く日本人の間にあるものと知るべし

予が茲に我國に於ける基督敎の新傾向に就いて陳べんと欲することは專ら正統派内の不正統派と見做さるゝものに關係せり是れ一は現今基督敎社會に於て最も疑訝の目的物となり居る者は恐くは此派なるべければ成るべく公平に其特質を指摘するは甚だ肝要なることと思ふによる又一は予は最も此派に就て知る所

直接に我國の「ユニテリヤン」派より來りし影響とは見做すを得ず是れ明白なる事實にして少しく我國に於ける基督教の今迄の行懸を知る者の皆承認する所ならん然れども今云ふ如く彼の新傾向は歐米に於ける神學宗教上の新思想の大勢（即ちユニテリヤン派も其一部分を爲し居る大勢）の影響を蒙れるものなるが故に其所說の或點に於ては頗る「ユニテリヤン」派と相似たる所あるは亦當に然るべき事と謂はざるを得ず

方今我國の宗教界に於て彼の所謂る正統派の神學に對して新義新說を主張するものは「ユニテリヤン」派及正統派內の進步派（若しくは異端派）の外に獨逸神學の自由派なる者ありて此三者は皆其行懸より云ひ又其感情思想より云ふも多少特殊の性質を帶ぶるには相違なきも又共に我國の基督教に於ける新傾向の代表者と見做して可なるべし即ち此三者は其神學宗教上の思想に於て皆進步的の方向にあるものなること明なり向後此等の間には如何なる相互の關係を生ずべき乎固より明細に預言し難しと雖ども察するに今後も尙は各特殊の方向を取て進み行くならん又其此後の進步發達の如何はその將來我國の宗教界に於ける位置と勢力

欲するなり但し此の如き現在の出來事に關しては(既に局を結びたる過去の事實よりも尚一層)一個人の關係又先入によりて見解を過るの恐あるが故に予は只だ極く確實なりと思惟する大躰の趣にのみ就いて論述すべし

通常正統派と名くる敎會の中に近頃「新說」を稱ふる人々のあるを見て是れ全く近年我國に渡來したる「ユニテリヤン」敎派の影響なりと云ふ者あれども此の說大に細しからざる所あり近頃頓に發生したる如き觀ある(正統派内の)新思想は決して今日始めて其源を開きたるにあらず其發生の源因は既に數年前に存し居れり近時正統派内に於て「新說」を稱ふる人々は既に早くより歐米に於ける神學上の新傾向に注意し來りて夫等の問題に關しては常に思想を運らし居りしなり故に彼の新說を稱ふる輩は皆歐米の新思想に注目し來りし(基督敎内の)思想家たる人々の中に存するを見る彼の人々の稱ふる所は歐米諸國の神學宗敎上の新思想(自由派不正統派の思想)に影響され居るとは云ひ得るも我國に渡來したる「ユニテリヤン」敎派より直に影響されたりとは云ふを得ず即ち彼の新說は我國の「ユニテリヤン」派と共に或點に於ては歐米の新思想より(我國に)來りたる影響とは見做し得るも

我國の基督敎に於る新傾向

現今我國の基督敎は大波瀾の中にあり大變動を經過しつゝありとは或氣早き人々の言ひ傳ふる所なるがこは事を仰山に見なしたる想像にして眞實我國の基督敎は其如き有樣にあらず矢張り從來の信仰を維持し從來の慣習を固守せんとするを以て其大躰の傾と爲し居れり又そを以て其大躰の傾となすは苟くも一個の宗敎たる以上は免る可らざるの事、寧ろ當然のことゝ謂はざるを得ず然れども彼の氣早き人々の想像する所は亦全く緣由なきにはあらず其想像は或事實を指摘し居ること明なり其事實とは即ち基督敎社會の或部分に於て現に存在する新思想新傾向是れなり

基督敎社會の或部分に於ける新傾向とは如何なるものを云ふ乎其由て來る所はいづくに在る乎其遂に到らんとする所は何の點にある乎此等は苟くも我國の宗敎的現象に注意し殊に基督敎の成行に注目する者の必ず念頭に浮ぶる問題ならん予は茲に此新傾向の大躰の趣と思惟する所を開陳して大方の注意を乞はんと

乎。予は曾て可なり名のある一人の牧師の說敎を聽聞せしことあるが其人の口より「奇麗の花」「わたしさう思ひます」等の言語の多く出でしに一驚を喫したり。されど當今の世の中には西洋人風の日本語と純粹の日本語との差別に心づかぬ人も隨分ありさうなることと思へば左まで驚くにも足らざることならん歟。何樣其如き人は同じ日本人ではありながら共に日本語を談ずるに足らぬ人ならん。

予は說敎語を研究する助として左に揭ぐるものを指摘せんと欲す、蓋し說敎家が尙ほ一層注意して此等のものを研究せば大に益する所あらんと信ずればなり。

(一)淨瑠理本並に小說類(二)講談師落語家の話(三)鳩翁道話、心學道話の類(四)眞宗等の談義僧の說敎。

當今說敎を速記したるものなどあれども其中言語に注意したるもの殆んどあるなし。說敎語の模範標準ともなるべき說敎を揭載する雜誌若しくは書冊を發兌するは目下の急務にあらずや。追々其數の增加する基督敎的の雜誌中此任に當らんと欲するものはなきや。若しあれば夫れ「標準」ならん歟、夫れ「標準」ならん歟。

(明治卅三年二月發行「標準」第三號)

教者の口よりは單純にして自然に出で而かも心の奥底に貫徹する日常の言語を聞かんことを願ふ。言語を平易にするに次ぎて說教語に(凡ての演說と等しく)缺くべからざるは言語及び語法を正うすること也。「おいゝ御心」又は「神樣をゝ祈ります」等の誤は少し敎育ある者の耳には甚しき不快を感ぜしむ。此等は誤の最も甚だしきものにして而かも間々聞く誤なり。尙は他にありがちなる語法の間違を擧げて例證とせんと欲せば之を擧ぐること難からねども茲にはしかするの必要なかるべし。右に陳べたる二點の外に完美なる說教に(言語上)必要なるもの固より少なからねども、此二點は其中にて殊になくてならぬものにして他は其上に加ふべき飾の如きものと云つて可ならん。

說教の仕方に注意して其精神を御留守にするは固より非なれども又精神のみにて事足れりと思ふも大なる間違也。此間違が原因なるか否かは知らねども當今の說敎者には說敎術、殊に說教語をおろそかにする風はなき乎。此風が當今の說教をして今だに前云ふ如き有樣に遲々たらしむるの原因にはあらざる乎。當今の說敎者の一部分には西洋の書物を讀む割に日本語には精しからぬ缺點はなき

基督教會の說教には其言語のつかひ方にまだ甚だ不完全なる所のあることを知らんと思はゞ、試に二三の會堂に行いて其日曜日の說敎を聽いて見よ、茲に殊更に論ずるの用なかるべし、論より證據を得ること難からざるべし、語脈の亂れざるもの、言語に乏しからぬもの、聽衆をして成程と言はしむるものの幾何かある。此等の點に於ては眞宗の僧侶の說教は遙に其上にあるべし。

現今の基督教會の說教語に二個の大缺點あるを見る。一は言語の文章風に過ぎたること、又一は未だ十分に語法の正しからぬこと也。第一の缺點は大に說敎の力を弱からしむ。若し老若男女の區別なく聽衆全躰の心を動かさんと思はゞ、書物の言語を用ふ可らず家庭の言語を用ふ可き筈なるに、實際說教とし云へば改めて固くるしき言語をつかふ癖あるを免れず。何の爲に「一番大切な」と云はずして「最も大切なる」と云ふ乎、何の爲に「こんな人」と云はずして「此の如き人」と云ふ乎、なぜ「そこから此處へ」と云はずして「其の所より此の所へ」と云ふ乎、「此國で名の有る」と云はずして「此國に於て名のある」と云ふ乎、「福音がひろまる」と云はずして「福音が擴めらるゝ」と云ふ乎。予は此の如き書物語の臭味を放逐せんことを願はざるを得ず、予は說

說教語の研究を促す

あり來りの漢文燒直し躰の文章に滿足せば兎も角も、苟も之に滿足せぬ以上は如何なる文躰を選び如何なる言語を用ふべきかは當今文章を書くものに取りて最も大切にして而かもまた最も六ケ敷問題也。和文と漢文との間を取らんか、和文漢文俗語の混合躰を作らんか、將た寧ろ全く俗語の儘に從はんか、今の所にては此等の問題に判然たる答を與へ難し、我國の文章語は未々はいざ知らず今しばらくは亂雜の有樣を脱すること能はざるべし。

文章語を定むることの困難に較ぶれば說敎語を定むるは甚だ爲し易きことと云はざるを得ず、なぜなれば說敎は日常の言語にて爲すべきものなれば其標準を立つること難からざればなり。言辭語法皆既に日常の言語の中に備はり居りて之より離れて他の言辭を選び他の語法に從ふの必要なし。されば文章に比すれば說敎語は早く整頓し幾らか早く完美に近よるべき筈なるに、實際しかあらざるは何故なる乎。玆には只基督敎會の說敎に就いて云ふなり。

取扱ひ幾分の見立を爲すの力ありと云ふに過ぎず別に其經驗を統一解釋する原理を知得せるにもあらざれば其見解も亦深く賴むに足らざるべし次は美術家の見解なり例へば畫工が繪畫に就きて有する知識と經驗とには常人の得て推量し能はざるものあるべければ其見解は亦一層の價値あること明なり然れども美術家必しも美術の妙處を分析し得るにあらず創造の才ある者必ずしも究理の才ありと云ふにあらず想像と理解と、構造と分析との間には却て相違背するの趣あるを以て或は希有の美術家にして其有する見解に於ては拙陋取るに足らざるものなきにあらずされば右數種の不完全なる見解を統合補充して之を終極の原理の上に置くものあるを要す、是れ即ち哲學者の見解なり固より未だ完全なる美學あるにあらず又哲學者の見解とても決して一定せるにあらず然れども到底する處終極の見解は哲學的美學に求むべきこと明ならん而して其見解は哲學の完全に近くに從ひまた等しく完全に近くべし故に予は當今我國に美術の技を勵ますと同時に美術の學を勵まさんことを希望して止まず

（明治廿二年七月發行、西毛時事第三號）

可らず如何かの哲學的美學を論據とせざれば到底其終極の判斷は下し得ざるべし然れども記憶するを要す事實を顧みざる學理的の空論は學理に基かざる事實の穿索と等しく共に信用すべきものにあらざることを

予は或人々が別に深き考究をも遂げずして思ひ思ひの臆斷を我國の美術に下すを見て強ち深く排斥する者にもあらず是れまた止を得ざる事なればなり然れども予が其人々に向て常に記憶せんことを願ふは右に掲げたる數問を答るにあらずんば我國の美術の眞實の價値は到底判定し得可らずと云ふと是れなり

美術の見解に淺深精粗の段等あり先づ最も淺薄なるものは素人の見解なり即ち格別美術に就きては知識も習練もなき常人が一見一考して美と云ひ妙と云ひ又は拙と評する見解也此見解は固より誤謬多く又概ね人々の好不好に從ひて定むる處なれば別に價値を置くに足らざれども又往々其單純自然なるが故に大に眞理を穿つことなきにあらず次は世に所謂る美術鑑定者などと稱する輩の見解なり此輩は多くの標品に觸れ其見る所聞く所自ら浩瀚なるべければ其見解は素人の見解に比して數倍の價値あるを勿論なり然れども是れとても只だ多く美術品を

りと謂ひつべし我國の美術の價値は萬國の美術史に於て其占有する位地を知らざれば到底其如實の處は定め得べきものにあらず故に我國の美術の價値に關する第四の問題は其の世界の美術史に於ける位地是れなり

(五)右第四の歴史的攷究に伴ふに學理的の考究なかる可からず何となれば一國又一時代の美術的現象の價値を定め又其開發の順序を立つるには如何かの標準なかる可らず即ち其長短大小を度るの尺度なかる可らず而して其標準其尺度は局る處學理に求むるの外なければなり人或は事實を知るを以て十分なりと思惟すれども是れ甚しき謬見なり事實は事實なるの點に於ては彼此毫も其價値を異にするなし此事實は彼の事實より尚一層の事實なりと云ふことある可からず卑き者も高き者も其事實なるに於ては毫も異なる處あらずされば物の高下の定まるは其物の事實なるや否やにあらずして眞理、善德、美妙に關する吾人の理想の判斷にあり換言すれば歴史的の考究は事實を蒐集するに止まらずして事實を解釋せざる可からず而して事理を解釋するには是非とも學理に依らざる可からず故に我國の美術の價値を定めんとするに於ても其終極の論斷は學理の上より來らざる

同じく美といへども美に高下あるは明なり而して其美、其意匠の高下によりて美術に段等あると亦明なり如何なる技倆を盡すとも陶器若しくは漆器などに音樂と同等なる意匠と美妙を寫さんことは到底爲し得べきにあらざるなり

(三)我國の一種若しくは數種の美術に長せる事を斷定し又其美術が全躰其物の性質に於て表現し得る美妙の高下を斷定したりとするも未だ以て我國の美術は其美術其物の性質に於て表現し得る丈の美妙をば實際如何程表現せるかを知るに足らず蓋し我國は其長とする或種類の美術に於て其美術其物の容し能ふ程の事を全く爲し盡したりとは豫定し得ざればなり故に我等の第三に答ふべき問題は或種類の美術に於て我國の有する長所は實際如何程の長所なるかと云ふこと是れなり

(四)右第三の問題に答へんには只だ單に我國の美術をのみ研究して足れりと爲す可からず蓋し一物の長所を知らんと欲せば比較的の考究を爲すを要す故に我國の美術の長短を知らんと欲せば之を他國の美術と比較せざるべからず古今萬國の美術發達の順序を知らずして我國の美術の價値を定めんと欲するは抑も愚な

の少きにあらざるを思ふに我國の美術の眞實の價値を知らんと欲せば先づ左の數個の問題に答ふるを要す

(一)我國は如何なる美術に長ぜる乎、若し只だ單に美術は我國の長所なりと云ひ又我國は東洋の美術國なりと云ふを以て滿足する人あらば是れ其人の思想の疎陋淺薄なるを證するなり若し尙ほ一步を進めて考ふる人あらば必ずや問はん我國は諸の美術に長ぜりや將た或種類の美術にのみ長ぜりやと蓋し美術に建築、彫刻、繪畫、音樂、詩歌等の種類ありて一種の美術に長ぜるの國は必しも亦他の美術に長ぜりとは云ふ可らず「アラビヤ」人の如きは頗る愛すべき一種の建築風を創始したれども彫刻的美術に於ては分毫も爲す所あらざりき彼の古代の美術國と稱せられたる希臘の如きも其最も長とする所と長とせざる所とあるは少しく其美術を研究したるものの容易く發見し得る所なり

(二)我國にして若し或種類の美術に長ぜりとせば其種の美術は他の美術に比して如何なる位地を占むるものなるか、夫れ凡べての美術皆等しき段等に立つ者にあらず一の美術は一の意匠を現はすに適し他の美術は他の意匠を現はすに適す又

的美術に大なる價値を置く能はず若し外人の我が美術を嗜好するは總じて右の如き理由に基けるものならば其嗜好は直に以て我國の美術に無比獨得の妙處あるの證となすに足らず且又外人の我美術を評するを聞くに思ひ思ひの見解を下して毫も一定する所なきが如しされば彼等の言ふ所は但だ多少參考となすの價値あるのみ我國の美術を判斷するに最も適當なる者は我等日本人なることを忘るべからず故に若し我國の美術に正當なる判斷を下さんと欲せば徒らに外人の所見を擧ぐることを止め又故意に國粹保存に益せんとの目的を以て辯論を構ふることを止め先づ事の根本に立入りて美術一般の發達及原理に其論據を置かざるべからず

予が此文に於て讀者の注意を促さんと欲するは事の根本より我國の美術を品評せんとするに當り如何なる問題に遭遇するやと云ふこと是なり予が此文を草せるは我國の美術に關する問題をば明白にせんとの意に出でしなり蓋し問題に答ふるに先ち其問題を明にするは正當なる考究の順序と信ずれば也予は疑ふ未だ我國の美術の問題の何たるを明にせずして早く既に其美術の價値を判斷する者

上の斷言なる乎との問題是れなり
美術を以て我國の長所と斷定するは或人々の思ふが如く容易なるものにあらず之に關しては種々の問題を解釋辯明せざる可らず彼の外人の言は以て終極の斷定となすに足らざること固より論なし彼輩若し我美術を稱讃せば我等は先づ彼輩が理由とする所の當否を判斷せざる可らず一獨逸人美術史を講述するの際左の如く云ふを聞けり曰く我等が日本の美術的器物を嗜好するは其意匠、其形狀を愛して然るにあらず意匠形狀の點に於ては我等の嗜好する所自ら異り我等が日本の美術品に於て悦ぶ所は其細工の精密なるの邊、即勞力と時間とを惜まずして極く些細の點にも深く注意を込めたるの邊にあり而して此の如く精密なる細工は中世紀の頃には歐洲人も亦之を製造したりしが物質的開化の進歩するに從ひ器物を製造するに大概ね機械を以てするに至りしかば今は莫大の勞力と時間とを費して器物を製するを嫌ふ思ふに日本に於ても今後益〻器械的製造の進歩するに從ひ昔時の緻密なる細工は再び之を見ることなきに至らん是れまた止むを得ざることたるべし云々と若し果して右獨逸人の說の如くんば我等は我國の器物

原由せるが如し西洋模倣の傾向に反して國粹保存の說起り世間の或部分に於て如何にかして我國の依て以て西洋と肩を比べ得べき長所を發見せんと欲する折から西洋人中頗る我國の美術に注目する者あるを見又就中或外人の甚しく我美術を稱讚するを見て我文物の保存すべきもの、養成すべきものの一は必ずや我美術にありとの思想を發揚したるが如し此思想の趣く所遂に或人々をして我美術心即我國粹也と斷言せしむるに至れり

美術は我國の長所にして我國を名けて美術國と云ふも決して過稱にあらずとは現今多くの人々の好んで唱道する處なるが是れ果じて事の實相にかなへるものなる乎我等は我國の長所を知らんと欲す何となれば我長所を知るによりて發生する自重心ばかり我活力を喚起し我進歩を獎勵するものなければなり然れども亦我長所を發見せんと欲するの餘り知らず識らず己を欺くが如きとなからんことを希望す何となれば己を欺くは遂に救ふ可らざるの絕望を來すものなればなり故に我等が近時の流行論を聞て先づ深く考ふべきは我國の長所は眞に美術にある乎或人々の唱道する所は十分の理由あるものなる乎十分の考究を遂げたる

を以て到底解す可らざるものと爲し之が解釋を試みるを無用也とするの理由あを見ず何ぞ後人の破壞せんことを恐れて茲に建設の勞を取らざるの理由あらんや予輩の建設する處にして若し先人の建設せし處に勝らば予輩の心勞豈に無効に歸せりと謂ふを得んや殊に予輩にして若し東洋の思想に加ふるに西洋の思想を以てし深く明に之を判別比較して我思想界に於ける批評的の要務に應じ以て其建設的要務に應ずるの階梯と爲さば予輩に於て豈に望なしと謂ふを得んや

（明治廿二年四月發行、六合雜誌第百號）

我國美術の問題

凡そ自己の長所を發見するばかり嬉しきはあらず又隨て己が精神を鼓舞するものはあらず近來切りに美術論の流行し美術的活動の勃起せんとするは蓋し毫も怪むに足らざるべし何となれば我國人は美術上自己の長所あるを發見せりと信ずればなり而して何故に殊更近時に於て此美術上の自重心を發揚するに至りしかと尋ぬるに一は國粹保存の傾向に原由し一は外人の我國の美術を稱讚するに

に到ては予輩容易に其說に感服する能はざるなり然らば則ち何を以て又如何にして右の必要に應ぜんとする乎是れ我國の思想界に於ける建設的問題の主眼とする所なり其中心其燒點とする所なり

人或は予に告げて曰はん君請ふ此問題を解釋せんとすることを休めよ先人の建設したるものは今人之を破壞せり今人の建設するものは後人又必ず之を破壞せん請ふ休めよ君の心勞も亦遂に無効に屬せんのみと予は固より此問題の至難のものなるを知る予は屢〻ヤコビと共に嘆息して「光予の心情(ヘルツ)の中にあり然れども之を移して予の智解(フェルスタンド)の中に置かんとするや忽にして消滅す此二者の中孰れか眞正の光なる智解の光か是れ實に吾人に現はすに堅固なる形を以てす然れども其後邊には底なき穴あるを如何せん然らば心情の光か是れ實に光輝を上天に放て尙ほ益〻照さんとする所あるが如し然れども判然たる智識を與へざるを如何せん吾人の心性は此兩者を和合して唯一の光と爲すに非ずば到底眞理に達し能はざる乎而して此の如きの和合は若し成就し得可んば之を奇績とし考ふるに非ずば他に之を考ふるの途ある乎」と疑ひ問はんと欲することなきに非ず然れども予は此問題

の調和を爲さんとする者に外ならず予はロッツェの哲學を以て方今思想界の最大問題に完全無缺の解釋を與へたるものと思惟するにあらず又スペンサー氏の哲學に格別の信用を置く者にあらず然れども右問題の解釋を試みたるに於ては殊にロッツェの哲學の大に見るべき所あるを疑はざるなり

方今歐洲の思想界に切迫し來れる問題は主心的傾向と主物的傾向、特に宗教と學術の間に新なる且往時に勝れるの調和を發見するにあることは上來陳じたる所に由て略ば認知し得らるゝならん而して此問題は我國も亦後來益々之を解釋するの必要を感じ來るならん我國にして若し萬一現今の主物的の傾向に放任し物質的の文明に滿足して別に高尚なる人性の需要あることを認識する事なくんば是れ實に我國最大の不幸と謂ふ可きなり我國にして此の免れざる可らざるの不幸に陷らざる以上は上に陳じたる歐洲思想界の問題は又我國思想界の問題たるに相違なし頃日或種類の人々が物質的開化の弊害を論述して其弊害の中より我國を救濟せんものは物質的開化に背馳する佛教なりと說きたるは幾分か右問題解釋の必要に注目したるものの如し然れども佛教を以て其必要を滿たしめんとする

と歌ふことなくんばあらずされば吾人の心性には二個の需用ありて如何にかして之を調和滿足せしめざる可らず然るに兩者動もすれば相背馳するが如きの傾向あるは双方共に不完全なる所あるによる乎將た兩者をして永久に相調和せしめんには別に第三者の發見すべきものある乎彼の通常所謂る「學術と宗教の和合（リコンシリエーション）」と謂ふが如きの彌縫的、上塗的手段にては決して兩者の間に滿足すべき調和を見ること能はざるべし故に或部分の學者間には學術と宗教とを全く別世界に置きて兩者毫も相關係する所なしと思惟する者あるに至れり是れ寧ろ一時の窮案に過ぎずして決して永久の解釋にあらざるなり

近時歐洲學者の中、上に陳じたる歐洲思想界の二樣の傾向、二樣の需用をして相調和せしめんと試みたる者に乏しからず卑近膚淺の手段は茲に云はず事の根底より討究し事の中心に論入して眞に哲學的の調和を試みし者の中ロッツェの哲學の如きは最も穩當なる又最も見るべきものの一なり啻にロッツェの哲學のみならず通常宗教の仇敵視さるゝスペンサー氏の哲學の如きも亦學術と宗教との調和を爲さんとするものの如しスペンサー氏の所謂る「不可知的」なるものは此兩者

るも決して全く之を逐ふこと能はざるべし宗教の學術に對するも亦然りされば今時又今後の問題は如何にして此兩者を調和せしめ得るやと云ふにあり

若し一定の宗教を指して絶對的の眞理と謂ふを得ずんば宗教なる者は其完不完に拘らず磨滅す可らざる人性の需用を示せるものと云ふを得べし夫れ學術が人性の一方の需用を示せる如く宗教は其他方の需用を示せるものに外ならず若し一方の需用のみを認識して他方の需用を擲棄するの人あらば是れ未だ其見る所、其感ずる所の圓滿ならざるによるのみ近世第一流の學術家チャールス、ダルウィンが其自叙傳中に記したる嘆息の辭を讀む者はダルウィンが學術的一方の需要に滿足せんとして滿足し能はざりし跡を認むべし夫れ吾人は頭腦を有すると共に又心情を有せり吾人は鳥類の進化を知らんと欲すると共に其啼語の意味を解せんと欲する者なり吾人は草花の構造を知らんと欲するのみならず又時に詩人と共に

"To me the meanest flower that blows can give
Thoughts that too often lie too deep for tears."

ず即ち主物的哲學は既に其頂上に達して是より其反對の傾向の之に代らんとする者あるの有様なり然れども此反對の傾向は復た全く往時の主心的哲學の位地に復歸することを得ざるべし今日に於ては復た往時の如く全く一方の傾向を棄てゝ獨り他の傾向を取るを得ずさりとて兩者を包合せんには其間に氷炭相容れざるが如きの觀あるを如何せん是れ現今歐洲の思想界に歷し來れるの問題なり此問題の影響する所太だ浩瀚にして諸般の思想は之が爲めに必ず多少の影響を蒙るべしと雖も最も著大の影響を蒙るは蓋し宗敎と學術相互の關係ならん人或は曰ふ歐洲の學術は將に宗敎を放逐せんとす近時歐洲に於て宗敎の衰へんとするは蔽ふ可らざるの事實なり歐洲の宗敎は遂に衰頽して復た起ることなけんと論者をして此の如きの思想を懷かしめたるは思ふに畢竟上に陳述せる主物的傾向の今世紀に於て歐洲の思想界に著大なる進步を爲したるに由るならん然れども唯だ此一方の傾向をのみ見て又前後の關係に注目せず唯だ今世紀後半の狀況をのみ見て歐洲の宗敎は遂に全く衰ふべしと云ふは是れ歐洲思想界の大勢を知らざるの言なり歐洲の學術は歐洲の宗敎をして多少其形を變せしむることあ

りき當時ヘーゲルは歐洲全思想界の帝王と仰がれ其腦中より紡績し出したる哲學は宇宙の奧義を看破し盡したるもの、絕對的の眞理に到達したる者、即ち終極完美の哲學と見做されたり然れども歐洲思想界の大勢は今世紀の中葉より全くヘーゲルに違背し來り殊に其本國なる獨逸に於てはヘーゲルの哲學は全然覆沒して轉た往時の隆盛を追想せしむるのみ此の如く近時歐洲の思想界がヘーゲル派の主心的哲學を放棄して專ら主物的の方向に趣くは蓋し一はヘーゲルの空想的哲學に對する反動に原因し又一は物質的學術の驚くべき進歩と又之に伴ふ物質的技藝の進歩且つ都べて物質的開化の進歩が今世紀の人をして天地間の事物は悉く物質的に解釋し得べきもの又主物的に思惟せざる可からざるものとの思想を懷かしめたるに原因す而して此主物的の傾向は今は既に其極度に達したり此の主物的の傾向は長く歐洲の思想界を支配するものにあらず現に獨逸に於てはヘーゲルの哲學は倒れたりと雖もカントに還れと唱道する者少からず又蘇格蘭、北米合衆國の學者中には近時ヘーゲルを崇奉する者に乏しからず且つヘーゲル若しくはカントの學に復歸せざるも主物的哲學に向ては不滿を懷く者少しとせ

上來陳述したる如く方今我思想界の要務は批評に相違なかるべしと雖も是れ專ら最初の要務にして何時迄も批評さへ爲さば足れりと謂ふにあらず蓋し批評は專ら分析的にして又多くは破壞的なれば若し其分析に次ぐに合成を以てせず其破壞に次ぐに建設を以てせざれば其批評は寧ろ有害なるも決して益あることなけんされば我國今日の混沌たる思想を判別批評するは畢竟するに之に次ぎて思想の新世界の建設せられんことを望めばなり故に批評的の要務に次で建設的の要務なくんばあらざるなり而して我國の思想界に於ける建設的要務の中心主眼とも謂ふべき處の何の點にあるを知らんと欲せば先づ宜しく眼を西洋の思想界に轉ずべし蓋し我國にして若し開進の行路を離るゝことなくんば方今西洋思想界の大問題とする所のものは又早晩我國思想界の大問題となるに至るべし否既に其大問題たらんとす我國の思想界は既に多少其問題を解釋するの必要を感じつゝあるなり

フィヒテの主心的哲學（イデアリズムス）を始として夫の莊嚴なるヘーゲルの哲學に到ては實に是れ主心的哲學の頂上に達したる者にして其時代は即ち主心的哲學全盛の時代な

して時に不明なることあり時に其判斷を誤ることあるの故を以て依賴す可きものにあらずとせば世間何物の依賴すべきあらんや他の事に於ては他に吾人の尊敬服從すべき者あらん但だ吾人が思想の世界に於ては吾人の理性は吾人の至尊者なり此至尊者の承認を經ざるものはカントの所謂る「眞實の尊敬」を受くるに足らざるなり

今日批評の目的とする所は東西古今千種萬態の思想を蒐集し之を吾人の理性に照らして其價値を發見するにあり方今我國の思想界の如く種々雜多の思想の混合搖動して未だ其處を得ざるの有樣に於ては其諸思想を其根底中心より新に討究判別するを以て其思想界最初の急務となさゞるを得ず此の如く批評を以て我國思想界最初の急務と見做すは毫も新奇の議論にあらず但し之を實行するには新鮮なる氣力と不拔の忍耐あるを要す豈に容易の業ならんや思ふに我國今日の思想界は未だ混沌錯雜の有樣にあり而して此混沌錯雜の思想界を開拓するものは何ぞや今日の識者は須らく批評の矛を下して此混沌たる思想界を探るべし希くは其矛先に滴つて形成するものは整然たる思想の新世界ならん

ず甲なる國が許多の星霜を要したる進歩も乙なる國は前者の經驗を利用して少數の年月間に其進歩を遂ぐることあるは毫も進化の法則に反したるものにあらず前者の進歩を漸進と云はゞ後者の進歩を急進と云はずして何とか謂はん社會の進化には略方の進化あることを記憶せざる可らず思ふに急進と云ひ漸進と云ふは單に比較的の語にして比較する者を異にすれば同一の進歩を名けて或は急進と云ひ或は漸進と云ふを得べし予は疑ふ漸進若しくは急進なる語は實地我國の進歩の方針を示すに幾何の裨益ある者なるかを殊に予が此文の主題とする我國の思想界の爲めに其最初の急務を論ずるに當ては予は急進と謂はず又漸進と謂はずして批評と謂はんと欲す

人或は曰はん東西兩洋の思想を批評して其比較的の價値を定めんとするは固より善し然れども何を以て其の品評の準繩尺度と爲すか恐くは人々皆其の尺度を異にして到底一致する所なけんと然れども若し其一致し難きの故を以て之を困難とせば此困難は如何の方向を取るも等しく免る可らざる所たり思ふに批評の尺度となすべきものの唯だ一あるのみ吾人の道理心是れなり若し吾人の道理心に

此を保存するを不可とするなり

人或は曰ふ急進保守共に事の極端に走れるの論にして進化自然の法則に違背せり進化自然の法則に隨順して事の中正を得たるものは是れ漸進なりされば我國今日の方針となす可きものは漸々徐々の進歩にありと是れ極端の論を避けたるの言にして大に妥當なるが如き所ありと雖も急進と云ひ漸進と云ひ要するにただ程度の差あるのみ何處よりを急進と云ひ又何處よりを漸進と云ふ可き乎殆ど其區劃を立つること能はざるべし彼の「アミバ」の如き至簡至單なる生物より進化して遂に吾人人類に到達する間には固より無數の星霜を經過したるならん然れども吾人一個人が母の胎內にありて至簡至單の有樣より發育生長して以て成人に至るの進歩は之を生物界全躰の進化に比すれば甚しき急進と謂はざるを得ず蓋し一種族の進化には無數の星霜を要したる塲合にも其種族中の個々の生物は少數の年月を以て其進化を經過することを記憶せざる可らず社會の進化に於けるも亦然り一國一民の進歩は必ずしも人間社會全躰の進歩の段楷をば悉く踏んで昇るものにあらず又諸國の進化は必ずしも同一の速度を以て進むものにあら

らんとす實に我國は東西文明の市場と謂て可なり其思想界の混雜せる有樣は恰も市場の雜沓せるに似たり東西兩洋の思想の我思想界に於て相衝突する有樣は恰も彼の「アマゾン」河口に河水と潮流の相衝突するに似たり或は飛奔して新奇を追ひ或は逆流して守舊復古を圖らんとす日本の物ならば成る可く之を保存せんとする日本主義あり西洋の事ならば成る可く之を取らんとする西洋主義あり是れ皆我國今日の如く混雜せる思想界に於ては免る可らざるの現象なり蓋し西洋主義と云ひ日本主義と云ひ急進と云ひ保守と云ひ皆只だ事の一方を見たるものにして思想界に於ては都べて此等の上に立ち此等を統合する所の主義なくんばあらず予は批評主義を以て此位地にあるものと思惟す思ふに我思想界の當初の要務は東西萬般の思想を比較判別批評して其傾向及び其の價値を認むるにあり敢て急進するを要せず敢て保守するを要せず敢て日本の舊思想を保存するを要せず敢て西洋の新思想に倣ふを要せず日本の舊思想を保存し若しくは西洋の新思想に模倣するは其事自身に於て敢て不可なるにあらず但だ先づ批評せずして即ちカントの所謂る吾人の道理心の試驗を經せしめずして彼に模倣し若しくは

の既に多少批評の時代に入り來れること又必ず入るを要するものなることは漸々識者の認知する所となるが如し彼の第十八世紀は歐洲諸國に於ては古來人の安心立命の地と賴みたるものを悉く其中心より、其根底より搖動せしめたるの時代なりき我國今日の時代は頗る之と類似するの點あるが如し人皆問はずして祖先の遺物を尊信したるの日は今は既に過去のことゝなりぬ今日に於ては人々皆其遭遇する事物に向ひ必ず問うて曰ふ是れ果して益ありや是れ果して理ありやと昔日の安心は今日の懷疑となり舊物其地を失ふて新物未だ其所を得ず是れまさに我國思想界の現狀なり此時に當て我國思想界の最初の要務となすべきは百般の事物をして「公明且正大なる試驗」を經せしむるにあり

我國小なりと雖も現時其包有する思想の千種萬態なるに於ては決して他國の及ぶ所にあらざるべし一たび鎖國の關門を開きしより東西兩洋の思想は此東洋の一孤島に湊合しぬ尙ほ木石に跪きて冥福を祈るの愚民あれば既に西洋學術の蘊奥を究めたるの學者あり或者は南洋群島の蠻人を想はしめ或者は巴里龍動の紳士を想像せしむ封建の時代は尙ほ昨日の如くなるに早く既に代議政治の曉天な

思想界の方針と爲すに足ると信ず

方今思想界の要務

（明治廿一年五月發行、國民の友第廿一號）

西曆千七百八十一年カントが其大著述なる「純理性の評論（クリチック、デル、ライネン、フエルヌンフト）」を世に公にする時に當り其書の序文の補註に記して曰く

我等の時代は眞に批評の時代なり事々物々皆之を批評に付せざるを得ず宗敎は其神聖なるの故を以て、法度は其莊嚴なるの故を以て、動もすれば批評の外に立たんと欲すれども若し果して其外に立ちたらんには吾人の宗敎法度に對して疑訝を懷くに至らんも毫も不當のことと謂ふ可らず又吾人の道理心は其如き宗敎法度には眞實の尊敬を與ふることをせざるべし蓋し吾人の道理心は其公明且正大なる試驗を經たるものに非ずんば之に眞實の尊敬を與ふることをせざればなり

此カントの語は以て直に我國今日の現狀に應用し得ると信ず方今我國の思想界

前の新聞を取りて之を今日の新聞と比較せば、其進歩の如何を知るに足らん、然れども尚ほ我國の文學は、云はゞ小人國の文學なり、學者の考ふる所、著作家の著す所、批評家の評する所、其規模の宏大深遠なる者幾何かある、學者は洋書の拔書をなし著作家は西洋小説の燒直をなし批評家は眞似の如き批評を爲し居れり、出來は如何に麁末なるも只だ手間の懸らぬが肝腎なり、事實は相違の廉あるも唯だ大ゲサに書きたるが最もよろし、此の如く書かずんば公衆の愛顧を得ること能はざるを如何せん、然れども我國今日の文學は思ふに我國の今日に相應せる文學なり、豈に猥りに著作家を咎む可けんや又急に公衆を責む可けんや、我等即ち其公衆若くは其著作家なることを忘る可らず、三年歷ば三歲になるべし、我國の文學にも尚ほ幾分の年月を假せよ、されば予は猥りに今日の時代を咎めず、只だ之を知れと云ふ、人己を知る者少し、今日の時代にありて善く今日の時代を知る者幾何かある、今日の時代を知らんには之を超越せざる可らず、之を超越せんには先づ進歩せる西洋の思想に通せざる可らず、之を超越し之を知り之が敎導者たらんと欲する者は細に密に明に西洋の思想を究め而して之を批評せざる可らず、此一語は以て我國今日の

八ヶ處を發見し得べし、例へばターレスのことを記して「幾何學天文學は此人の初めて發明する所なり」と云ひ又プラトーンを論じて其哲學の基本は宇宙の第一原因を信ずるにありと云ひ又ヺラトーンは物躰を見て唯だ神の觀念となすと云ひ又彼は天地萬物を把て唯心のみとして天地萬物虛無なりと迄論及すと云へる如きは一渡り哲學史を讀める者の決して看過し能はざる誤謬なり、又其近世哲學史を論ずるの段には唯だベーコンとプラトーンとを奇怪に比較するに止まりてブルーノー又デカルトの名も無ければ、スピノザ、ライブニッツの名もあらず、カント、ヘーゲルの名だに見えず、噫よくも斯かる書物を書く人あるかな、而して著者は自ら曰ふ「天の未だ吾著述を絕たざる也吾生命必ず存して吾志を成すを得ん」と我國今日の著者學者と名くる者は何すれぞ動もすれば此の如きの言語を發するや、何すれぞ好で自ら「ラビ」と稱するや、彼等の爲す所恰も市井の童子が相互に誇稱して我は大閤なり我はナポレオンなりと云ふに似たり、予は之を名けて著書の不道德と云ふ、彼等が學ぶべきの德義は先づ暫く默するにあり

我國の事物日々に其面目を改め文學の如きも進で退くなきの有樣なり、試に十年

通辯の誤謬

夫れ西洋の思想を通辯するは決して爲し易きの事にあらず、されば其通辯に誤謬多きも更に怪しむに足らざるなり、請ふ試に我國の思想界を通觀せよ、其誤謬の多きは如何ぞや、玆に其一例を擧げん歟、從來英學の隆盛なると共に斯學に入れるの輩は概ね皆ミル、スペンサーを見て西洋學問の標準、西洋學者の代表者と思ひたりしにあらずや、現今の書生尙ほ此誤謬に支配さるゝ者少きにあらざるべし、此の如きの誤謬は蓋し何處より來れる乎、西洋の思想を通辯し誤りたるより來りしにあらずや、且つ又近來の著書小冊子中通辯の誤謬の多きとは殊更玆に論證するの必要なかるべし、されども試に其最も甚しき者を擧げん歟、或人の著述と稱する「哲學管見」てふ小冊子あり、素より管見には相違なかるべきが、予は其餘りに管見なるに一驚を喫したり、此書若しゴマカシを主意とするならば、固より何とも非難の仕方なし、然れども苟にも哲學を論ずるの書、苟にも事實を講じて之を人に敎へんとするの書なる以上は、豈少しく筆誅を加へずして措く可けんや、余輩其書中哲學史大意と題するの一項を見るに、其紙數僅に十六頁に過ぎず、而して其中希臘哲學史を記せる者八頁あり、僅か此八頁の中一目瞭然たる誤謬少くとも七

批評するは敢て爲し得べきことにあらずと雖も、其選擇したる範圍に關することのみは廣く且つ具さに之を攷究すること最も必要なり、例へば英國の文學を批評せんと思ふ者は啻に其國の文學に止まらず、少くとも獨佛の文學に涉り又多少希臘及羅馬古代の文學にも通せざる可からず、何となれば批評は專ら比較的になすべき者なればなり、されば批評家たらんと欲する者は宜しく其目途の爲に其一生を犧牲とするの覺悟なかる可らず、今日我國の學者と稱する者は多くは是れ西洋の思想を通辯する者に過ぎず、其思想の批評家たらんとする者に過ぎず、或人之を嘆じて「今日の日本人は生國を忘れて外國をのみ知るの傾向あり」と曰ひたれども予は却て我國人の外國を知るの甚だ不十分なるを嘆せずばあらず、固よりビスマルクの政略、佛蘭西内閣の更迭の如きは、最も注意を惹き易きの事件にして、世間之を論ずるの士に乏しからざるべし、然れども西洋文化の裏面なる其思想界の大勢に到ては、善く之を知り善く之を批評し善く之を通辯する者幾何かある、若し善く之を爲すの人あらば、眞に我國の先師と仰ぐ可きの大家なり、西洋の思想を通辯すること誰か之を爲し易しと謂はんや、素よりゴマカシの通辯を云ふにはあらず

りし所なり、而して之を爲さんとするには先づ西洋の思想を借り其批評法に倣はざる可らず、右の中第三は概して西洋思想の漏瀉れ出でたる者に過ぎざれば、善く西洋の思想を知る者はまた善く之が批評を下し得べし、然らば則ち今日批評家たる者の最も心を用うべきは右第二に揭げたる西洋の思想是なり、人或は予の言を見て、此西洋學の盛なる今日に於ては、殊更言ふに及ばざることゝ思はん歟、然れども今日我國の學者と名くる者の中、善く西洋の思想を批評し得る者ある乎、若し西洋の思想を批評する事の眞に何たるを知る人あらば、必ずや予が言の無用ならざるを認知すべし、夫れ西洋の思想を批評するは實に太だしき難事なり、何となれば先づ其思想の眞相を認めざる可らず、而して之を認めんには畧ぼ西洋の學者と同等の位地に立たざる可らず、是れ豈に爲し易きの事ならんや、然るが故に今日批評を事とする者も少しく綿密なる議論に遭遇すれば「之を批評するは正しく西洋の大家を批評する也一朝に論ず可らず」とて後しざり爲る者のみ多きにあらずや、次に西洋の思想を批評せんには、其批評の範圍に屬する事柄は、啻に一國一代に止まらず、廣く且つ具さに之を研究せざる可らず、固より一人にして西洋百般の思想を

を東洋の西洋に仰ぐ者に比較すれば、其大小强弱言を待たずして明なり

今や我東洋の一孤島は外には西洋思想の襲ひ來るあり、内には支那印度の思想の尙ほ其城壁を固うするあり、此三者は或は遂に相和する所あらん、或は全く相容れざる所あらん、其爭鬪其調和は我國將來の思想界の歷史なり、若し我日本にして一種特別の新思想を開發するを得ば、必ずや其爭鬪其調和の間に於て之を爲すならん、我國今日の外交的政治家は英佛露が東洋に示すの一擧一動を見て、日本の將來如何、東洋の運命如何と竊に懼るゝ所ある者の如し、我國今日の學者たる者は支那の思想を明にし印度の思想を究め西洋の思想に通曉し以て我國將來の爲に思慮せざる可らず、政治家の配慮彼に在り、學者の思慮此にあるなり

批評を要する者　夫れ批評を要する者甚だ多し、されども概言すれば三種となし得べし、第一從來我國に存する者即ち支那印度の思想及其和合より生じたる文學等、第二西洋の思想、第三西洋の思想と從來の思想との相合して現今に現はるゝ所の現象是なり、此中第一は久しく我國人の所有且つ使用し來れる者なれども、之を批評的に論じて其價値を判定し其眞相を認むることは概ね未だ我等の爲さゞ

たる者は儒敎なり、儒敎は我國を感化し終りて既に其力を餘さず、印度思想の大に我國に影響したる者は佛法なり、佛法も亦既に其感化力を用ゐ竭したる者の如しと雖ども思ふに尙ほ幾分の餘す所なきにあらず、其餘す所とは即ち其哲學的の思想なり、從來苟くも文字を知れる者にして四書を讀まざる者は莫かるべし、佛書に到ては專門の僧侶を除きては學者と雖も其理に通ずる者太だ稀なり、蓋し實際的の佛敎は既に我國を感化し終りたりと雖も、理論的の佛敎は尙ほ其の思想界の一隅に止まれり、「西洋思想の我國を感化し來りしより未だ多數の年月を歷ざるに、其成就したる結果に於ては大に驚駭すべき者少からず、我國の將來は必ずや永く其感化を受くるならん、」夫れ西洋今日の文明は希臘及羅馬の文化を其基本とせり、其思想界の最高位なる哲學は希臘の學問と猶太の思想との相合して生れる結果なり、而して輓近又印度の思想、稍〻其間に加らんとする者の如し、既にショーペンハウエルの哲學の如きは最も著しく其思想の影響を受けたる者と謂つて可なり、向後其影響は西洋の思想界に如何の現象を呈せん乎、今茲に之を預言するを得ずと雖も、必ずや西洋は尙ほ東洋の爲に多少の感化を受くるならん、されども其感化は之

とする所、小說の評書の出づる度に之に數言の愛憎を呈せんとするに在る乎、寺小屋の文字にホゼクリ批評を下さんとするに在る乎、それも或は益あるならん、然れども是れ只だ批評の末端なるのみ、若し又其欲する所は筆を飛ばして政治經濟詩文小說歷史哲學の近著に悉皆搔撫(かいなで)の批評を下し尙ほ飽き足らずして數學の書物迄を品評せんとするに在る乎、其批評家の多能なる、或は「八人藝する樣な」との世間の大評判を博するに足らん、其批評の効能は少くとも千金丹位はあるならん、然れども凡べて其種類の批評家は予が所謂る批評家にあらざるなり、我國文化の先導者たらんと欲するの批評家は宜しく活眼を開て今日の思想界を洞察せよ、善く其眞相を看破し得る者は是れ予が所謂る批評家たることを得る者なり

我國の思想界　向後我國文化の基礎となり、其動力となるの思想に三種あり、其中二ッは既に過去に發達したる者、一ッは過去に發達し現在に發達し尙ほ未來に發達せんとする者なり、過去に發達したるの思想とは支那及び印度の思想を云ふ、人屢〻「東洋の思想」てふ一語を以て此二種の思想を合稱すれども、是れ大に當を失せるの嫌(きらひ)あり、此兩者の間判然たる差別の存することを忘る可らず、夫れ支那思想の骨髓

此時に當り世人稍〻批評の必要を感じ來りしは固より當に然るべきことなりとす、夫れ此一二年間新聞雜誌の紙面を一變したる者にして、恐くは批評の文字の上に出づる者あらざるべし、小說の飜譯ある每に、諸の新聞雜誌は之に多少の批評を下さざるはなし、朝に生れて夕に死すと云ふ蜉蝣に等しき小冊子をだも尙ほ丁寧に批評する新聞屋あり、每月出版の雜誌にして批評を專門とする者さへあるに到れり、されば此批評の流行に連れて身に速成の神驗術（まじなひ）を行ひ、一變して批評家となりすます者もあるならん、予は批評家たらんと思ふ者の益〻多からんことを希望して止まず、但だ彼等に向ひ問うて曰はん、何事を批評せんと欲するかと、人或は新聞雜誌の批評を非難して定文句の挨拶に過ぎずといふと雖も、其の批評を責むるに先ちて批評さるゝ著書の價値を撿せざる可らず、今日の著作中細密莊嚴なる批評に値する者幾何かある、我國文學の尙ほ振はざる、縱令ひ批評を以て一世に鳴らんと欲するの俊才あるも、其慧眼を用ふべき所なきを如何せん、未だ名作なし何ぞ名評ある可けんや

然らば則ち今日の批評家たらんと思ふ者は將に何をか批評せんとする、其爲さん

最高の標準を發見し、且つ廣く創作家に對して同情となること能はざるなり

批評の範圍　上來論じたる所は專ら文學の批評に關すれども、批評なるものは廣く之を解すれば獨り文學に限るにあらず、美術には美術の批評あり、哲學には哲學の批評あり、創作のある所批評あらざるはなし、且つ夫れ歷史は一種の批評に外ならず、或は國家の歷史、或は文學の歷史、或は學術の歷史、皆是れ既往の事實を批評する者と謂つて可なり、將に社會に流布せんとするの思想あるか、爰に最も缺く可らざるは之が批評なり、其思想にして若し眞實の價値あらば宜しく之に印して思想界の貨幣となすべし、而して之に印する者は即ち批評なり、且つ夫れ批評の職分は其批評を下す所の事件に隨ひて、多少其趣を異にすべければ、文學的著作の批評家と、哲學若しくは其他學術的著作の批評家とは其間自ら差別ありと雖も、其批評家たるの大躰に於ては、上來論じたる所と概ね相違ふことなかるべし

何を批評すべき乎　方今我國は隱遯の眠より覺め來りて、將に新鮮の思想を呼吸せんとす、泰西の思想は波濤の卷き來るが如く將に我國中に漲らんとす、我國人は將に活潑なる精神的の運動を爲さんとす、我國の文學は將來に望ある者の如し、

然らば則ち批評家は如何の作用によりて文學的創作の眞相を發見し得るや、今其作用を分析して二段となし得べし、第一創作家と同情となること、第二其創作家の所作を、我が有する所の最高の標準に照すことと是れなり、八常に曰ふ批評は須からく局外の人に委托すべしと、蓋し其局に當る者は動もすれば事の一方に執着して公平の判斷を失ふことあればなり、然れども是れ只だ眞理の半を云へるに過ぎず、何となれば當局者にあらざるよりは其事の內實隱微の邊に通じ難く從て皮相の見解を下すこと多ければなり、されば批評家たる者は先づ身を創作家の位地に置き、其考を自ら更に考へ、其感覺を自ら更に感覺し、全く彼と同情となり、云はゞ、一旦は、彼れ創作家と變せざる可らず、此の如にして始めて其思想と感情との祕密の邊を探り得て毫も遺憾なきに到るべし、然れども一たび身を創作家の位地に置きし上は、復た翼を擊て理想的の上地に上り、最高の標準に照らして其創作家の所作に、絕對的の批評を下さゞる可らず、即ち一たびは近づき一度は遠かり、一度は親友一たびは純全たる他人とならざる可らず、大自在の心なき者豈に之を爲し得んや、啻に心の自在なるのみならず、非凡の智力と感應とを具ふる者にあらざれば、文學上

後者に一歩を讓るは亦敢て疑を容れざるべし、蓋し文學の世界に於て最高の勳章を受くる者は創作家なれども之を授くる者は批評家なり

批評の職分　　批評の創作に關する所の如何を知れば、其職分は從て推知し得らるべし、其職分は他なし、一言を以て之を竭すことを得、曰く在る物を在りの儘に見ること是れなり、此事たる、至て爲し易きが如く見ゆべけれども、一たび深く其事の眞に何たるを考ふれば、其極めて難事なるを認識し得べし、蓋し事物を創作するには一種の才能を要する如く、其創作の眞相を觀るにも亦一種の才能なかる可らず、事物の相を認識するは恰も鏡面の物象を受くるが如く、曇(くもり)なく、凹凸なき者にして始めて其眞相を寫し得べく、智力の發達圓滿、心情の感應宏寬なる者にして始めて其眞相を認識し得べし、且又事物の眞相は屢〻其表面に出現せず、寧ろ其内部に埋伏するが故に、慧眼を有するにあらずば之を發見する能はず、其眼孔は事物の全面に亘ると共に、其根底に達せざる可らず、されば批評家が文學上の創作を品評し、其眞相を明にし、其妙處を穿つは實に爲し難きのことと謂つべし、名評の得難き豈に怪むに足らんや

ることを得且つ夫れ文學史上創作の時代と批評の時代とは頗る其趣を異にする所あるを以て、一國の文學、若し批評の時代にある時は創作は敢て望む可らず、寧ろ之が爲に準備を爲すべし、創作の時代は招て直に來る者にあらず、其來るや深く國家百般の情況に因緣す、彼の「エリザベス時代」の、英國の文學に於ける、又彼の「ゲーテ、シルレル時代」の、獨逸の文學に於ける、其例古來幾何かある、斯の如き創作時代の因となり緣となる者、固より一にして足らずと雖も、一般の國民、新鮮の思想を呼吸し、活潑なる精神的運動を始むるに於ては、其國の文學望むらくは創作の時代に近からん、此時に當り社會の飛奔する種々雜多の思想を判別批評して其眞價を明にし以て當時の思想界に先だつ者は蓋し批評家なり、此時に當り草を耨り土を反し種子を下して以て將來の文華を招き來す者は蓋し批評家なり、將に來らんとする文華の遲速と其情態とは大に之に先だつ所の批評如何に關係す、兩者の相關する所太だ親密なるを知るべし

斯の如く創作の時代は批評の時代と相分離すべき者にあらず、批評家を措て創作家を得んとするは實に爲し難きの事と雖も、若し其技能の高下を論ずれば、前者の

力なる、恰も一種の魔術に似たりと雖も、一旦心を潜めて詩文の批評を爲さんとするに當ては、其言ふこと極めて拙く、悉皆非なり、彼(かれ)の歌ふや天使に似たり、其考ふるや三歳の童子に等し、夫れ詩才動くが故に詩人歌ふ、然れども必しも自ら其由て來る所を知らざるなり、詩人は能く美妙を直覺す、之を理解する者は批評家なり、詩人は恰も神明に通ずる者の如く、自ら其理を解せずして、よく天地の美妙を闢き、よく其眞理を穿つ、詩人の爲に其理を解する者は批評家なり、詩人は美妙を執て之を其作中に宿らしむ、彼素より作中の美妙を知る、然れども必しも其美たる所以を解釋し得るにあらず、之を解釋する者は批評家なり、然らば則ち詩人は天然を解する者、批評家は詩人を解する者と謂て可なり、此の詩人と其批評家との關係は、之を推さば以て概ね自餘の創作家と其批評家との關係を知るに足らん

されば批評家は創作家の爲に殿(しんがり)となるの位地にあれども、亦よく之が先驅となるの榮譽を負へり、蓋し名評は名作の後に出づるのみならず、又よく未來の名作を誘引するの力あり、批評は啻に往時を顧るに止まらず、又將來を指揮するの力あり、批評家は己れ自ら創作せずと雖も、後世の創作家に敎へて望あるの行路を取らしむ

思潮評論

上篇

批評論

創作と批評　名評の得難き、殆と名作の得難きに下らず「ハムレット」を評する者、ゲーテの如きあり、其批評の至妙なる、マコレーをして嘆美と絶望とに餘念なからしめたり、然れどもシエーキスピアーのゲーテを得る迄には殆と二百年を經過せり、夫れ文學及美術上の創作は主として結構的作用に屬す、理解的慧眼を以て其結構の妙處を穿つは是れ批評家の本領とする所なり、批評家と創作家とは頗る其才能の趣を異にするを以て、一人にして此兩者の極處に達するは殆と望む可らざるの難事なり、古來此兩種の才能を兼具したる者にしてゲーテ若しくはレッシングの如きは至て稀なり、彼のバイロンの詩を賦するや、其音調の爽快なる、其詞句の有

大西博士全集第六卷目次　終

下篇 (自明治廿八年至明治三十年)

中篇 （自明治廿八年一月 至明治三十年十一月）

大西博士全集第六卷 思潮評論目次

上篇 （自明治廿一年五月至明治廿七年十二月）

藤寅之助、中島半次郎、綱島榮一郎、五十嵐力等各其の勞を分てり。
但し『思潮評論』に掲げたる諸篇の校訂は前記哲學會員之を分擔し、中桐確太郎、綱島榮一郎の兩人之が編纂に當れり。

十、各卷出版の順序は一に編纂上の便宜によりて定めたり。

十一、本集の出版につきては、横井時雄氏主として斡旋の勞を取られ、渡部董之介、谷本富、文學博士坪内雄藏、綱島佳吉、文學博士中島力造、松村介石、文學博士松本亦太郎、文學博士元良勇次郎の諸氏亦之に與られたり。殊に法學博士高田早苗氏及び早稻田大學の厚意を受けしこと少なからず。

明治三十七年七月

編　者　識

六、なほ第六卷中には純粹に評論とはいふべからざるものも混りたれど、なほそれ等は皆評論にちなみあるものなれば敢て揭ぐることとせり。

七、但し先生の遺稿中、明治三十年九月帝國敎育會の講談會にてものせられたる『啓蒙的思潮を論じて敎育に及ぶ』と題する一篇は第六卷に揭載すべき種類のものなれども、該會の機關雜誌『敎育公報』(明治三十年十月五日發行、第貳百壹號)に其の一部の揭げられたるに止まり、其の餘は未だ先生の校閲を經ざるのみならず、筆記餘りに疎漏なるが故に遺憾ながら揭載を見合はせたり。

八、先生の遺稿は一たび公けにせられたる後、先生自から添削せられたるもの頗る多し、本書は凡て之に從へり。然れども未だ加筆せられざりしものもあり、又句讀點、假字遣ひ、及び外國人名、外國語の發音等にも一致を缺ける所少なからず、(殊にこの中には先生自から種々に變へ試みられたりとおぼしきもあれば)これ等は概ねそのまゝにして敢て改竄を加へず。但し鼇頭目次等は何れも校訂者の新にものせるもの讀者の便宜を圖れるに外ならず。

九、本集全躰の編輯につきては『早稻田哲學會』員中桐確太郎、紀淑雄、島村瀧太郎、後

四、先生の遺稿中評論創作に屬する諸篇は之を類によりて別ち、公表の年代によりて次第し、又成るべく思想の聯絡をも保たしめ、之を三卷に分ちて發行せんとする豫定なりしも、種々の事情によりて果たすを得ず。其の中、論理に關する數篇は之を第一卷の終りに附錄し、主として倫理、道德、宗敎及び敎育に關する諸篇は之を『論集』と題し、『良心起原論』と合せて本集第五卷に收めたり。

五、さて第六卷には明治二十八年より同三十年に至る間、內外の思潮につきてものせられたる評論を掲げたり、題して『思潮評論』といふ。この中明治廿八年以前に係るものを集めて上篇となし、其の以後のものを更に中篇と下篇とに別てり。而して中篇には明治廿八年以降同卅年十一月迄、先生自から擔當せられたる『六合雜誌』誌上新設の『時論』欄に於て、宗敎、道德、哲學、文學及び社會等に關する當時の諸問題につきて幾んど每號筆を執られたる評論を輯めたり。蓋し是等の諸篇はおのづから連續したるものとして特殊の趣ありと謂ふべし。下篇に收めたるは、六合雜誌以外にてものせられたるもの、所論の題目もおのづから異なれるものに屬せり。

本集の編纂に就きて

一、本集は先生の遺稿の散佚するを恐れ、之を一纏めにして先生の面影を永く後世に傳へむが爲に編纂したるもの、『大西博士全集』と名づけたるは、略〻先生の遺稿の主要なるものを網羅したれば也。

二、本集第一卷に掲げたる『論理學』、第二卷に掲げたる『倫理學』及び第三、第四の兩卷に分掲せる『西洋哲學史』等はもと早稻田大學の需めに應じ、其の講義に掲げられしものにて、先生の蘊蓄を悉くされしものに非ず、且つ歐洲留學其の他の事故のため、稿を半途に止められたるもあり。其の他の評論創作等亦其の時々の場合に臨みて當座に作りなされしもの多かり。

三、『良心起原論』は明治廿三年頃大學院卒業論文として草せられたるも、故ありて其の提出を見合はされたるものなり。其の後所々に添削の筆を加へ、殊に其の自家の考說を陳べらるゝあたり增補せられたるもの頗る多し、蓋し先生の遺稿中にて較〻完了せりと見ゆるは此論なるべし。是は他の論集と合せて、本集第五卷に掲げたり。



大學に移る。三十二年六月京都帝國大學より文科大學の學科及び組織取調を囑託せらる。これより先三十一年六月イェーナ大學在留中盲腸炎を病み翌年二月ライプチヒにてインフルエンザに罹り大いに健康を損す。尋いで神經衰弱症を起こし保養の爲め墺太利伊太利を漫遊したれども効なく醫師の勸告に從ひ七月歸朝の途に上り九月神戸に着し、それより東京及び鎌倉に病を養ふこと數月、稍ゝ癒ゆ。十一月羅馬字日本語書方取調委員を命ぜらる。七月博士會の推薦により文學博士の學位を受く。同年三月京都に移りてより腦神經衰弱症俄に革まる、靜養すること半年にして漸く輕快に向ひ、十月下旬轉地療養の爲め郷里岡山に歸る。三十一日夜半より激烈なる腹膜炎を發し十一月二日午前八時逝く。享年三十六歲三月。岡山の西郊妙林寺に葬る。明治二十六年松井幾子を娶り、一男二女を擧ぐ。長女を道子（みさを）、長男を定彥、次女を安子（やす）といふ。號は操山、郷里岡山なる操山に因めるなり。（此の小傳は遺族の編せられたるを殆んど其の儘に揭けたる也）

故文學博士大西祝先生小傳

文學博士大西祝は岡山藩士木全正脩の三男にして元治元年八月七日岡山城下に生まる。十五歳にして叔父大西定道の家を嗣ぐ。幼にして郷里の小學校に學び、明治十年九月京都同志社に入り十四年普通科を卒業し十七年神學科を卒業す。同年秋東京に出で翌年一月東京大學豫備門第三年級に入り、九月東京大學文學部に入り、文學部改まりて文科大學となるに及び其の哲學科を修め、毎年特待生たり。二十二年七月文科大學研究生たることを命ぜられ給費を受く。二十四年九月東京專門學校(早稻田大學)に聘せられて講師となり哲學に關する講義を擔當して卅一年二月に至る。此の間又先進學院に教頭として哲學の諸科を講じ、『六合雜誌』の編輯を負擔す。三十年十一月高等師範學校倫理科講師を囑託せらる。三十一年二月歐洲留學を命ぜられ先づ獨逸に行きイエーナ大學に遊ぶこと六ヶ月にして十一月ライプチヒ

文學博士　大西祝先生遺稿

思潮評論

東京　警醒社書店